修辞理解の認知過程に関する研究:
名詞述語文の意味解釈を中心として

佐 山 公 一

修辞理解の認知過程に関する研究：名詞述語文の意味解釈を中心として

佐山 公一

目次

序　認知心理学における修辞理解の研究の歴史と位置づけ

修辞理解の研究の目的は，“修辞(figurative language)”と称される様々な表現がどのように理解されるかを考察することである．言うまでもないことであるが，“修辞的な”表現とは，聞き手あるいは読み手によって“修辞”として理解された言語表現を指すものであり，そのように名づけられる対象が存在するわけではない．とはいえ，そうした名称が存在しているということは，その名で一括して呼ぶことができるような，ある種の言語表現の理解に共通する特徴が存在することを示唆している．

認知心理学における修辞理解の研究は歴史が浅い．初めて認知心理学に登場したのは，70年代後半以降のことである．アリストテレスに始まり2000年もの歴史を有するそれまでの修辞の研究と，認知心理学における修辞理解の研究との大きな相違の一つは，後者の研究が，表現そのものというよりは，修辞を理解する心内過程を，解明すべき問題の中心に据えた点にあると言える．

一般に，言語表現の理解過程は，長期記憶の中に保持された様々な知識を参照しながら，外部から入力された言語表現を様々な内部表現に変換していく過程と言える(戸田・阿部・桃内・徃住，1986)．当然，このことは修辞的表現の理解過程にもあてはまる．結局，修辞理解研究の目的は，長期記憶中のどのような知識源(knowledge source)のどういった知識を参照しどのような過程を経て，修辞的な表現が理解されているのかという問題を解明することと言いかえることができる．

揺籃期の修辞理解研究に影響を与えたものの一つに，Grice(1975，1978)によって提案された“会話の公準(conversational maxims)”がある．Griceに従うなら，会話の公準は，人がコミュニケーションを行う際に参照する，発話状況に関する知識ということになる．とすれば，会話の公準は，多種多様な修辞的表現の間の様々な性質の違いを捉える理論的枠組みになり得る可能性を有していることになる(会話の公準の下位原則を枠組みとした多種多様な修辞的表現の分類体系が，第1章で考察されている)．

Griceの会話の公準以上に，修辞理解研究にインパクトを与えたのは，Searleをはじめとする何人かの研究者によって提案された“段階的”な修辞理解過程の理

論であった(たとえば，Grice，1975，1978; Levinson，1983; Lyons，1977; Searle，1975，1979a，1979b; Sperber & Wilson，1981b，1986; 安井，1978; 山梨，1982，1986，1988，など)．彼らによれば，修辞的表現は，一度“文字通りの意味(literal meaning)”で理解され，会話の公準のようなコミュニケーション上の諸規則に照らし，その文字通りの意味が，当該表現の置かれた文脈や状況と合わないと判断された場合に，その意味とは異なる修辞的な意味が計算し直される，ということになる．修辞理解過程に対して与えられたこうした理論の妥当性が，隠喩文(metaphorical sentence)および間接的発話行為(indirect speech act)として機能する文の場合について，多くの研究者たちによって実験的に考察されてきている(この経緯は，第6章，第7章に詳しく概観されている)．

このように，修辞的表現一般に共通する理論にもとづいて研究が進められた一方で，同語反復文(tautology)や隠喩文といった，個々の修辞的表現の理解に関する理論も盛んに提案されるようになってきた．

同語反復文は，文字通りの意味では，聴者に何ら新しい情報を伝えない．それゆえ，その意味で，同語反復文は明らかに会話の公準の下位原則である量の公準に違反する表現と言える．しかしながら，同語反復文は，日常の言語活動の中で充分意味のある発話として理解(あるいは産出)されている．では，どのような場合に，同語反復文は意味ある発話として容認(accept)されるのか? こうした同語反復文の意味解釈のされ方に関わる問題が，何人かの研究者たちによって考察されてきている(同語反復文の意味解釈のされ方に関する過去の研究については，第3章，第4章で触れられている)．

また，隠喩([狭義の]metaphor)および直喩(simile)の理解の個別的なメカニズムに関する理論も構築された．“顕著性の不均衡(salience imbalance; Ortony, 1979)”の考えは，その基本的なアイデアをアリストテレスに求めてはいるが，従来の隠喩の研究とは異なり，隠喩文理解のメカニズムの基盤となる可能性をもつものであった(この理論は第8章に詳しく紹介されている)．

最近，比喩([広義の]metaphor)[1)]としての理解，あるいは比喩的な思考が，言語理解のみならず人間の思考に中心的なものであるという主張が頻繁になされるようになってきた(たとえば，Gibbs，1992; Glucksberg & Keysar，1990)．これは，言語学者Lakoffとその共同研究者たちによる一連の研究(Lakoff，1987;

Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989)に負うところが大きい. Lakoffたちによれば，人間の知識は，その多くの部分が，それ自体比喩的になっており，比喩的な理解のみならず人間の思考は，そうした比喩的な知識を参照しながら行われている，という．とすると，そうした比喩的知識の種類や性質を調べることは，言語と思考との関係を解きあかす上で避けて通れないキーポイントになる.

Lakoffたちの研究は，隠喩文理解の研究とカテゴリー形成・学習の研究との一体化をもたらした．一種のカテゴリー化(categorization)を隠喩文理解のメカニズムの中心と考える提案(Glucksberg & Keysar, 1990)がなされたり，いわゆる基本レベル(basic level; Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976)のカテゴリーを基準としたカテゴリー・レベル上のどのレベルのカテゴリーを，たとえる語句が指示しているかの違いが隠喩文の理解に及ぼす影響を調べた実験的研究(佐山, 1993, 1994)が行われたりするようになってきた(Glucksberg & Keysarによる隠喩文理解過程の理論は，第8章で論じられている．また，佐山の実験的考察は，第9章，第10章に紹介されている).

本論文は，以上のような認知心理学的な修辞理解研究の流れを踏まえ，第Ⅰ部から第Ⅴ部までの5部で構成されている．第Ⅰ部では，多種多様な修辞的表現の“修辞”としての理解の特徴を探る．第Ⅱ部以後は，同語反復文，隠喩文，など，主に，名詞述語文形式をとる文の修辞的な理解や意味解釈を扱っている．第Ⅱ部では，名詞述語文形式の同語反復文(nominal tautology)の意味解釈に関する従来の研究を概観し理論的な考察を行った後，名詞述語文形式の同語反復文の意味解釈のされ方に関する実験的考察を行う．第Ⅲ部では，隠喩文一般の理解過程に関する過去の研究を概観し理論的考察を加え，さらに，名詞述語文形式の隠喩文の理解に関する実験的考察を述べる．第Ⅳ部は，第Ⅱ部と第Ⅲ部での考察にもとづき，名詞述語文の意味解釈過程をモデル化することを試みる．第Ⅴ部は，まとめである.

---

[1] 一般的に言えば，“metaphor”は“隠喩”の訳語に相当する．しかし，“直喩”，“換喩(metonymy)”，“提喩(synecdoche)”なども含め“比喩”の意味で使われる場合もある(芳賀・子安, 1990).

第Ⅰ部

修辞的表現とその心理印象

第Ⅰ部では，修辞と呼ばれている様々な表現の理解を全体的に把握し，それらに共通する理解の特徴を探る．序で触れたように，修辞とは，聞き手あるいは読み手によって“修辞”として理解された言語表現のことを言うのであるが，そうした名称があるということは，その名で一括して呼び得るある種の言語表現の理解過程に共通する特徴が存在することを示唆する．そこで，第1章では，Grice(1975, 1978)の“会話の公準”の下位原則の下に，様々な修辞的表現を可能な限り詳細に分類することによって，また，第2章では，修辞的表現を読んで受ける心理印象に関する評定実験を行いそこで得られた評定の結果をクラスター分析することによって，修辞的表現の理解に共通する特徴を考察してみる．

第1章　“会話の公準”に照らした新しい修辞分類:
修辞的表現理解過程における“逸脱”の検出
(考察論文)

1.1 修辞理解過程の特徴づけ

修辞的表現は，日常の言語使用の中に広く見られ，それらに対して伝統的に数多くの名称が与えられてきている．そうした名称の中には，日常的な言葉として定着しているものも多い．たとえば，“比喩([広義の]metaphor)”，“隠喩([狭義の]metaphor)”，“直喩(simile)”，“反語(irony)”，“皮肉(irony)”，“誇張(hyperbole)”，“逆説(paradox)”などである．しかしながら，修辞的表現の理解(あるいは産出)の過程の特徴についてはもちろんのこと，修辞的表現の“質ないしは技巧”や生み出される心理的“効果”に関しての類似性と相違点でさえ，これらの伝統的な分類概念では明確には捉えられていない．このことは，たとえば，“効果”に関する用語である“皮肉”や“誇張”と“質あるいは技巧”に関する用語である“比喩”や“逆説”とが，修辞カテゴリーとして同列に並べられている(たとえば，佐藤，1978，1981，など)ことからも見て取れる．

本研究では，修辞理解はすべて，与えられた言語表現が何らかの点で“通常の”表現とは異なっていると(意識的か無意識的かを問わず)感知されるところから始まるものであり，しかもその“逸脱”はコミュニケーション上の諸規則(性)に照らして感知(検出)されるという想定の下に，新しい修辞分類体系の構築を試みる．すなわち，各種の修辞的表現を，それぞれの検出される“逸脱”の質・種類によって分類してみようとするものである．このような，いわゆる当該現象の自然類(natural classes)を正しく把握した上で修辞理解過程を心理学的に説明しようとするアプローチは，Sperber and Wilson(1981a, 1981b)によっても採用されている．しかし，以下で述べるように本研究はこれを逸脱の種類と関係づけようとしており，この点で Sperber and Wilson(1981a, 1981b)とは異なる．

修辞に関する著者の関心は，究極的には，一定の表現形式を有する発話が，“文字通りの意味”を伝達すること以上もしくは以外の＋αの心理的な効果を生み出すメカニズム，すなわち，そのような効果を生み出す言語表現の理解(あるい

は産出)の過程を解明することにある．本研究はその第一段階に位置づけられる．本研究の目的は，そうした“逸脱”の検出が，修辞理解過程を説明する上でのキーポイントとなることを確認し，さらに，検出される逸脱の種類の分類が，修辞的表現の理解過程に関わる類似性や相違点，あるいは理解の結果としてもたらされる＋αの心理的効果に関する表現間の類似性と相違点を捉え得る枠組みになり得るかどうかを考察することである．

逸脱の有無を判定する基準として従来から採用されてきているコミュニケーション上の規則(性)には，生成文法でいう“選択制限・共起制限(selectional restrictions, restrictions of coocurrence)”やGriceの“会話の公準”などがある．これらのうち，選択制限による逸脱の判定とは，たとえば，次のようなものを言う．

(1)　男は狼である．

この文例では“狼”の属性[-human]と“男”の属性[+human]とが一致していない．このような属性間の不一致の有無の判定が，選択制限による逸脱の判定である(Chomsky, 1965)．また，会話の公準による逸脱の判定とは次のようなものを言う．

(2)　バカはバカだ．

この文例には，文字通りの意味では，新しい情報がまったく含まれていない．その意味で，この文は，“情報を過不足なく話せ”という量の公準に違反していると言える．このような，文字通りの意味に受け取った場合の，会話の公準に対する違反の有無の判定が，会話の公準による逸脱の判定である．先ほどの文例(1)も，会話の公準に照らしてみた場合には，“嘘を言うな”という質(quality)の公準に違反しているとみなせる．

しかしながら，従来の修辞研究(たとえば，Grice, 1975; Wilson & Sperber, 1981, など)においては，より包括的な規則(性)である会話の公準が問題にされている時でさえ，その公準のすべての項目が考察の対象となっていたわけではない．それは，従来の研究では，主として隠喩や反語などのごく少数のタイプの修辞に

その興味が限られていたこと，さらには，言外の意味まで含めた場合には会話の公準が守られているとみることもできるため逸脱の有無を判定する基準としては徹底的には用いられてこなかったこと，などによるものと思われる．そこで，本研究では，逸脱の有無を判定する基準として現時点で最も包括的であると考えられる会話の公準を採り，必要に応じて他のコミュニケーション上の規則(性)をも参照することにした．その上で，できるだけ多種多様の修辞的表現を考察対象として扱い，それらを会話の公準のすべての項目の下に分類するようにした．

具体的な分類結果を述べる前に，“会話の公準”について触れておきたい．会話の公準とは，コミュニケーションにおいて話し手または書き手(以下，話者と呼ぶ)は聞き手または読み手(以下，聴者と呼ぶ)に対して協力的であるはずだという暗黙の前提を明示的に体系化したものであり，その内容は，以下のように，量(quantity)，質，関連性(relation)，様式(manner)の4つのカテゴリーに分かれている．

量:

1. 会話へのあなたの貢献を，(やり取りのその時点での諸目的のために)必要とされているだけの情報量があるようにせよ．
2. 会話へのあなたの貢献を，必要とされている以上に情報量のあるものにしてはいけない．

質: 会話へのあなたの貢献を，真実であるところのものにしようとせよ．

1. あなたが虚偽であると信じていることを言ってはいけない．
2. あなたが適切な証拠を持っていないことを言ってはいけない．

関連性: 関連性があるようにせよ．

様式: はっきりと表現せよ．

1. 表現の不明瞭さを避けよ．
2. 多義性を避けよ．
3. 簡潔であれ(不必要な冗漫さを避けよ)．

4.　順序正しくせよ.

実際の分類作業では，修辞的と思われる言語表現の“文字通りの意味”に，これらの四つのカテゴリーの各項目のいずれかにあてはまる“逸脱”があるかどうかが判定された．そして，あると判定された場合には，その項目の下に問題の表現を置き，必要に応じてさらに下位の項目を立てる，というようにして行われた．同時に，会話の公準と無関係であると判断される修辞的表現に対処するため，会話の公準自体を下位項目として含むようなより包括的な枠組みを作ることも行なった．以下にその分類結果を示す.

1.2 修辞的表現の新しい分類

上述の手順に従い，文字通りの意味を伝達すること以上もしくは以外の＋αの心理的効果を生み出す言語表現(修辞的表現)を，それらの逸脱の種類の観点で分類した.

分類の対象となる言語表現例は，伝統的な修辞学の分類体系の下に整理された修辞的表現用例集(佐藤，1978，1981)から139例を集めたのをはじめ，広告コピー文集や文学作品などから，総数約2600例を集めた.

既に述べたように，まず各表現例を“文字通り”に受け取って“会話の公準”からの逸脱が感じとれるかどうかを判断し，感じとれた表現例の逸脱の種類を，その下位原則の項目だてに従い分類した．その際，どこにも分類できないと考えられる表現もかなり見い出されたため，会話の公準からの逸脱以外の項目も設定した．その結果，分類の枠組みは以下のようになった(Table 1.1参照)．まず，一番上位の分類概念として，

(A)　コミュニケーション上の規則(性)に関して逸脱が感じられるもの.

(B)　文脈内での表現の出現位置と頻度とに関して統計上の標準値からの逸脱が感じられるもの.

の二つの項目が設定された．そして，前者(A)に属する項目として，(A-1)，(A-2)，

Table 1.1

会話の原則以外の規則(性)などに照らして感知される逸脱の種類

逸脱の種類	文脈依存性(I/D)	実例[出典]a)
A コミュニケーション上の規則(性)からの逸脱		
1 文字通りの意味における，会話の原則からの逸脱(＝Table 1.2)		
2 正書法からの逸脱	I	
1 表記体系の使い方に関して逸脱がある		・“シンケン”な顔付[MS]
2 引用の仕方に関して逸脱がある		・(暗示引用)
3 文体に関する規則からの逸脱	D	
1 伝達媒体に照らした使用法に関して逸脱がある		・あのォ，これ，作ってみたんですけど(文面で)[IS]
2 受け手および発話状況に照らした使用法に関して逸脱がある		・今夜もひと押し“いたすかな”[IS]
B 文脈内での表現の出現位置と頻度とに関する統計上の標準値からの逸脱	I	
1 その結果として，反復性，繰り返し性が生じている		
1 音形に関して反復性，繰り返し性が生じている		・キナリ　好きなり　春となり(押韻)[TK]
2 文字数に関して反復性，繰り返し性が生じている		・(定型詩)
2 その結果として，前後対称性が生じている		・軽い機敏な仔猫何匹いるか(回文)[TK]
3 その結果として，順序性が生じている		・(数え歌)

a) 以下にTable 1.1およびTable 1.2中に引用された実例の出典の一覧を示す．

IS　糸井重里 (1984). 糸井重里全仕事(広告批評別冊3). マドラ出版.
IHD　井上ひさし ドン松五郎の生活.
IHM　井上ひさし モッキンポット師の後始末.
IY　井上靖 比良のシャクナゲ.
UH　梅崎春生　崖.
OK　興津要(編) (1972). 古典落語上. 講談社.
KY　川端康成　舞姫.
G　現代言語セミナー(編) (1985). スルドイ言葉の辞典. 冬樹社.
FS　F. サガン　ある微笑.
SN78　佐藤信夫 (1978). レトリック感覚. 講談社.
SN81　佐藤信夫 (1981). レトリック認識. 講談社.
S　シェイクスピア　ロミオとジュリエット.
B　聖書.
DO　太宰治　狂言の神.
TK　土屋耕一 (1984). 土屋耕一全仕事(広告批評別冊4). マドラ出版.
NY　野上弥生子　秀吉と利休.
NA　野坂昭如　殺さないで.
P　パスカル　パンセ.
H　ブレット・ハリディ　大いそぎの殺人.
MS　室生犀星　杏っ子.
MO　森鷗外　雁.
YS　山本周五郎　青べか物語.
YB　与謝蕪村　―
R　落語　らくだ.

(A-3)の三つの項目が設けられた.

(A-1)　文字通りの意味において会話の公準からの逸脱が感じられるもの.
(A-2)　正書法からの逸脱が感じられるもの.
(A-3)　文体に関する規則からの逸脱が感じられるもの.

本研究は(A-1)にもとづく分類が出発点となっており，また実際にこの項目に含まれる修辞的表現例はその数が多かったため，(A-1)の下位項目は，会話の公準に照らした分類として，別表のTable 1.2に詳しく掲げることにした.

さらに，(A-2)の下位項目として，(A-2-1)，(A-2-2)の二つが設定された.

(A-2-1) 表記体系の使い方に関して逸脱の感じられるもの.
(A-2-2) 引用の仕方に関して逸脱の感じられるもの.

また，(A-3)の下位項目として，(A-3-1)，(A-3-2)の二つが設定された.

(A-3-1) 伝達媒体に照らした使用法に関して逸脱の感じられるもの.
(A-3-2) 受け手および発話状況に照らした使用法に関して逸脱の感じられるもの.

一方，後者(B)に属する項目として，(B-1)，(B-2)，(B-3)の三つの下位項目が設定された.

(B-1)　反復性，繰り返し性に関して逸脱の感じられるもの.
(B-2)　前後対称性に関して逸脱の感じられるもの.
(B-3)　順序性に関して逸脱の感じられるもの.

(B-1)についてはさらなる下位項目として，(B-1-1)，(B-1-2)の二つが設けられた.

(B-1-1) 音形に関して逸脱の感じられるもの.

Table 1.2

会話の原則に照らして感知される逸脱の種類

逸脱の種類	文脈依存性(I/D)	実例[出典]
量の原則に関する逸脱		
(a)情報量が不足しているかまたは欠如している		
1 表現自体がなく，従って情報量がない		
1 表現全体の省略による情報の不足，欠如	I	・「近頃は，また短髪が流行りなんだってね」「“………”」「若い人がジーパン離れしてきてるって話だねえ．．．」(黙説(…))[IS]
	D	・「値段もまけるだよ」と，老人はうめきたてた，「先生のこったからよ，思いきって五までまけるだ，たった五だ」 “私が答えると”，老人は片手を出した． 「タバコ」と老人は云った．[YS, SN81]
2 表現の一部の省略による情報の不足，欠如	I	・生きること“……”結局それはできるだけ満足していられるように工夫することだ(黙説(…))[FS, G]
	D	・「なにいってやんでえ，いつおめえと酒を飲んだい？」「“飲みましたよ”」[OK]
2 表現はあるが，		
1 特定化に必要な情報が不足している	D	
1 縮約の結果残った表現の指示対象と意図されている指示対象との間にカテゴリーのずれがある		
1 全体部分関係の部分へのずれによる不足		・春雨やものがたり行く“蓑”と“傘”(換喩)[YB, SN78]
2 場所へのずれによる不足		・直ぐに“無縁坂”へ往かうかとも思ったが(換喩)[MO, SN78]
3 付加的属性へのずれによる不足		・おっと今はねた鯉だが，やつは百五十万円の錦鯉だよ．．．．ほかにも“農林大臣賞”や“水産長官賞”がぞろぞろ泳いでいるのだよ(換喩)[IHD, SN78]
2 カテゴリーのずれはないが，代置の結果，		
1 指示範囲が拡大されぼかされている		
1 内在的属性への代置による不足		・その日一日時折思い出したように舞っていた“白いもの”が，そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた．(類による提喩)[IY, SN78]
2 上位下位関係の上位概念への代置による不足		・“自然”は痛い(いが栗のこと)[TK]
3 精度の低い方への代置による不足		・決して満点のとれないような問題ではない．現にこのクラスの“何人か”は満点をとっている．
4 「のような」などのたとえへの代置による不足		・法王ボニファキオ八世は，“狐のように”その地位につき，“獅子のように”その職務をおこない，“犬のように”死んだという．(直喩)[M, SN78]
5 先行または後続する状況への代置による不足		・……じゃあおめえ，どうしても飲めねえんだな，だめかい？ ……“やさしく言ってるうちに”飲みなよ(転喩(換喩の一種))[R, SN81]
6 反対の状況の否定による不足		・汗水垂らして掃布握って床を這い回り，目の色変えて吊り床を上げ下げする図は，どう考えても“気の利いた風景でない”(緩叙法)[UH, SN81]

2 指示範囲が縮小され過ぎている		
1 集合要素関係をなす典型事例による不足		・人は“パン”のみによって生きるのではない(種による提喩)[B, SN78]
2 情報がない		
1 同語反復になっているだけで情報がない	I	・女は女だ(同語反復文)
	D	・これは本です(分かりきっている状況で)
2 語彙の分析になっているだけで情報がない	I	・逢わぬ人とは，別離もない(分析命題)[IS]
	D	・今年生まれた赤ちゃんが，お嫁にいくのは21世紀です[TK]
(b)情報の過剰		
1 表現の量が過剰で情報量も過剰	I	
1 表現の羅列による過剰		・今夜，死ぬのだ．それまでの数時間を，私は幸福に使ひたかった．ごっとん，ごっとん，のろすぎる電車にゆられながら，暗鬱でもない，荒涼でもない，孤独の極でもない，ちえの果てでもない，狂乱でもない，阿呆感でもない，号泣でもない，悶々でもない，厳粛でもない，恐怖でもない，刑罰でもない，憤怒でもない，諦観でもない，秋涼でもない，平和でもない，後悔でもない，沈思でもない，打算でもない，愛でもない，救いでもない，言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は，ひとつも持ち合せてゐなかった．(ためらい，列叙法)[DO, SN81]
2 意味的対照関係をなす項目の添加による過剰		・虎は死して皮をのこし，人は死して名をのこす(対比)[G]
2 表現の量は過剰でないが情報量が過剰	D	
1 表現内容の精度に関して過剰		・“28,455キロメートルの”海岸線がある日本に，たった20数カ所のマリーナしかないなんて．(数の提喩)[TK]
2 指示範囲に関して過剰		
1 反対の状況の否定による過剰		・「笑いごとじゃないぞ」とウィングが言った．「笑う気はないさ」，シェーンはライターの火をつけた，「もっとも，だからと言って“泣きたいとも思わん”がね．」(緩叙法)[H, SN78]
2 内在的属性による過剰		・その日一日時折思い出したように舞っていた“白いもの”が，そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた(類による提喩)[IY, SN78]
3 「のような」などのたとえによる過剰		
質の原則に関する逸脱		
(a)真実性の欠如		
1 事実でない	D	
1 真である命題を偽として言う		
2 偽である命題を真として言う(存在しないことを存在することとして言う)		
1 単に存在しないことを存在することとして言う		・人間は一本の葦にすぎない(隠喩)[P]
2 後続状況がない場面で後続状況で先行状況を表現しているかまたはその逆の関係になっている		・袖を濡らす(転喩(換喩の一種))[SN81]
3 意味が反対になっている		・顔に泥ぬられたやて，えらいすまなんだな，“立派な”顔に泥塗って(反語)[NA, SN81]
4 程度が過大または過小の方向へずれている		・支配人は総金歯をにゅっとむいて笑ったので，“あたりが黄金色に目映く輝いた”(誇張)[IHM, SN78]
2 ありえない	I	・いいコートはつぶやく(隠喩(擬人法))[IS]
		・(隠喩(共感覚表現))
		・あの方こそ花，本当の花でございます(隠喩)[S, SN78]
		・波子はだまってゐたが，胸の底に“冷たい炎”がふるへた(逆説(撞着語法))[KY, SN81]
		・たしかにそれは“利休でありながら，利休ではなかった”(逆説(撞着語法))[NY, SN81]
		・あれ，地球が落ちてくる(スカイダイビング中)(逆説)[TK]
		・おいしい生活[IS]
(b)証拠の欠如		

関連性の原則に関する逸脱		
1 表現の量は過剰でないが情報量が過剰(量の原則に関する逸脱の(b)情報の過剰の2の項目に対応する)	D	
1 表現内容の精度に関して過剰		・(＝量(b)情報の過剰の2)
2 指示範囲に関して過剰		・((数の提喩，他)
1 反対の状況の否定による過剰		・(緩叙法)
2 内在的属性		・(類による提喩)
3 「のような」などのたとえ		・(直喩)
様式の原則に関する逸脱		
(a)あいまい		
1 指示対象がはっきりしない	I	・おいしい生活[IS]
		・“自然”は痛い(いが栗のこと)[TK]
2 断定の程度が弱められている	D	・“その節”はとんだ失礼をいたしました[OK]
	I	・彼の言い方は断定“的”ではあるが，決して断定してはいなかった．
(b)多義的	D	・ふるえていては，愛は語れない(コートのコピー)(多義表現)[TK]
(c)簡潔でない	D	・(対比，列叙法，ためらい，緩叙法)
(d)順序正しくない		
1 表現が無秩序に配列されている	D	・(列叙法，ためらい)
2 旧・新情報の順序が逆転している	I	・太るのもいいかなあ，夏は(倒置)[TK]

(B-1-2) 文字数に関して逸脱の感じられるもの.

(B)に属する表現例には，表層表現上の“逸脱”がある．表層表現上の“逸脱”とは，具体的に言えば，韻を踏んだ文章，回文，定型詩，などの，普通の散文では生じてこないであろう特殊な音韻(あるいは文字)の配列による“逸脱”を言う.

なお，Table 1.1およびTable 1.2の実例欄には，それぞれの分類項目にあてはまるとみなされた代表的な修辞的表現例が挙げられている．ただし，挙げられた表現の全体が問題の箇所となっていない場合には，該当箇所を引用符で囲んだ．それぞれの実例の末尾の丸括弧中に示されているのは，その表現例が称される伝統的修辞カテゴリーの名称，あるいは，状況説明であり，角括弧中に示されているのは，その実例の出典である．また，Table 1.1およびTable 1.2中の，項目名の後の記号“I”(independent)は，その表現が文脈から独立させても逸脱が感じられるものであることを表し，“D”(dependent)は文脈があって初めて逸脱が感じられるものであることを表す.

1.3 分類からの示唆

Table 1.1およびTable 1.2に示した分析結果，とくにTable 1.2の“会話の公準”に照らした分類から，修辞的表現における逸脱が，質(真実性)に関する違反(文例(1)参照のこと)だけではないことを確認できた．たとえば，文例(2)にみられるような，量の公準に関する違反もある．このことは，Wilson and Sperber(1981)などによって既に指摘されていることではある．それを本研究は具体的に確認したわけである．とくに，反語，隠喩，緩叙法(litotes, meiosis, understatement)，誇張(hyperbole, overstatement)の4種類の修辞的表現を，質の公準にのみ違反する表現と捉える(Grice, 1975)ことには問題がある，という点を具体例によって確かめた.

感知される具体的な“逸脱”の種類は，量，質，関連性，様式のすべての下位原則の下にある各項目に多岐にわたっている．このことは，Wilson and Sperber(1981)の考えに対する疑問の提出でもある．Wilson and Sperberは，下位原則間の関係や個々の公準の意味にもとづき，Grice(1975)の関連性の公準を定義し直し

た．そして，量，質，関連性，様式の四つの公準を，彼らが言うところの関連性の原則ひとつにまとめることが可能であると主張する．しかし，最終的に関連性の公準からの逸脱とみなされることになるとしても，Griceの言う関連性の公準以外の他の下位原則の項目とも逸脱が様々に関わる以上，逸脱を捉える基準を関連性の原則に還元しようとすることには無理があるように思われる．実際，本研究では，二つ(あるいはそれ以上)の下位原則に違反する文例，および，逸脱のあることは分かるがいずれの下位原則からの逸脱であるか特定できない文例が数多く認められた．

Grice(1975)は，会話の公準が，大きく言って，“言われていることがら(what is said)”に関わる量，質，関連性の三つの下位原則と“伝達の仕方(HOW what is said is to be said)”に関わる様式の下位原則の二つに分かれるとしている．しかし，量，質，関連性の各公準からの逸脱が同時に様式の公準からの逸脱になる場合がある．たとえば，文例(3)は，量の公準と様式の公準の両方に同時に違反する場合である．

(3)　　自然は痛い．　(土屋耕一　[1984]．土屋耕一全仕事[広告批評別冊4]．マドラ出版，より)

(3)は，ある広告のコピー文であり，子供が“いが”の中の栗を取ろうとしている写真と一緒に掲載されていた．“自然”の指示対象が，広告の中のいが栗であるとすれば，その指示対象を特定化するのに必要な情報が“自然”という単語に含まれていないという点で，(3)は情報が不足しており量の公準に違反しているとみなすことができる．また，そもそも，指示対象を特定化するのに必要な情報の含まれていない言い方であるという点で，(3)は様式の第一の公準“表現の不明瞭さを避けよ”の公準に違反しているとも言える．

質の公準と様式の公準の両方に違反している場合もある．

(4)　　おいしい生活．　(糸井重里　[1984]．糸井重里全仕事[広告批評別冊3]．マドラ出版，より)

たとえば，文例(4)はありえないことを述べており真実性に欠けるという点で，質の公準に違反しているが，同時に，指示対象がはっきりしないという点で，様式の第一の公準“表現の不明瞭さを避けよ”の公準にも違反していると言える．

さらに，文例(5)のように，関連性の公準からの逸脱が同時に様式の公準からの逸脱になっている場合もある．

(5)　虎は死して皮を残し，人は死して名を残す．
(現代言語セミナー[編]　[1985]．スルドイ言葉の辞典．冬樹社，より)

(5)では，後半部分が本来伝達したいことであるから，前半部分は内容の関連性に逸脱があることになる．同時に，(5)全体は，簡潔でない冗長な表現形式が用いられているという点で，様式の公準に逸脱があるとみなすこともできる．なお，(5)は従来“対比”と呼ばれている修辞カテゴリーに属する．

Griceは，量の公準と関連性の公準がともに“言われていることがら”に関わる公準であるとしていたが，それら公準の下位原則の項目に同時に違反する場合も見られた．

(6)　28,455キロメートルの海岸線がある日本にたった20数カ所のマリーナしかないなんて．
(土屋耕一　[1984]．土屋耕一全仕事[広告批評別冊4]．マドラ出版，より)

たとえば，文例(6)の“28,455キロメートルの”という部分は，表現内容の精度という点において情報の量が過剰であり量の公準に違反しているが，同時に，情報の量が過剰であれば，余計なことがつけ加えられて述べられているという意味において，関連性の公準にも違反していると言うこともできる．これはGrice(1975)が既に指摘していることでもある．なお，この“28,455キロメートルの”は修辞学で言うところの“数の提喩”にあたる．

その他，逸脱があると感じられるが，いずれの下位原則に関わる逸脱であるか

判断のつかない場合もある.

(7)　　その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが………
(井上靖『比良のシャクナゲ』, 佐藤信夫 [1978]. レトリック感覚. 講談社, より再引用)

たとえば, 例(7)の“白いもの”は, 雪のことを意味しているとした場合その特定化に必要な情報が不足しているという点において量の公準に違反していると言える. しかし, その一方で, 文字通りには白いもののクラスを提示していて雪以外のものをも連想させ得るため指示の範囲に関して情報が過剰であるという点で, 同じ量の公準に違反していると言うこともできる. つまり, この例では, 量に関して過剰でも過少でもあると分類可能な, 多義的な逸脱があると考えることができる. なお, (7)は, 修辞学で言う“類の提喩”に相当する.

二つかそれ以上の下位原則に違反する修辞的表現, および逸脱のあることは分かるがどの下位原則からの逸脱であるか特定できない修辞的表現は, 修辞的表現理解過程内の多くの処理が, 多層的に関係しあっていることを示すかもしれない. 一般に, 会話の公準の各下位原則は, 修辞的表現の理解過程の質的に異なる様々な処理を反映するものであると言えるかもしれない.

安井(1978)は, 本研究で言う“逸脱”を, 隠喩を対象にした考察の中で, “共起場面の欠如”として捉えている. また, 山梨(1982)は, “叙述行為の違反”として捉えている. しかし, “共起場面の欠如”も, “叙述行為の違反”も, そして, 本章の冒頭で触れた“選択制限の違反”も, 質の公準の違反の一つと考えることによって, 一種の会話の公準からの逸脱として扱うことができる. したがって, これらを会話の公準とは別の基準とみなす必要はなく, むしろ, 本研究で行ったように, 会話の公準の下位項目とみなしその妥当性を問題にしていく方が適当であると思われる.

以上が, 会話の公準に照らしてみた場合の修辞的表現のもつ逸脱の特徴について示唆できたことである. その他の結果としては, 既にTable 1.1に示されているように, 逸脱で問題になるコミュニケーション上の規則(性)として, 会話の公準の他に正書法と文体に関する規則を設定することが可能であるということ, また

さらに，逸脱の有無を判定する基準となり得るものとして，コミュニケーション上の規則(性)とは別に，文脈内での表現の出現位置と頻度とに関する統計上の標準値もあるということ，が挙げられる．

1.4 今後の課題

本研究では以上のような分析結果を得たが，これら結果は修辞的表現の理解過程の解明のために有効に利用されなければならない．以下に，これらの結果にもとづいて考えられる今後の研究課題を挙げておく．

第一に，検出される逸脱の種類が，ここで提案された項目によってすべて尽くされているか．第二に，逸脱の依存関係と階層構造が，検出される逸脱を正しく反映しているか，の検討がある．

第三に，ここで提案された，検出される逸脱の種類の分類が，＋αの心理的な効果に関する修辞的表現間の類似性と相違点を捉えることができるかどうか，の検討がある．たとえば，アイロニー(irony)とパロディー(parody)との違いは，アイロニーが言葉の内容や思考(thought)の再生(reproduction)であるのに対し，パロディーが言葉使いそのものの再生であるとする考え(Sperber & Wilson, 1981a; Sperber,1984)がある．このような区別はここで提案された枠組みの中で解釈可能かどうか．あるいは，そもそも，この区別は本研究の枠組みが問題にしている修辞理解過程の第一段階でなされる区別なのか，それともより後の段階でなされる区別なのか，さらに，もし後の段階の問題とすれば，その段階で問題になる修辞の種類の区別とここで扱っている修辞の種類の区別とはどのような関係にあるのか，等々の問題の検討である．

第四に，逸脱の検出の個人差には，検出される逸脱の種類の違いによる場合と逸脱の検出能力(次第に細かく枝分かれしていく分類階層のどのくらいの深さまでその逸脱を検出できるか)の違いによる場合とがあると考えられるが，ここで提案された枠組みによってそのような個人差が説明可能かどうか，の検討がある．

第五に，逸脱があっても＋αの心理的な効果をもたない場合があるが，心理的な効果をもつ場合ともたない場合とはどこがどう異なるのか，の検討がある．

最後に，本研究の最終的な目標のひとつである修辞理解過程と逸脱の検出の過

程との関係についての検討がある．すなわち，今回の研究では逸脱の検出過程を修辞理解過程の第一段階と見なしこれだけを取り出して考察したが，この検出過程がその第一段階であるという考えの妥当性の検討である．たとえば，本当にこの検出過程が理解過程に先立って働く別個の過程として存在する(Jorgensen, Miller, & Sperber, 1984)のか，あるいは，普通の過程で処理できなかった表現が逸脱として検出され，その場合だけさらに別の処理が必要とされるのか．あるいは，普通の過程で処理しきれなかったものがさらにもう一度同じ過程によって別の解釈が見つけ出されるだけである(Sperber & Wilson, 1986)のか，等々の可能性である．それら様々な可能性について，具体的な過程モデルを作成していくこと，さらには，それにともなって各モデルの心理学的妥当性の検証をはかっていくこと，それらが修辞の認知心理学的研究にとっての今後の究極的な課題と言うことができるであろう．

第2章　言葉の“あや”の印象のクラスター分析：“あや”に関する形容語尺度の分類（実験論文）

2.1 “あや”について

日常的な会話のやりとりから文学作品や広告コピー文に至るまで，我々は毎日おびただしい数の表現を聞いたり読んだりしている．そして，しばしばそれらの表現中に言葉の“あや”を感じとったりする．次の例を見てもらいたい．

(1)　　人間は考える葦である．

(1)の表現を読んで，我々は直観的にその中に“あや”を感じとることができる．では，この“あや”とは具体的にどのような心理印象をいうのであろうか．

従来，“あや”のある表現，すなわち修辞的表現に対する心理印象についての研究はほとんど行われておらず，それゆえその方法論も判然としない．どのようにすれば言葉の“あや”というものを心理学的に捉えることができるのであろうか．一般に，心理印象に関する研究ではいわゆる形容語尺度を用いた評定実験が行われてきている．“あや”も何らかの心的活動の結果もたらされるものであるから，“あや”に対しても形容語尺度による印象評定データを得ることができれば，そこからその心理的構成因子を見つけることができるかもしれない．ただ，その前に行っておかなければならないことがある．それは，言葉の“あや”の印象を評定するための形容語尺度としてどのようなものを用意しておけばよいのかを決めておくということである．そこで，本研究では言葉の“あや”に関わると思われる形容語尺度を数多く選択しておき，それらをより少数のグループに分類してみることにする．また，可能ならば，分類された各グループが“あや”の何らかの特徴的な側面を反映しているかどうかを考察してみることにする．

一口に“あや”と言っても，一つの表現を読んで受ける心理印象は多様である．実際，(1)の例から受ける“あや”を，言葉で説明しようするのは難しい．一方，“あや”をもたらす表現自体にも様々な種類があり得る．そしてこのことによっ

ても“あや”という心理印象はさらに多種多様になると考えられる．“あや”が多種多様であるならば，それをもたらす心理的要因も多種多様であるかもしれない．それゆえ，印象評定実験を行うにあたっては以下の点に留意する必要がある．印象評定のための形容語尺度は可能な限り緩い制約の中で選定し，かつ，“あや”をもたらすと考えられる表現もなるべく多く収集しておく．本研究では，分類対象となる形容語尺度を数多く選び，また，できるだけ多種多様な“あや”のある表現，すなわち修辞的表現を対象にする．

ところで，一般に何らかのことがらを言葉で表現しようとするとき，話者はこれから何を話す(書く)かすなわち表現の内容と，その表現内容をどのように話す(書く)かすなわち表現の形式とを選択する必要がある(阿部，1987; Clark & Clark，1977; 桃内，1988)．たとえ同じことがらを話すにしても，どのような語彙と統語形式を選択するかによって，すなわち話者の表現形式の選択の仕方によって，聴者の受ける印象は変わる．もちろん，表現形式の選択は，話者が表現を産出するときに行うことであり，聴者が理解に際して行うことではない．しかし，聴者は同時に話者にもなり得るため，話者が選択した表現形式そのものに対しても何らかの判断を下し得ることが考えられる(金子・佐山・阿部，1986; 第1章を参照されたい)．一例として緩叙法と呼ばれる“あや”のある表現を考えてみよう．

(2)　　難しいがその方法でもやれなくはない．

(2)において，“やれなくはない”という表現を，“やれる”に置きかえても，伝えたいこと自体に大きな変化はない．しかし，明らかに前者の言いまわしの方が，後者よりも修辞的な効果を聴者に与える．このように，伝えようとしている命題内容はおおむね同じでも，表現形式が変わると受ける印象も変わってくる．このことは，聴者が話者の採った表現形式に対し，何らかの評価を下し得るということを示唆している．

そこで，本研究では，2種類の評定実験を行うことにした．第一の評定は，“一般的印象”すなわち表現を読んで直接受ける全体的印象についてである．第二の評定は，“技巧的印象”すなわち言葉の使い方または意図や命題内容の伝え方に対する印象についてであり，それらにはたとえば，字面の印象や音韻列に対する

印象なども含まれる．言語処理の結果としてもたらされる言葉の“あや”の心理印象を，これら二つの側面から検討し，それぞれにあり得る心理的構成因子を考察するとともに，両側面の間の関係をも考えてみることにした．

2.2 修辞的表現を読んで受ける2種類の印象の測定：実験

方法

被験者　被験者は，北海道大学文学部学生22名であった．

材料　印象評定の対象として“修辞的”と思われる言語表現を57例選択した．その際，“あや”のある表現をできるだけ幅広く捉えられるよう配慮し，そのような表現を多く含んでいると思われる文学作品や広告コピー文集などの中から選択するようにした．なお，巻末の付録に選択した全57例を挙げてある．

評定のための尺度には形容語尺度を50対用意した(Figure 2.1およびFigure 2.2に全尺度が示されている)．形容語尺度は次のようにして作成した．まず，修辞に関する文献2冊(佐藤，1978，1981)から，修辞的表現に関係があると思われるすべての形容語を抜き出した．さらにその中で互いに類義語や反対語の関係になく，しかも表現を読んで得られる多くの心理印象を判定できると思われるもの50語を選択した．そして各語についてその反対語を考え，50対の形容語尺度を作った．

形容語尺度はいずれも７段階尺度とした．目盛りの内容は，たとえば“美しい-醜い”という尺度であれば，順に，美しい，かなり美しい，やや美しい，どちらでもない(またはどちらともいえない)，やや醜い，かなり醜い，醜い，とした．

実験材料は2部の小冊子からなる．一方は，ある表現を読んだ際にその表現から受ける“一般的印象”を評定するためのものであり，他方は“技巧的印象”を評定するためのものであった．いずれの小冊子とも57ページあり，各小冊子の各ページには，57の修辞的表現例の中のいずれか一つと50個の形容語尺度が印刷されていた．形容語尺度の向きと配列順序は冊子中の各ページごとに変え，ランダムにした．

手続き　各被験者は，読解後の“一般的印象”および表現上の“技巧的印象”の評定のための小冊子2冊を手渡される．“一般的印象”の評定では57の表現例のそれぞれが与える直接的で全体的な心理的印象を評定するように求められる．被験者はページごとに記されている修辞的表現一例を読み，それに対する素朴な印

象を50の形容語尺度すべてについて評定しなければならない．被験者は，教示の中で，次のような“一般的印象”の評定方法を説明される．

その1　提示された言語表現が与える心理的な印象を評定することです．まず，提示されている言語表現全体を読み，そのあとで，それらに関してもった“感じ”を判断して下さい．言語表現の下には両端に形容語のついた尺度が50個印刷されていますので，その印象を各尺度上で上から順に判断していって下さい．

一方，“技巧的印象”の評定では“一般的印象”と同じ57の表現例それぞれに対して，表現上の技巧に注目し，言葉の使い方および意図や命題内容の伝え方を評定するように求められる．“一般的印象”同様，各ページに記されている修辞的表現一例を読み，その表現上の技巧についてどのような印象を受けるかを50の形容語尺度すべてについて評定しなければならない．被験者は，教示において，以下のような“技巧的印象”の評定方法の説明を受ける．

その2　言語表現の“表現形式”を(表現上の)技巧としてみた場合にどのような印象をもったかを評定することです．ここでいう“表現形式”とは，言葉の使い方や内容の伝え方，文字列の形態，その他文や語句を特徴づける要因のことを指します．その1と全く同様に尺度が50個印刷されていますので，その1と同じやり方で上から順次記入していってください．

被験者は，“一般的印象”の側面の評定から始め，続いて“技巧的印象”の側面の評定を行う．その際，それぞれの側面の小冊子中の各表現例の各形容語尺度に対し，第一印象や直観的判断だけで答えるよう，かつ，上から順に，尺度どうしは互いに無関係とみなしてして評定するよう求められる．評定の際の制限時間はとくに課されず，また，途中，休憩を自由にとることも許された．

結果と考察

被験者が評定そのものに要した時間は，4時間前後であり，また，評定開始から終了まで1日から4日程度必要であった．

こうして得られた57種の修辞的表現例のうち，一つの表現例に対する反応結果

は，反応用紙の一部に不備があったため分析から除いた．したがって各被験者につき56(修辞的表現例の数)×50(形容語尺度の数)の素データ行列2種が上の手続きにより得られた．素データ行列2種のうち，一方は“一般的印象”について，他方は“技巧的印象”についてのものであった．ここでは，形容語尺度の分類を行い，言葉の“あや”の印象の分析を試みた．

分析方法には分岐型クラスター分析 VARCLUS を用いた．VARCLUS は，主成分分析を応用したものであり(Harman, 1976; Sarle, 1985)，変量の数を減らし対象をより簡潔に記述するのにもっとも有効な手段の一つである．とくに，この手法は多数のしかも意味上互いに似かよったところのある変量群のグループ分けに適していると考えられる(Sarle, 1985)．

分析では以下に述べる同一の手続きが繰り返された．手続きは，分割されるクラスターの決定とその分割とからなっている．始めは全形容語尺度が一つのクラスターとみなされ二つに分割される．その後，複数のクラスターのうちのいずれか一つが選ばれ分割され続ける．分割されるクラスターは次のようにして決められる．すなわち，クラスター内の形容語尺度間の相関行列に対する固有値の中で二番目に大きな固有値を，その時点で存在する全クラスター間で比較し，最も大きな第二の固有値をもったクラスターが選択される．一つのクラスターが選択された後，その中の各形容語尺度が，そのクラスターの第一，第二の固有値に対応する二つの主成分の中でその形容語尺度との相関の高い方に割り当てられる(Anderberg, 1973; Sarle, 1985)[1]．全分析はいずれかのクラスターの第二の固有値の中に1以上のものがなくなった時点で終了する[2]．

<u>**クラスターの解釈**</u>　Figure 2.1には“一般的印象”に関するクラスター分析の結果が，Figure 2.2には“技巧的印象”に関するクラスター分析の結果が示され

---

1)　厳密に言えば，各形容語尺度は，NCS(Nearest Component Sorting; Anderberg, 1973 および Sarle, 1985 を見てほしい)アルゴリズムに従ってまず，いずれかの主成分へ割り当てられ，すべての割当が終了したのち，相関の高い成分に正しく割り当てられたかどうかがチェックされる．

2)　クラスターの分割は各分析段階どうしが階層的になるように行われた．

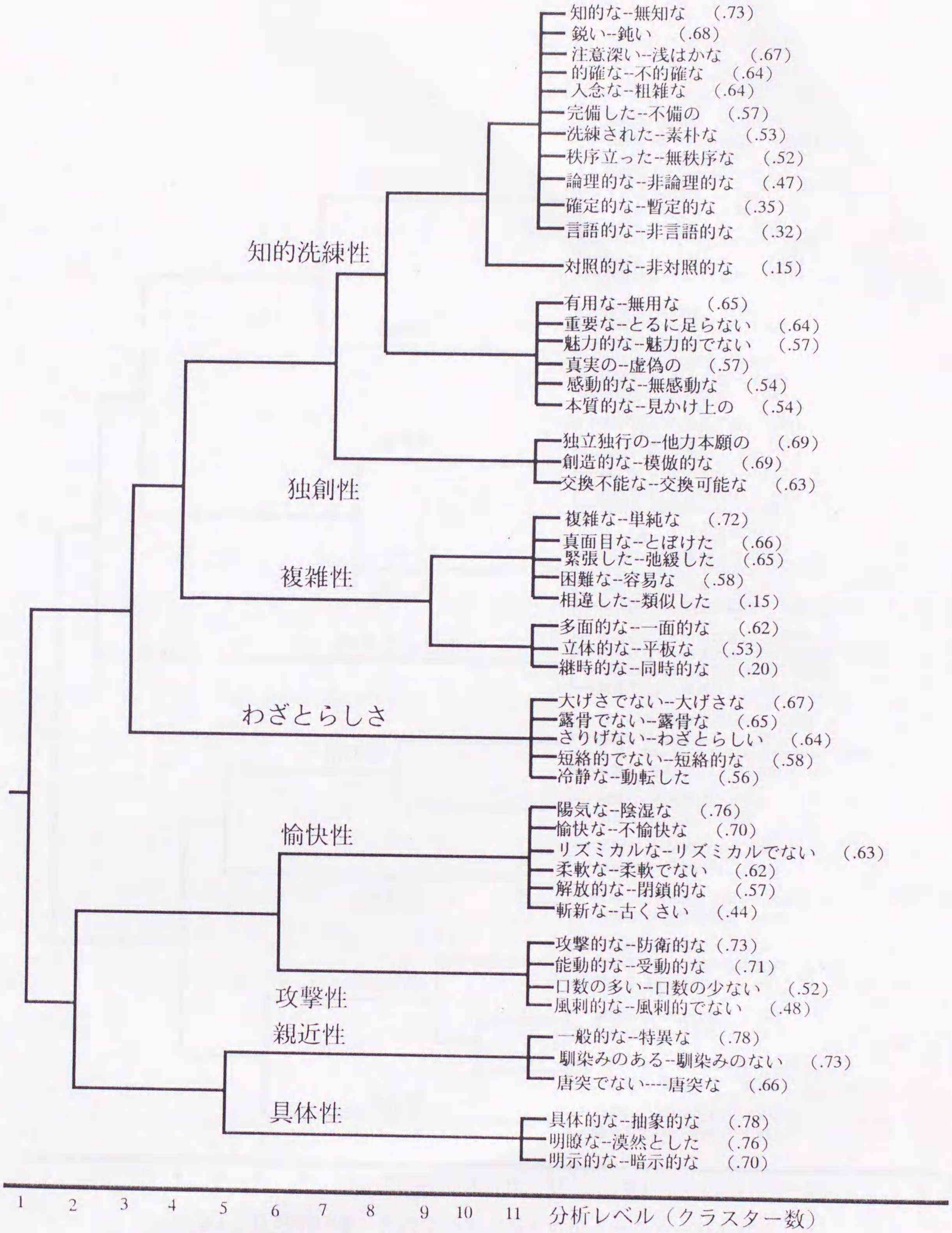


Figure 2.1 “一般的印象”に関する形容語尺度のクラスター分析結果，および，クラスター数８のレベルにおける，形容語尺度とそれが属するクラスターとの相関係数

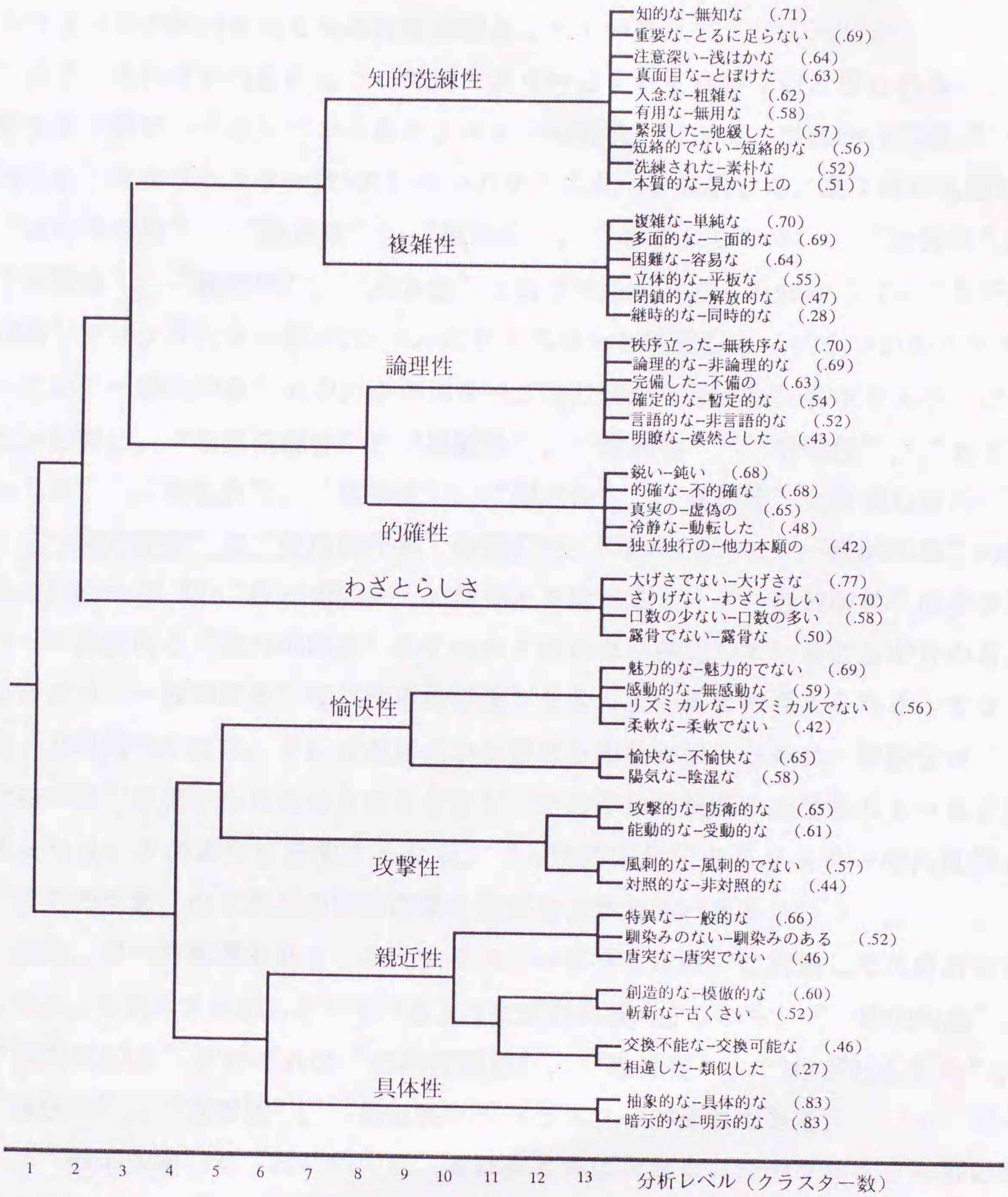


Figure 2.2 “技巧的印象”に関する形容語尺度のクラスター分析結果，および，クラスター数9のレベルにおける，形容語尺度とそれが属するクラスターとの相関係数

ている．最終的なクラスター数は“一般的印象”が11，“技巧的印象”は13であった．各図とも形容語尺度は，クラスターごとに，形容語尺度とそれが属するクラスターとの相関が正となる向きに揃えられている．

以下，それぞれの分析についてクラスターのまとまりがよいと思われる分析段階を適宜選び，そのレベルの各クラスターの解釈を試みた．Figure 2.1の“一般的印象”ではクラスター数8のレベルのクラスターを解釈した．最上段から順に，“知的洗練性”，“独創性”，“複雑性”，“わざとらしさ”，“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”，“具体性”と名づけた．一方，Figure 2.2の“技巧的印象”ではクラスター数9のレベルのクラスターを解釈した．いくつかのクラスターには“一般的印象”の中のクラスターと同じ解釈を与えた．各クラスターは，上から順に，“知的洗練性”，“複雑性”，“論理性”，“的確性”，“わざとらしさ”，“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”，“具体性”と解釈した．

“一般的印象”と“技巧的印象”の類似性 Figure 2.1の“一般的印象”の結果とFigure 2.2の“技巧的印象”の結果とを比べると，“一般的印象”のクラスターの尺度群と“技巧的印象”のそれらとはかなり共通していることが分かる．もとより“一般的印象”は“技巧的印象”を含んでいるとも考えられる．すなわち，表現例の中には，その表現形式から受ける印象が強いために，被験者が“一般的印象”を求められたときにも主としてその印象で判断する場合もあったと考えられる．そのように推測するなら，“一般的印象”のクラスターの尺度群と“技巧的印象”のそれとの間の結果の類似は当然ともいえる．

実際，同一の解釈を与えられたクラスターどうしは互いに共通した尺度群を多く含み，それゆえ対応しあっているように思われる．すなわち，“一般的印象”，“技巧的印象”それぞれの“知的洗練性”，“複雑性”，“わざとらしさ”，“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”のクラスターがそれである．

“一般的印象”と“技巧的印象”とは，ともに大きく二つのクラスター群に分かれる点でも共通している．すなわち，“一般的印象”では，“知的洗練性”，“独創性”，“複雑性”，“わざとらしさ”を含む群と“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”，“具体性”を含む群とに大別され，“技巧的印象”では，“知的洗練性”，“複雑性”，“論理性”，“的確性”，“わざとらしさ”を含む群と，“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”，“具体性”を含む群とに分かれる．

“あや”を測る尺度の選定　クラスター分析の結果を，“あや”の心理的効果を測定する今後の研究のために活用することができる．しかし，クラスター内のすべての形容語尺度が“あや”を測る尺度として妥当であるとは言えない．クラスター内の形容語尺度はいずれも“あや”の印象の何らかの側面を反映するものであるとは言っても，それらすべてがそれらの属するクラスターを代表できるとは限らないからである．

Figure 2.1の各形容語尺度の左のかっこの中には，“一般的印象”のクラスター数8のレベルにおける，形容語尺度とそれが属するクラスターとの相関係数が示されている．一方，Figure 2.2の各尺度左のかっこ内には，“技巧的印象”のクラスター数9のレベルにおける，尺度とクラスターとの相関係数が示されている．

明らかに，Figure 2.1，Figure 2.2の形容語尺度の中には，当該クラスターとの相関の非常に低い尺度があるのが分かる．たとえば，Figure 2.1の“対照的な-非対照的な(r = .15)”やFigure 2.2の“継時的な-同時的な(r = .28)”がそれである．これらの尺度は，実際には，“あや”の測定には向かないか，あるいは，“あや”とは無関係の尺度であったと考えられる．

“一般的印象”と“技巧的印象”の結果の類似は，表現形式からもたらされるであろう“あや”の心理印象を，それ以外の“あや”から分離するのが難しいことを示している．それゆえ，ここでは，“あや”という心理印象の強さや性質を測定するための形容語尺度として，“一般的印象”のクラスターから選んでおくのが妥当かもしれない．その際，たとえば，“知的洗練性”からは“知的な-無知な”(r = .73)，“独創性”からは“創造的な-模倣的な”(r = .69)，“複雑性”は“複雑な-単純な”(r = .72)，“わざとらしさ”は“大げさな-大げさでない”(r = .67)，“愉快性”は“陽気な-陰湿な”(r = .76)，“攻撃性”は“攻撃的な-防衛的な”(r = .73)，“親近性”は“一般的な-特異な”(r = .78)，“具体性”は“具体的な-抽象的な”(r = .78)というように，クラスターごとに，相関係数の高い尺度を選ぶのがよいであろう．

クラスターの性格　Figure 2.1およびFigure 2.2の上部に記されているクラスター群，すなわち，“一般的印象”における“知的洗練性”，“独創性”，“複雑性”，“わざとらしさ”と“技巧的印象”における“知的洗練性”，“複雑性”，“論理性”，“的確性”，“わざとらしさ”のクラスターは，ごく大ざっぱにい

って，表現に対する，知的・理性的な側面での印象評定に関わる尺度群を含むと考えられる．これに対し両図の下部に記されているクラスター，すなわち，“愉快性”，“攻撃性”，“親近性”，“具体性”のクラスターは，表現に対する，情動的な側面での印象評定に関わる尺度群を含むと見なせるかもしれない．

ただし，どちらのクラスター群に属する尺度であれ，個々の形容語尺度が反映する表現の側面は，ある特定の側面あるいは層に限られるというわけではなさそうである．たとえば，“知的な-無知な”という尺度上に現れる評定値は，表現に用いられた語彙や表現形式に依存して決まる場合もあるであろうし(たとえば，難解な単語や統語形式を用いた場合)，その話題(たとえば，量子力学についての表現の場合)や登場人物(たとえば，表現に高名な哲学者が登場するような場合)だけで決まる場合もあるであろう．つまり，聴者が表現から受ける印象は，いろいろな面，いろいろな層から来るということであり，その面・層としては，話者，話題，登場人物，等々が考えられるということである．

結局，本結果から確認できることは，今後，修辞的表現に対する印象評定を求める際には，大きくいって，知的・理性的側面に敏感な尺度と情動的側面に敏感な尺度の両者を必ず用意すべきということと，できるならば，そのような評定の尺度を，Figure 2.1に示されるような数種類のクラスターから一つずづバランスよく選択すべきということである．また，推測できることは，それら数種類のクラスターのそれぞれを性格づける特徴が，言葉の“あや”を構成する心理的因子として解釈できる可能性がある，ということであろう．

2.3 “あや”の情動的側面

“一般的印象”(Figure 2.1)，“技巧的印象”(Figure 2.2)の各クラスター群に対して与えた諸々の解釈は，人が“あや”のある表現を読んで抱く様々な日常的印象を総括・分類し，それぞれに直観的な説明を与えたものとなっている．しかし，むろんこの程度の簡単な説明では十分とは言いがたい．“あや”の印象とは何かを説明するためには，たとえば，なぜ人はわざわざ“あや”のある表現を用いて意思を伝え合うことをするのか，あるいは，言語の理解や産出のどのような過程の中で“あや”の印象がもたらされるのかなどといった問題に答えられな

くてはならない．以下では，本研究結果を過去の研究結果と比較することにより，各クラスターに対する解釈にさらなる考察を加え，そのような問題の解決への手がかりとしたいと思う．

Ortony, Clore, and Foss(1987)は，過去の研究者たちによって情動(affect, emotion)を表わすと判断された単語(以下，情動研究材料語と呼ぶ)を集め，各単語が文脈中で具体的にどのような対象を指示するかを分析し，それらを，それらが指示する状況の種類ごとに，数カテゴリーに分類した．情動研究材料語は，Table 2.1に示される諸カテゴリーに階層的に分類される．Table 2.1内のカテゴリーのうち，話者の情動状況を指示する，すなわち話者の情動を表現していると彼らによって判断された単語のグループは，“情動状態(affective states)”，“情動-行動状況(affective-behavioral conditions)”，“情動-認知状況(affective-cognitive conditions)”のみである．分類の際，彼らは，情動状況(affective conditions)，認知状況(cognitive conditions)，行動状況(behavioral conditions)の3種の状況の概念を用いた(これらの状況の区別についての詳細は，Hilgard(1980)を参照してほしい)．“情動状態”の単語は情動状況だけを指示するのに対し，“情動-行動状況”は情動状況と行動状況を，“情動-認知状況”は情動状況と認知状況をそれぞれ同時に指示する．

情動状況への指示に関する彼らの判断は，主観的ではあるが直観的に受け入れることができるものである．たとえば，Table 2.1の中で“alone”は“一人でいる”という“客観的記述”であり情動状況は指示しない．これに対し“lonely”は“ひとりぼっちで寂しい”という話者や登場人物の情動状況を指示する．

本研究で使われた形容語のいくつかは，彼らの集めた情動研究材料語中に含まれていた．双方の研究に共通する単語と，それらの属する“一般的印象”，“技巧的印象”の各クラスター，および，Ortony et al.(1987)のカテゴリーとをTable 2.2に示す．この表から，本研究結果のクラスターと，Ortony et al.(1987)のカテゴリーとを以下のように対応づけることができそうである．

まず，“一般的印象”と彼らの分類とを比較すると，“一般的印象”において知的・理性的側面とされた単語は，“弛緩した(psychologically relaxed)”を除けば，彼らの分類中で，直接情動状況を指示しないとされた“行動-認知状況”，“主観的評価”，“認知状況”の各カテゴリーに該当している．このことから，

Table 2.1
Ortony, Clore, and Foss(1987)による情動研究材料語の指示対象の分類

情動研究材料語の指示対象	単語の具体例
external conditions (外的状況)	
objective descriptions (客観的記述)	abandon, alone, cheated, defeated, ignored, lucky, powerful, successful, など
subjective evaluations (主観的評価)	good, hopeless, horrible, inferior, ridiculous, strange, trustworthy, wonerful, など
internal conditions (内的状況)	
physical and bodily states (肉体的・身体的状態)	dizzy, feverish, hungry, ill, pain, refreshed, sleepy, tired, など
mental conditions (心的状況)	
affective states (情動状態)	afraid, angry, anxious, glad, lonely, love, miserable, sorrow, など
affective-behavioral conditions (情動－行動状況)	cowardly, gleeful, jubilant, kind, mournful, shy, tender, triumphant, など
affective-cognitive conditions (情動－認知状況)	amused, desire, empathy, encouraged, intimate, optimistic, peaceful, troubled, など
cognitive conditions (認知状況)	accept, certain, confused, curious, doubtful, inspired, interested, surprised, など
behavioral-cognitive conditions (行動－認知状況)	bold, careful, competitive, crazy, critical, friendly, lazy, stubborn, など

本研究結果において知的・理性的側面と解釈された形容語の多くは，彼らの分類でも情動状況を指示しないと推察される．

また，“一般的印象”の“愉快性”は，Ortony et al.(1987)の“情動状態”に含まれる．このことから，“愉快性”と“情動状態”との対応が示唆される．Table 2.1に示すように，“情動状態”は“嬉しい(glad)”や“悲しみ(sorrow)”のような比較的単純で日常頻繁に経験する情動に対応する単語を多く含んでいる．この意味で，“愉快性”は言葉の“あや”の印象の中の最も基本的な情動的側面を反映する形容語を含んでいると言えるかもしれない．

さらに，“一般的印象”の“攻撃性”のクラスターはOrtony et al.(1987)の“行動-認知状況”の一部に相当している．“行動-認知状況”は直接情動を指示しない単語からなり，それゆえ“攻撃性”が“行動-認知状況”と対応するとすれば，“攻撃性”を情動的側面とした先の解釈とは食い違うことになる．Ortony et al.(1987)は，情動研究材料語の中には，前後の文脈によって情動状況を指示したりしなかったりするものがあると指摘している．たとえば，“客観的記述”の“abondoned”(Table 2.1を参照のこと)は“feeling abondoned”と用いられれば“諦めている”となり情動状況を指示するが，“being abondoned”と使われれば“放棄している”となり情動状況を指示しなくなる．“行動-認知状況”の単語の中には，たとえば“競争的な(competitive)”や“友好的(friendly)”のように，文脈と合わされると情動状況を指示するようになるものが多いように思える．このことから推測するなら，“攻撃性”の形容語は，“あや”の情動的側面の中でもとくに文や文章など，より大きな単位の表現を読んで得られる総合的な印象を表わしているのかもしれない．

“一般的印象”のクラスターのうち，Ortony et al.(1987)において情動状況を指示するとされたカテゴリーに該当する単語を含むものは，“愉快性”のみである．また，Table 2.2における対応から，“愉快性”は，情動状況だけを指示する“情動状態”と対応すると推測される．本研究の形容語中に，情動状況と同時に他の状況をも指示するカテゴリーにあてはまるものがないように見える理由は，たまたま本研究で用いられた形容語の中には情動を表わすものが少なく，逆にOrtony et al.(1987)では当然のことながら情動を指示する単語が多く含まれていたためであろう．

Table 2.2
本研究で用いられた形容語とOrtony, Clore, and Foss(1987)で扱われた情動研究材料語との対応

本研究の形容語[a]（Ortony, Clore, and Foss(1987)の情動研究材料語）	“一般的印象”のカテゴリー	“技巧的印象”のカテゴリー	Ortony, Clore, and Foss(1987)におけるカテゴリー
注意深い（careful）－浅はかな（careless）	知的洗練性	知的洗練性	行動－認知状況
とるに足らない（unimportant）	知的洗練性	知的洗練性	主観的評価
魅力的な（attractive）－魅力的でない（unattractive）	知的洗練性	愉快性	主観的評価
感動的な（impressed）	知的洗練性	愉快性	認知状況
真面目な（earnest）	複雑性	知的洗練性	認知状況
弛緩した（psychologically relaxed）	複雑性	知的洗練性	情動状態
弛緩した（physically relaxed）	複雑性	知的洗練性	肉体的・身体的状況
動転した（upset）	わざとらしさ	的確性	情動状態
陽気な（cheerful, merry）	愉快性	愉快性	情動状態
愉快な（pleasure）	愉快性	愉快性	情動状態
攻撃的な（aggresive）－防衛的な（defensive）	攻撃性	攻撃性	行動－認知状況
風刺的な（sarcastic）	攻撃性	攻撃性	行動－認知状況

[a] 本研究において形容語尺度の両端をなしていたものどうしは対にして示した．

他方，“技巧的印象”とOrtony et al.(1987)のカテゴリーとの比較では，“技巧的印象”の“攻撃性”のクラスターがOrtony et al.(1987)の“行動-認知状況”の一部に相当していること以外には対応は見られない．この理由は，“技巧的印象”が表現形式そのものに注目した評定であったために，“情動状態”への直接的な指示の結果もたらされる印象と，情動以外の状況を指示し間接的に情動を喚起しもたらされる印象とが区別されにくくなり，その結果，後者に対しても前者と同じような評定結果が与えれられたためかもしれない．

本研究結果とOrtony et al.(1987)のカテゴリーとの比較から，言葉の“あや”の印象が，話者の多様かつ多層的な知的・理性的側面や情動的側面から成り立っていることを確認できたといえるであろう．人が“あや”のある表現を使う理由の一つは，このような多様で多層的な知的側面や情動を効果的に伝えることができるためであると考えられる．したがって，今後の研究課題として，複雑に絡み合うこのような印象側面をいかに一つ一つ解きほぐし，明らかにして行くかということが挙げられるであろう．

“あや”の印象は，一単語から文章に至るまで，あらゆるレベルの表現の処理の過程において生み出されるものであると考えられる．それゆえ，今後，どのような言語処理過程の中で“あや”の印象がもたらされるのかを子細に調べて行こうとするのであれば，対象とする表現のレベルを厳密に統制することが必要になろう．

第Ⅱ部

同語反復文理解の認知過程

第Ⅱ部では，“A is A”，または“AはAである”の名詞述語文形式をとる同語反復文の理解過程を考察する．“A”と“B”とが異なる“A is B”の一般の名詞述語文の理解と同一の名詞“A”の繰り返される同語反復文の理解との間の一見して分かる違いは，一般の名詞述語文の理解が主として“A”と“B”との間の意味関係を計算することであるのに対し，同語反復文の意味解釈は繰り返される“A”の意味そのものから同語反復文の何らかの意味を計算するということである．“A”自体から同語反復文の意味を導き出すとはいえ，同語反復文の意味は“A”の意味とは異なる．とすると，同語反復文の意味は，少なくとも部分的にはその同語反復文の置かれた文脈や状況に依存して決められるのかもしれない．以下，第3章では，英語の同語反復文の意味解釈について，過去の研究を概観する．また，第4章では，日本語の同語反復文の意味解釈について，従来の研究を概観した後考察を行う．第5章では，日本語同語反復文の意味解釈に及ぼす文脈および繰り返される名詞の性質に関する実験的考察を述べる．

第3章　英語同語反復文の意味解釈について（展望論文）

第3章では，英語の名詞述語文形式の同語反復文がどのように解釈されるかという問題を取り扱う．ここでは，その問題に関する従来の研究を展望し，そこでの議論を整理することを目的とする．英語の名詞述語文形式の同語反復文とは，(1)の形式をとるものをいう．また，次章で扱う日本語の名詞述語文形式の同語反復文とは，(2)の形式をとるものを指す．

(1)　(ART) A be (ART) A.　(A: 名詞; ART: 定冠詞，不定冠詞，または無冠詞)

(2)　AはAである(または，AはAだ).　(A: 名詞)

このような文形式をもつ同語反復表現は，様々な言語においてよく見られる．たとえば，英語においては(3)のような表現を，また，日本語においては(4)のような表現を，日常生活の中でよく聞く(見る)ところであろう．

(3)　Business is business.

(4)　(しょせん，)　子供は子供だ．

以下，本章では，“同語反復文”とは(1)または(2)の形式の同語反復文を指すものとする．また，英語および日本語の同語反復文中で繰り返される名詞“A”を“反復語”と呼ぶことにする．

本章では，まず，3.1において，同語反復文の意味解釈に関わる研究が，いわゆる“文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ表現の産出・理解に関する研究の中に位置づけられるものであることを述べる．続いて，3.2から本題に入り，同語反復文の意味解釈について何が問題となるのかを，日本語と英語の文例を挙げつつ説明する．3.3では，英語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を展望する．そ

して，3.4では，第4節での議論を踏まえ，英語同語反復文の意味解釈の文脈独立的な側面と文脈依存的な側面の両面について考察し，議論のまとめを行う．

なお，第4章では，日本語の同語反復文の意味解釈に関して，英語の場合と同様の展望と考察を行い，その後に，その意味解釈の(個々の言語を超えた)普遍性に言及する．

3.1 “文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ表現としての同語反復文

Grice(1975, 1978)が“会話の公準”を提案して以来，それを基本的な理論的枠組みに据え，文字通りの意味を超えた意味を運ぶ様々な表現を，会話の公準の下位原則に違反する表現として位置づけようとする試みが行われてきている(たとえば，Brown & Levinson, 1978; Levinson, 1983; 金子・佐山・阿部，1986; Sperber & Wilson, 1986; 山梨，1986, など)．そうした試みは，“修辞的”な表現や“間接的”な表現などを包括的に把握し，それらに共通する意味解釈過程を探って行こうとするアプローチといえる．そのような研究はいずれも，“同語反復文”の使用を，“緩叙法”，“誇張”などとともに，会話の公準の下位原則である“量の公準”に違反する代表的な例として捉えている．

他方，こうした試みとは別に，“隠喩”，“アイロニー”などと呼ばれる表現，あるいはいわゆる“間接的発話行為”として機能する表現，等々の理解過程をそれぞれ個別的に扱う研究も盛んに行われるようになってきている．多種多様に存在するそうした研究の中には，たとえば，隠喩の理解に関する Gildea and Glucksberg(1983), Gluckberg and Keysar(1990), Ortony(1979), Ortony, Schallert, Reynolds, and Antos(1978), などの研究，アイロニーの理解に関する Clark and Gerrig(1984), Jorgensen, Miller, and Sperber(1984), Kreuz and Glucksberg(1989), Sperber(1984), Williams(1984), などの研究，また，間接的発話行為の理解に関する Gibbs(1982, 1983, 1984, 1986)の研究，等々が含まれる．そのような状況の中で，近年，同語反復文の理解に関してもいくつかの考察が行われるようになってきている．本研究では，同語反復文の理解に関するそうした研究の現状を展望しつつ，そこでの議論を整理することを本題とする．

3.2 同語反復文の容認可能性

同語反復文は，文字通りの意味では，聴者に何ら新しい情報を伝えない．したがって，その意味で，同語反復文は明らかに量の公準に違反している表現といえる．しかしながら，同語反復文は，日常の言語活動の中で充分に意味のある発話として産出されたり理解されたりしている．では，どのような場合に，同語反復文は意味ある発話として容認されるのであろうか?

文脈から単離され，同語反復文1文のみが与えられた場合を想定してみよう．そして，そうした場合，同語反復文のみからどの程度明確な意味を受け取ることができるのかを考えてみよう．

(5a)　ゴミはゴミだ．
(5b)　? 空は空だ．

(6a)　A diamond is a diamond.（Gibbs & McCarrell, 1990, より）
(6b)　? A bottle is a bottle.（Fraser, 1988, より）

一般に，日本語を母語とする聴者ならば(5b)よりも(5a)の文意の方を解釈しやすいと感じ，また，英語を母語とする聴者ならば(6b)よりも(6a)の方を解釈しやすいと思うであろう．(5a)や(5b)の例，あるいは(6a)や(6b)の例は，いずれも，(7)や(8)のような慣習化(conventionalize)された言いまわしとは異なる．

(7)　（腐っても，）鯛は鯛である．

(8)　Boys will be boys.

また，(5a)，(5b)も(6a)，(6b)も，ともに文としての表現形式は同じである．したがって，(5a)と(5b)の間，および(6a)と(6b)の間の解釈しやすさの違いは，反復語の何らかの違いから生じると考えるのが妥当であろう．つまり，聴者は，“ゴミ”，“diamond”といった名詞から構成される同語反復文に対しては，解釈

を促す特定の文脈や発話状況が与えられなくとも，比較的明確な意味を引き出すことができる，ということである．

今度は，より一般的に，何らかの文脈あるいは発話状況の下で同語反復文が発せられた場合を想定してみよう．文脈・状況が変わると，同語反復文から受け取ることのできる意味はどの程度変わるものであろうか?(9a)，(9b)の例を見てほしい．

(9a)　いくら小さくても，ダイヤはダイヤだ．十分に価値がある．

(9b)　いくら高価だといっても，ダイヤはダイヤだ．命にはかえられない．

我々は，同一の同語反復文“ダイヤはダイヤだ”を，互いに異なった意味をもつものとして受け取る．その解釈の差は文脈の違いからもたらされるといえる．

(5a)と(5b)，(6a)と(6b)の例および(9a)と(9b)の例は，同語反復文の意味解釈の二つの異なる側面を示している．すなわち，(5a)と(5b)，(6a)と(6b)の例から分かるように，たとえ文脈・状況から単離されたとしても，ある種の同語反復文は明瞭な意味をもつものとして解釈され得るということであり，また，(9a)と(9b)の例に見られるように，同一の同語反復文であっても，文脈・状況が変わると異なる意味に受け取られる場合もある(佐山・阿部，1988a，1988b，1991a，1991b，1994)，ということである．

3.3 英語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

これまで，英語では，(1)の形式をもつ同語反復文の意味解釈のあり方について，ある程度の言語学的考察や心理学的考察がなされてきている．そうした考察は，前節の終わりで指摘した同語反復文の意味解釈のあり方をどのように説明しているであろうか? 以下，そうした点を中心にして過去の主な研究の内容を述べていくことにしよう．

3.3.1 Levinson(1983)の研究

Levinson(1983)は，その著書『語用論(pragmatics)』において，文字通りの意

味を超えた意味が推論される基本的原理を議論しており，その中で同語反復文の場合にも触れている．彼は，聴者が，会話の公準を基盤とする言語普遍的な推論の原理を数多く有しており，そうした原理の一部を，言語表現それ自体とは関係なく文脈・状況に依存して選択し，個々の言語表現に適用すると主張する．

同語反復文の場合について具体的に言えば，聴者は次のように解釈するという．まず，同語反復文を，“$\forall x\ (W(x) \rightarrow W(x))$”という論理形式で表される恒真命題を自然言語によって表現したものとみなす．そして，それが，文字通りの意味では，何も新しい情報を伝えておらず，量の公準に違反していることに気づく．聴者は，そうした違反が見かけに過ぎず，実際には会話が協力的に行われているはずであると考える．そして，たとえば同語反復文(10)に対しては，同語反復文が発話されるようなすべての文脈・状況に共通にあてはまる推論の原理を使い，「ひどい状況は戦争では常に起こる．それは戦争の性質であり，その特別な災難を嘆いてもためにならない」とでも表現できるような一般的な意味を推論する．さらには，実際に(10)が発せられる個々の文脈・状況それぞれに適合する推論の原理を用い，文脈・状況ごとに変わる個別的意味を付加的に推論する．

(10)　War is war.

要するに，Levinsonの同語反復文の意味解釈に関する主張は，聴者が同語反復文に対して適用する推論の原理が，おしなべて文脈・状況に依存して選択される，つまり，同語反復文の意味が基本的に文脈・状況依存的に決まる，ということである．

3.3.2 Wierzbicka(1987)の研究

3.3.2.1 すべての同語反復文に適用される言語知識　Wierzbicka(1987)は，同語反復文の意味が文脈・状況に強く依存して決まるとするLevinson(1983)の考えに反対する．彼女は，特定の文脈・状況によらず，一般的な言語知識さらには同語反復文に特有の表層表現に関する知識(冠詞の有無と種類および反復語の単数・複数に関する知識)を参照するだけでほぼ同語反復文を解釈できると主張する．Wierzbickaは，言語知識の範囲内に，あらゆる同語反復文に共通して適用される

慣習化された知識があると考える．彼女は，そうした知識が単語の意味的知識とは異なるが，単語の知識と同様に“意味的不変体(semantic invariant)”であると見なす．彼女によれば，同語反復文を解釈する際，通常聴者は[A]，[B]二つの意味的不変体を参照し，利用するという．

[A]　An A is not different from other A's.(All A's are the same.)
(あるAは他のAと違わない．[すべてのAは同じである．])

[B]　This cannot change. (これは変わらない．)

また，彼女によれば，(11)，(12)のように反復語が“ユニークな対象(unique entities)”を指示する同語反復文の場合には，聴者は知識[C]を援用するという．

(11)　East is east.

(12)　Samantha is Samantha, and you are you.

[C]　This cannot be denied.(Nobody could say that this is not true.)
(これを否定することはできない．[誰もこれが真実でないとはいえないであろう．])

3.3.2.2 特定の同語反復文に適用される言語知識　こうした，あらゆる同語反復文に適用できる言語知識に加え，Wierzbicka(1987)は，一部の同語反復文のみに適用される言語知識もあると指摘する．彼女によれば，英語の同語反復文には，冠詞の有無，反復語の単数・複数の違い，および，反復語が何らかの特別な意味的カテゴリーに属するか否かによって“マーク(mark)”されるいくつかのパターンがあり，それらのパターンごとに慣習化された一定の言語知識が記憶から引き出されるという．それゆえ，Wierzbickaの考えに従えば，人はそうした微妙な表現形式上の違いをも手がかりとしながら同語反復文を解釈していることになる．彼女はそうした英語同語反復文のパターンを“下位構文(sub-construction)”と

呼ぶ．そして，英語を母語とする聴者は少なくとも3種の下位構文(の知識)を保持していると指摘し，それぞれ“複雑な人間の行為に対する真摯な態度(sober attitude toward complex human activities)”の同語反復文，“人間の性質に対する寛容(tolerance for human nature)”の同語反復文，“義務(obligation)”の同語反復文と名づけている[1]．

“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の同語反復文：

反復語が，単数形をとり，かつ無冠詞で用いられ，かつ相互作用を伴う複雑な人間の行為を表わす．

Wierzbicka(1987)は，この下位構文にあてはまる同語反復文の例として，(13)，(14)((3)に同じ)，(15)などを挙げている．

(13)　War is war.

(14)　Business is business.

(15)　Politics is politics.

Wierzbickaによれば，この下位構文にあてはまる同語反復文がもつ反復語によって指示される対象は，特殊な状況での行為あるいは別の世界で起こる出来事であり，そうした行為は大目に見なければならず，また避けることのできない否定的側面をもつ，という．そして，この下位構文にあてはまる同語反復文から，聴者は，そのような複雑な人間の行為に対し“真摯な態度”で接する必要がある，と

---

[1] Wierzbicka(1987)は，紙面の都合で取り上げることができないと断りながら，これら三つ以外にも下位構文があるとほのめかしている．ただ，Wierzbicka(1987)はもちろん，その後の彼女の論文の中にも，それに言及した記述はないようである．

いったニュアンスを推論するとしている.

“人間の性質に対する寛容”の同語反復文:

反復語が，複数形をとり，かつ無冠詞で用いられ，かつ人間を表わす.

この下位構文にあてはまる同語反復文としては，(16)，(17)，(18)などが挙げられている.

(16)　Boys are boys.

(17)　Kids are kids.

(18)　Women are women.

彼女によれば，この下位構文に適合する同語反復文は，人はある種の人間の行動に対しては寛容である必要がある，といったニュアンスで解釈される，という. つまり，「boy」，「kid」，「woman」といった類の人間は他の人々がそうすべきだと思うやり方でものごとを行うことができないのだ，とでもいうようなニュアンスが導き出されるという. 加えて，彼女によれば，この下位構文には，(19)((8)と同じ)のように，習性を表す助動詞“will”をつけて発話される場合が含まれると指摘している.

(19)　Boys will be boys.

Wierzbickaは，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文にあてはまる同語反復文から引き出される意味と，“人間の性質に対する寛容”の下位構文にあてはまる同語反復文から導き出される意味とは，互いに類似しているが，以下の点で異なると説明している. すなわち，前者の意味には反復語の“悪い(bad)”側面が含意されるが，後者の意味にはそれがない. たとえば，同語反復文(15)から聴者は，政治が“汚い仕事”であるというニュアンスを推論するが，(1

6), (17), (18)をそれと類似した意味合いで理解することはない，とのことである．

“義務”の同語反復文:

反復語が，単数形をとり，かつ定冠詞または不定冠詞づきで用いられ，かつ義務を表わす．

彼女は，“義務”の同語反復文の例として，(20), (21), (22)などを挙げている．

(20)　The law is the law.

(21)　A deal is a deal.

(22)　A promise is a promise.

彼女によれば，この下位構文にあてはまる同語反復文は，たとえ実行したくなくとも実行しなければならないというニュアンスで解釈されるという．たとえば，(22)は，「たとえそうしたくなくても法律は守らなければならない」とでも表現できるような意味で受け取られるとしている．

3.3.2.3 “下位構文”の有効性　“下位構文”なる知識を仮定することによって，英語同語反復文の意味解釈はよりよく説明されるようになるのであろうか?

本章の3.1で，文脈から単離されて与えられた場合であっても，ある種の同語反復文は他よりも容認しやすい((5a)と(5b), (6a)と(6b)を見てほしい)ことのあることを指摘した．Wierzbicka(1987)は，この点に関し直接的には何も触れていないが，彼女の見解にもとづいてこうした事実を説明するとすれば，下位構文によくあてはまる同語反復文ほど他よりも解釈しやすい，ということになるであろう．このことは，間接的ながら，たとえば，彼女の次のような指摘に示されているといえるかもしれない．

(23a)　War is war.
(23b)　A war is a war.

(24a)　A promise is a promise.
(24b)　Promises are promises.

Wierzbickaによれば，(23a)は，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の同語反復文のみに非常によくあてはまり，たとえば「しょせん戦争は悲惨なもので，そういうものとして戦争を受け入れなければならない」というような意味に容易に解釈されるという．これに対し，(23b)は，何らかの下位構文に適合するとすれば，“義務”の同語反復文に該当することになり，たとえば「人は戦争に関わる何らかの義務を果たさねばならない」というような解釈を与えられることになる，という．逆に，(24a)((22)に同じ)は，もっぱら“義務”の同語反復文としてきわめて認知されやすく，たとえば「約束は守りたくなくても守らなければならない」というような意味に解釈されるのに対し，(24b)は，結果的に，(どのような下位構文にあてはまることになるのか彼女は明言していない[2)]が，)「約束は約束にすぎない．約束が常にあてになるとは限らない」といった解釈がなされるとしている．

ところで，英語を母語としない者にとっては“人間の性質に対する寛容”の下位構文の条件に適合しているように思え，それゆえそれに対応する意味をもつものとして解釈できると考えざるを得ない同語反復文であるにもかかわらず，その下位構文にあてはまる意味をもつものとして解釈できない同語反復文があることをWierzbicka自ら認めている．(25)や(26)の文例がそうである．

---

2)　Wierzbicka(1987)は，論文中の“下位構文”の説明以外の箇所で，多くの英語同語反復文の例を挙げておきながら，その一部については解釈のみを与えどのような下位構文に該当するのかにまったく言及していない．おそらく，そうした同語反復文は，脚注1)で触れたように，論文中に記されなかった下位構文に属するのではないかと推測される．

(25)　? Nazis are Nazis.

(26)　? Rapists are rapists.

彼女によれば，“Nazis”や“rapist”のような名詞によって指示される対象はあまりに悪すぎるので，人がそれらに寛容さを求める可能性がほとんどなく，そのために(25)，(26)のような同語反復文はきわめて解釈しにくい，という．このことは，“Nazis”や“rapist”といった名詞が，“人間の性質に対する寛容”にあてはまる反復語のカテゴリーに属していないことを意味しているといえるかもしれない．もしそうだとするならば，そしてWierzbickaの説明がより詳細かつ妥当なものとなることを望むならば，“人間の性質に対する寛容”の反復語に対する条件の中に，たとえば，人間の性質の「悪さ」の程度を条件の中に盛り込むなどして，“Nazis”，“rapist”などが明確に除外されるようにする必要があるであろう．

また，Wierzbickaは，ある種の同語反復文は複数の下位構文にあてはまる場合があり，その結果，多義性が生じる可能性があるとしている．そして，そうした場合，一般に聴者は，同語反復文の置かれた文脈や状況に関する知識を参照しながら妥当な解釈を下す，としている．こうした例として，彼女は，(27)を挙げる．

(27)　A mother is a mother.

彼女によれば，この同語反復文(27)は，文脈・状況によって「母親には母親としての義務がある」というような意味に解釈されたり，「(どんなに他の母親と違うように見えても)母親は絶えず母親たる仕方で振舞う」とでもいうように解釈されたりするという．

3.3.3 Fraser(1988)の研究

Fraser(1988)は，Wierzbicka(1987)の考えに異論を唱える．彼は，“下位構文”なる言語知識を人が有しているという仮定が妥当でないことを，いくつかの反例

を挙げて説明している.

(28)　The law is the law.

(29)　Negotiations are negotiations.

(30)　A deal is a deal.

(31)　Love is love.

たとえば，文(28)((20)に同じ)，(29)，(30)((21)に同じ)は，いずれも“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文に対する要件のうちの統語的な要件，すなわち反復語が無冠詞で使われかつ単数形であることを満足しないにもかかわらず，その下位構文にあてはまる意味をもつものとして解釈できる[3]．

また，逆に，例文(31)は，“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文の統語的要件および(反復語に対する)意味的要件の両方を充たしていながら，その下位構文の意味をもつものとして解釈できない，などである.

Fraserは，同語反復文が適格(well-formed)となるか否かが，Wierzbickaの言うような冠詞の有無と種類，反復語の単数・複数の違い，および反復語の意味的性質によって決定されるのではなく，むしろ同語反復文をとりまく文脈・状況が何らかの解釈にうまく導き得るかどうかで決まる，という考えを述べている．この点では，彼の考えは，先に紹介したLevinson(1983)と似ている.

たとえば，彼によれば，(32)のような同語反復文は，文脈から単離されて与えられるときわめて解釈しにくいものの，「凧がたこを飛ばすのに都合の悪い方向から吹いてきていることに不満を言う人に向かって発話された」とすれば，それを意味ある同語反復文として受け取れるようになる，という.

---

[3] 例文(28)，(30)は，Wierzbicka(1987)自身によっては“義務”の同語反復文に適合する例として挙げられている.

(32)　Wind is wind.

ただし，Fraserは，Levinson(1983)とは異なり，同語反復文の意味が文脈・状況のみによって決まるとは考えていない．彼は，Wierzbicka(1987)の主張する“意味的不変体”よりずっと一般的で漠然としてはいるが，すべての同語反復文に対し無条件に適用される慣習的な言語知識があると主張する．彼によれば，そうした言語知識は，下記の[A]，[B]，[C]のようなものであるという．彼は，そうした知識を会話参加者間で共有される一種の信念と捉えている．

[A]　反復語によって指示されるあらゆる対象に対し，話者は何らかの見解を主張している．

[B]　聴者がこの特定の(particular)見解に気づくことができると話者は信じている．

[C]　この見解は会話に関係している．

つまり，Fraserは，すべての同語反復文に共通する意味が，[A]，[B]，[C]のようなものに過ぎず，実際に聴者が受け取っている同語反復文の意味の多くは，文脈・状況に照らし引き出されたものである，と考えている．この考えを支持する例として，彼は，同一の同語反復文であっても文脈・状況が変わると異なって解釈されることがある，ことを挙げる．たとえば，文(33)((3)，(14)と同じ)は，文脈・状況次第で，「あらゆる仕事は同じである」という意味や「仕事は無慈悲である」という意味，さらには「仕事はお金になる」というような意味に解釈され得るという訳である．

(33)　Business is business.

彼の仮定する同語反復文に関する言語知識[A]，[B]，[C]のうち，[A]は，反復

語ばかりではなく主語一般に適用される言語知識と見なしても差し支えないかもしれない．また，[B]，[C]にしても，同語反復文のみに対する言語知識というよりは，あらゆる種類の発話・言語表現に適用される一般的な言語知識と考える方がよいかもしれない．同語反復文に適用される何らかの慣習化された言語知識があるとするならば，同語反復文のみに特定的にあてはまるそれを指摘してもらいたいところではある．

3.3.4 Glucksberg and Keysar(1990)の研究

これまで述べてきた見解は，いずれも言語学者によるものであった．こうした言語学の立場からのアプローチに加え，心理学的な見地に立った同語反復文の意味解釈の考察も行われてきている．本節および次節で紹介する研究などがそうである．

Glucksberg and Keysar(1990)は，同語反復文の意味解釈の仕方が，主語と述語が異なる(34)の形式をもつ名詞述語文の意味解釈の仕方と同じであると主張する．それゆえ，彼らの考え方に従えば，取り立てて同語反復文に特別な意味解釈の仕方はないことになる．

(34)　(ART)A be (ART)B.　(A，B：名詞)

彼らによれば，人は，あらゆる名詞述語文を，クラス包含関係を表わす文，すなわち事例(token)Aが集合(type)Bの事例であることを示す文としてか，あるいは同一関係(identity relation)を表す文としてかのいずれかに受け取るという．名詞述語文が隠喩として理解される場合が，彼らの考えでは一種のクラス包含関係としての理解とみなされることが第8章で詳しく述べられる．彼らの考えるところでは，名詞述語文形式の同語反復文も通常のクラス包含関係をもつものとして理解されることになる．

(35)　Boys are boys.

(36)　A tree is a plant.

たとえば，彼らは，同語反復文(35)を解釈する仕方が，(36)のようなクラス包含関係を表す文を解釈する仕方とまったく同じであると主張する．すなわち，(35)の主語“boys”は少年の特定の事例群を指示し，述語の“boys”は「少年らしいやり方で振舞う人」といった一種の集合概念を指示するものとして受け取られ，文全体としては，ある特定の少年がその集合の成員であることを表していると解釈される，としている．

しかしながら，こうした単純なクラス包含関係にもとづくだけでは，明らかに説明しきれない事実がある．一般に，無冠詞の名詞は特定の個体や集合を指示しない(小泉，1989)．それゆえ，Glucksberg and Keysarの説明は，無冠詞で用いられている同語反復文(たとえば，文例(3))の場合にはあてはまらないであろう．彼らは，反復語が定冠詞づきで用いられているか不定冠詞づきで使われているか，あるいは冠詞があるか否かといった相違が，同語反復文の解釈にどのように影響するかについてまったく触れていない．

また，前節において，反復語のみの違いによって同語反復文の解釈のしやすさに差が生じるという事実((5a)と(5b)，(6a)と(6b)の例文を参照されたい)に言及した．この事実もクラス包含関係の観点からは説明できない．なぜなら，それは単語そのものに関する現象であり，クラス包含関係のような単語間の関係に関する事実ではないからである．彼らは，同語反復文解釈時に聴者の参照する反復語それ自体の意味的性質に何ら言及していない．

3.3.5 Gibbs and McCarrell(1990)の研究

Gibbs and McCarrell(1990)は，ここまで紹介してきた諸研究の考え方をいろいろと取り込みながら，多角的に同語反復文の意味解釈を説明しようと試みている．彼らは，基本的には，前節のGlucksberg and Keysar(1990)と同様な立場に立つ．すなわち，彼らは聴者が同語反復文をクラス包含関係を表わす文として受け取ると考える．また，彼らは，先に述べたWierzbicka(1987)の見解の一部を引用し，反復語の単数・複数の違いにより同語反復文の解釈が異なるとも仮定する．彼らによれば，複数形の同語反復文の場合，主語の指示する特定の事例群が述語の指示するカテゴリーの“ステレオタイプ”的事例群である，と解釈されやすいとい

う．その理由は，複数形の反復語の方が集合概念を指示していると解釈されやすく，その分ステレオタイプが引き出されやすいため，としている．(37a)と(37b)を見てほしい．

(37a)　Boys will be boys.

(37b)　A boy is a boy.

Gibbs and McCarrellは，たとえば「少年は手に負えないもので，言う通りにさせるのは難しい」という意味を伝えるためには，表現(37a)が用いられなければならず，(37b)では，そもそもその意味が分かりにくいとしている．

彼らの考えに従えば，(38)の文が(37a)のように慣習的ではないのにもかかわらず，英語を母語とする聴者にとって，解釈しやすいことを説明できる．すなわち，複数形をもつ(38)は，(37b)よりも「boy」のステレオタイプを引き出しやすく，したがって，文全体の解釈もしやすい，ということになる訳である．

(38)　Boys are boys.

また，彼らは，単数形の同語反復文は，その反復語がステレオタイプを想起させやすい場合には，複数形の同語反復文と同様に解釈され，そうでない場合には「ある概念のどのような事例も他の事例と同等である」とでもいうような意味をもつものとして解釈される，としている．

Gibbs and McCarrellは，反復語がその概念の“ステレオタイプ”を想起させやすいかどうかで，その同語反復文の解釈のしやすさが変わるという点を強調している．たとえば，彼らは(39a)((8)，(35)，(37a)と同じ)が(39b)に比べ解釈しやすいと指摘する．

(39a)　Boys will be boys.

(39b)　Girls will be girls.

その理由として，彼らは，アメリカ社会では「boy」に対して一般的にあてはまる

ステレオタイプ的知識を話者・聴者が共有しているのに対し，「girl」に対してはこのようなステレオタイプ的知識を共有していないという事実を挙げている．

Gibbs and McCarrellによれば，以上の意味の他に，同語反復文は，Fraser(1988)が指摘するようなあらゆる同語反復文にあてはまる一般的な話者の信念，および文脈・状況にもとづいて個別的に推論される具体的な話者の信念をも聴者に伝える，という．彼らによれば，どのような同語反復文も，反復語によって指示されるすべての対象に対し話者が何らかの見解を主張しており，聴者自身がこの特別な見解に気づくことができ，その見解が会話に関係している，というような信念を伝達する，という．

(40) Business is business.

また，たとえば，同語反復文(40)((3)，(14)，(33)と同じ)は，文脈・状況次第で，「仕事は競争である」というような話者の信念を伝えたり，あるいは，「仕事は金銭的な利得を与えるものである」というような信念を伝達したりする，という．

3.4 英語同語反復文の意味解釈に及ぼす文脈の影響

本章のまとめとして，ここで，前節で展望した英語同語反復文の意味解釈に関する諸研究の議論を，次の観点から整理しておきたいと思う．聴者が同語反復文をどの程度特定の文脈・状況と関係なく解釈すると考えているか?

Levinson(1983)によれば，聴者は，あらゆる文脈・状況に一般的にあてはまる推論の原理を用い同語反復文の根幹をなす意味を解釈し，さらに，一つ一つの文脈・状況に個別的に適合する推論の原理を使い，枝葉の意味を付加する，という．彼に従えば，文脈・状況に置かれなければ同語反復文を解釈できないことになる．

Wierzbicka(1987)は，Levinson(1983)とは対極的な見解を採る．Wierzbickaは，あらゆる同語反復文にあてはまる言語知識(単語と同様の意味的不変体とみなされる)，および，いくつかの同語反復文のみに適用されるパターン的言語知識(“下位構文”と呼ばれる)を英語母語話者が有していると主張する．彼女によれば，聴者はそれら言語知識を特定の文脈・状況とは関わりなく同語反復文に適用するた

め，その意味解釈は基本的に文脈独立的に行われる，ことになる．

Fraser(1988)は，聴者が母語話者の間で共有されている一種の信念をあらゆる同語反復文に適用し，それらを解釈すると主張する．彼の言う信念とは，話者が反復語に対し抱いている特定の見解を聴者が容易に認識できるはずである，といった漠然とした知識を指す．彼によれば，そうした信念を聴者は文脈・状況とは無関係に同語反復文に適用するが，その結果得られる意味は実際の同語反復文の意味の一部分にすぎず，聴者は残りの意味の大部分を文脈・状況に照らし決定する，とする．したがって，彼の考えでは，同語反復文の意味解釈は，いくらかは文脈独立的に定まるものの，ほとんど文脈依存的に決定されることになる．

Glucksberg and Keysar(1990)は，同語反復文の意味解釈が，基本的に名詞述語文のそれとまったく同じであり，同語反復文が一種のクラス包含関係を表すものとして解釈されると主張する．

Gibbs and McCarrell(1990)は，本章で紹介したWierzbicka(1987)，Fraser(1988)，Glucksberg and Keysar(1990)の考えを折衷した案を主張している．折衷の結果として，彼らの説明では，同語反復文の意味解釈は，Wierzbickaほどには文脈独立的に定まらないが，Fraserほど文脈依存的でもなくなっている．彼らによれば，聴者は，文脈・状況に依存しない意味的処理を行ったり，特定の文脈・状況に依存させた解釈を行ったりして，以下の4種類の意味あるいは信念を受け取るという．すなわち，反復語の単数・複数の違いに関する表層表現の知識を基に引き出される意味，反復語に関するステレオタイプ的な世界知識に照らし導き出される意味，同語反復文という表現形式に関する知識から引き出される一般的な話者の信念，および同語反復文の置かれた文脈・状況の知識にもとづいて推論される具体的な話者の信念，である．

こうして見てくると，英語同語反復文の意味がどのように解釈されるかということに対する説明には，文脈・状況に関する知識，言語知識，世界知識，話者または聴者の信念というように，言語理解過程において聴者が参照するとされている知識源が一通り現れているのが分かる．従来から，人間の言語理解過程においてはいろいろな種類の知識源からの情報が利用され，また，各種の処理がそれぞれ異なったレベルで遂行される，という指摘が数多くなされてきている(たとえば，Hobbs，1979，1982; Winograd，1977，など)．同語反復文に対しても，聴者が，

それらの知識源のすべてを利用し，いろいろなレベルで解釈のための処理を進めていっていることは十分に考えられる．それゆえ，今後の研究の方向としては，たとえばGibbs and McCarrell(1990)の取り組みに見られるように，多くの知識源のさまざまな知識を仮定しつつ，それらの内容およびそれら各種の知識の適用過程をより詳細・妥当に明らかにしていくことが必要といえるかもしれない．

さて，Wierzbicka(1987)やGibbs and McCarrell(1990)のように，反復語の単数・複数の違いや冠詞の有無によって意味解釈の仕方が異なるとする説明は，英語のような，冠詞を有し名詞の単数・複数の区別を表現上で明確に行なう言語にはよくあてはまるかもしれない．しかし，そうした説明は，言語特異的(language-specific)な制約を前提とした説明であり，他の言語の同語反復文の意味解釈にそのまま適用できるとは限らない．そうした言語特異的な制約が英語同語反復文の意味解釈に働くとすれば，日本語のような，冠詞が担う情報や名詞が指示するものごとの数量を明確に表現しない言語では，いったいどのような制約の下で個々の同語反復文の意味解釈が遂行されていることになるのであろうか．次章では，こうした点を中心に日本語の同語反復文の意味解釈のなされ方を考察してみる．そして，その後に，英語と日本語の同語反復文の意味解釈の対照比較を試み，さらには，同語反復文の意味解釈の普遍性へと考察を進めていきたいと思う．

第4章　日本語同語反復文の意味解釈について（考察・展望論文）

本章では，主として，名詞述語文形式をもつ日本語同語反復文がどのように解釈されるかについて考察する．ここで扱う名詞述語文形式の同語反復文とは，日本語においては(1)の形式，英語においては(2)の形式，をとるものをいう．

(1)　AはAである(または，AはAだ)．　(A: 名詞)

(2)　(ART) A be (ART) A.　(A: 名詞，ART: 定冠詞，不定冠詞，または無冠詞)

このような文形式をもつ同語反復表現は，様々な言語においてよく見られる．たとえば，日本語においては(3)のような表現を，また，英語においては(4)のような表現を，日常生活の中でよく聞く(見る)ところであろう．

(3)　(しょせん，)　子供は子供だ．

(4)　Business is business.

本章の以下では，“同語反復文”とは(1)または(2)の形式をもつ同語反復文を指すものとする．また，日本語および英語の同語反復文中で繰り返される名詞Aを“反復語”と呼ぶことにする．

前章においては，(2)の形式をもつ英語同語反復文の意味解釈を扱った従来の研究を展望し，問題を整理した．

本章では，まず次節において，日本語の同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を概観する．続いて，4.3，4.4において，佐山・阿部がこれまで行ってきた考察をまとめて紹介する．4.5では，日本語と英語の同語反復文の比較を行う．特に，日本語に関する佐山・阿部の説明と英語に関するWierzbicka(1987)の説明について具体的に比較する．4.6は，同語反復文が伝える意味の普遍性について考察

する．4.7は，第3章，第4章を通して行ってきた同語反復文の意味解釈に関する理論的考察の結論を述べる．

4.1 日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

日本語の同語反復文がどのように解釈されるかという議論は，もっぱら言語学において行われてきた．ただし，そこでの議論は，同語反復文を，他の種類の同語反復表現(たとえば，同一の名詞[1)]，動詞，形容詞，形容動詞を繰り返す表現)と一緒に扱っていたり，あるいは，名詞述語文一般の議論の中で言及したりしていることが多く，同語反復文そのものを詳しく考察しているものは少ない．また，そのためか，残念ながら，ほとんどの研究が浅い説明に終わっている．

大野(1978)は，同語反復表現一般について触れており，それらは，未知情報を含まないため，情報を伝達する機能を果たさず，主語によって示される“題目”について確認する機能のみをもつ，としている．そして，例の一つとして同語反復文(5)を挙げ，その意味は「バカはやっぱりバカで，それ以外ではない」というようなものになるとしている．

(5)　　バカはバカだ．

しかし，彼の議論では，同語反復文と他の種類の同語反復表現とを区別してお

[1)] 英語には妥当な例が見つからないが，日本語には名詞を反復する以下のような同語反復表現もある．Aはいずれも名詞である．

(ia)　AがAだけに，(文)

(ib)　問題が問題だけに，どう対処したら良いか分からない．

(iia)　AはAで，(文)

(iib)　太郎は太郎で，別の考えもあろう．

(iiia)　AもAだ．

(iiib)　(そんなひどい言い方をするなんて，)太郎も太郎だ．

らず，また，それゆえ当然のことではあるがそれぞれの意味解釈の詳細にまでは触れていない．

毛利(1980)は，同語反復文の意味解釈過程を以下のように説明している．聴者は，同語反復文が，話者によって想定されるすべての可能世界(possible world)[2)]において真となるため，“会話の公準”(Grice, 1975, 1978)の下位原則である“量の公準”に違反していることを容易に判断できる．そして，その判断をきっかけにして，文脈・状況ごとに“善意の解釈”を行う．たとえば，(6)((3)に同じ)に対しては，「子供というのは子供だけあって幼稚なものだ．仕方のないものさ」というように解釈する．

(6)　　子供は子供だ．

彼の説明は，たとえば，英語同語反復文の意味解釈に対するBrown and Levinson(1978)の考察や第3章で紹介したLevinson(1983)の説明，あるいは日本語同語反復文の意味解釈に対する金子・佐山・阿部(1986)の考察，などと軌を一にしているといえる．

小泉(1990)も，毛利(1980)と同様に，Griceの会話の公準を基本にした同語反復文の意味解釈の説明を行っている．また，第3章で紹介したLevinson(1983)と同じく，同語反復文は“$\forall x\ (W(x) \rightarrow W(x))$”という論理形式を自然言語によって表現したものと仮定している．彼の説明によれば，同語反復文の解釈は次のようになされることになる．同語反復文は会話の公準の中の量の公準に違反する．話者と聴者の間では，同語反復文の主語AがB_1，B_2，B_3・・・といった属性を有することが了解済みになっている．聴者は“AはAである”に対し，「Aは(Bであるから，Bであるものは)Aである」というように，省略を補う推論を行い，AにBという属性のあることを再認識する．たとえば，同語反復文(6)に対しては，「子供」の「無

---

2) 一般に，話者は，その場の文脈あるいは発話状況下において自らの心内に可能世界を想定し，その中の少なくとも一つと矛盾しない発話を行う(Abe, 1982; Fauconnier, 1985; Johnson-Laird, 1983).

邪気」，「聞き分けがない」，「わがまま」，等々の属性が話者と聴者の間で認識されており，聴者は「子供は(無邪気だから，無邪気なものは)子供だ」というように省略を補う推論を行い，その意味するところを解釈する．

確かに，小泉の言うように，同語反復文によって聴者に与えられる情報は，実質的には反復語に負うところが大きい．また，聴者が同語反復文の意味を解釈する際に，反復語から想起される属性を直接的にあるいは間接的に利用しているということも疑いの余地がない．しかしながら，そうであるならば，より具体的に，どのような状況・文脈の下でどのような属性がどのように選ばれるのか，についての説明が望まれるところではある．

国広(1985)は，聴者は一種の慣用的“枠組”を適用することによって同語反復表現を解釈すると指摘する．彼の言う枠組とは，繰り返される単語を変項としてとる一定の表現形式をもち，かつ，その表現形式が慣用的にある種の意味のパターンをもつもの，を指している．

(7)　　安いことは安い．

(8)　　言うことは言う．

たとえば，彼は，(7)，(8)のような“AことはA(Aは形容詞または動詞)”という枠組にあてはまる同語反復表現は，「一応，Aと言える」という意味のパターンに従って解釈されると説明している．ただし，彼は同語反復文に関しては何も述べていない．

4.2 佐山・阿部の研究

近年，佐山・阿部(阿部，1989a，1989b；佐山・阿部，1988a，1988b，1991a，1991b，1994)は，同語反復文の意味解釈過程を体系的に説明しようと試みている．ここで，佐山・阿部によって提案されてきている，日本語の同語反復文が解釈される際に働いているであろう“制約”について説明してみたいと思う．

ここでいう制約とは，日本語を母語とする聴者が同語反復文を解釈する際に適

用する一種の“知識”あるいは“規則”を意味するものであり，それはまた，聴者が同語反復文を解釈する際に適用する“スキーマ”の諸性質と言いかえてもよいかもしれない．

以下に，その“制約”を列挙していく．

[A] 反復語の指示する概念が強い“価値評価”を伴う場合，同語反復文を，その概念の価値評価が恒常的で不変であることを強調・再認識する意味に解釈する(ことを試みる)．

この制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては，(9)(例文(5)と同じ)や(10)などが挙げられるであろう．

(9) バカはバカだ．

(10) ダイヤはダイヤである．

一般的に言って，「バカ」や「ダイヤ」という概念には，肯定的にせよ否定的にせよ，強い価値評価が伴う．そのような，強い価値評価を伴う概念を指示する名詞を反復語とする同語反復文は，その意味するところを理解しやすく，また実際よく発話される．日本語において慣用句(idiom)として定着している(11)なども，元来は，この種の制約の下にあったものと考えられる．

(11) (腐っても，) 鯛は鯛だ．

では，(12)や(13)の場合はどうであろうか？

(12) ？空は空である．

(13) ？鱒は鱒だ．

我々の文化においては，一般に，「空」や「鱒」に，「ダイヤ」や「バカ」や「鯛」ほどの強い(正あるいは負の)社会的価値を与えてはいない．したがって，文脈から単離された形で(12)や(13)の同語反復文を与えられた場合，聴者は，制約[A]の下でその意味を解釈することはできず，(また，後述するような他の制約を利用して解釈することもできないため)，結局どのように解釈してよいか迷うことになる．

同様なことは，同語反復文(11)を他の言語に直訳した場合にも言えるかもしれない．もしもその文化が日本とは異なり，「鯛」を価値ある魚としていなかった場合，その直訳された文の意味(特に隠喩的な意味)はほとんど伝わらないことになるであろう．

ところで，[A]に言う“価値評価”は，その概念から標準的にまた恒常的に連想されるもの(たとえば，ダイヤであれば金銭的価値)である必要はない．話者・聴者間の特別な可能世界の中で付与された一時的なものであってもよい．同じ同語反復文でも，その同語反復文の置かれた文脈・状況次第で話者・聴者間で想定される可能世界が変わり，そこで了解される価値評価も変化することは十分にあり得る．たとえば，(14a)と(14b)とを比べてみてほしい．

(14a)　いくら小さくても，ダイヤはダイヤだ．十分に価値がある．
(14b)　いくら高価だといっても，ダイヤはダイヤだ．命にはかえられない．

聴者は，(14a)の文脈下で想定される可能世界の中で，「ダイヤ」の金銭的価値が話題とされていることを了解し，“ダイヤはダイヤだ”を，そうしたダイヤの高い価値に言及したものとして解釈することであろう．これに対し，(14b)の文脈下で想定される可能世界では，「ダイヤ」の“もの”であることが話題となっていることを了解し，「命」との比較においてダイヤの価値が低いことが確認・強調されている発話として解釈するはずである．

[B]　反復語Aが指示する概念が強い“独自性”をもつ場合，あるいは/かつ，陰に陽に“BはB，AはAである．(A，B: 名詞)”という対比的な情報提示をとる場合，同語反復文“AはAである”を，Aの概念の独自性を強調・再認

識する意味に解釈する(ことを試みる).

[B]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては,(15),(16)などが挙げられると思う.

(15)　(アメリカはアメリカ,) 日本は日本である.

(16)　(君は君,) 太郎は太郎だ.

[B]に言う“独自性”は,その概念が恒常的に有すると認知されるものである必要はない.対比的な表現がとられると,修飾節の同語反復文“BはB,”が文脈となって主節の同語反復文と対照させられ,主節の反復語Aの指示する概念の,修飾節の反復語Bの指示する概念に対する相違点を話題とする可能世界が想定される.その結果,聴者は,その相違点に基づいてAの一時的な独自性を認めることになる.

(17a) ? 心理学は心理学だ.
(17b)　生理学は生理学,心理学は心理学だ.

たとえば,文(17a)のように文脈から単離されている場合,[A]や[B]の制約が働きにくく,このままではその発話の意図が推測しにくい.しかし,(17b)のように,対比するに足る対象が具体的に示されると,その違いを話題とする可能世界を想定することができ,その意味が容易に解釈できるようになる.

ただし,そうした可能世界は,ただ単に二つの名詞A,Bを並べただけでは想定できない.そうした可能世界は,聴者がAとBとの間に共通の意味的基盤を見つけやすいほど容易に想定できる.すなわち,AとBとが同じカテゴリー・レベルにあり,共有する意味的属性が多ければ多いほど,その対比は理解されやすくなる.(18)の例文a,b,cを比べてみてほしい.

(18a) ? 鳥は鳥,心理学は心理学だ.
(18b) ? 認知心理学は認知心理学,心理学は心理学だ.

(18c)　心理言語学は心理言語学，言語心理学は言語心理学だ．

さて，以下に記す[C]，[D]は，日本語に特有な制約と考えられる．

[C]　“aだって(あるいは，aも，など)，AはAである”の文形式をとり，かつ，aが反復語Aの下位事例，とくに典型的でない事例を表わす名詞である場合，その同語反復文を“aが実際にはAの下位事例である”ことを強調・再認識する発話として解釈する(ことを試みる)．

[C]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては，(19)，(20)を挙げることができると思う．

(19)　ペンギンだって，鳥は鳥だ．

(20)　みかん箱だって，机は机だ．

[C]の同語反復文中の事例aは，カテゴリーAの事例として受け入れられるものでなければならないが，“典型的(typical, prototypical)”(たとえば，Rosch & Mervis, 1975)なものであってはならない．次の(21a)((19)に同じ)と(21b)を比較してもらいたい．

(21a)　ペンギンだって，鳥は鳥である．
(21b) ? すずめだって，鳥は鳥である．

(21a)は容認しやすいが，(21b)は容認しにくい．この両者の違いは，ペンギンの鳥としての典型性とすずめの鳥としての典型性の差に起因する．つまり，(21a)のようにaがAの典型的でない事例の場合は受け入れやすいが，(21b)のように典型的な事例である場合は，それなりの状況・文脈がない限り，受け入れにくい表現となる．

[D] 反復語が，話者の感情や情動的な状態を表し，かつ，形容動詞の語幹とみなし得る名詞である場合，その同語反復文を話者が話者の感情・情動状態を確認している発話として解釈する(ことを試みる).

[D]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては，(22)，(23)などが挙げられると思う．(24)の反復語「安堵」は，「安心」と似た意味をもっているが，形容動詞の語幹とはなり得ないので，それをもつ同語反復文(24)は，一般的には，容認できない.

(22)　楽は楽だ.

(23)　安心は安心である.

(24)　? 安堵は安堵である.

4.3 “制約”と意味解釈

聴者は，同語反復文を解釈する際に様々な知識を利用する．発話状況に関する知識，当該の同語反復文の前後にある文脈に関する知識，反復語およびその指示する概念に関する知識，そして，上記の制約の中でも触れている，個々の同語反復文が埋め込まれる慣用的表現パターンに関する知識，等々である．そうした各種の知識を利用する上での条件を述べたものが，Wierzbicka(1987)の“下位構文”(第3章を参照してほしい)であり，本章で佐山・阿部の言う“制約(の条件部分)”であるといってもよいであろう.

いずれかの“下位構文”あるいは“制約条件”にあてはまれば，同語反復文の意味処理は進むことになる．もしいずれにもあてはまらなければ，そしてその他の手がかりがなければ，その同語反復文の意味は結局は捉えられないことになる.

同語反復文の中には，その意味(あるいはその発話の意図)を解釈しやすいものもあるが，そうでないものもある．このことは，第3章においてもあるいは本章においても既に述べた．佐山・阿部の考えに従えば，“制約”を適用できるあるい

は適用しやすい同語反復文ほど理解しやすい同語反復文になる，ということになる．逆に言えば，ある種の同語反復文が他より解釈しやすい理由は，聴者がそれらの同語反復文に対しては(“制約”と呼ばれる)ある種の知識を適用することができ，文字通りの意味を超えた意味を計算することができるから，ということになるわけである．

基本的に，同語反復文が伝える意味は，隠喩文と同様，主語および述語(名詞)がもつ何らかの属性情報ということができる．隠喩文“AはBである”を解釈し受け取ることのできる属性情報は，Bのもつ属性のうちのある特定部分に限定される，つまり，Bから自由に連想される属性よりも絞られたものとなる(Searle, 1979a)．同様に，同語反復文を解釈し受け取ることのできる属性の種類は，“制約”，“下位構文”などといった一定の条件によって限定される．同語反復文と隠喩文の伝える属性情報は，ともに，述語が本来もつ属性情報のうちのある特定部分に限定されるとしても，その両者の限定の程度には多少の違いがあると考えられる．隠喩文の場合は，同じ述語Bが使われたとしても，主語Aが異なると，Bから受け取り得る属性情報が異なってくる．他方，同語反復文の場合には，佐山・阿部やWierzbicka(1987)が指摘するような“価値評価”，“義務”，“寛容”などといった特定の性質をもつ属性情報に固定されている．その意味で，同語反復文の方が，隠喩文に比べて，伝えられる属性情報の限定の度合いがより大きくまた固定的であると考えられる．しかし，一方で，それがために，その伝える“効果”がより大きくなるのかもしれない．(25)の隠喩文と同語反復文を比較してみてもらいたい．

(25a)　(しょせん，)太郎はガキだ．
(25b)　(しょせん，)ガキはガキだ．

「太郎」の子供じみた行動が話題となっている文脈・状況下で，この(25a)と(25b)のいずれかを言われたとしてみよう．「幼稚な」，「手に負えない」といった「ガキ」の属性，特にそれが有する否定的な価値評価は，(25b)の方が，(25a)よりも効果的に聴者に伝えるのではないかと思う．

ところで，上に提案した制約のほとんどは，互いに他を強く排他するというよ

うな性格をもってはいない．ということは，同じ同語反復文に対する解釈が同時に異なった制約の下で重畳的にあるいは多義的になされることがあり得る，ということを示唆している．(26)の例文a，b，cを見てほしい．

(26a)　ダイヤはダイヤである．
(26b)　サファイアはサファイア，ダイヤはダイヤだ．
(26c)　イミテーションだって，ダイヤはダイヤである．

聴者は，(26a)，(26b)，(26c)の各文を，[A]，[B]，[C]の制約下で解釈しようと試みる．その際，[A]，[B]，[C]の適用は必ずしも互いに排他的に働かない．たとえば，(26c)の意味が，「たとえイミテーションのダイヤであっても，ダイヤには違いなく，十分に美しい」とでも表現できるようなニュアンスで受け取られるとしてみよう．その場合，その解釈には，[C]ばかりではなく，[A]も関与していることになる．

ただ，[D]が適用される場合に関しては，[A]，[B]，[C]との間に適用の重畳性はないと考えられる．たとえば，(27)の例文a，bを見てほしい．

(27a)　不安は不安だ．
(27b)　道徳性不安だって，不安は不安だ．

一般に，(27a)には[A]の適用は考えにくく，[D]のみの適用によって解釈されるのではないかと考えられる．また，(27b)は[C]のみの制約下での解釈しかあり得ないのではないかと思う．

また，これは意味の重畳性や多義性とは異なる現象であるが，どの制約が適用されるかによって，反復語の指示する対象の解釈が異なる場合もある．(28)のaとbを比べてみてほしい．

(28a)　人は人，動物は動物だ．[人と動物は違う．]
(28b)　人だって，動物は動物だ．[人もやはり動物である．]

(28a)は，[B]の制約が適用され，「動物」が人間と同じレベルのカテゴリーを指示しており，文全体としては，人間と他の“動物”との相違点を強調・再認識するものとして解釈される，と考えられる．一方，(28b)は，[C]が適用され，「動物」が人間の上位レベルのカテゴリーを指示しており，人間の“動物”としての成員性を強調・再認識するものとして解釈される，ということができるであろう．

4.4 日本語と英語の同語反復文の対照比較

本節では，第3章および本章で紹介した研究の中から，同語反復文の意味解釈について比較的詳細に論じている研究，すなわち，日本語に関する佐山・阿部の研究(阿部，1989a，1989b; 佐山・阿部，1988a，1988b，1991a，1991b，1994)と，英語に関するWierzbicka(1987)の研究(第3章を参照されたい)とを比較してみることにする．

さらには，佐山・阿部の言う“制約”の下で解釈されると考えられる代表的日本語同語反復文とそれに対応する英語同語反復文とを比較してみる．また逆に，Wierzbicka(1987)によって挙げられている英語同語反復文の例とそれに対応する日本語同語反復文とを比べてみる．そうした比較を通じて，同語反復文の意味解釈における普遍性あるいは言語特異性について考察を進めてみたいと思う．

4.4.1 日本語から英語へ

(29)　ダイヤはダイヤである．

(29)は，佐山・阿部が制約[A]の条件によく適合する例として挙げたものである(例文(10)を参照されたい)．Wierzbicka(1987)の論に従えば，この(29)の「ダイヤ」に対応する英語名詞「diamond」を反復語とする英語同語反復文の表現は，(30)のaからdまでのように複数存在することになる．

(30a)　A diamond is a diamond.

(30b)　Diamonds are diamonds.

(30c)　The diamond is the diamond.

(30d)　The diamonds are the diamonds.

身近にいる英文学を専門とする英語母語話者に，(30)のaからdまでを見せ，同語反復文として意味の伝わるものはどれかと尋ねたところ，彼は(30a)と(30b)が同語反復文として意味が伝わるとした[3)]．そして，その意味としては，(30a)が「ダイヤモンドにも，他の宝石(precious stones)と違わない本質的な価値(intrinsic value)がある」というようなものになり，一方，(30b)は「ダイヤモンドには社会的な価値(social value)がある」といったものになるとした．この“社会的価値”とは何かとさらに質問したところ，それは金銭的価値のようなものだと答えた．彼が(30a)に与えた意味は，Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)に相当すると言える．しかし，(30b)に与えた意味は，Wierzbickaの説明の中には見い出せない．この意味は，ちょうど日本語母語話者が(29)から引き出すであろう意味，すなわち佐山・阿部の言う制約[A]から導き出される意味とよく似ている．それゆえ，このことは，実際には，英語母語話者も，(Wierzbickaは指摘していないが)佐山・阿部の提案する制約[A]に似た類の知識を心内に有しており，それを(30b)に適用して解釈を進めている可能性を示唆している，と言えるかもしれない．

(31a)　太郎は太郎だ．

(31b)　Taro is Taro.

(31a)は，佐山・阿部が制約[B]の代表的な例として挙げたものである(例文(16)

---

3)　ただし，彼の指摘によれば，同語反復文としてでなければ，(30c)，(30d)も次のような場合には意味をもつ発話となるという．すなわち，話者がショーウィンドウに飾られたダイヤモンドを指さし，話者と聴者の間の過去の会話の中で話題になっていたダイヤモンドとは，今話者が指さしているダイヤモンドのことである，という意味で発話する場合である．

を見てほしい)．この(31a)の反復語は固有名詞「太郎」であり，対応する英語同語反復文は(31b)となる．この英語同語反復文(31b)の意味は，たとえば「太郎は(別の人間との比較において)ユニークな存在である」のように解釈され(Wierzbicka, 1987)，明らかにWierzbickaの言う二番目の意味的不変体(の意味)が強く引き出される例といえる．こうした観察からすると，佐山・阿部の言う制約[B]から導かれるであろう意味は，Wierzbicka(1987)の言う二番目の意味的不変体ときわめて類似したものであると言えそうである．

佐山・阿部の提案した残りの二つの制約[C]，[D]は，日本語に言語特異的(language-specific)な表現上の制約を条件として課しており，それらの制約下で解釈される日本語同語反復文に直接対応するような英語同語反復文は存在しない．ただ，制約[C]から導かれる意味「aだって実際にはAである」と，Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)「すべてのAは他のAと変わらない」は，ともに「A」の成員の“同一性”を強調・再確認するという点で似ている．Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)は，日本語の同語反復文の場合にもあてはまると言えそうである．日本語の場合には，さらに一歩進ませ，「A」の非典型的成員の“(Aの成員としての)同一性”を述べるために，特別な表現形式“aだって，AはAだ”を慣用的表現として発達させたのであろう．

4.4.2 英語から日本語へ

さて，今度は，逆に，Wierzbicka(1987)が，彼女の言う“下位構文”にあてはまる例として挙げている英語同語反復文を取りあげてみよう．そして，そのそれぞれに対応する日本語同語反復文と比較してみることにする．

(32a)　War is war.
(32b)　戦争は戦争である(だ)．

(33a)　Politics is politics.
(33b)　政治は政治である(だ)．

(34a)　Business is business.

(34b)　仕事は仕事である(だ).

英文(32a), (33a), (34a)は, Wierzbickaによって“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文に適合する例として挙げられていたものである. 彼女の説明する, それらの文の意味は, 概略, 以下のようなものである. 戦争(政治, 仕事)は人に悪いことをもたらすものであるが, そのことは言うまでもないことであり, また, そのことを変えることはできない. それゆえ, そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない.

こうした意味は, それぞれの英文に対応する日本語同語反復文(32b), (33b), (34b)からも受け取ることができる. そのことから言えば, Wierzbicka(1987)の説明は, 英語に対してばかりではなく, 日本語にもあてはまり, 普遍性の高いものと言えそうである. しかし, 日本語の場合には, その意味は彼女の言うほど固定的に決まってはいず, 文脈や状況次第でその伝達される意味の側面が変化する. 例文(35a), (35b)の2文を見てもらいたい.

(35a)　相手が親友だからと言っても, <u>仕事は仕事だ</u>. 私情をはさむわけにはいかない.

(35b)　地主という職業も, <u>仕事は仕事だ</u>. 十分に生計をたてることができる.

例文(35a), (35b)からも分かるように, 文脈次第で, 「仕事」のどのような属性が強調されるかは変わり得る. つまり, Wierzbicka(1987)の主張する“radical semantics(すなわち, 同語反復文の意味は状況・文脈などの言語外の知識には依存せず, 言語内知識だけでほぼ定まるとする極端な主張)”は, 少なくとも日本語の同語反復文については妥当ではない, ということである. 実は, 同様のことは, Wierzbicka(1987)への批判として, 英語についても指摘されている(Fraser, 1988; Gibbs & McCarrell, 1990). たとえば, 第3章でも触れたように, Gibbs and McCarrell(1990)は, (34a)が, それの置かれた文脈・状況の違いにより, 「仕事は競争である」というように仕事が否定的属性を有するものとして解釈されることもあれば, 「仕事は金銭的な利得を与えるものである」というよう

に肯定的属性をもつものとして受け取られることもあると述べている．また，このことからも推測されるが，Wierzbickaの言う“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文は，佐山・阿部の言う“価値評価”の制約[A]と強く関係するところがあると言えそうである．

(36a) Kids are kids.
(36b) Children are children.
(36c) 子供は子供である(だ)．

(37a) Boys are(will be) boys.
(37b) 男の子は男の子である(だ)．
(37c) 少年は少年である(だ)．

(38a) Women are women.
(38b) 女は女である(だ)．
(38c) 女性は女性である(だ)．

英語同語反復文(36a)，(36b)，(37a)，(38a)は，Wierzbicka(1987)が“人間の性質に対する寛容”の下位構文に適合する代表的な例として挙げているものである．彼女が説明しているそれらの意味は，概略，次のようなものである．子供(男の子[少年]，女[女性])は，まわりの人間がそうしてほしくないと思うことをしてしまうものであるが，そのことは言うまでもないことであり，また，子供(男の子[少年]，女[女性])はその行動を変えられないものである．それゆえ，そのことを理解しなくてはならないし，そのことで何らかの悪いことを自らに感じさせるべきではない．

このような意味は，確かに，対応する日本語同語反復文(36c)((3)，(6)に同じ)，(37b)，(38b)からも受け取ることができる．特に，日本語の慣用句とも言える(38b)の意味などは，まさにその通りであろう．しかし，やはり，この“人間の性質に対する寛容”の場合も，上記の“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の場合と同様に，日本語同語反復文の意味は，Wierzbickaの言うほど固定的にはなら

ない．また，“価値評価”と強く関係し合っていると考えられる．(36c)，(37b)，(37c)，(38b)，(38c)など，それぞれの英文に対応する日本語同語反復文の場合には，その意味は，文脈次第で，Wierzbickaの言う“寛容”とは異なり，“賞賛”となったりもする．たとえば，(36c)を(39)のように変えたとしてみよう．

(39)　やっぱり，子供は子供だね．

この表現(39)は，子供の“しようがなさに対する寛容・諦観”を伝えるための発話としても容認できるし，また，子供の“可愛らしさ”を伝えるための発話としても受け入れることができるであろう．

(40a)　The law is the law.
(40b)　法律は法律である(だ)．

(41a)　A deal is a deal.
(41b)　取引は取引である(だ)．

(42a)　A promise is a promise.
(42b)　約束は約束である(だ)．

Wierzbicka(1987)は，“義務”の同語反復文として(40a)，(41a)，(42a)を挙げ，その意味を概略次のようなものだとしている．法律(取引，約束)について実行すべきことがあるという事実を人は受け入れなければならない．ただし，ときどき実行したくないと思うことがあっても，そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない．

英文(40a)，(41a)，(42a)に対応する日本語同語反復文(40b)，(41b)，(42b)は，いずれも日本語母語話者によって比較的容易に受け入れられると思う．そして，その際受け取られる意味も，基本的にはWierzbickaが示唆する意味とほとんど同じではないかと思う．つまり，「法律」，「約束」などの概念から連想される“履行”や“遵守”といった意味合いが伝わる．

このことは，佐山・阿部の提案する“制約”がまだ説明原理として不十分なものであることを示唆する．たとえば，日本語文(40b)から受け取り得る“履行”や“遵守”といった“義務”に関わる意味合いは，佐山・阿部の提案する4種の制約のどれからも予言できない．(43)と比べてみよう．

(43)　確かに，ザル法はザル法だ．早急に改正すべきだね．

「ザル法」という反復語をもつこの同語反復文(43)の場合は，“履行”や“遵守”といった“義務”に関わる意味合いを伝える発話として解釈することはできない．この文の場合は，むしろ，佐山・阿部の言う制約[A]から予測される，反復語の否定的価値評価を強調・再認識する発話として解釈される，と言ったほうがよいであろう．

また，(44)，(45)を見てほしい．

(44)　慣習は慣習，法律は法律である．公務員の君としては，どちらかといえば，法律に従ったほうがよいであろう．

(45)　悪法でも，法は法だ．

(44)，(45)の例における同語反復文からは，確かに，履行，遵守といった義務の関わる意味が伝わる．しかし，それぞれの文は，その前に，まず，佐山・阿部の提案する制約[B]あるいは[C]の下での処理を受けると言える．すなわち，(44)の場合は，[B]の制約を受け，「法律」は「慣習」とは違うということを強調・再認識する発話として解釈され，また，(45)は，[C]の制約下で，「悪法」もやはり「法(律)」という集合の成員に違いないということを強調・再認識する発話として解釈される，と言えるのではないかと思う．

4.4.3 同語反復文の文脈依存性

さて，こうして見てくると，日本語から英語へ，英語から日本語へと，反復語を相手言語の対応する単語に取り替えた同語反復文は，一般に相手言語の母語話

者に受け入れられ，また，ほぼ同じような意味で解釈されることが多いと言えそうである．もちろん，そうは言えない部分もある．日本語にも英語にもそれぞれ言語特異的な表現形式があり，そのような表現形式に基づいて伝えられる意味については，両言語間に単純な対応を求めるのは無理である．たとえば，佐山・阿部の言う制約[C]に関わる日本語文形式“aだって，AはAである”に直接対応する英語の文表現はない．また，英語には，冠詞の有無と種類，単数・複数の違いによって，反復語1語につき複数の同語反復文表現が存在し得るが，日本語ではそうではない．(46a)((42a)に同じ)および(46b)を見てほしい．

(46a)　A promise is a promise.

(46b)　Promises are promises.

前章3.4においても触れているが，Wierzbicka(1987)によれば，(46a)は彼女の言う“義務”の同語反復文に適合し「約束は守りたくなくても守らなければならない」のように解釈されるのに対し，(46b)は「約束は約束にすぎない．常にあてになるとは限らない」という別の意味をもつものとして解釈されるという．同じ反復語を用いながら，異なった文表現で異なった意味を伝えるということは，日本語の同語反復文では不可能である．英語同語反復文(46a)と(46b)に対応する日本語同語反復文(47)((42b)に同じ)によって，(46a)と(46b)のそれぞれの文の意味を伝えるためには，この文表現だけでは足りず，それぞれの意味に導くために十分な文脈や状況の情報が必要になる．

(47)　約束は約束である(だ)．

このような例から，次のような可能性が推測できる．一般的に言って，英語同語反復文の方が，日本語同語反復文よりも，反復語の単数・複数あるいは冠詞の種類と有無といった表現上の変化が多く(つまり意味を伝える道具だてが多く用意されており)，その分だけ文脈独立的に意味を伝えることができる可能性がある．逆に言うと，日本語の同語反復文の意味は，英語の同語反復文の場合よりも文脈依存的あるいは多義的になる，ということである．

4.5 同語反復文の意味の言語普遍性

Wierzbicka(1987)の言う，同語反復文がもつ“意味的不変体”と“下位構文”を利用し同語反復文から引き出される意味，および，佐山・阿部の提案する“制約”から導き出される意味，の間には多くの共通点があるように見受けられる．また，さらには，その他の研究者の指摘する同語反復文の意味も考慮に入れて広く考えてみると，以下のような仮説がたてられるのではないかと思う．

同語反復文は，英語や日本語といった個別言語の如何にかかわらず，次のような三つの意味を伝える表現として普遍的に用いられている．その第一は，「すべてのAは他のAと違わない」という，カテゴリーの成員の“同一性”の意味，第二は，「Aは他(B)とは違う」という，他のカテゴリーからの“独自性”の意味，そして，第三は，カテゴリーAのもつ最も顕著で不変な特徴によってもたらされる意味，である．この最後の第三の意味には，具体的には，佐山・阿部の言う“価値の評価”，Wierzbickaの言う“義務の履行・遵守”，“人間の性質に対する寛容”，などがあり得る．また，この意味は，Gibbs and McCarrell(1990)の言う“ステレオタイプ”に相当する．

さて，表現形式という点から見れば，同語反復文は，主語，述語の異なる名詞述語文(“AはBである”あるいは“(ART)A be (ART)B”)の特別な場合に相当する．一般に，人は名詞述語文を主語の指示するカテゴリーが述語の指示するカテゴリーの成員であるというようなクラス包含関係として解釈したり，あるいは主語のカテゴリーと述語のカテゴリーとが同一対象を指示するといった同一関係を示すものとして解釈したりする(佐山・阿部，1990a，1990b)．それゆえ，名詞述語文の特別な場合である同語反復文に対しても，これと類似した集合関係を表すものとして解釈すると考えるのは自然であろう．前章3.4で触れた通り，Glucksberg and Keysar(1990)やGibbs and McCarrell(1990)は，同語反復文はまさに一般の名詞述語文と同じクラス包含関係を示すものとして解釈されると主張する．

しかし，もちろん，反復語Aしかもたない同語反復文は，A，B，二つのカテゴリーの間の集合関係について何かを伝えることはできない．名詞述語文形式をもつ同語反復文は，必然的に，反復語Aによって指示される概念Aのカテゴリー(あるいは集合)としての“何か”を伝える以外にはその役割はないことになる．その“何

か”が，上述した三つの意味といえるのではないかと思う.

よく知られているとおり，自然カテゴリー概念は，“族類似(family resemblance)”構造を有しており，そのすべての成員が特定の定義的特徴をもっているわけではない(Rosch & Mervis, 1975). つまり，自然カテゴリーは，明確な定義的特徴をもたずその境界が曖昧である. また，自然カテゴリー概念は，その使われ方が時とともに変わることもよくある. つまり，それを構成する重要な特徴が徐々に変化したり，その境界が変わったりもする. それがために，時として，言語使用者には，あるカテゴリーの周辺的な成員が当該カテゴリーの成員であること，すなわち，ある成員のAとしての“同一性”，を強調・再認識する必要が生じてくることにもなる. 日本語ではそれを(48)((19), (21a)に同じ)のような同語反復文を用いて伝えるのではないかと思う.

(48)　ペンギンだって，鳥は鳥だ.

また，ある場合には，自然カテゴリー概念の境界や成員がはっきりとしないために，そのカテゴリーに近接し，重なり合っている他のカテゴリーと違うこと，すなわち，そのカテゴリーの“独自性”，を強調・再認識することが必要にもなってくる. そのために，(49)((18c)と同じ)のような同語反復文が存在することにもなる.

(49)　<u>心理言語学は心理言語学，言語心理学は言語心理学だ</u>. 同じように見えて，両者はその成り立ちからして違う.

さらに，他のカテゴリーとは異なるという意味の“独自性”を伝えるにとどまらず，そのカテゴリーの独自性を支える顕著な特徴(あるいは属性)を強調・再認識することを伝えるために同語反復文が用いられる. たとえば，(50)((3), (6), (36c)に同じ), (51)((4), (34a)と同じ), (52)((11)に同じ), (53)((30a)と同じ)のような例である.

(50)　しょせん，<u>子供は子供だ</u>.

(51)　Business is business.

(52)　腐っても，鯛は鯛だ.

(53)　A diamond is a diamond.

あるカテゴリー概念の特徴を強く効果的に伝える道具だてとして，同語反復文は，英語においても，日本語においても，そしておそらくはそれ以外の言語においても，用いられている．そして，その際，その特徴(あるいはそれがもつ顕著な属性)を伝える話者の価値評価は，どちらかと言えば，肯定的というよりも，否定的な場合が多い．それは，佐山・阿部が指摘する日本語の場合ばかりではなく，英語の場合にもあてはまるようである(Gibbs & McCarrell, 1990).

第3章および本章を通じ，英語，日本語それぞれの同語反復文の意味解釈のあり方を，それらの比較をまじえながら考察してきた．双方の意味解釈に対する研究者間の立場の相違は，根本的には，解釈時に必要とされる知識のうちのどの程度を言語知識の範囲内から引き出し，どの程度を文脈・状況知識から引き出すと考えるかにある．本研究は，英語および日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究の中に，反復語の語彙情報や統語情報のみを言語知識から引き出し，それ以外は文脈・状況知識から引き出して解釈すると考える立場(Glucksberg & Keysar, 1990; 毛利, 1980, など)から，言語知識を参照すれば同語反復文はほぼ解釈できるとする立場(Wierzbicka, 1987)まで，さまざまな見解が存在することを示した．また，英語および日本語の同語反復文について，それぞれの母語話者のもつどのような知識が，双方の意味解釈を支えているのかについて考察した．認知心理学者としての我々の関心は，同語反復文の意味解釈の際に必要とされる知識源や知識を同定したり詳述したりすることにとどまるわけではもちろんない．我々の興味は，人が同語反復文を解釈する，そのメカニズムの具体的な解明にある．これを成し遂げるためには，なお一層の理論的考察とそこから生じてきた仮説の実験的吟味という，長い研究の連鎖が必要となるであろう．ともあれ，同語反復文の研究は，この表現形式が，“文字通りの意味”を超えた意味の理解を要

求する発話の中でも，最も単純な表現形式をもつ一つと言えるだけに，修辞理解の認知過程の解明というより大きな問題への突破口を開くことが期待されているわけである．

第5章　日本語同語反復文の意味解釈過程における文脈と反復語の関わり（実験論文）

5.1 同語反復文の有意味性の違い

“乗りに乗る”，“安いことは安い”，“しょせん，子供は子供だ”など，いわゆる同語反復表現は，日常会話において頻繁に見いだされる．本章では，これら同語反復表現のうち，(1)のような，“A”を名詞とする名詞述語文形式の同語反復文を扱う．以下，“A”を反復語と呼ぶ．

(1)　AはAである．(あるいは，AはAだ．)

同語反復文は，“文字通り”には，何ら新しい情報を伝えない．そして，その意味では，Griceの“会話の公準”(Grice, 1975, 1978)の下位原則の一つである“量の公準”に違反していることになる(Levinson, 1983; 金子・佐山・阿部，1986)．しかし，我々は，日常の言語使用の中で，同語反復文を充分に意味ある発話として産出したり理解したりしている．では，どのような場合に，どのようにして，同語反復文は意味ある発話となるのであろうか?

文脈から単離され，同語反復文1文のみが与えられる場合を考えてみよう．一般的に言って，文例(2)は意味の通る発話として容認されやすいのに対し，(3)はそうでもない．

(2)　ゴミはゴミだ．

(3)　空は空だ．

(2)，(3)の例はいずれも，“(腐っても，)鯛は鯛である”のような慣用句ではない．また，(2)も(3)も，ともに文としての形式は同じである．したがって，それらの解釈されやすさの違いは，それぞれの反復語がもつ何らかの違いから生じると考えられる．それでは，反復語のどのような相違が，上の例に見られる有意味

性の違いあるいは解釈されやすさの違いをもたらすのであろうか? また，反復語の違いだけで各同語反復文の有意味性の違いを説明できるものなのであろうか?

これまで，英語では，(4)のような名詞述語文形式をもつ同語反復文がどのように解釈されるかについて考察されてきている．たとえば，言語学的考察としては，Brown & Levinson(1978)，Fraser(1988)，Levinson(1983)，Wierzbicka(1987, 1988)などの研究があり，また，心理学的考察としては，Gibbs & McCarrell(1991)，Glucksberg & Keysar(1991)などの研究がある．

(4)　(ART) A be (ART) A.　(A: 名詞; ART: 定冠詞，不定冠詞，または，無冠詞)

このうち，Wierzbicka(1987)は，同語反復文から受けとることのできる意味を，言語知識の範囲内で，可能な限り，個々の同語反復文の文脈や発話状況とは無関係に説明しようとする．彼女によれば，同語反復文は，言語知識の範囲内にあるとされるいくつかの制約のうちのどれをその反復語が充たすかにより，異なって解釈されるという．彼女の言う制約とは，冠詞の有無，反復語の単数・複数の違い，および反復語が何らかの特別な意味的カテゴリーに属するか否か，などによって区別される特徴である．たとえば，彼女によれば，反復語が単数形，かつ，定冠詞または不定冠詞づきで用いられ，さらに，反復語が「law」，「promise」のような“義務(obligation)”を表わす，という制約を充たす同語反復文は，「たとえ実行したくなくとも実行しなければならない」というような意味をもつことになるという．彼女は，このような制約を充たす同語反復文の例として，(5)，(6)などを挙げている．

(5)　The law is the law.

(6)　A promise is a promise.

しかしながら，Wierzbicka(1987)は，限られた種類の反復語にのみあてはまる制約しか示しておらず，あらゆる同語反復文の反復語が何らかの制約を充たすこ

とになるのかどうかを明らかにしていない．

Wierzbicka(1987)の考えは，極論すれば，同語反復文の意味が言語知識を参照するだけで決まるとする論と言える．一方，こうした考えとは異なり，同語反復文の意味が，言語知識の範囲内では決まらず，それに文脈や状況に関する知識をも合わせて参照しなければ決まらない，とする見解もある．Fraser(1988)はこの立場にたつ．彼によれば，言語知識の範囲内で決まる同語反復文の意味は，どのような同語反復文からも受けとり得る次のような話し手または書き手(以下，話者と呼ぶ)の一種の信念である．すなわち，その反復語によって指示し得る何らかの対象に対し，話者が何らかの見解を主張しているということと，聞き手または読み手(以下，聴者と呼ぶ)がこの特定の見解に気づくことができると話者が信じているということ，およびこの見解が会話に関係しているということ，といった信念である．それゆえ，その考えに従えば，個々の同語反復文が伝えるであろう具体的な意味は，文脈や状況ごとに変わることになる．たとえば，彼は，同語反復文(7)が文脈や状況次第で「あらゆる仕事は同じである」という意味に受けとられることも，「仕事は無慈悲である」という意味に解釈されることもあると指摘する．

(7)　　Business is business.

Gibbs and McCarrell(1991)は,上で述べたWierzbicka(1987)の立場，およびFraser(1988)の立場のちょうど中間の立場をとる．彼らは，まず，Fraser(1988)の言う信念を聴者が受けとることを認める．そして，それ以外に，発話された同語反復文から次の二つの意味を受けとると主張する．その第一の意味は，その同語反復文の置かれた特定の文脈・状況の中で反復語に対し話者の抱いている信念であるという．また，第二の意味は，Wierzbicka(1987)の言う単数・複数の違い，さらには，反復語に“ステレオタイプ”的知識が付随しているか否かで変わる意味であるという．そして，この後者の具体的な意味は，反復語が複数の場合には，「同語反復文の主語の指示対象が述語の指示するステレオタイプの事例である」となり，また，単数の場合には，反復語がステレオタイプと結びついていれば複数の場合と同じであり，それ以外は「あらゆる事例が同等である」となるという．

加えて，彼らは，同語反復文の受けとりやすさが，反復語がステレオタイプと結びついているか否かによって左右されると主張する．たとえば，(8)は(9)に比べ解釈しやすいという．

(8)　Boys will be boys.

(9)　Girls will be girls.

その理由は，「少年」に一般的にあてはまるステレオタイプ的知識を英語母語話者は共有しているが，「少女」に対してはこのようなステレオタイプを共有していないためであるという．

以上のように，英語同語反復文に関する考察は，同語反復文の意味が，反復語の性質と同語反復文をとりまく文脈の性質の両方に依存して決まる可能性を示唆している．すなわち，一方では，たとえ文脈から単離されて与えられた場合でも，反復語次第で，同語反復文の意味が具体的に定まることがあり得ることを示し，他方では，同一の同語反復文であっても，文脈に応じて解釈が変わる場合のあることを示唆している，というわけである．

さて，同語反復文の意味解釈に関する議論は，英語においてばかりではなく，日本語においてもなされてきている．たとえば，言語学的考察としては，大野(1978)，国広(1985)，毛利(1980)などの研究が，また，心理学的考察としては，阿部(1989a，1989b)，佐山・阿部(1988a，1988b，1991a，1991b)，などの研究がある．

このうち，国広(1985)によれば，同語反復表現は変項を含む慣用的“枠組”をなしており，表現形式全体が一つのパターンとしての意味をもっているという．たとえば，彼によれば，(10)，(11)のような，“XことはX(Xは形容詞または動詞)”という表現形式をもつ同語反復表現は，「一応，Xといえる」という解釈のパターンに従って解釈されるという．

(10)　安いことは安い．

(11)　　言うことは言う．

しかしながら，国広(1985)は，名詞述語文形式の同語反復文に関しては何も述べていない．

佐山・阿部(1988a，1988b)は，名詞述語文形式のさまざまな日本語同語反復文の例を観察し，日本語同語反復文の解釈の仕方にいくつかのパターンがあることを指摘している．彼らによれば，そのような一定のパターンに則った解釈がなされるためには，反復語が特定の意味上の制約を充たしているか，あるいは特定の表現形式を必要とするという．彼らの言うパターンには以下のようなものがある．「ダイヤモンド」や「バカ」のように，反復語で示される概念が強い価値評価を伴う場合，その同語反復文は，反復語のそのような価値評価が恒常的で不変であることを強調する意味に解釈されやすい．たとえば，(12)は，特定の解釈を促す文脈のない場合，「ダイヤモンドは金銭的価値のあるものである」という意味に受けとられやすい．

(12)　　ダイヤはダイヤである．

佐山・阿部(1988a，1988b)は，日本語にはまた，英語にない日本語独特の解釈のパターンもあると指摘する．

(13)　　aだって，AはAである．

(13)のような表現形式をとり，かつ，“a”が“A”の下位事例，とくに非典型事例を表わす名詞である場合，その同語反復文は，「aが実際にはAの下位事例である」ことを強調する文として解釈されやすい．たとえば，次の(14)のような例である．

(14)　　ペンギンだって，鳥は鳥である．

本研究では，以上のような先行研究を踏まえつつ，同語反復文の意味解釈のあり方について，実験調査的な分析と考察を行いたいと思う．すなわち，被験者に

同語反復文を与え，その同語反復文が自然で意味のある表現として容認され得るような“文脈”を産出させる実験を行う．そして，その結果を次の二つの観点から分析し考察する．第一に，反復語のどのような違いが，同語反復文の解釈されやすさや修辞性に影響するのかを分析し考察する．第二に，同語反復文を解釈されやすくする文脈の性質，すなわち，どのような文脈のもとで，同語反復文が意味ある表現となるのかを分析し考察する．同語反復文を容認可能な表現とさせる文脈を分析することにより，同語反復文の意味解釈のあり方を考察することができる．その理由は，そうした文脈が，同語反復文の典型的に産出される文脈・状況に関する知識を反映しており，その知識は同語反復文の意味解釈にも直接的あるいは間接的に影響すると考えられるためである．

5.2 同語反復文を有意味にする文脈の産出：実験

方法

被験者　北海道大学の学生100名であった．

材料　“AはAである”の形式の同語反復文22種を以下の手順で作成した．まず，Aに置くべき名詞22語を連想基準表(梅本，1969)内で刺激語として用いられている全名詞142語(刺激語総数は210語)の中からランダムに選んだ．連想基準表から選択した理由は，その中で反復語(刺激語)に対して与えられている諸指標(最多連想反応頻度，無連想価，反応種類数，名詞率，形容詞率，動詞率：詳しくは梅本，1969を参照されたい)と，本研究の実験結果との相関関係を分析し，考察してみるためであった．Table 5.1には，選択した全22語の名詞が示されている．そして，それらから“AはAである”の同語反復文22種を作り，4群(6文，6文，5文，5文)に分け，群ごとに小冊子を作成した．被験者にはいずれか1冊の小冊子が与えられた．4群に分けた理由は，1人の被験者が，22種の同語反復文すべてについて，多くの異なる“文脈”を産出するのでは負担が大きいと思われたためである．

各小冊子は次のように構成されている．まず，1ページ目には教示が印刷されている．2ページ目以降には，1ページにつき1文の同語反復文と問1，問2の質問およびそれらの回答欄が印刷されている．2ページ目以降の各ページの体裁は，記されている同語反復文以外，同じであった．

問1は(a)，(b)の2種の設問に分けられており，(a)に対しては四つの“文脈”記入欄が，また(b)に対しては四つの“言いかえ文”記入欄が設けられている．さらに，問2にも(a)，(b)の2種の設問があり，(a)には同語反復文に対する“修辞性”評定のための尺度が，(b)には言いかえ文に対する修辞性評定尺度がそれぞれ印刷されている．

手続き　実験は2人～15人の小集団で行われた．被験者は，まず問1(a)において，記されている同語反復文を使うことのできる場面・状況を具体的に想像し，それを文章にするように教示された．ここでの課題は，同語反復文そのものを含む“文脈”を産出することであった．その際，“文脈”は，与えられた同語反復文が日本語の表現として自然に受け入れることができ，かつその意味や意図を間違いなく解釈されやすくするものでなければならないとされた．被験者に対する要求は，与えられた同語反復文を文脈中に必ず含めること，および，文脈の中で同語反復文の意味が明確になること以外には課されなかった．たとえば，同語反復文そのものを文修飾する語句をつけることや同語反復文の文末の“である”を他の語尾に変形すること，および場面・状況の説明を卜書的に入れることなどは許された．問1(a)には四つの文脈回答欄が用意されており，被験者は各同語反復文につき少なくとも一つ以上，なるべく多くの文脈を産出するよう求められた．たとえば“ダイヤはダイヤだ”が与えられた場合，被験者は次のような“文脈”を産出した．

(15)　花子が太郎に買ってもらったダイヤモンドに“小さい”とケチをつけた．太郎は怒ってこう言った．“小さくたって，ダイヤはダイヤだ．”……

さらに，問1(b)において，与えられた同語反復文の“言いかえ文”を産出するよう求められた．被験者は問1(a)で産出されたそれぞれの文脈下で，その同語反復文の意味するところを，より直接的な別の言葉で言いかえた文を産出した．たとえば，(15)の“小さくたって，ダイヤはダイヤだ”の部分を，“小さくたって，やっぱり高かったんだぞ”というような表現に置きかえた．

続いて，問2の(a)，(b)において，問1(a)での同語反復文，および問1(b)での言

いかえ文が，それらの置かれた文脈下で，どの程度“綾のある”表現であるかについて，それぞれ7段階尺度上で評定を求められた．尺度の目盛りの内容は，左から順に，“全く綾のある表現ではない”，“綾のある表現ではない”，“あまり綾のある表現ではない”，“どちらともいえない”，“やや綾のある表現である”，“綾のある表現である”，“とても綾のある表現である”，であった．

被験者は，どの課題に対しても制限時間を課されず，また，思いついた同語反復文から自由に文脈を産出することが許された．そして，これ以上小冊子内のどの同語反復文に対しても文脈を思いつかなければ止めてもよいと教示された．

結果と考察

被験者は4群に分けられ，群ごとに4種類の小冊子のうちの1冊を配布された．すなわち，ある一つの同語反復文に対して各群合計25人の被験者の回答が得られた．以下に述べる文脈産出頻度，同語反復文に対する修辞性評定値，言いかえ文に対する修辞性評定値のいずれにおいても，4群間に差は見られなかった(順に，$F(3, 18) = .83$; $F(3, 18) = 2.77$; $F(3, 18) = 2.98$，すべてns)．

また，各小冊子内で同語反復文の提示順序は固定されていたが，この提示順序の効果も全く認められなかった(文脈産出頻度: $F(5, 16) = .58$; 同語反復文修辞性評定値: $F(5, 16) = .30$; 言いかえ文修辞性評定値: $F(5, 16) = .57$，いずれもns)．

文脈の産出頻度　問1(a)で収集された“文脈”の数は全被験者全同語反復文の合計で782例(1被験者1同語反復文につき平均1.42例; $SD = .80$)であった．

得られた文脈のうち，計100例が“不適切”な文脈産出例と判断され分析から除かれた．不適切な文脈とは，教示に即しておらず，同語反復文が入れられていないか，または，文脈の意味の不明瞭なものを言う．たとえば，(16)，(17)のような反応がそれぞれの例である．

(16)　現在の対米輸出は危険な輸出である．
　　(“輸出は輸出である”の反応例)

(17)　お正月と言えば，こたつはこたつである．
　　(“こたつはこたつである”の反応例)

文脈の適切さの判断は，著者，本章の研究の共同研究者，および心理学専攻の大学院生1名，計3名が，それぞれ独立に，産出された全文脈例を読み，行った．その判断の一致度は92.2%であった．3名が適切でないと判断した87例，および3名中2名が適切でないと判断した13例，計100例を“不適切”な文脈とし除外した．

“適切”とされた文脈682例に対し，各同語反復文ごとに，その産出頻度が調べられた．Table 5.1にその結果が示されている．産出頻度の多い同語反復文は，被験者平均で，それぞれ“さくら”が1.92例，“からす”が1.80例，“はさみ”が1.76例，“宝石”が1.76例，“賛成”が1.68例，などであった．一方，産出頻度の少ない同語反復文は，同じく被験者平均で，それぞれ“輸出”が1.08例，“原因”が1.08例，“質問”が1.16例，“長所”が1.16例，などであった．産出頻度の高い名詞には，比較的具体的な対象を表わすものが多く，産出頻度の低い名詞には，比較的抽象的なものが多いように見受けられる．

なお，各同語反復文の産出頻度と連想基準表(梅本，1969)中の諸指標との間に有意な相関は見られなかった．

<u>同語反復文の修辞性</u>　“適切”とされた反応例682例の中には，文脈は産出されているが言いかえ文が産出されていないか，もしくは言いかえ文が文脈内のもとの同語反復文と同じかあるいは類似した形式の同語反復表現で言いかえられているものが認められた．それらは44例あり，修辞性の分析からは除外された．また，(18)のような反応7例も分析の対象から外された．

(18)　教室で大掃除をしているときに，“つくえはつくえ，いすはいすで集めておこう．”

(18)のように“AはA(で)，～”という節の形式をもち，後続の文を修飾する同語反復表現は，日本語として容認され得る表現ではあるが，(1)の形式の同語反復文とは異なる形式(国広，1985)と判断されたためである．

Table 5.1には，同語反復文に対する修辞性評定値の平均，同語反復文の言いかえ文に対する修辞性評定値の平均，および，それら修辞性評定値間の差を表わすt値が，同語反復文ごとに示されている．同語反復文の修辞性評定値の全体平均は3.09，言いかえ文の修辞性評定値の全体平均は2.13であり，両者の間には有

Table 5.1
同語反復文を意味ある発話にする文脈の産出頻度,
および,同語反復文とその言いかえ文の
“修辞性”評定値[a)]

反復語	文脈の産出頻度	修辞性評定値		
		同語反復文	言いかえ文	t 値(df[b)])
さくら	1.92	3.58	2.23	3.36(60)***
からす	1.80	3.29	1.95	4.26(73)****
宝石	1.76	3.46	2.00	3.97(67)***
はさみ	1.76	2.78	1.84	2.83(69)**
賛成	1.68	2.81	2.00	2.15(71)*
母	1.56	3.17	2.20	2.55(55)**
うわさ	1.52	3.28	2.16	3.64(59)***
つくえ	1.52	2.97	2.03	2.72(61)**
重要	1.40	3.26	2.57	1.73(43)
時計	1.40	3.04	2.44	1.41(52)
寝床	1.40	2.97	2.35	1.55(58)
断念	1.36	2.91	2.00	2.16(42)*
うしろ	1.32	2.79	1.83	2.29(55)*
理屈	1.32	2.81	1.78	2.54(51)**
日本	1.32	2.77	2.03	1.70(60)
満員	1.28	3.21	1.86	4.03(53)***
こたつ	1.24	3.35	2.61	2.01(44)*
便所	1.24	3.35	2.23	2.84(46)**
長所	1.16	3.11	2.58	1.40(32)
質問	1.16	3.38	2.38	2.21(43)*
原因	1.08	3.11	2.22	1.87(29)
輸出	1.08	2.62	2.14	0.94(39)
平均	1.42	3.09	2.13	11.58(1241)****
SD	(.24)	(1.48)	(1.46)	

**** p<.0001, *** p<.001, ** p<.01, * p<.05
[a)] “0”=“全く綾のある表現ではない”から“6”=“とても綾のある表現である”までの7段階評定で行った.
[b)] F検定の結果,“時計”を除くすべての場合において,同語反復文に対する評定値の母集団分散と言いかえ文に対する評定値の母集団分散とが等しくないと見なされた.

意差が見られた($t = 11.58$, $p < .0001$). 同語反復文に対する修辞性評定の絶対値はさほど高くないことが分かる. この理由は, おそらく同語反復文が日常会話において頻繁に使われ, とりたてて修辞性を感じさせなくなっているためであろう. それでも, 通常の直接的な言いまわしとの間に信頼できる差の認められることは, 同語反復文の一定の修辞的効果を示していると言えそうである.

同語反復文に対する修辞性評定値も言いかえ文に対する修辞性評定値も, ともに同語反復文間の差は小さい. しかし, 同語反復文の修辞性評定値から言いかえ文のそれを差し引いた値の程度差を示す t 値は, 同語反復文間で大きな相違が認められる. t 値の大きな, すなわち評定値間の差に有意差の見られた同語反復文には, “宝石は宝石である” や “うわさはうわさである” などのように, 比較的具体的, かつ一定の価値評価を伴う名詞の同語反復文が多く, 有意とならなかった同語反復文には, “輸出は輸出である” や “原因は原因である” など, 比較的抽象的な名詞の同語反復文が多いように思われる. この傾向は, 文脈産出頻度の結果の傾向と似ている. 事実, 文脈産出頻度と t 値との間には, 比較的高い相関が見られた($r = .60$, $p < .01$)[1]. ただし, 現時点でこの傾向に何らかの説明を与えることは難しい.

反応の中で, 被験者は “からす”, “宝石” などに対し, 反復語そのものを隠喩的に用いることがあった. たとえば, (19)のような反応例である.

(19)　上流階級の人々の催すパーティ. その中に紛れ込んだ花売り娘. しかし “お里” は知れるものである. それを見て人々は言う. “からすはからすである.”

文脈中のこのような同語反復文を自己評定する場合, 被験者は, 修辞性の直観の中に, 同語反復文の修辞性だけでなく, 隠喩としての修辞性をも加味したと想像される. “からす”, “宝石” などの t 値が, 非常に高い理由は, このためであ

---

[1]　以下の分析では, (1)以外の形式の同語反復表現を含む反応7例を除外した文脈産出頻度のデータを用いた.

ると推察される．

前出の文脈産出頻度は，反復語の性質の違いにより，その同語反復文が意味ある発話となる文脈の想起されやすさがどのように変わるかを示す指標と見ることができる．また，それは，反復語の性質の違いにより各同語反復文の産出や理解のされやすさがどのように変わるかを示しているとも考えられる．そこで，Table 5.1中の2種類の修辞性評定値と文脈産出頻度との間の相関が調べられた．その結果，同語反復文の修辞性評定値と文脈産出頻度との間には相関は見られず(r = .07, ns)，また，言いかえ文修辞性評定値と文脈産出頻度との間には中程度の負の相関が見いだされた($r = -.45$, $p < .05$)．

最後に，同語反復文に対する修辞性評定値平均，言いかえ文に対する修辞性評定値平均および t 値と連想基準表(梅本，1969)中の諸指標との相関をとってみたところ，同語反復文の修辞性評定値と“反応種類数”(反復語から何種類の単語が連想されたかを示す)との間($r = .59$, $p < .01$)，および言いかえ文の修辞性評定値平均と“名詞率”，“動詞率”(順に，名詞，動詞の種類の数の，反復語から連想された単語の種類数に占める割合を示す)との間(順に，$r = -.50$, $p < .05$; $r = .52$, $p < .01$)に有意な相関が認められた．

<u>同語反復文の文脈の性質</u>　同語反復文の使用を妥当にする文脈の意味的性質を調べるため，適切と判断された文脈中に存在する自立語が，各同語反復文ごとに集計された．ただし，自立語のうち，代名詞，数詞，同語反復文を修飾しない副詞，および，同語反復文に連なっていない接続詞は，同語反復文の解釈に直接影響しないとの判断から，集計対象から除外された．また，同語反復文を文修飾する副詞や同語反復文に連接する接続詞は，後述する限定語句に含め，別途集計された．したがって，名詞(代名詞，数詞を除く)，動詞，形容詞，形容動詞，連体詞の頻度が数えられたことになる．

まず，これらの自立語に属する各単語の産出頻度が集計された．しかし，そこからは目立った傾向が認められなかったため，次の手順で数え直された．接頭語，接尾語などが付加されている単語については，それらが取り除かれた．また，否定形や可能形，願望形などをとっている単語は，もとの形の単語とみなされた．そして各単語が以下の基準でグループにまとめられ，グループごとに頻度が集計された．

・反意語関係および同意語関係にある語句どうしを同一グループとする.

その際,以下に該当する単語は除外された.

・反復語
・形式動詞(“する”,“ある”,“いる”,“いく”,“くる”,など)
・否定を表わす補助形容詞“ない”
・形式名詞(“とき”,“こと”,“さま”,“わけ”,“よう”,など)

Table 5.2の右欄には,以上の基準の下で集計された,各同語反復文の文脈中に出現した最多自立語グループが示されている.Table 5.2から,下記の傾向が認められる.すなわち,最多自立語グループの単語には,反復語と対極的意味関係にある単語が多い.たとえば,反復語“賛成”に対して“反対”,“原因”には“結果”,“うしろ”には“前”,“長所”には“短所”,“日本”には“アメリカ”,“便所”には“美しい”,“きれい”,“宝石”には“安い”,“安物”,“からす”には“白い”といった具合である.(20)は,こうした,反復語の対極的意味を表す単語の典型的に現れた反応例の一つである.

(20)　　安物でも,宝石は宝石である.

これらの単語は,同語反復文を意味ある表現とさせる上で重要な役割を果たしていると考えられる.一般に,同語反復文の文脈には,反復語と対極的な意味関係をもつ表現が多く含まれていることが特徴的であると言えそうである.

また,Table 5.2の左欄には,最多反応語,すなわち連想基準表(梅本,1969)において反復語(刺激語)から最も多く連想された単語が示されている.一見して,各反復語に対する最多反応語の多くは,その反復語の最頻自立語グループ内の最頻出単語と同一であるのが分かる.しかし,最多反応語が反復語を特徴づける属性を表す(“便所”に対する“臭い”,や“こたつ”に対する“暖かい”,“からす”に対する“黒い”)場合に限っては,最多反応語の反意語が最頻自立語グルー

Table 5.2
同語反復文の文脈中に現れた最頻自立語グループ，およびその反復語に対する
連想基準表(梅本，1969)中の最多反応語

反復語	最多反応語 (連想基準表より)	最頻自立語グループ (各自立語の産出頻度)
はさみ	切る	{ 切る(23) }
賛成	反対	{ 反対(11)，同意(2) }
質問	答	{ つまらない(2)，くだらない(9) }
時計	時間	{ 時間(8)，時(2)，時刻(1) }
母	優しい	{ 子供(10) }
便所	臭い	{ 汚い(3)，美しい(2)，きれい(4)，清潔(1) }
原因	結果	{ 結果(9) }
さくら	日本	{ 花(9) }
寝床	ふとん	{ 寝る(4)，眠る(5) }
満員	電車	{ バス(9) }
こたつ	あたたかい	{ 暖かい(1)，寒い(7) }
うしろ	前	{ 前(7) }
うわさ	きく	{ 事実(2)，本当(2)，真実(2)，実際(1) }， { 人(6)，人々(1) }
長所	短所	{ 短所(7) }
理屈	(無反応)	{ 言う(7) }
日本	狭い	{ アメリカ(7) }， { 外国(6)，他国(1) }
からす	黒い	{ 黒い(1)，白い(5) }， { 鳥(6) }
つくえ	いす	{ 上(6) }， { 言う(6) }
宝石	ダイヤ	{ 輝く(1)，輝き(1)，光る(4) }， { 高価(1)，安い(4)，安物(1) }
重要	大切	{ 言う(5) }， { 思う(5) }
断念	希望	{ 言う(5) }
輸出	輸入	{ 輸入(4) }， { 日本(4) }， { 少し(1)，少量(2)，大量(1) }

プ内の最頻出単語となっていることが見て取れる．

限定語句の産出頻度　文全体を修飾したり，文の冒頭に置かれていたりする限定語句は，その文の意味解釈を効果的に方向づける機能をもつと考えられる．そこで，適切とされた文脈中に存在する限定語句の中から，同語反復文に直接かかるものが集められ，同語反復文と限定語句がどのように関わるかが分析された．すなわち，同語反復文全体を文修飾する“副詞”，“代名詞＋接続助詞の形式をとる連用修飾語句”，および，同語反復文に直接先行する“接続詞”が収集され分析された．Table 5.3には，全限定語句とそれらの産出頻度が集計されている．なお，限定語句産出頻度の同語反復文間の違いは，各同語反復文の文脈産出頻度の相違には依らなかった．すなわち，同語反復文ごとの限定語句の産出頻度を文脈産出頻度で割った“限定語句生起率”で比べた場合も，Table 5.3での頻度順とほぼ同じ傾向が見られた．

Table 5.3から，“やはり(“やっぱり”を含む)”(32回)，“しょせん”(29回)，“しかし”(27回)が他の限定語句に比べとびぬけて多く使われることが分かった．これらのうち“やはり”と“しょせん”がとくに多くなった理由は，それらが反復語それ自体のもつ否定的価値評価を(“やはり”の場合には，時に肯定的価値評価をも)，他より強く導くためと考えられる．たとえば，“しょせん，うわさはうわさである”とか，“やはり，うわさはうわさだった”とかいうように，文頭に“しょせん”や“やはり”を付けた方が，“うわさ”の否定的側面(たとえば，うわさは本当かどうか分からないとか，うわさは信用できないとかいうような)を伝えようとする意図がより明確になるので，被験者はそれらの語句をより多く付加した，ということであろう．また，“しかし”が頻出した理由は，同語反復文が，往々にして先行文脈から推論されることと逆の，あるいは対極的な意味を伝えるために用いられることが多く，そうした際に“しかし”を付けることで，その文意をより強く予期させることができるためではないかと考えられる．たとえば，(21)のような反応例は，こうした解釈にあてはまる例と言える．

(21)　この何年も前に買ったはさみは錆びていて歯も欠けている．しかしはさみははさみである．切れないことはないであろう．

Table 5.3
同語反復文の文脈中に現れた限定語句とその産出頻度[a]

反復語	やはり[b]	しかし	しょせん	それも[c]	一応	これも[d]	確かに	でも	まあ	あくまでも	だから	結局	(1例のみ)	計
からす	4	3	5								1	1		14
はさみ	5	2	5		1			1						14
うわさ	2		9										どうせ	12
日本	3	1	3	1				2		1				11
寝床	2	3	1		1	3					1			11
こたつ	3	2		1		1							さすがに	8
母	4	2			1									7
賛成		2			1		1		1				とりあえず	6
つくえ	1			1	1	1	1						あれだって	6
満員	3	3												6
うしろ	2	2										1		5
宝石		1	1	1					1	1				5
理屈	1	1	1				1			1				5
時計	1			2			1						それならば	5
さくら		1	1	1				1						4
重要		1			1		1		1					4
断念		4												4
質問		1					1	1						3
長所	1			1					1					3
輸出					1	2								3
便所			1											1
原因														0
計	32	29	27	8	7	7	6	5	4	3	2	2	5	総計 137

a) 空欄のセルは，産出頻度0を示す．
b) “やっぱり”を含む．
c) “それでも”，“それだって”を含む．
d) “これでも”，“これだって”を含む．

Table 5.3の最右欄には，同語反復文ごとの限定語句の産出頻度が示されている．限定語句の多く付与された同語反復文の反復語は，“からす”(14回)，“はさみ”(14回)，“うわさ”(12回)，“日本”(11回)，“寝床”(11回)，などであり，逆に，限定語句の与えられることの少なかった反復語は，“原因”(0回)，“便所”(1回)，“輸出”(3回)，“長所”(3回)，“質問”(3回)などであった．このように，限定語句の産出頻度は，同語反復文間で大きな差がある．これは，一般的に言えば，被験者が，適当な文脈を与えれば解釈できると判断した同語反復文にはとくに限定語句をより多く与え，一方，特殊な文脈を付与しなければ解釈し難いと判断した同語反復文にはそうしなかったためと考えられる．たとえば，“からすはからすである”や“はさみははさみである”などは前者の例，“原因は原因である”や“輸出は輸出である”などは後者の例と言えるであろう．

しかし，もう少し細かく見れば，別な理由によると考えられる例もある．“うわさはうわさである”を見ると，“しょせん”だけが多い(産出頻度9)．前にも触れたように，“しょせん”は言及対象に対する否定的価値評価を効果的に推論させると考えられる．被験者は“うわさ”のような否定的価値評価を伴う反復語の同語反復文に一種慣用的表現に近い感覚で“しょせん”を付けた可能性がある．ただし，同じく否定的価値評価を伴う反復語をもつ同語反復文であっても，“便所は便所である”のように，限定語句がほとんど付与されなかった(産出頻度1)例もある．この場合は，反復語に対する否定的価値評価が非常に強く喚起される場合と考えることができ，そうした場合には“しょせん”などの限定語句を付加する必要がなかったのかもしれない．つまり，この同語反復表現は，限定語句のような文脈情報がなくても，“便所”の“汚なさ”や“臭さ”などに関する否定的態度の表明であるとはっきりと受けとることができるのであろう．

産出された文脈の結果，とくに限定語句の結果から，同語反復文をとりまく文脈全体に関し，次の一般的な傾向が示唆される．すなわち，反復語が表す対象に対する否定的価値評価を強く推論させる文脈は，反復語の肯定的あるいは中立的価値評価を強く推論させる文脈よりも，同語反復文を解釈しやすくするのではないかということである．同一の英語同語反復文であっても，それが否定的感情を引き起こさせる文脈下に置かれているときの方が，肯定的感情を喚起させる文脈下に置かれているときより，解釈されやすいことが見いだされている(Gibbs &

McCarrell, 1991). 本実験の結果は，英語の同語反復文について得られているこうした知見と矛盾しない.

5.3 同語反復文の容認可能性と修辞性

本研究では，日本語同語反復文が，どのような反復語をもつ場合に，また，どのような文脈下で，意味のある発話として容認され得る表現となるのか，さらには，より一般的な表現(言いかえ文)に比べ，どの程度修辞的な表現となるのかを実験的に考察した.

その結果，反復語に関しては，“宝石は宝石である”や“うわさはうわさである”などのような比較的具体的で一定の価値評価を伴う反復語の同語反復文ほど容認されやすく，“輸出は輸出である”や“原因は原因である”など，比較的抽象的な反復語の同語反復文ほど容認されにくい傾向が見いだされた. また，文脈に関して言えば，同語反復文をとりまく文脈中には，反復語の反意語や対極的意味の単語，あるいは反復語が特徴的に有する意味属性の反意語または対極的意味の単語が多く含まれており，そのような文脈下で，同語反復文は，意味のある発話として容認されやすくなることが分かった. さらに，同語反復文は，一般的に，反復語の否定的価値評価を強く導く文脈下での方が，肯定的・中立的価値評価を強く導く文脈下でより，解釈されやすい可能性が示唆された.

しかし，本実験では，反復語の性質とその同語反復文の修辞性や解釈されやすさとの間の関係については特定の傾向を見いだすことができなかった. 本実験で得られた結果を見る限り，修辞性の高い同語反復文が常に解釈されやすいとは言えない. このことは，文脈産出頻度と同語反復文の修辞性評定値との間にほとんど相関が見られなかった(r = .07, ns)ことからも示唆される. たとえば，“さくらはさくらである”や“質問は質問である”などは修辞性が高かった(“さくら”は3.58，“質問”は3.38，全同語反復文の平均は3.09)が，文脈から単離された場合を想定してみれば，それらがとりたてて解釈されやすい同語反復文であるとは考えられない. 逆に，“日本は日本である”のように，修辞性評定値は低かった(2.77)が，日常的によく見かけられ(たとえば，“アメリカはアメリカ，日本は日本だ”のように)，特定の文脈下に置かれなくても解釈されやすいように思えるも

のもある．一般的に言って，同語反復文の解釈しやすさと修辞性とは，文脈と反復語次第で，それぞれ独立に変わると言えそうである．

同語反復文を解釈する際，人は，本実験で見いだされたような特徴を有する先行文脈と反復語，さらには，その反復語から引き出される同語反復文の解釈パターンなどを手がかりとして利用しながら，その意味解釈を作り上げていくと考えられる．文を解釈する際，異なった知識源からの情報をいかに利用し処理していくのかを説明するのは容易なことではない(阿部，1987)．まして，同語反復文のような，いわゆる“文字通りの意味”を越えた意味を運ぶ表現の場合にはなおさらである．とはいえ，同語反復文の意味解釈のなされ方を解明しようとする試みは，この文が，そうした“文字通りの意味”以上の意味の理解を要求する発話の中でも最も単純な表現形式をもつものであるだけに，今後，そうした難問の解決に一つの突破口を与えてくれる可能性を期待できる訳である．

第Ⅲ部

隠喩文理解の認知過程

第Ⅲ部では，隠喩文，主に名詞述語文形式の隠喩文の理解過程を取り上げる．第6章では，隠喩文の理解の全体的な過程を捉える仮説的枠組みとして提案されてきているいわゆる“段階モデル(stage model)”について理論的考察を行う．段階モデルの考えに従えば，問題の文は，一度文字通りの意味で受け取られ，会話の公準のような，聴者が知識として心内に有するコミュニケーション上の諸規則に照らされ，文脈や状況とうまく合わない意味であると判断された場合に限り，改めてその文字通りの意味とは異なる隠喩的意味をもつものとして理解される，ということになる．このような段階モデルの，隠喩文理解過程を捉える仮説的枠組みとしての妥当性を，様々な実験的知見にもとづいて論ずる．

第7章では，間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルについて理論的考察を行い，隠喩文の理解過程の段階モデルと比較・考察する．

第8章では，これまでに提案されてきている隠喩文の理解の基本的なメカニズムを概観する．そして，どういったメカニズムが妥当であるかを，第6章，第7章での議論やいわゆる“慣習的比喩(conventional metaphor)”に関する言語学的見解との整合性を考慮しつつ論ずる．

第9章，第10章では，主語，述語の指示するカテゴリー概念のカテゴリー・レベルの違いによって，隠喩文の理解しやすさや適切さが変わるかどうかという特定のテーマに焦点を当て，それを実験的に考察する．その際，第9章では，隠喩文の理解しやすさや適切さに影響を与えると従来指摘されてきている文脈および隠喩文の慣習性をカテゴリー・レベルと合わせて考慮する．第10章では，文脈と慣習性の要因を一定に保ち，カテゴリー・レベルをより厳密に操作する．

第6章　隠喩文理解過程の段階モデル
(展望・考察論文)

本章では，まず6.1において，隠喩文理解の認知過程を説明するために提案された仮説的枠組みである“段階モデル”を紹介し考察する．6.2では，その段階モデルから導かれる種々の仮説の妥当性を検討した実験的研究を概観する．6.3では，隠喩文の理解過程と慣用句の理解過程との関係に言及する．6.4では，段階モデルの妥当性を考察する．

6.1 段階モデル：隠喩文理解過程の仮説的枠組み

これまで，言語学において，文の隠喩としての理解がどのような過程を経て成立するかを扱う仮説的枠組みがいくつか提案されてきている(たとえば，Grice, 1975, 1978; Levinson, 1983; Lyons, 1977; Searle, 1979a, 1979b; Sperber & Wilson, 1981, 1986; 安井，1978; 山梨，1982, 1988, など)．これら提案は，文が三つの質的に異なる段階を経た後，隠喩的意味をもつものとして受け取られると仮定する点で共通している．これら見解は，一括されしばしば“段階モデル”と呼ばれる．段階モデルが主張するように実際に人が段階的に文の隠喩的理解を行っているかどうかを調べるため，数多くの実験的研究が行われてきている．そこで，本節では，これまでに提案されてきている段階モデルの中から二つを紹介し，その後，段階モデルを検証するために行われた実験的研究を概観する．

6.1.1 Grice(1975)の見解

Grice(1975)は，よく知られた彼の論文『Logic and conversation』の中で，“文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ様々な発話がどのように理解されるかを考察し，その1ケースとして文が隠喩的に理解される場合を説明している．彼は，一般に，聴者が，受け取った発話の文字通りの意味pから[1]，それを超えた意味qを，会話の公準(1.1を参照されたい)にもとづく次のような推論のパターンを適用することによって引き出すと主張する．

- 話者がpと言った.
- 話者が会話の公準(のいずれかの下位原則)を守っていないようには見受けられない.
- 話者がqを意図していないとすれば，会話の公準は守られていないことになる.
- 話者がqを意図しようとしていることを聴者が分かると話者は信じている.
- 話者がqを意図していると聴者が考えるのを止めさせることを話者は何もしていない.
- qを意図していると話者が聴者にむしろ考えさせようとしている.
- それゆえ話者はqを意図している.

Griceは，文字通りの意味を超えた意味を運ぶ様々な発話がどのように理解されるかを，その発話が会話の公準の下位原則の中のどれに，どのように違反するかという点で分類できると指摘している[2)]．文が隠喩的に理解されるケースは，会話の公準中の質の第一の公準“虚偽であると信じていることを言ってはいけない”に“見かけ上違反する(flout)”場合に分類される.

上のGriceの説明では，聴者が当該発話の文字通りの意味を超えた意味qを，パターン中のどの段階でどのように推論するかが明確になっていない．しかし，彼は，そうした文字通りの意味を超えた意味qを推論すべきかどうかの判断を，(会話の公準に加え)当該発話をとりまく文脈あるいは発話状況の知識を利用しながら行う，という点を強調している．また，彼は，発話の文字通りの意味pを，その発話をとりまく文脈・状況とは無関係に計算する，としている．これらの点を考え

[1)] Grice(1975)自身は，このpのことを“言われていることがら(what is said)”と呼び，pを“誰かによって発せられた語，または文の慣習的な意味と密接に関係している，とその誰かによって言われたことがら(p.44)”と説明している．要するに，pは，当該発話の置かれた文脈・状況とは無関係に定まるその発話の意味ということであり，それは従来言われている文字通りの意味の概念の言語学的な定義の一つに相当する(Wilensky, 1989).

あわせると，上述のGriceの推論のパターンは，実際には，特定の文脈・状況とは無関係に当該発話の文字通りの意味pを計算する段階，会話の公準と文脈・状況の知識にもとづき，pとは異なる文脈・状況上ふさわしい意味を計算する必要があるか否かを判断する段階，そして，文脈・状況の知識を用い文字通りの意味を超えた意味qを実際に計算する段階，の三つの段階からなるとみることができる(Glucksberg & Keysar, 1990; Janus & Bever, 1985; Levinson, 1983).

6.1.2 Searle(1979a, 1979b)の見解

Searle(1979a, 1979b)は，Grice(1975)よりも具体的に，(1)の名詞述語文形式をとる文が，隠喩としてどのように理解されるかを具体的に考察してきている．彼によれば，(1)の形式をとる隠喩文の例には(2)のようなものがあるという．

(1) A is B. (A, B: 名詞，または，名詞句)

(2) Sam is a pig.

Searleによれば，(1)の形式の隠喩文の理解の最初の段階は以下のようであるという．

---

2) Grice(1975)は，話者が言語表現を使って会話の公準(の下位原則)にどのように違反していると聴者によって判断されるかを，4通りの場合に分類している．その4通りの場合とは，会話の公準に“公然と違反する(violate)”場合，“身振りあるいは言語表現自体などを合図として使って言いたいことを控えている(opt out)”場合，“一つの下位原則を守ることによって必然的に他の下位原則を守り得なくなっている(clash)”場合，“見かけ上違反している”場合，である．彼によれば，この四つの場合分けは互いに排他的なものではなく，言語表現によっては二つ以上の場合に同時にあてはまると聴者によって判断されることもある，とされている．また，彼は，アイロニー，隠喩，緩叙法，誇張といった修辞的表現が，会話の公準のいずれかの下位原則に“見かけ上違反する”と認定される場合になると指摘している．

・ 問題の文の文字通りの意味「A is B」を計算しなさい．

細かな違いを言えば，Searleの言う文の“文字通りの意味”は，ある種の文脈・状況の知識を参照しながら決定される意味である．この点で，彼の“文字通りの意味”は，特定の文脈・状況の知識を使わずに計算されるGriceその他多くの言語学者の言う“文字通りの意味”とは異なる．Searleは，そうした文脈・状況の知識を“背景の前提(background assumption)”と呼び，他の文脈・状況の知識(たとえば，主語の指示対象[referent]を決定する際に使われるもののような)とは区別している．彼の言う背景の前提とは，話者・聴者によって共有されている，文の発せられた文脈・状況に関する自明な知識のことをいう．

(3)　　The cat is on the mat.

たとえば，文(3)を理解する際に用いられる背景の前提は，地上に置かれたマットに猫が乗っているということである．彼は，こうした背景の前提を暗黙のうちに認めているからこそ，(3)の文を，たとえば「猫が“空飛ぶマット”の上に乗って部屋の中で浮いている」というような意味には受け取らない，と説明する．
(2)の形式の文の“文字通りの意味”を計算した後，聴者は次の段階に進む．

・ その文字通りの意味に“欠陥が生じている(defective)”と判断される場合，
　その文字通りの意味とは異なる意味を探しなさい．

彼の言う“欠陥の生じている”場合とは次の場合を指す．すなわち，その文の文字通りの意味が，明白に偽である場合，無意味である場合，発話行為の規則(rules of speech act)に違反している場合，会話の原理(conversational principal)に違反している場合，などである．Searleによれば，先に挙げた文例(2)は，それを文字通りの意味で受け取ると明らかに偽となることから，(2)の文字通りの意味には欠陥が生じていると聴者が判断する，とする．

・ 表層表現“A is B”を受け取ってそれが「A is C_1, C_2, C_3…」を意味し得るような「C_1, C_2, C_3…」を見つけるために，概念Aの概念Bとの類似点を探しなさい．そして，その類似点にもとづいて，「C_1, C_2, C_3…」の候補を探しなさい．

「C_1, C_2, C_3…」は概念Bの一つ以上の属性(property)を表す．Searleは，最も単純化して考えた場合であると断った上で，(1)の形式の文を隠喩的に理解することが，その文字通りの意味「A is B」からその実際の意味「A is C_1, C_2, C_3…」をどのように計算するか，という問題と同じになると主張する．彼は，概念Aの概念Bとの類似点を見つけるためのストラテジーをいくつか提案している．そのストラテジーには次のようなものがある．

ストラテジー: 概念Bの顕著(salient)なまたはよく知られた属性を「C_1, C_2, C_3…」とせよ．

彼によれば，上述の文例(2)を受け取ると，聴者は，豚に関する聴者の知識を参照し，豚が，「太っている」，「大食いである」，「不潔である」，といった，豚の顕著でよく知られた属性群を見つけ出す，という．そして，豚に関するこれら属性の中から，「C_1, C_2, C_3…」の値を選択する，という．

Searleによれば，選択し得る「C_1, C_2, C_3…」は，一つの組に固定されているわけではなく，不特定多数の候補があり得，隠喩として理解できるためには，それらの候補の中から一組の「C_1, C_2, C_3…」を特定する段階をもう1段階経る必要がある，という．

・ Aに戻り，「C_1, C_2, C_3…」の多くの候補のうちのどれがAの属性群であり得るかを調べなさい．

Searleによれば，たとえば，(2)の文の主語が“Sam”ではなく，“Sam's car”であったとすれば，“Sam”と“pig”との間で選ばれる属性群とは異なる属性群が選択され，その結果，「サムの車は，豚が餌を消費するようなやり方でガソリン

を消費する」とか，「サムの車は豚のような形をしている」とかいうように，(2)とは異なって聴者は解釈する，という．

このように，Searleは，(1)の形式の隠喩文の理解に，いくつかの段階を仮定している．彼自身は明確に言及していないが，これらの段階のうち，3番目と4番目の段階は，文字通りの意味を超えた意味を実際に計算する段階に相当している．また，彼は，(1)の形式以外の隠喩文も，基本的には上述のような段階を経て理解されるとしている．それゆえ，彼の段階モデルも，Griceの段階モデルと基本的には同じ三つの段階からなることになる．すなわち，まず問題の文の文字通りの意味を計算する段階があり，次に，その文字通りの意味が会話の公準のようなコミュニケーション上の規則と文脈・状況の知識に照らし妥当か否かを判断する段階か続き，最後に，文字通りの意味を超えた意味を計算する段階がくることになる(Blasko & Connine, 1991, 1993; Inhoff, Lima, & Carrol, 1984; Janus & Bever, 1985; Ortony, Schallert, Reynolds, & Antos, 1978).

さて，こうしたSearleやGrice(1975)の段階モデルに対し，二つの問題点が指摘されてきている．そのうちの一つは，段階モデルに従えば，文字通りに理解する仕方と隠喩的に理解する仕方とは異なることになるが，それは事実かどうか，という点である．また，もう一つは，段階モデルでは，隠喩的意味を計算する段階が“オプション”の過程になる，という点である(Gibbs, 1984; Glucksberg & Keysar, 1990)．すなわち，この段階は，それ以前の文字通りの意味を計算する段階(どのような発話でも必ず通過しなければならない)の中であらかじめ計算された文字通りの意味が，会話の公準のような発話状況に関する知識と当該発話の置かれた文脈・状況に照らし妥当でない場合にのみ，起動されるという点である．次節以降，これら二つの点について考察していくことにする．

6.2 段階モデルの妥当性に関する過去の実験的研究

段階モデル(たとえば，Grice, 1975; Searle, 1979a, 1979b, など)の主張に従えば，隠喩的意味を計算する段階はオプションの過程になる．すなわち，まず最初に文字通りの意味を計算する段階を経た後，その文字通りの意味が文脈・状況に照らし適切でない場合に限り，その隠喩的意味が計算される．

6.2.1 文字通りの理解と隠喩的理解の同質性を検討した従来の実験的研究

6.2.1.1 先行する文脈のない場合 Glucksberg, Gildea, and Bookin(1982; 実験Ⅰ)は，(4)の形式をもつ文を次々とランダムに提示し，文字通りの意味で真か否かを，すなわち主語Aの指示するカテゴリーが述語Bの指示するカテゴリーに含まれるか否かを判断するよう被験者に求めた．

(4)　Some A's are B's. (A, B: 名詞)

そして，主語Aと述語Bとの意味関係の異なる4種類の文を提示し，それらに対する真または偽の判断時間を比較した．すなわち，主語のカテゴリーと述語のカテゴリーとがクラス包含関係にはないが隠喩として理解される文(たとえば，(5a), (5b), (5c)のような)を偽と判断する時間，隠喩として理解される文の主語と述語をランダムに入れ替えた“混ぜられた隠喩(scrambled metaphor)”の文(たとえば，(6)のような)を偽と判断する時間，実際に主語のカテゴリーが述語のカテゴリーに含まれる“文字通りの意味”の文(たとえば，(7)のような)を真と判断する時間，クラス包含関係になくかつ隠喩としても理解できない文(たとえば，(8)のような)を偽と判断する時間を比較した[3)]．

(5a)　Some jobs are jails.

(5b)　Some flutes are birds.

(5c)　Some roads are snakes.

(6)　Some jobs are birds.

(7)　Some birds are robins.

(8)　Some birds are apples.

Glucksberg et al.は以下のような結果を得た．すなわち，隠喩として理解され

る文に対する判断時間は，“混ぜられた隠喩”の文に対する判断時間およびクラス包含関係になく隠喩としても理解できない文に対する判断時間よりも統計的に有意に遅かった．しかし，“混ぜられた隠喩”の文の判断時間とクラス包含関係になく隠喩として理解できない文の判断時間との間には有意な差はなかった．さらに，これら3種類の偽と判断される文に対する判断時間は，真と判断される文字通りの意味の文よりも有意に遅かった．

彼らはこの結果を次のように解釈した．すなわち，隠喩として理解できる文を偽と判断するのに要する時間が，偽と判断される他の2種類の文に対する判断時間よりも有意に遅くなった理由は，隠喩として理解できる文に対し被験者が文字通りの意味での真偽判断を行おうとしても，その隠喩的な意味で理解することを被験者自身が意識的に抑制することができず，その“自動的な”隠喩的理解が文字通りの意味の真偽判断を遅せたためと考えた．そして，文の隠喩的な理解も，文字通りの理解と同じように即座に生じるから，隠喩的に理解する仕方と文字通りに理解する仕方とは同一であると結論づけた．

加えて，Glucksberg et al.(1982; 実験Ⅲ)は“some”の代わりに“all”を用い，上述のものと同じ実験を行い同様の結果と結論を得た．

6.2.1.2 文脈が先行する場合 Gildea and Glucksberg(1983)は，ターゲット文に先立つ文脈を1文に保ち文脈とターゲット文との間の意味関係を変え，文字通りの理解と隠喩的理解とが同じ過程であるか否かを調べた．彼女らは(9a)または(9b)の形式のターゲット文を同数ずつランダムに被験者に提示した．そして，ター

---

3) 主語の指示するカテゴリーが述語の指示するカテゴリーに含まれる文字通りの意味の文のうち，半数は述語のカテゴリーが主語のカテゴリーの典型事例であるものに，残り半数は典型的でない事例にされた．この処置は，過去の多くの文検証課題(sentence verification task)を行っている研究(たとえば，Smith, Shoben, & Rips, 1974)においてそれらの被験者が行っている処理と同じ処理を，彼らの被験者が行っていることを確認するために行われた．実際，従来の文検証課題を行っている研究とまったく同じように，述語のカテゴリーが典型事例の文の方が典型的でない事例の文よりも有意に早く真であると判断された．

ゲット文が文字通りの意味で真か否かを，すなわち主語Aの指示するカテゴリーが述語Bの指示するカテゴリーに含まれるか否かを判断するよう被験者に要求した．ターゲット文の文頭の“some”と“all”の違いは判断時間に影響しない(Glucksberg et al., 1982)ので，“some”をもつ(9a)の形式の文と“all”をもつ(9b)の形式の文とが同数ずつ混ぜられた．

(9a)　Some A's are B's. (A, B: 名詞)
(9b)　All A's are B's. (A, B: 名詞)

実験では主語Aと述語Bとの意味関係の異なる6種類の文を提示した．すなわち，隠喩文ここでは主語のカテゴリーと述語のカテゴリーとがクラス包含関係にはないが隠喩として理解される文，隠喩文の述語をそのグループの文の間でランダムに入れ替えた“混ぜられた隠喩”の文，隠喩文の述語の隠喩的な語義とその文の述語とが意味上関係する文，隠喩文の述語の文字通りの語義とその文の述語とが意味上関係する文，および，コントロール文，フィラー文，であった．たとえば，隠喩文としては(10)のような文を用意し，また，隠喩文の隠喩的な語義と関係する文としては(11)のような文を，さらに，隠喩文の文字通りの語義と関係する文には(12)のような文を用いた．

(10)　All marriges are iceboxes.

(11)　Some people are cold.

(12)　Some winters are cold.

このうち，述語の語義に関係する2種類の文は，隠喩文およびコントロール文の前に，また，フィラー文はランダムに置いた．したがって，隠喩文およびコントロール文の提示の仕方は，述語の語義に関係する2種類の文のうちの一つを先に提示するか，フィラー文を先行提示するかの3通りのうちのいずれかであった．

その結果，Gildea and Glucksbergは，述語の語義に関係する文をターゲットの

隠喩文の前に提示する場合，隠喩的語義，文字通りの語義のいずれの意味で関係していても，フィラー文を提示する場合よりも，隠喩文に対する文字通りの意味で偽と判断する時間が統計的に有意に長くかかることを見いだした．そして，前節で述べたGlucksberg et al.(1982)と同様に，文を文字通りに理解する過程と隠喩的に理解する過程とは多くの下位過程を共有しあっていると結論した．

この実験と同様の結果が，文の読解時間(reading time)を測度として採った実験によっても得られている(Shinjo & Myers, 1987).

6.2.2 段階性を検討した従来の実験的研究

段階モデルに従えば，同一の文でありながら文脈・状況次第で隠喩的にも文字通りにも受け取り得るような文は，それを隠喩的意味に導く文脈の下に置かれ隠喩的に理解されるときの方が，文字通りの意味に導く文脈下に置かれ文字通りに理解されるときよりも，理解するのに時間がかかる，という予測が成り立つ．この予測が正しいか否かが検証されてきている．

6.2.2.1 隠喩文理解に及ぼす文脈効果　Ortony, et al.(1978; 実験1)は，(13)のような，文脈次第で隠喩としても文字通りにも理解し得る文をターゲット文として用い，隠喩として解釈させる文脈下でのその文の読解時間と文字通りに理解させる文脈下での読解時間を比較した．

(13)　Regardless of the danger, the troops marched on.

彼らは，ターゲット文の前に被験者に提示する文脈に関し，異なる四つの条件を設けた．第一の条件として，彼らは，ターゲット文を被験者に隠喩的に解釈させる文の数の多い長い文脈を用い，第二の条件として，第一の条件の文脈の一部を省いたもの(これも隠喩的解釈に導く)を用いた．また，第三の条件として，ターゲット文を文字通りの意味に解釈させる長い文脈を，さらに第四の条件として，第三の条件の文脈の一部(文字通りの解釈に導く)を使った．たとえば，彼らは，(13)の文に先立つ第一の条件の文脈として(14)を使った[4)].

(14)　The children continued to annoy their babysitter.

She told the little boys she would not tolerate any more bad behavior.
Climbing all over the furniture was not allowed.
She threatened to spank them if they continued to stomp, run, and scream around the room.
The chilren knew that her spankings hurt.
(子供たちはベビーシッターを悩ませ続けた．彼女はその小さな少年たちにこれ以上悪いことをするのは許さないよと言った．手あたり次第家具の上に登るのも許されなかった．彼女はドシンドシンと音をさせて部屋を走り騒ぎ続けたら叩くよと脅かした．子供たちは彼女の平手打ちが痛いことをよく知っていた．)

第二の条件には，これらの文のうちの最初の1文だけを文脈として用いた．また，(13)の文に先立つ第三の条件の文脈として彼らは(15)を使った．

(15) Approaching the enemy infantry, the men were worried about touching off landmines.
They were very anxious that their presence would be detected prematurely.
These fears were compounded by the knowledge that they might be isolated from their reinforcements.
The outlook was grim.

---

4) (14)の文脈下で，(13)の文は，“文の隠喩(sentential metaphor)”として，すなわち文全体が隠喩を表すものとして理解される．Ortony et al.(1978)の実験では，ターゲット文が隠喩として解釈される場合はすべて文の隠喩として受け取られるようになっている．しかし，たとえターゲット文が，“述語的隠喩(predicate metaphor)”として，すなわち文の述語だけが隠喩として解釈されるようになっていても，後の議論はそのまま成り立つ．

(敵の歩兵に近づくにつれ，男たちは地雷を爆発させるのではないかと心配した．彼らがずっと前に見つかっているであろうことがとても不安だった．彼らの援兵たちから隔たっているかもしれないと分かってこの恐怖はいっそう大きくなった．その見通しはぞっとさせるものだった．)

第二の条件と同様，(13)に対する第四の条件には(15)の最初の1文だけを用いた．

彼らは，ターゲット文の読解時間を，文の数の多い文脈下に置かれた第一の条件と第三の条件との間，文の数の少ない文脈下に置かれた第二の条件と第四の条件との間で比較した．その結果，第一の条件と第三の条件との比較では，第一の条件におけるターゲット文の読解時間も第三の条件における読解時間もともに2秒足らずであり，それらの間に統計的に有意な差は認められなかった．すなわち，特定の解釈に導く充分な量の文脈がある場合には，ターゲット文を隠喩的に理解するのに必要な時間も文字通りに理解するのに必要な時間も同じであった．対照的に，第二の条件と第四の条件との比較では，第二の条件におけるターゲット文の読解時間がおよそ4.5秒であったのに対し，第四の条件における読解時間はおよそ3.5秒であり，第二の条件の場合の方が第四の条件の場合よりも有意に長かった．すなわち，特定の解釈に導く文脈が充分与えられていない場合には，ターゲット文を隠喩的に理解するのに要する時間は文字通りに理解するのに要する時間よりも長くなる．

Ortony et al.(1978)は，この結果から次のように結論した．段階モデルは，ターゲット文が文脈・状況から単離されて与えられるかまたはごく少数の文からなる文脈しか与えられない場合に限り，その文の隠喩的理解を妥当に説明する．しかし，特定の解釈に導く充分な量の文脈下にターゲット文が置かれた場合には，段階モデルはその文の隠喩的理解をうまく説明しない．Ortony et al.のこの結論は，Ortony et al.と同様の材料と同じ手続きを用いた追試によって確かめられた(Inhoff et al., 1984)．

こうした隠喩文理解に及ぼす文脈の量的な効果に関する論争は決着がつけられられたように見えたが実際にはそうではなかった．Janus and Bever(1985)は，Ortony et al.(1978)において用いられた文脈および隠喩文をそのまま材料として用い，Ortony et al.(1978)と同様の手続きを用い，Ortony et al.の実験を追試

した．ただし，Ortony et al.とは異なり，文脈および隠喩文を句(phrase)ごとに分け文全体の読解時間ではなく句の読解時間を測定した．その結果，Janus and Beverは，Ortony et al.の結果とは違い，特定の解釈に導く充分な量の文脈下に置かれている場合であっても，ターゲットの句(主部)を隠喩的に理解するのに要する時間(1材料1被験者あたりの平均で1160ms)の方が文字通りに理解するのに要する時間(平均960ms)より有意に長くかかることを見いだした．

Janus and Bever(1985)の研究は，文脈・状況次第で隠喩的にも文字通りにも理解し得る表現を，隠喩的に処理するのにかかる時間と文字通りに処理するのに要する時間との差は非常にわずか(200ms程度)であり，そのわずかな差を検出できるためにはより精度の高い実験測度を使わなければならないことを示している．

6.2.2.2 隠喩文の熟知度(慣習性)の効果　Blasko and Connine(1991, 1993)は，(16)((2)と同じ)の名詞述語文形式の隠喩文の熟知度(familiarity)，すなわち主語Aと述語Bとの間の隠喩的な意味関係をどの程度よく知っているかをあらかじめ別の被験者に評定させ熟知度の高い隠喩文と低い隠喩文とに分けておき，それぞれについて，Searle(1979a, 1979b)が主張するように理解が段階的に行われるか否かを調べた．彼らの言う熟知度は，慣習性(conventionality)あるいは慣用性(idiomaticity)とほぼ同じ意味であると考えられる．

(16)　　A is B.（A, B: 名詞，または，名詞句）

彼らは様相間プライミング法(cross-modal priming method)を用い次のような手続きの実験を行った[5]．被験者は“A is B”形式の隠喩文の埋め込まれた複文をヘッドホンを通して聞かされる．述語Bがプライムに相当している．たとえば刺激文(17)のような文を聴覚的に提示される．下線部が隠喩文の例である．

(17)　　Jerry first knew that <u>loneliness was a desert</u>
　　　　when he was still very young.
　　　　(まだずっと幼かったとき，ジェリーは孤独が砂漠であることを最初に知った．)

隠喩文には熟知度の高いものと低いものとが半数ずつあった．そして，実験1では刺激文の提示直後に，また実験2では刺激文の提示から300ms後に，コンピュータディスプレイ上に，ターゲットとして，隠喩文の述語Bの隠喩的な語義を表す単語，文字通りの語義を表す単語，述語Bとは意味的関連のないコントロールの単語のいずれかを250msの間提示される．たとえば，刺激文(17)を聴覚的に提示される場合，隠喩的な語義のターゲット「isolate(隔離されたもの)」，文字通りの語義のターゲット「sand(砂)」，コントロールターゲット「mustache(口ひげ)」のいずれかが視覚的に提示される．被験者は，ターゲットに対し語彙性判断課題(lexical decision task)を行うよう求められる．すなわち，ターゲットが単語であるか非単語かをできるだけ早く決定するよう要求される．

Blasko and Connineは刺激文の提示直後にターゲットが提示された実験1において以下の結果を得た．熟知度の高い隠喩文が提示された場合には，隠喩的な語義のターゲットも文字通りの語義のターゲットもともにコントロールターゲットより有意に早く単語であると判断された．一方，熟知度の低い隠喩文の提示された場合には，文字通りの語義のターゲットは熟知度の高い隠喩文の場合と同様にコントロールよりも有意に早く判断されたものの，隠喩的な語義のターゲットは前とは逆にコントロールターゲットより有意に遅く判断された．

刺激文の提示から300ms後にターゲットが提示された実験2でも実験1とほぼ同様な結果が見いだされた．ただし，実験1とは異なり，熟知度の低い隠喩文の提示された場合，隠喩的な語義のターゲットはコントロールターゲットより判断時間そのものは遅かったが，その差は有意差を見いだせるほど大きくはなかった．

刺激文の提示直後にターゲットが提示されたとき(実験1)ですら，熟知度の高い隠喩的な語義のターゲットは，文字通りの語義のターゲットと同程度に早く判断

---

5) 6.3.3で言及するように，様相間プライミング法は多義語の一義化の過程を調べた研究において一般的に用いられてきている方法である．Swinney(1979)は，様相間プライミング法の利点として，プライムの単語とターゲットの単語との意味関係を被験者に意識させることなく，ターゲットの単語の語彙性判断を行わせることができる，という点を挙げている．

された．このことから，Blasko and Connineは，慣習性の高い隠喩文は文字通りの意味の文と同じように理解されるとした．そして，それゆえ熟知度の高い隠喩文の理解過程に関しては，その隠喩的意味が段階的に処理されるとするSearle(1979a，1979b)の段階モデルは誤りであると結論づけた．熟知度の低い隠喩文の理解過程に関しては，段階モデルの段階的理解の説明が妥当にあてはまるか否かについて彼らは何も触れていない．だだ，彼らは，別の実験(実験3)を行い，たとえ熟知度の低い隠喩文であっても，それが適切な(apt)ものであれば，熟知度の高い隠喩文と同程度に早く理解される可能性を示唆している．

6.2.3 隠喩文理解過程における単語認知

前節で述べたBlasko and Connine(1991，1993)の実験結果のうち，熟知度の高い隠喩文に関するものは，多義語の一義化(disambiguation)のプロセスを調べた単語認知研究の知見と類似している．多義語の一義化のプロセスは，二つの段階からなる(Kintsch，1988)．その第一段階は，多義語のすべての語義が活性化されている段階であり，多義語の提示開始直後50msから350ms程度の間に相当する．たとえば，多義語“bank”は，「銀行」と「土手」という互いに無関係な文字通りの語義をもち，文脈(あるいは多義語を含む文)がいずれの語義に受け取らせるようになっていても，それら二つの語義が活性化される．第二段階は，活性化されたあらゆる語義のうち，文脈に合う語義が選択され活性化され続け，合わない語義はその活性化が抑制される段階である．多義語の提示開始から350msから500ms程度の間がそれにあたる．たとえば，文脈がそれを「銀行」の語義に導いていれば，その「銀行」の語義だけが選択され活性化され続ける．

熟知度の高い隠喩文の述語は，文字通りの語義と隠喩的な“語義”という二つの語義をもつ一種の多義語と考えることができるかもしれない．彼らの実験において設定されたプライム(隠喩文の述語B)の提示開始からターゲットの提示開始までの時間間隔0ms，300msは，多義語の一義化のプロセスにおける，プライム(多義語)のあらゆる語義が活性化されている段階に相当している．したがって，彼らが行ったものと同じ実験手続きを用い，刺激文の提示開始からターゲットの提示開始までの時間間隔を350msから500msの間の時間に設定した場合，熟知度の高い隠喩文に対する結果は，彼らの結果とは少し異なっていたかもしれない．すなわち，

隠喩的な“語義”を表すターゲットに対する語彙性判断は彼らの場合と同じようにコントロールターゲットよりも早いが，文字通りの語義を表すターゲットに対する語彙性判断は，その文字通りの語義が文脈とは合わないため，コントロールに対する語彙性判断より遅くなるであろう．

この予測が正しいとすると，Blasko and Connineの実験結果は，多義語が段階的に認知されるのと同じ意味で，慣習性の高い隠喩文の述語が段階的に認知される，ということを示していることになる．その第一段階は，隠喩的な“語義”，文字通りの語義の違いに関わらず述語のあらゆる語義が文脈・状況とは無関係に活性化されている段階である．(16)の形式をもつ慣習性の高い隠喩文の述語は互いに意味的な関係のない複数の語義をもつ．たとえば，(16)の形式をもつ慣習性の高い隠喩文“loneliness was a desert”(6.2.2を参照のこと)の述語“desert”は，「砂漠」という本来の語義の他に，「むなしい」，「荒涼としている」などといった隠喩的“語義”をもつかもしれない．

6.3 慣用句の理解過程との関係

“loneliness was a desert”のような慣習性の高い隠喩文は，一種の慣用的表現として理解されると考えられる．そこで，慣用句の理解過程，およびそれと隠喩文の理解過程との関係に言及しておくことにしよう．

慣用句の意味は，それを構成する個々の単語の知識と統語規則をもとに合成(compose)されるものではあり得ない．たとえば，“kick the bucket”の「死ぬ」という意味は，この慣用句を構成する個々の単語の意味から合成される意味とは異なる．こうした慣用句の中には，統語規則に合わない“単語の連なり”でしかないものすら存在する(Gibbs, 1984)．たとえば，“by and large(概して)”，“trip the light fantastic(踊る)”などがそれである(Wilensky, 1989)．

文脈次第で文字通りの意味にも慣用句の意味にも受け取り得るような表現(たとえば，“let the cat out of the bag[ネコをバックから出す，秘密をあばく]”)は，それを慣用句の意味に受け取らせる文脈下で慣用句の意味で解釈する場合の方が，文字通りの意味に受け取らせる文脈下で文字通りの意味に解釈する場合よりも，一貫して読解時間が短い傾向がある(Ortony, et al., 1978; 実験2)．この

実験結果は，慣用句の意味をもつものとして解釈する場合には，単一の語彙項目を検索すると考えれば説明され得る．事実，慣用句は単一の語彙項目として登録されており，単一の単語と同様に処理されるという実験的証拠もある(Swinney, 1979)．

文脈によって文字通りの意味にも受け取ることのできる慣用句は，慣用句の意味と文字通りの意味のいずれかで解釈され得るという点で多義語と同じである．多義語の一義化の過程を調べた研究の示してきている先の知見(6.3.3を参照のこと)を，こうした慣用句が慣用句の意味に理解される場合の理解過程に適用すれば次のようになるであろう．慣用句は複数の単語からなっているから，慣用句を構成するすべての単語が入力され，それが慣用句として認識される以前に，慣用句をなす単語に対して，それら単語の語義を活性化させる処理がすでに行われている．慣用句が慣用句と認識された時点では，その慣用句を構成する各単語の語義の複数の組み合わせの表象とその慣用句としての意味の表象が活性化されている．慣用句と認識されると即座に，単語の語義の組み合わせの表象はすべて抑制される．

慣習性の高い隠喩文も，一種の慣用的表現として，文全体が単一の語彙項目として長期記憶に登録されているであろう．それゆえ，そうした隠喩文は，文全体に対する単一の語彙項目が検索され理解されていると考えられる．

6.4 段階モデルの妥当性

一般に，“A is B”の名詞述語文形式をとる文の理解過程は大きく言って次の二つの段階からなると言える．第一段階は，主語と述語のあらゆる意味が活性化される段階である．この段階では，主語“A”，述語“B”の意味「A_1」，「A_2」，．．．および「B_1」，「B_2」，．．．が，言語知識(liguistic knowledge)の範囲内から引き出され，「A_1 is B_1」，「A_1 is B_2」，．．．というような表象が作られ，それらが有意味な意味関係かどうかが調べられる．“A”，“B”の意味がそれぞれ引き出される順序は主としてそれら意味の慣習性の程度，すなわち個人的な使用頻度によるであろう．第二段階は，もし有意味な意味関係をとる表象があった場合に，それら表象の中から，文脈・状況に合うものが選択される段階である．

もし有意味な意味関係をとるものがなければ，何らかのさらなる処理を施す段階が必要になる．

上の二つの段階は，Searleの段階モデルで言う第一段階，すなわち“A is B”の文字通りの意味「A is B」を計算する段階に相当している．Searleの段階モデルの第三段階，すなわち「A is C_1，C_2，C_3…」を計算する段階(6.1.2を参照されたい)では，第8章で説明するような“顕著性の不均衡(salience imbalance; Ortony, 1979)”を計算して「A is C_1，C_2，C_3…」を決定すると考えられる．ただし，この“顕著性の不均衡”の計算に要する時間は，慣習性が高くなるにつれて，読解時間のような従来の実験で採られてきた実験測度では検出することができないほど小さくなると考えられる．そして，隠喩文の慣習性がある程度高くなると，顕著性の不均衡の計算は行われなくなり，過去の顕著性の不均衡の計算結果が一つの語彙項目として登録されるようになる．それゆえ，慣習性の高い隠喩文は慣用句と同じように理解される．そうした慣習性の高い英語の隠喩文の例が(18a)である．この文例はGlucksberg and Keysar(1990)から採った．

(18a)　My surgeon was a butcher.

(18b)　A is a butcher.（A: 名詞，または名詞句）

Glucksberg and Keysar(1990)によれば，(18b)のような言いまわしは「仕事が雑で無能な人」を表すために使われる慣習性の高い隠喩文であるという．そして，その「仕事が雑で無能な人」という意味は，英語の辞書の“butcher”の項に一つの語義として登録されている，という．手元にある英和辞典(リーダーズ英和辞典, 1984)で“butcher”の項を引いてみると，1番目の項目に「肉屋；屠殺者」とあり，さらに続けて1番目の項目に，その語義から派生した俗語の語義として「へたくそな外科医[床屋]；へぼ職人」とあった．このことは，“a surgeon is a butcher”という言い方そのものが慣習的に使われることに加え，さらに“butcher”が仕事が雑で無能などのような人に対しても慣習的に使われるようになっていることを示している．このように考えると,6.2で述べてきた様々な実験結果がSearle(1979a, 1979b)の段階モデルで説明できるように思われる．

第7章　間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデル（展望論文）

本章では，間接的発話行為として機能する文の理解過程を取り上げる．間接的発話行為として機能する文の理解過程についても，隠喩文の理解過程と同様な段階モデルが提案されてきている(Searle, 1975)．7.1では，そうした間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルを紹介し，そこから導かれる仮説を述べる．7.2では，間接的発話行為として機能する文の理解過程では，間接的な“発話の力(illocutionary force)”を計算するために発話状況に関する知識が参照されることを説明する．7.3では，間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルの妥当性を検討した過去の実験的研究を紹介する．7.4では，間接的発話行為として機能する文の理解過程を隠喩文理解過程と比較・考察する．

7.1 間接的発話行為として機能する文の理解の段階モデル

Searle(1975)によれば，間接的発話行為として機能する文の理解も，隠喩文の理解とまったく同様に，三つの処理段階からなる，という．すなわち，問題の文の文字通りの意味が計算される段階，その文字通りの意味が見かけ上会話の原理に違反するか否かが判定される段階，間接的な“発話の力”が計算される段階，の三つの段階である(発話の力に関しては7.2で述べる)．ただし，Searleの考えでは，隠喩文の理解と間接的発話行為として機能する文の理解との間には次のような違いがある．隠喩文の理解では，聴者が最終的に受け取る意味の中に“文字通りの意味”は含まれない．これに対し，間接的発話行為として機能する文の理解では，聴者の受け取る“意味”の中には，文字通りの意味(およびその文字通りの意味から生じる直接的な発話の力)と間接的な発話の力の両方が含まれる(Searle, 1979a)．

(1a)　何時か分かりますか?
(1b)　Can you tell me the time?　(Clark & Schunk, 1980, より)

たとえば，彼に従えば，(1a)や(1b)は，時間を教える能力が聴者にあるか否かを尋ねる疑問の(直接的な発話の力を生じさせる)文字通りの意味と，時間を教えてほしいという要請を示す間接的な力の両方の“意味”をもつ，ということになる．

第6章で詳述したように，隠喩文の理解の段階性を検討するため，様々な実験的研究が行われた．これと同様に，間接的発話行為として機能する文の理解に対しても，Searle(1975)の言うように，その理解が段階的に行われるかどうかに関し実験的研究が行われてきている(それらのうちのいくつかを7.3で紹介する)．隠喩文の理解過程の場合，段階モデルを支持する立場，すなわち問題の文の文字通りの意味を計算した後その意味とは異なる隠喩的意味を計算するという見解をとる立場，および，段階モデルを支持しない立場，すなわち問題の文の隠喩的意味を直接計算するという見解をとる立場，の二つがあった．これと同様に，間接的発話行為として機能する文の理解過程の場合にも，次の二つの見解が考えられる．

[A]　問題の文の文字通りの意味を計算した後，その意味(から生じる直接的な発話の力)とは異なる間接的な発話の力を計算する．

[B]　問題の文の間接的な発話の力を直接計算する．

本節の初めに述べたように，間接的発話行為として機能する文は，その文字通りの意味と間接的な発話の力の両方が意図されているものとして受け取られる(Searle, 1979a)，とされる．したがって，[A]，[B]に加え，間接的発話行為として機能する文の理解の場合には，次の[C]の見解もあり得ることになる(Gibbs, 1982)．

[C]　問題の文の文字通りの意味および間接的な発話の力とを同時に計算する．

7.2 文理解に関わる2種類の“慣習性”

6.2で述べた隠喩文の理解や6.3で触れた慣用句の理解と同様に，間接的発話行為として機能する文の理解も，その文の慣習性の程度の違いが影響することが考

えられる．すなわち，間接的発話行為として機能する文も，その文の慣習性が高いほど，文脈・状況のあるなしを問わず，間接的な発話の力をもつ文として早く理解されるようになる．

ただし，間接的発話行為として機能する文の理解に影響を及ぼすその文の慣習性と，隠喩文の理解に影響するその隠喩文の慣習性とは，どのような種類の知識の慣習性かという点で異なる．根本的に，慣習性とは，発話をどの程度日常的によく使うかの程度を表す概念であった(Clark & Schunk, 1980)．言いかえれば，慣習性は，発話を理解する際に利用される知識の引き出しやすさの程度を示す．当然のことであるが，隠喩文の慣習性の程度に関わり，隠喩文の“意味”を計算するする際に利用される知識は言語知識の範囲内にある．間接的発話行為として機能する文の慣習性の程度に関わり，その文の間接的な“発話の力”を受け取る際に利用される知識は発話状況に関する知識の範囲内にある(Morgan, 1978)．

言語知識の引き出しやすさとしての慣習性に様々な程度があるのと同様に，発話状況の知識の引き出しやすさとしての慣習性にも様々な程度がある．たとえば，文例(2a)，(2b)は，それぞれ7.1で挙げた文例(1a)，(1b)よりも，発話状況の知識の引き出しやすさとしての慣習性が低い．したがって，(2a)，(2b)を，それぞれ(1a)，(1b)と同じ“時間を尋ねる要請”の間接的な力をもつものとして受け取ることができるためには，一定の解釈に導く文脈や，そうした文脈中の発話を妥当に産出・理解し得る話者・聴者の社会的関係などをうまく想定する必要がある．

(2a)　遅いね．

(2b)　It's late, isn't it.　(Clark & Schunk, 1980, より)

もし7.1で述べた[A]または[C]の見解が妥当であるなら，間接的発話行為として機能する文を理解する際には，その文字通りの意味を計算するために特定の言語知識を使い，間接的な発話の力を計算するために一定の発話状況に関する知識を使うということになる．もし[B]の見解が妥当であるなら，間接的な発話の力を計算するために発話状況に関する知識を理解に使うということになる．

7.3 間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階性の検討

すでに述べた通り，隠喩文の理解過程の段階モデルが妥当かどうかを検討するため数多くの実験的研究が行われた．これと同様に，間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルが妥当かどうかを検討するため多くの実験的研究が行われてきている．従来の実験的研究の中に，Searle(1975)の段階モデルに沿った[A]の立場を支持する研究はほとんど見あたらない[1)]．問題の発話の間接的な発話の力を直接計算するという[B]の見解を支持する研究と，文字通りの意味と間接的な発話の力の両方を同時に計算するという[C]の見解を支持する研究のいずれかに分かれる．

Gibbs(Gibbs, 1979, 1981, 1982, 1983, 1984, 1986; Gibbs & Mueller, 1988)は，一貫して[B]の見解を支持する立場を主張してきている．たとえば，Gibbs(1983; 実験1)は，間接的発話行為として機能する慣習性の高い文について,Searle(1975)の主張する段階モデルが正しいかどうかを調べた．彼は次の2種類の文章を用いた．第一の種類の文章は，(3)のように，問題の文(下線部：文章中の最後の文．下線は著者が付した)を間接的な発話の力を伝える文として理解させる文章である．

(3) Mrs. Norman was watching her kids play in the backyard.
One of the neighbor's children had come over to play.
But Mrs. Norman's kids refused to share their toys.
This upset Mrs. Norman.
She angrily walked outside and said to one of her children.
<u>Can't you be friendly?</u>
(ノーマン夫人は彼女の子供たちが裏庭で遊ぶのを監視していた．近所の子供の一人が遊びにやってきていた．しかし，ノーマン夫人の子供たち

---

1) 例外的に，Clark and Lucy(1975)は[A]を支持する実験結果を得ている．しかし，後で触れるように，Clark自身が，後に[A]の立場を放棄し[C]の立場を支持するようになった(Clark, 1979).

はおもちゃを使わせるのを拒んだ．このことがノーマン夫人のやきもきさせた．彼女は怒って表に歩いていき，彼女の子供たちの一人に言った．<u>仲よくできないの?</u>)

第二の種類の文章は，(4)のような，間接的な発話の力を伝える文と同一の文(下線部．下線は著者による)を文字通りに理解させる文章である．

(4)　Rod was talking with his psychiatrist.
He was having lots of problems in establishing relationships.
"Everyone I meet I seem to alienate," Rod said.
"I just turn very hostile for no reason," he continued.
The shrink said, "<u>Can't you be friendly?</u>"
(ロッドは彼の精神科医と話していた．彼は人間関係を確立させる際に多くの問題をもっていた．"出会う人みんなを僕は疎遠にしているようだ"とロッドは言った．"僕は訳もなくとても敵対的になるんだ"と彼は続けた．精神科医は言った，"仲よくできないの?")

Gibbsは，文章中の各文を1文ずつ被験者に提示し，各文の読解時間を測定した．その結果，一定の文脈下で問題の文を間接的な発話の力を伝えるものとして受け取る場合の方が，特定の文脈下で問題の文を文字通りの意味をもつものとして理解する場合よりも読解時間が短くなる傾向があることを示した[2)]．

このGibbの実験結果は，6.3で述べた慣用句の理解に関するOrtony et al.(1978)のそれとよく似ている．慣習性の高い慣用句がそれ自体一つの語彙項目として扱われるように，間接的発話行為として機能する慣習性の高い文も文全体が単一の語彙項目のように扱われると考えられる．それゆえ，その文が間接的な発話の力をもつものとして受け取られる場合の方が，文字通りの意味をもつものとして受け取られ複数の語彙項目の集まりとして扱われる場合よりも理解に要する時間が短くなると考えられる．

慣用句の理解において問題とされる慣習性は言語知識の利用しやすさの程度であると考えられるのに対し，7.2で触れたように，間接的発話行為として機能する

文の理解において問題とされる慣習性は，発話状況に関する知識の利用しやすさの程度である．言語知識の引き出しやすさとしての慣習性は，特定の仲間うちで話される俗語の慣習性や敬語の慣習性のようなものを除けば，特定の表現の個人

---

2) 実験では，同時に，第一，第二のいずれかの文章の後に続き，(i)のような，文章中の最後の文の間接的な発話の力と同じ発話の力を直接的に伝える文，または，(ii)のような，最後の文の文字通りの意味と同じ意味を伝える文，または，(iii)のような，最後の文のいずれの“意味”とも無関係な意味をもつ文のいずれかが提示された．そして，文章中の最後の文の読解時間の他に，それらの文のいずれかに対し“言いかえ判断(paraphrase judgement)”を行うのに要する時間が測定され，読解時間の結果とほぼ同じ傾向が見いだされた．

(i) Please be friendly to other people.
(ii) Are you able to act friendly?
(iii) Running is excellent for the heart.

言いかえ判断とは，(i)，(ii)，(iii)のように，文章が提示された直後に提示された文の解釈が，文章の最後の文(間接的な発話の力をもつものとして解釈されるかまたは，文字通りの意味をもつものとして解釈される)の解釈と同じかどうかをできるだけ早く判断するという，Gibbs独特の課題である．

間接的発話行為として機能する文の理解の途中で，その文字通りの意味の表象が活性化されているとしても，それが活性化されている時間は非常に短く問題の文を読み終えた時点では，その文字通りの意味の表象はすでに抑制されていると考えられる．言いかえ判断において，被験者が心内で行っている作業は，文章中の最後の文をまさに理解している最中に行っている作業ではなく，その最後の文を処理し終えた後に行っている作業であることになる．したがって，言いかえ判断から得られた結果は[B]の見解を間接的に立証しているにすぎない(Dascal，1987，1989)．問題の最後の文の理解過程を直接的に反映するのは，その文の読解時間の方である．

的な使用頻度の多寡とみなすことができる．これに対し，発話状況に関する知識の引き出しやすさとしての慣習性は，使用頻度以外の要因によっても決まる．そうした要因の中には，話者・聴者の社会的関係や親密度であるとか，話者・聴者のいる場所がどの程度フォーマルな雰囲気をもったところであるかとか，あるいは，話者がそうした社会的関係や居場所のフォーマルさを踏まえ，どの程度“丁寧(polite)”に発話しようとするかといったようなことがらが含まれる(Clark & Schunk, 1980; Gibbs, 1986).

ただし，発話状況に関する知識の慣習性が高い場合には，上のような使用頻度以外の要因はさほどその文の慣習性に影響しなくなるかもしれない．そういった，間接的発話行為として機能する，極端に慣習性の高い発話の例が，“How do you do?”のような挨拶表現である(Clark & Schunk, 1980; Gibbs, 1986). 間接的発話行為として機能する，慣習性の高い文は，その高い使用頻度によってその慣習性が決まるという点で，慣用句と同じであるかもしれない．それゆえ，そうした文が慣用句と同じように理解されると考えるのは自然ということになる．

Gibbs(1986)は，間接的発話行為として機能する発話の慣習性の程度を決定づける要因が，その間接的発話行為を遂行する聴者の能力や遂行しようとする意欲(willingness)などといった，間接的発話行為を実行する際に聴者が抱えるかもしれない障害(obstacle)を，その発話によって聴者が特定できる程度であると考えた．そして，聴者が潜在的にもっているそうした障害を聴者が特定できる程度の高い発話ほど，間接的な発話の力をもつものとして早く理解できることを実験によって示した．Gibbsによれば，聴者は，間接的発話行為を遂行しようとする際の障害を最もよく特定できる文形式の知識を，起こり得る発話状況の種類ごとに有しており，そうした文形式の知識を，慣用句から慣用句全体に対する単一の言語知識を引き出すのと同じやり方で引き出す，という．たとえば，障害が，間接的発話行為を遂行する聴者の能力にあれば，話者はCan you...?という文形式を使い，直面することになる障害を聴者に正確に特定させようとする．彼は，聴者がそうした文形式の知識を個別的な発話状況に関する知識と結びつけているとし，(発話状況に関する知識の)慣習性の程度をその結びつきの強さとみなした．そして，それゆえ，どのような慣習性の程度をもった間接的発話行為として機能する文を理解する場合であっても，聴者が問題の発話の文字通りの意味を計算する必要は必

ずしもないと，すなわち[B]が支持されるとした．

一方，Gibbsとは異なり，Clark(1979, Clark & Schunk, 1980, 1981)は，間接的発話行為として機能する発話を[B]の過程をたどって理解する場合が，挨拶表現のような極端に慣習性の高い発話を理解する場合に限られると主張する．そして，それ以外の慣習性をもった間接的発話行為として機能する発話については，おしなべて[C]の過程を経て理解しているとする．Clark and Schunk(1980)は，間接的発話行為として機能する発話の“丁寧さ”の程度に応じ，被験者がその発話と同じ程度の丁寧さをもった返答を妥当な返答と判断することを見いだした．そして，被験者が丁寧な返答を行うためには，間接的発話行為として機能する発話の間接的な発話の力だけでなく，文字通りの意味にも注意を向け続ける必要があるから，そもそも間接的発話行為として機能する発話を，間接的な発話の力および文字通りの意味の両方をもつものとして理解しているはずであると結論づけた．そうすると，7.1に挙げた[A]，[B]，[C]のうち，間接的発話行為として機能する発話(極端に慣習性の高いものを除く)の理解過程として妥当であるのは，[A]または[C]ということになる．しかし，間接的発話行為として機能する発話の理解では，丁寧さの情報以外にも多くの情報(たとえば，話者の意図のような)を使っており，“文字通りの意味”での処理に丁寧さの情報を使い，その後，間接的な発話の力の計算のためにその他の情報を使うというように，理解において使われる情報を聴者が段階ごとに区別して使っているとは考えられないから，[A]の可能性は考えにくいとした(Clark, 1979)．そうではなく，それら多くの情報を聴者は同時に使っており，その際間接的な発話の力と文字通りの意味とを同時に計算する，すなわち[C]の過程を経て理解すると考えたわけである．

7.4 間接的発話行為として機能する文の理解過程と文字通りの意味

7.3で触れたように，慣習性の高い間接的発話行為として機能する文の理解過程に関するGibbs(1983)の実験結果は，慣用句の理解過程に関する実験結果とよく似ている．このことから，慣習性が高くなるにつれ隠喩文が慣用句と同じように理解されるようになるのと同様に，間接的発話行為として機能する文も慣習性が高くなるにつれ慣用句と類似したやり方で理解されるようになるものと考えられる．

Gibbs(1986)が言うように，発話状況の種類と対応する文形式の知識を人は有しているのかもしれない．そして，問題の慣習性の高い文を受け取るとその文形式を手がかりにして発話状況に関する知識を参照し，間接的な発話の力をもつものとして理解するのであろう．

間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルが妥当か否かを論ずるのは，隠喩文の理解過程の段階モデルの妥当性を議論するのよりも難しいように思われる．その難しさの原因は，間接的発話行為として機能する文の理解に影響を与える(発話状況に関する知識に関わる)慣習性が使用頻度のみでは決まらないという点にある．話者・聴者の社会的関係や親密度，話者・聴者のいる場所の社会的な雰囲気のようなものなど，慣習性の程度に影響する数多くの要因があり得る．段階モデルの妥当性を検討しようとするなら，そうした多くの要因を考慮しつつ，慣習的でないと明確に分かるような言語材料を用いた実験を行わなければならないであろう．

段階モデルの妥当性は別にして，間接的発話行為として機能する文で，明らかに慣習的であるとは言えないものであれば，間接的な発話の力だけでなく，その文字通りの意味も計算されるのではないかと思う．

(6a)　映画を見に行かないか?
(6b)　明日，テストがあるんだ．

たとえば，次の(6a)，(6b)が，比較的親密な二人の若者によって発話されたとする．(6b)は，慣習性の高くない間接的発話行為として機能する．その際，(6b)は映画に行くことを断るという間接的な発話の力をもつと考えられる．(6b)が文字通りに理解されていないとしたら，(6b)の聴者には(6b)の話者が断っているということを分からないのではないかと思う．

第8章　隠喩文理解の基本的なメカニズム
（考察・展望論文）

本章では，隠喩文の解釈が生み出される基本的なメカニズムについて考察する．このメカニズムは，第6章で言及したSearle の段階モデルの第三段階で行われる処理のメカニズムである．名詞述語文形式の隠喩文で言えば，その文字通りの意味「A is B」から，文字通りの意味を超えた意味「A is C_1，C_2，C_3…」を計算する処理のメカニズムである．ここで，C_1，C_2，C_3…は属性である．C_1，C_2，C_3…は，単語“B”の意味Bすなわち“B”の指示する概念Bと結びついた概念である．

以下，8.1では，隠喩的理解とアナロジー推論との関係について触れる．それから，隠喩的解釈が生み出される基本的なメカニズムとして提案されてきているOrtony(1979)の考えを8.2において，また，Glucksberg and Keysar(1990)の考えを8.3において紹介する．それぞれの節の中で，各研究が隠喩文に関する様々な心理現象をどのように説明しているかを詳しく述べる．その後，8.4では，それら二つの研究を比較し，隠喩文理解の認知過程の基本的なメカニズムとしてどのようなものが妥当かを考察する．続いて，8.5では，8.2，8.3で考察したメカニズムを支える知識として，“慣習的比喩”および(慣習的意味としての)“文字通りの意味”があることを述べ，それぞれについて文例を交えながら考察する．8.6では，第6章，第8章を通じ行ってきた隠喩文理解の認知過程についての議論をまとめ，その過程の全体像を描き出すことを試みる．

8.1 隠喩文の理解とアナロジー推論

従来，隠喩的な理解の過程は，アナロジー推論の過程の一種と捉えられることが多かった(たとえば，Gentner，1983; Indurkhya，1987; Miller，1979，など)．こうした研究とは異なり,本節で紹介するOrtony(1979)もGlucksberg and Keysar(1990)も，ともに，アナロジー推論と関係はあるがそれとは異なる隠喩文理解のメカニズムを提案してきている．そこで，彼らの研究を紹介する前に，隠喩文の理解とアナロジー推論との関係について触れておくことにしよう．

隠喩文の理解過程に関する議論の多くは，最も単純な文形式である(1a)，(1b)

の名詞述語文形式の文を考察の対象としてきている.

(1a)　A is B.

(1b)　AはBである. (または, AはBだ.)

“A”, “B”は, いずれも名詞である.

第6章において触れたように, 最も単純化すれば, 名詞述語文を隠喩的に理解することとは, その表層表現“A is B”から隠喩的意味「A is C_1, C_2, C_3…」を計算することとみなすことができる(Searle, 1979a, 1979b). このことは, 表層表現“B”が, 通常指示する概念Bとは異なる何らかの概念C_1, C_2, C_3…を指示していると分かることを意味する.

かりに名詞述語文を隠喩的に理解することが, 2項関係のアナロジー推論であったとしてみよう. すなわち, 名詞述語文の隠喩的な意味が, 「A : A' = B : B'(AのA'に対する意味関係は, BのB'に対する意味関係と同じである)」であったとしよう. こうしたアナロジー推論では, 概念A'および概念B', さらには概念AとA'の意味関係(BとB'の意味関係)を推論する必要がある. それゆえ, アナロジー推論の方が隠喩文理解よりも, 推論しなければならないことがらが多くなる(Searle, 1979a, 1979b).

(2)　A lifetime is a day. (Glucksberg & Keysar, 1990, より)

たとえば, 文例(2)を理解する際には, 最低でも, 「人生(lifetime) : x = 一日(day) : y」が成り立つような, 概念x, y, および「人生」とxとの意味関係(「一日」とyとの意味関係)を推論する必要がある. こうしたアナロジー推論を使い, 読書や会話のような通常の言語活動の中で読んだり聞いたりする隠喩文を理解するとすれば, その推論の数の多さのために, 隠喩文に出くわすたびに読書や会話は中断させられてしまうであろう. Glucksberg and Keysar(1990)は, 一定の解釈に導く文脈のようなものを与えずに, 隠喩文(2)を18人の被験者に提示し, (2)の会話の中での意味を尋ねた. 彼らによれば, 被験者の3/4は「life is short」のような言いかえで答え, 1/4は「夜明け(dawn) : 夕暮れ(dusk) = 誕生(birth) :

老い(old age)」というようなアナロジーの説明をしたという．彼らは，この結果から，少なくとも，日常的なコミュニケーション場面では，人がアナロジー推論を使わず，それよりも効率的な方法で隠喩文を理解しているとした．

しかしながら，Glucksberg and Keysarの実験の被験者の中には実際に課題をアナロジー推論によって答えたものがいた．このことは，日常場面においても，ときには人はアナロジー推論を用いて(1b)の形式の文を理解する場合もあることを示す．ただし，そうした場合とは，クイズかそれに類するものとして“答”を求められるような場合であるとか，あるいは，まったく新奇な隠喩文を理解させられるような場合であるかもしれない．Glucksberg and Keysarの実験においてアナロジー推論を使って答えた被験者は，隠喩文を一定の解釈に導く文脈なしに唐突に与えられたので，質問をクイズ的に捉えていたのかもしれない．

ともあれ，日常的なコミュニケーション場面での隠喩文理解は，アナロジー推論とは異なるように見える．では，そのような隠喩文の理解のメカニズムは具体的にどのようなものであるのか? 次節以降，それを詳しく論じたOrtony(1979)とGlucksberg and Keysar(1990)の研究を取り上げることにする．

8.2 “顕著性の不均衡”の仮説

Ortony(1979)は，名詞述語文が隠喩として理解されることが，その文に“like”のような類似性の標識(marker)の付いた(3a)の形式の文(日本語では，(3b)の形式の文がそれに相当する)が直喩として理解されることと，基本的に同じであり，隠喩としての理解が直喩としての理解の特別な場合であるとみなす．すなわち，双方とも，主語の指示する概念Aと述語の指示する概念Bとの間の“比喩的比較(metaphorical comparison)”として理解される．そして，類似性の標識が明示されていない文を比喩的比較とみなし理解する必要があるという点で，隠喩としての理解は特別である．

(3a)　A is like B. (A, B: 名詞)
(3b)　AはBのようである．（または，AはBのようだ．; A, B: 名詞）

Ortonyの用語法では，比喩的比較は直喩または隠喩を指すが，彼は，すべて直喩文で論を進めている．

Ortonyは，比喩的比較の文の理解過程を，属性(attribute, predicate)のマッチング(matching)の過程と捉える．すなわち，述語の指示する概念Bのもつ“顕著性(salience)”の程度の高い属性C_1，C_2，C_3…を，それらの属性と類似した，主語の指示する概念Aの属性と対応させることによって理解が成立する，と考える．結果的に，対応させられた主語Aの属性の顕著性の程度は(少なくとも一時的に)高められる．ここでいう，“顕著性”とは，ある概念の有する特定の属性が，その概念の他の属性と比べ“目立っている(prominent)”程度あるいは“重要である(important)”程度を指す．次節で詳しく述べるように，比喩的比較として理解される文においては，述語Bの指示する概念の属性の顕著性と，その属性に対応させられる主語の指示する概念Aの属性の顕著性との間に，“顕著性の不均衡(salience imbalance)”が生じていなければならない．すなわち，主語と述語との間で共有される属性の顕著性が述語側で高く，主語側で低い状態になっている必要がある．

Ortonyによれば，ある属性の顕著性は，その属性をもつ個々の概念ごとに相対的に決まる，とされる．Ortony自身の例を引けば，概念「磁石」の属性「鉄でできていること」は，概念「線路」の属性「鉄でできていること」よりも顕著性が高く，また，「消防自動車」の属性「赤い」は，「煉瓦」の属性「赤い」よりも顕著性が高い，ということになる．

8.2.1 比喩的比較の必要条件としての顕著性の不均衡

Ortonyは，(3a)の形式の文の種類を，その文の主語の概念Aと述語の概念Bによって共有される属性群のうちで理解に用いられる属性群の，“述語側から見た顕著性の程度/ 主語側から見た顕著性の程度”の組み合わせにより，次の4種類に区別する．まず，概念AとBによって共有される属性の顕著性が，述語側でも主語側でもともに高い場合がある．これを，Ortonyにならい，概念A，Bの属性の集合を

それぞれ，a，bとし，“high b/ high a”と書くことにする．そして，順に，述語側では高いが主語側では低い場合(high b/ low a)，述語側で低く主語側で高い場合(low b/ high a)，述語側，主語側とも低い場合(low b/ low a)，がある．

“high b/ high a”の組み合わせをとる文は“文字通りの比較(literal comparison)”と呼ばれる．文字通りの比較は，一種の文字通りの意味の文である．Ortonyは，文字通りの比較の例として文例(4)を挙げる．

(4)　Billboards are like placards.

(4)において，主語の概念「billboard(看板)」と述語の概念「placard(プラカード)」とは，「醜い」，「突き出ている」などの属性群を共有している．それら属性群は，「billboard」側と「placard」側の両方において，各々の側の他の属性群の顕著性の程度に比べ，相対的に顕著性が高く，それゆえ“high b/ high a”のパターンをとっていることになる．

“high b/ low a”の組み合わせをとる文は“比喩的比較”と呼ばれる．比喩的比較は直喩か隠喩のいずれかになる．概念Aと概念Bとが共有する属性群が，“high b/ low a”の組み合わせをとるとき，概念AとBとの間に“顕著性の不均衡”が生じていると言う．Ortonyによれば，比喩的比較の例には(5)のようなものがあるという．

(5)　Billboards are like warts.

(5)において，主語「billboard」と述語「wart(いぼ)」とは，たとえば「醜い」，「突き出ている」のような属性群を共有する．「wart」側では，「wart」の他の属性群の顕著性の程度と比べ，それら属性群は相対的に顕著性が高い(high b)．これに対し，「billboard」側では，「billboard」の他の属性群の顕著性の程度との比較において，それら共有する属性群は相対的に顕著性が低い(low a)．その結果，(5)の文は，“high b/ low a”の状態，すなわち主語と述語との間に“顕著性の不均衡”が生じている状態となる．

“low b/ high a”の組み合わせをとる文は“反転された直喩(reversed simile)”と呼ばれる[1)]．反転された直喩は容認されない文となる．Ortonyは，反転された直喩の例として文例(6)を挙げる．

(6)　Sleeping pills are like sermons.

(6)に対しては，主語「sleeping pill(睡眠薬)」と述語「sermon (説教)」とが「眠気を催す」のような属性群を共有している．しかし，“比喩的比較”の顕著性のパターンとは逆に，それら属性群の顕著性は「sleeping pill」側で相対的に高く，「sermon」側で相対的に低くなっている(low b/ high a)．

最後の種類の文は“low b/ low a”の組み合わせをとる．この種類の文も，反転された直喩の場合と同様，受け入れられない文である．(7)のような文がこの種類の文の例であるという．

(7)　Billboards are like pears.

(7)に対しては，主語「billboard」と述語「pear(洋梨)」との間には「ものであること」，「物理的対象であること」などといった抽象的な属性の他には，それらの共有する属性群がない．そして，そうした抽象的な属性群は，「billboard」側でも「pear」側でも相対的に顕著性が低く，“low b/ low a”の状態となる．

こうした分類では，主語の概念と述語の概念とが“共有する属性”の存在することが前提となっていた．Ortonyは，実際には，“共有する属性”のない場合もあると主張し，その具体例として(8)を挙げている．

(8)　Chairs are like syllogisms.

---

1) Ortonyは，直喩文を使って論を進めているので，直喩文の主語と述語を反転した形をとるこの種の文を，“反転された直喩”と呼んでいる．より一般的には，“反転された比喩的比較”と呼ぶべきであろう．

Ortonyによれば，“共有する属性”のない場合も，“low b/ high a”や“low b/ low a”の状態となる場合と同様に，容認され得ない文となる，という．しかしながら，どのような二つの概念に対しても，それらの間に何らかの類似点が必ず存在すると考えられる(Glucksberg & Keysar, 1990)．「chair(椅子)」と「syllogism(三段論法)」とは，たとえば，「役に立つ」というような属性を共有するかもしれない．したがって，Ortonyの挙げた例文(8)は，類似点すなわち“共有する属性”が極端に見つかりにくいだけで，実際には“low b/ low a”の状態となる場合であると考えられる．

Ortonyは，上の4種類の文が，概念Aと概念Bとの間に感知される類似性の程度において異なっている，と主張する．類似性の程度は，概念AとBそれぞれが，互いに共有し合う顕著性の高い属性を数多くもつほど高くなる．また，主語である概念Aは既知情報と，述語である概念Bは未知情報として受け取られる傾向があるから，Bの属性の顕著性の方がAの属性の顕著性よりも大きく評価される．したがって，文の意味(すなわちこの場合には概念AとBとの意味関係)ではなく，概念AとBとの間の類似性の観点からみると，最も類似性の高い種類の文から順に，“high b/ high a”の文，“high b/ low a”の文，“low b/ high a”の文，“low b/ low a”の文，となる．もっとも，これらの分類カテゴリーは連続的であり，カテゴリー間に明確な境界があるわけではない．

Ortonyは，“顕著性の不均衡”が隠喩文の理解過程の理論の基盤になり得る概念であると述べてはいるが，“顕著性の不均衡”が隠喩文の理解過程の中でどのように計算されるのかに言及していない．ただ，彼は，(3a)の形式の文の述語の顕著な属性とそれに対応する主語の属性との間に顕著性の不均衡の生じていることが，高い比喩性(metaphoricity; 比喩を比喩と感じること)をその文が有するための“必要条件”であるとだけ述べている．本章の冒頭でも触れた通り，名詞述語文を隠喩として理解するということは，その表層表現の中の“B”の指示する，通常とは異なる概念C_1，C_2，C_3…を同定することである．Ortonyの考えでは，隠喩文は一種の直喩文であるから，このことは直喩文の理解にもあてはまることになる．概念C_1，C_2，C_3になり得るものは，述語の概念Bの顕著性の高い属性で，かつ主語の概念Aの属性とみなすことが可能な属性である．それゆえ，比喩的比較の理解の基本的なメカニズムは，そうした属性を選択するメカニズムになるはずで

ある．この点については，8.2.8で改めて考えてみることにする．

8.2.2 属性の不等

Ortonyは，比喩的比較として理解される文の述語の顕著な属性とそれに対応する主語の属性とが，互いに異なる領域に属しており，それゆえ，それら属性は比喩的に類似しているにすぎないと指摘する．このことを彼は“属性の不等(attribute inequality)”と呼んでいる．

(9)　　Encyclopedias are like gold mines.

Ortonyによれば，たとえば，文例(9)は，「価値がある」，「役に立つ」などといった述語「gold mine(金鉱)」の顕著な属性が主語「encyclopedia(百科事典)」にもあり，それら述語の属性とそれに対応する主語の属性との間に顕著性の不均衡が生じているという．その際，彼は，述語「encyclopedia」側のそれら属性が人間の知的活動に言及するものであるのに対し，主語「gold mine」側のそれら属性は金銭的ことがらに言及しており，それゆえ両者は比喩的に類似しているとする．

Ortonyは，顕著性の不均衡が比喩的比較の文に比喩性をもたらす主たる要因であるとしながら，属性の不等も，顕著性の不均衡の程度を実際よりも過大に評価させ，その結果間接的に比喩性の程度を高める，と主張する．このことは，二つの顕著性の不均衡の程度が等しければ，主語の属性の領域と述語のそれとが異なっている方がそうでないものより，比喩的比較として理解されやすい，ということを意味する．

また，Ortonyによれば，属性の不等は，比喩的比較として理解される文において際だっているが，実際には，文字通りの比較の文においてもわずかながら見いだされる，という．彼は，このことに関し，具体的な説明を与えていない．具体例を挙げるとすれば，彼が顕著性の不均衡の仮説の検証を行った実験(Ortony, Vondruska, & Foss, 1985; 8.2.7を参照されたい)の中で材料として用いていた(10)のような文がそれにあたると考えられる．

(10)　　Moths are like butterflies.

(10)は文字通りの比較として理解される．その際，「moth(ガ)」と「butterfly(チョウ)」とは「四枚羽をもつ」，「鱗粉がある」，などといった属性を共有していると考えられる．しかし，明らかに，「moth」の「四枚羽」と「butterfly」の「四枚羽」とは微妙に異なるし，「moth」の「鱗粉」と「butterfly」の「鱗粉」もまったく同じではない．結局，属性の不等は，文字通りに理解される文から比喩的比較として受け取られる文まで，程度の差こそあれ，容認し得るあらゆる文において見いだされることになる．

文字通りの比較として理解される文において属性の不等がわずかでも生じるなら，その文でも顕著性の不均衡が若干ではあるが生じることになる．8.2.7で紹介するように，このことは,Ortony自身によって実験的に確認されてもいる(Ortony et al.，1985)．Ortonyは，比喩的比較として理解されるためには，ある程度大きな顕著性の不均衡が生じている必要がある，としている．

8.2.3 顕著性の不均衡の計算

8.2.1で述べたように，Ortonyは，“顕著性の不均衡”の概念が隠喩文の理解過程の理論の基盤になり得ると述べてはいるが，“顕著性の不均衡”が隠喩文の理解過程の中でどのように計算されるのかに触れていない．ここでは，比喩的比較の文の理解過程における顕著性の不均衡の計算について考察してみることにする．顕著性の不均衡の計算とは，述語Bの指示対象を，それまで指示していた概念BからBの顕著な属性で，それに対応するものが主語Aにもあるものへ指示対象を移すことであるかもしれない．文字通りの比較としての理解では，指示対象の変更を行わないから，顕著性の不均衡の計算も行わない．

具体的に，文脈次第で比喩的比較としても文字通りの比較としても受け取ることのできる(11)のような文を考えてみよう．

(11)　Sally is like a block of ice.

Ortonyによれば，(11)が，サリーが猛烈に寒いところから帰ってきたという文脈下で発話された場合には文字通りの比較になる，という．その際，文字通りの比

較としての解釈結果は，「サリーは氷の塊と物理的に似ていた」というようなものになるであろう．一方，そうした文字通りの比較としての理解に導く文脈がなければ，(11)は比喩的比較として受け取られる．この場合には，顕著性の不均衡の計算を行い，表層表現“a block of ice”によって指示される概念を，「(精神的に)冷たい」というような属性概念に代える必要がある．

8.2.1で述べた通り，文字通りの比較と比喩的比較とは，主語の概念と述語の概念によって共有される属性の顕著性の主語側から見た程度が異なる(すなわち“high b/ high a”と“high b/ low a”における“high a”と“low a”の違い)だけで，そこには連続的な違いしかない．このことは，文字通りの比較として受け取られる場合には顕著性の不均衡の計算が行われず，比喩的比較として受け取られる場合には逆に行われる，とする考えとは相容れないように見える．しかし，この見かけの矛盾は顕著性の不均衡の程度に，一定の“閾値”のようなものを想定すればなくなる．その閾値を超えないうちは周囲の概念への指示対象の移動は行われず，超えれば移動が行われる，というメカニズムを考えることができるかもしれない．このメカニズムであれば，文字通りの比較としての理解の場合には顕著性の不均衡の計算は行われず，比喩的比較としての理解の場合には行われるということと，文字通りの比較から比喩的比較へ至る連続性とは矛盾しないであろう．

ついでながら，元来指示していた概念の周囲の概念に指示対象を移す際，元の概念の“属性”概念に移動させる必要は必ずしもない．元の概念の上位にある対象概念や下位にある対象概念に移してもよいであろうし，あるいは，元の概念が何かの部分(または全体)にあたっていればその全体(または部分)を表す対象概念へ移動させてもよいであろう．ある概念からその概念と上位・下位関係や部分全体関係をもつその周囲の対象概念へ指示対象を移動させることは，(慣習的でない)換喩や提喩の表現を理解する際に行われていることである(佐藤，1978; 山梨，1988)．したがって，顕著性の不均衡の計算とは，そうした表現の理解と同種のメカニズムをもった推論と考えることができる．

8.2.4 属性の導入

隠喩文の理解過程が，属性のマッチングの過程，すなわち，述語の指示する概

念Bのもつ，顕著性の高い特定の属性群を，それらと類似した，主語の指示する概念Aの属性群と対応させる過程であるとすれば，主語の属性群の中に述語の顕著な属性に対応するものが“ない”場合，その過程はどのように説明できるであろうか? 8.2.1で触れたように，どのような二つの概念の間であっても，類似点すなわち主語の概念と述語の概念によって共有される属性は必ず存在するであろう．したがって，対応する属性が“ない”場合とは，主語の概念に直接的に結びついた属性概念の中に，述語の概念の属性と対応するものがない場合であるということになる．

Ortonyは，マッチングを行い，主語Aの属性に対応するものがない場合には，述語Bの属性で顕著性の高いものがそのまま主語の属性として主語側に導入(introduce)される，としている．ただし，述語Bの属性で顕著性の高いものであれば何でも導入できるというわけではなく，既存の主語Aのまわりの概念との間に“概念的な不釣り合い(conceputal incompatibility)”を生じさせないものでなければならないとする．Ortonyによれば，たとえば，概念「sleeping pill(睡眠薬)」の顕著性の高い属性群を概念「sermon(説教)」に適用する過程において，属性「being white(白い)」を「sermon」に適用しようとすると，「being white」をもち得る概念は物理的対象に限定されており「sermon」は物理的対象ではないから，概念的な不釣り合いを引き起こすという．Ortonyは，主語側に対応する属性がない場合には，属性が導入された後，その属性が概念的な不釣り合いを生じさせないかをチェックすることが必要になるとしている．そして，属性の導入とその属性のチェックを除けば，主語Aの属性に対応するものがある場合と同じ過程をたどる，としている．

Ortonyは，こうした“属性の導入”がどのようなメカニズムで行われるかをあまり詳しく説明していない．“属性の導入”は，属性の継承(inheritance)のメカニズムによって最もよく説明されるように思われる．例文(12a)と(12b)を比較してもらいたい．

(12a)　Roger is like a <u>tiger</u> in faculty meetings.

(Glucksberg & Keysar, 1990, より)

(12b)　Roger is like a <u>desk</u> in faculty meetings.

(佐山，1991a，より)

「Roger」なる人物を聴者が知らないとしよう．「Roger」が未知であったとしても，英語母語話者は(12a)を容易に理解できる(Glucksberg & Keysar, 1990)．対照的に，(12b)はきわめて理解しにくいと思われる．(12a)は属性を導入することによって隠喩として理解できる場合に相当している．述語「tiger」は「勇敢な」，「獰猛な」，などといった顕著性の高い属性を有しているかもしれない．聴者は「Roger」という人物を知らないわけであるから，そういった属性に対応する属性は「Roger」側にはないはずである．しかし，「Roger」が「人間」であることは聴者も知っているはずで，「人間」には，「tiger」の顕著性の高い属性「勇敢な」，「獰猛な」などに対応するが，顕著性の高くない属性があると考えられる．(12a)が理解しやすいのは，「tiger」の顕著性の高い属性に対応するそうした「人間」の属性を，容易に「Roger」に継承でき，それを「tiger」の顕著性の高い属性に対応する「Roger」の属性とみなすことができるからであると考えられる．

一方，(12b)の述語「desk」は「水平な」，「四角い」のような顕著性の高い属性を有しているかもしれない．しかし，主語「Roger」のまわりの対象概念に，そうした属性に対応するような属性を有しているものはないように思われる．あるとすれば，「物体」あるいは「ものであること」のような，「Roger」とつながりはあるが離れたところにある漠然とした，対象とも属性ともつかない概念になるであろう．かりにそうした概念から，「desk」の顕著性の高い属性「水平な」，「四角い」に対応する概念を継承させるとすれば，大きな処理負担を伴うことになるであろう．そういった処理は行いにくいと考えられるため，(12b)はきわめて理解しにくくなると説明できる．

8.2.5 顕著な属性の前景化

Ortonyは，次の二つの場合に，後に主語A，述語Bによって共有されることになる属性が前景化(foreground)される，すなわちあらかじめ同定されると指摘する．一つは，問題の文が特定の解釈を促す文脈・状況下に置かれる場合である．その場合，共有されることになる属性が，先行する文脈・状況の中で事前に選択され前景化される．

(13a)　Billboards are like pears.

(13b)　Insofar as they are both physical objects,
billboards are like pears.

彼は，たとえば，(13a)((7)に同じ)が理解されにくいのに対し，(13b)は，主語「billboard」，述語「pear」によって共有される属性「物理的対象であること」が，文脈上前景化されるため，理解され得るようになると指摘する．

もう一つは，問題の文の中で，主語，述語によって共有される属性を特定させやすくする動詞が用いられているか，あるいはもっと極端に，共有される属性そのものが特定されている場合である．

(14a)　John's face was like a beet.

(14b)　John's face looked like a beet.

(14c)　John's face was red like a beet.

Ortonyは，たとえば，(14b)が(14a)の動詞「be」を「look」に取り替えることによって，また，(14c)が「John」と「beet」とによって共有されする属性を「red」と指定することによって，前景化される，と述べている．

Ortonyによれば，もともと比喩的比較として理解されていた(3a)の名詞述語文形式の文の主語，述語によって共有される属性が前景化されると，聴者がその文に対して抱く比喩性の程度が減る，と指摘する．たとえば，(14b)は(14a)よりも比喩的でなくなり，(14c)は(14a)，(14b)よりも比喩的でなくなる，という．つまり，共有される属性の前景化が生じると，元来比喩的比較で“high b/ low a”の対応であったものが，文字通りの比較と同じ“high b/ high a”の状態になる，というわけである．しかしながら，属性が前景化され，“high b/ high a”の状態になるのであれば，次節で述べるように，主語，述語を入れ替えても，なおも理解できるはずであるが，実際にはそうならない．この理由を，彼は，主語，述語を入れ替えて意味をなすか否かが，“high b/ high a”の対応であることに加え，それ以外のいくつかの要因によっても決まるからであると説明している．そ

うした他の要因については，次節で詳しく説明することにする．

なお，Ortonyは直接触れていないが，前景化の現象は，述語Bの顕著性の高い属性を用い，述語Bを直接修飾する場合にも生じると考えられる．このことは，(3a)の形式の英語の場合，(3b)の形式の日本語の場合の両方について実験的に確認されている(英語の場合について，Malgady & Johnson, 1976; 日本語の場合について，楠見，1985)．

8.2.6 比喩的比較と文字通りの比較の区別

Ortonyは，比喩的比較として理解される文が，その文の主語と述語を入れ替えてしまうと，意味をなさなくなるという点で，文字通りの比較として受け取られる文とは異なると指摘している．彼によれば，たとえば，(15a)は，比喩的比較として理解されるが，(15a)の主語と述語を入れ替えた文(15b)((6)と同じ)は受け入れられないという．そして，顕著性の不均衡の仮説に則れば，この理由をたやすく説明できるという．すなわち，(15a)は，主語，述語によって共有される属性群が，述語側で顕著性が相対的に高く主語側で相対的に低い(high b/ low a)と認定されるが，(15b)は，(15a)のちょうど逆(low b/ high a)と判断されるためである．

(15a)　Sermons are (like) sleeping pills.

(15b)　Sleeping pills are (like) sermons.

一方，彼によれば，(15a)，(15b)の場合とは異なり，(16a)，および(16a)の主語，述語を入れ替えた文(16b)は，ともに文字通りの比較として受け取られるという．そして，この理由も，顕著性の不均衡の仮説に従い次のように説明できるという．すなわち，(16a)は，主語，述語によって共有される属性群が述語側，主語側ともに同程度に相対的に高い(high b/ high a)と認定されているので，(16b)のように主語と述語を入れ替えてもやはりどちらの側でも同程度に相対的に高いと判定され，その結果，(16a)も(16b)もともに文字通りの比較として理解されることになる．

(16a)　Czechoslovakia is like Hungary.

(16b)　Hungary is like Czechoslovakia.

要するに，顕著性の不均衡の仮説にもとづけば，比喩的比較として理解されるか文字通りの比較として受け取られるかは，主語と述語とを入れ替えてみてなお意味をなすかどうかで識別できる，ということになるわけである．ただし，例外がある．Ortonyは，主語，述語を入れ替えても，なお比喩的比較として理解できる場合，および主語，述語を入れ替えると，文字通りの比較として受け入れにくくなる場合があるとし，それぞれの場合に別々の理由を与えている．

まず，彼は，(17a)が比喩的比較として理解されるだけでなく，(17a)の主語と述語を入れ替えた文(17b)も，比喩的比較として受け取られると指摘する．その際，(17a)の場合には，前述のように，「醜い」，「突き出ている」のような属性群が共有されていると認定される．一方，(17b)の場合には，「目立つ」，「見つけやすい」のような(17a)の場合とは異なる属性群が共有されていると判定される．したがって，ともに比喩的比較として理解されるが，主語・述語間で共有される属性で理解に使われるものは，(17a)と(17b)とでは互いに異なっている．

(17a)　Billboards are like warts.

(17b)　Warts are like billboards.

これを一般的に言えば，元の文の主語と述語によって共有されているのであるが，主語側で顕著性が高く述語側で顕著性が低く，それゆえ元の文の理解には使われていなかった属性の中に，主語と述語を入れ替えることにより偶然理解に使うことができるようになった属性がある場合には，入れ替えられた後の文も比喩的比較として理解され得る，ということになる．

(18a)　North Korea is like Red China.

(18b)　Red China is like North Korea.

また，Ortonyは，文例(18a)が文字通りの比較として理解されるが，主語，述語を入れ替えた文(18b)は，(18a)に比して文字通りの意味をもつ文として受け入れ

にくい．彼は，(18b)においても，主語，述語によって共有される属性群の顕著性が主語側，述語側のいずれでも高いという，文字通りの比較にあてはまる状態(high b/ high a)が崩されていないと考えている．そして，それでもなお(18b)が理解されにくい理由は，「Red China」が「North Korea」よりも共産主義国家の“典型”と判断されるためである，と述べている．すなわち，彼は，人が(何らかのカテゴリー内の)より典型的でない対象を主語の位置で言及し，より典型的な対象を述語の位置で言及するという文に関する制約をもっているからである，とする．

Ortonyは，こうした典型性の他に，文字通りの比較として受け取られる文の主語と述語を入れ替えて意味をなさなくさせる要因として，既知・未知関係のような話題に関係することがら，個々の名詞と結びついた相対的な知識の量，などを挙げている．

既知・未知関係のような話題に関係することがらや個々の名詞と結びついた相対的な知識の量といったような要因は，文字通りの比較として受け取られる文のみならず，比喩的比較として理解される文にも，当然関与しているはずである．とすると，比喩的比較として理解される文が通常主語，述語を入れ替えると意味をなさなくなる理由の中には，こうした要因も実際には加わっていることになる．

8.2.7 顕著性の不均衡の仮説の実験的検証：“顕著性”とは何か?

Ortony et al.(1985)は，顕著性の不均衡の仮説，すなわち，比喩的比較として理解される文では述語と主語によって共有される属性の顕著性が述語側で高くの主語側で低い状態(high b/ low a)になるという仮説が，妥当か否かを実験的に考察している．既に述べたように，Ortonyの言う顕著性とは，ある概念の有する特定の属性が，その概念の他の属性と比べ目立っている程度あるいは重要である程度のことである．にもかかわらず，Ortony et al.は，事前の実験において，被験者が重要性を判断する一定の基準をもっていないことを見いだした．彼らは，その理由を，ある概念の属性がその概念にとって重要かどうかを判断するよう求められると，重要性を判断する“観点”を考えることを求められることになり，そうした観点は一つではないからであるとした．

そこで，Ortony et al.(1985; 研究3)は，顕著性を部分的に反映すると考えら

れる評定尺度を組み合わせ，それらの結果を総合することによって，顕著性の不均衡の仮説を検証することを考えた．彼の用いた評定尺度は，適用可能性(applicability)，概念的中心性(conceptual centrality)，特徴性(chracteriticness)の3種類であった．このうち，適用可能性とは，ある概念の属性がその概念のどのくらい多くの事例にあてはまるかの程度を指す．Ortony et al.によれば，ある概念の顕著な属性はその事例の多くに適用できるが，逆に多くの事例にあてはまる属性が常に高い顕著性をもつとは限らない，という．Ortony et al.は，適用可能性が高いが顕著性の高くない属性の例として，属性「has a windshield(フロントガラスがある)」を挙げている．「has a windshield」は，すべての「mobile(自動車)」に適用できるが，さほど顕著な「mobile」の属性ではない．そこで，適用可能性を補完する測度として，概念的中心性が導入される．概念的中心性とは，ある概念の属性がその概念にとって中心的である程度を指す．たとえば，属性「induces drowsiness(眠気を催す)」は，概念「sleeping pill(睡眠薬)」にとって，中心的かつ顕著性の高い属性であるという．しかし，ある概念の属性がその概念にとって中心的でなくても，高い顕著性をもつことがある．Ortony et al.によれば，たとえば，体毛をすべて剃り落とされたもゴリラもゴリラであることに変わりはないから，属性「being hairy(毛深い)」は「gorilla(ゴリラ)」にとって概念的中心性が低いが，「gorilla」の顕著性の高い属性である，という．こうして，さらに特徴性の測度が導入される．特徴性とは，ある概念の属性がその概念にとって典型的である程度を指す．Ortony et al.によれば，たとえば，「being hairy」は，「gorilla」にとってきわめて特徴性の高い属性であるという．

Ortony et al.は比喩的比較の文(直喩文)とその比喩的比較の文の主語Aまたは述語Bを取り替えることによって作られた文字通りの比較の文，さらに，比較のグランド(ground)，すなわち比喩的比較の文と文字通りの比較の文のそれぞれの主語Aと述語Bによって共有される属性のうち理解に使われるものを，予備実験(Ortony, et al., 1985; 研究2)において作成しておいた．

(19a)　Shopping centers are like jungles.

(19b)　Shopping centers are like markets.

たとえば，比喩的比較(19a)，およびそのグランド“being complex and difficult to find one's way(複雑で道が分かりにくい)”，さらに，その比喩的比較に対応する文字通りの比較(19b)，およびそのグランド“being places where goods are bought and sold(品物を売り買いするところ)”が作られた．

被験者は，比較のグランド，および主語Aか述語Bのいずれかを同時に提示され，適用可能性，概念的中心性，特徴性のうちのいずれか一つの評定課題を行うよう求められた．それから，提示された主語Aまたは述語Bを含む比喩的比較の文または文字通りの意味の文をそれらの主語と述語を入れ替えた文とともに対提示され，二つの文のうち“reasonable, sensible, appropriate, etc.(より合理的で，訳が分かり，妥当である，など)”を充たす方を選ぶよう求められた．その際，半数の被験者は，もとの比喩的比較の文または文字通りの文の比較のグランドを同時に提示され，残りの半分の被験者には対のみが提示された．

その結果，Ortony et al.は，比喩的比較の文の述語Bのグランドに対する適用可能性，概念的中心性，特徴性のいずれの評定値も，それぞれ対応する主語Aのグランドに対するそれら評定値よりも高く，それゆえ，顕著性の不均衡の仮説が妥当であることを見いだした．また，グランドが提示されているか否かにかかわらず，比喩的比較の文とその主語と述語の反転された文では，前者の方がずっと多く選択された．対照的に，文字通りの比較の文とその主語と述語の反転された文では，選択された割合に差が認められないことを示した．そして，このことから，比喩的比較の文の主語，述語を反転させた文は意味をなさないが，文字通りの比較の文の主語，述語を反転させた文はなおも意味をなすという，8.2.6で述べた観察が実証されたとした．

さらに，彼らは，“文字通りの比較の文とその主語と述語の反転された文との間の選択の割合”と“述語Bに対する先の三つの評定値の平均と主語Aに対するそれら評定値の平均との差”との間の相関をとり，両者の間に中程度の相関があることを見いだした．そして，この結果を，文字通りの比較の文においても，顕著性の不均衡がわずかながら見いだされる証拠と考えた．

さて，先に述べたように，重要である観点が必要になるため，ある属性が重要かどうかで顕著性を測るのは難しい，ということをOrtony et al.は指摘する．このことは，顕著性が，主観的な判断の結果もたらされるものではないことを示し

ている．むしろ，直観的に言って，顕著性は，被験者が意識的なコントロールを行うことの少ない課題，たとえば，連想課題のようなものに最もよく反映されると考えられる．実際，楠見(1985; 実験Ｉ)は，属性を表す語に連想語を制限した連想課題を行い，各連想語の連想頻度を顕著性の測度と考え，顕著性の不均衡の仮説，および比喩的比較の文が対称的にならないことを確認している．

8.2.8 顕著性の不均衡にもとづくマッチングにおける属性の選択

顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングの過程の中には，述語Bと主語Aとの間で共有される属性の中で，述語側で顕著性が高く主語側で顕著性の低いものを選択する過程が含まれていた．その過程の中で，述語側で同程度に顕著性が高く主語側で同程度に低い属性が複数あれば(そのようなケースは稀であろうが)，比喩的比較の解釈となる属性群C_1，C_2，C_3…も複数あり得，その結果複数の解釈が成り立つことになる(佐山・阿部，1990a，1990b，1990c; Searle，1979a，1979b)．

(20)　　Juliet is the sun.

たとえば，Searle(1979a)によれば，『ロミオとジュリエット』の劇において，(20)は，「ロミオの一日はジュリエットとともに始まる」というような意味で使われている，という．そして，『ロミオとジュリエット』の劇中という特定の文脈を離れ，(20)を与えられた場合には，(20)を劇中の意味と同じ意味には決して受け取れない，と述べている．「～は太陽である」という言い方は慣習的な言いまわしであり，(20)は「ジュリエットは，常に明るく輝き，希望を与え，あたりを輝かせてくれるような存在である」というような意味で使われる(山梨，1988)．特定の解釈に導く文脈のない場合，英語母語話者はこうした意味をもつものとして受け取る．

(20)の劇中での意味にはおそらく「(惑星のようなものが)まわりを回る」というような属性が解釈に関わっているのであろう．一方，特定の文脈から単離された場合には，「明るい」，「輝く」といった属性が理解に使われるのであろう．『ロミオとジュリエット』の劇をよく知っている英語母語話者にとっては，「ま

わりを回る」も，「明るい」や「輝く」も，どちらも「太陽」と「ジュリエット」との間で共有され，太陽側で顕著性が高くジュリエット側では低い属性になっており，それゆえ複数の意味をもつものとして多義的に解釈されるものと考えられる．

8.3 カテゴリー化モデル

Glucksberg and Keysar(1990)は，Ortony(1979)の言う顕著性の不均衡にもとづいて隠喩文の理解過程を説明しようとすると，属性を選択するメカニズムを明確に与えることができず，それゆえ顕著性の不均衡の考えそのものが隠喩文理解過程の基盤にはなり得ないと主張する．代わりに，Glucksberg and Keysarは，“カテゴリー化”にもとづくモデルを提案してきている．以下，彼らのモデルを“カテゴリー化モデル”と呼ぶことにする．

8.3.1 アドホックカテゴリーへのカテゴリー化

Glucksberg and Keysarは，Barsalou(1983)の主張する“アドホックカテゴリー”の考えを使って名詞述語文の隠喩的理解の過程を説明する．アドホックカテゴリーとは，「果物」，「家具」などのような通常の自然カテゴリーから，何らかの問題解決のために(多くは一時的に)生成されるカテゴリーを指す．たとえば，ハロウィーンのパーティーに何を着て行くかが話題とされているような文脈・状況下では，「ハロウィーンのパーティーで着ることができるコスチューム」というようなアドホックカテゴリーが話者,聴者の心内に作られている(Barsalou, 1983)．Glucksberg and Keysarによれば，Rosch(Rosch, & Mervis, 1975; Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976)の指摘する自然カテゴリーの二つの特徴が，アドホックカテゴリーにもそのままあてはまるという．すなわち，きわめて典型的な成員からまったく典型でない成員まで，あらゆる典型性の値をとる成員が存在し得るという特徴，および，基本レベル(basic level)，上位レベル(superordinate level)，下位レベル(subordicate level)のいずれかのレベルに階層的に分類され得るという特徴である．

(21)　My job is (like) a jail.
　　(私の仕事は牢獄[のよう]だ)

Glucksberg and Keysarによれば，文例(21)が隠喩として理解される過程はFigure 8.1のようになる，という．まず，文(21)の述語“jail(監獄)”が，概念「jail」および「jail」の上位にある「狭い場所に意思に反して閉じこめられ不快である状況」を表すアドホックカテゴリーとを同時に指示していると聴者によって認定される．そして，主語「my job(私の仕事)」がこのアドホックカテゴリーに結びつけられる．この様子は，Figure 8.1では，右端のギザギザの縦線によって表されている．そして，「my job」に，そのアドホックカテゴリーのもつ，「不快な」，「狭い場所に閉じこめられた」，「意思に反してそこにいる」，などといった属性が付与される．その結果，(21)は「私の仕事は私の意思に反しておりきわめて不快である」というような意味をもつものとして受け取られる．

Glucksberg and Keysarは，一般に，名詞述語文が隠喩として理解される場合，述語Bが，二つのカテゴリーを同時に指示すると主張する．一つは，名詞述語文の述語が通常指示する自然カテゴリーである．もう一つは，その自然カテゴリーを典型的成員としてもつ，名前のないアドホックカテゴリーである．彼らは，このアドホックカテゴリーの属性を，名詞述語文の主語Aと述語Bの両方の属性とみなし得るようになると主張する．

Glucksberg and Keysarによれば，こうしたアドホックカテゴリーの一部は，特定の述語と結びついて固定化され，慣習的な言いまわしになっているという．

(22a)　A is a butcher.　(A: 名詞)
(22b)　My surgeon was a butcher.

彼らはそのような言いまわしの例として(22a)(6.4の(18b)と同じ)を挙げている．(22a)の“butcher”は，(22b)(6.4の(18a)と同じ)のように用いられ，手腕，技巧，経験，などを要する専門的仕事に従事していながら，それをこなせるだけの能力をまったく持ち合わせていない人のカテゴリーを指示するために慣習的に使われる，という．

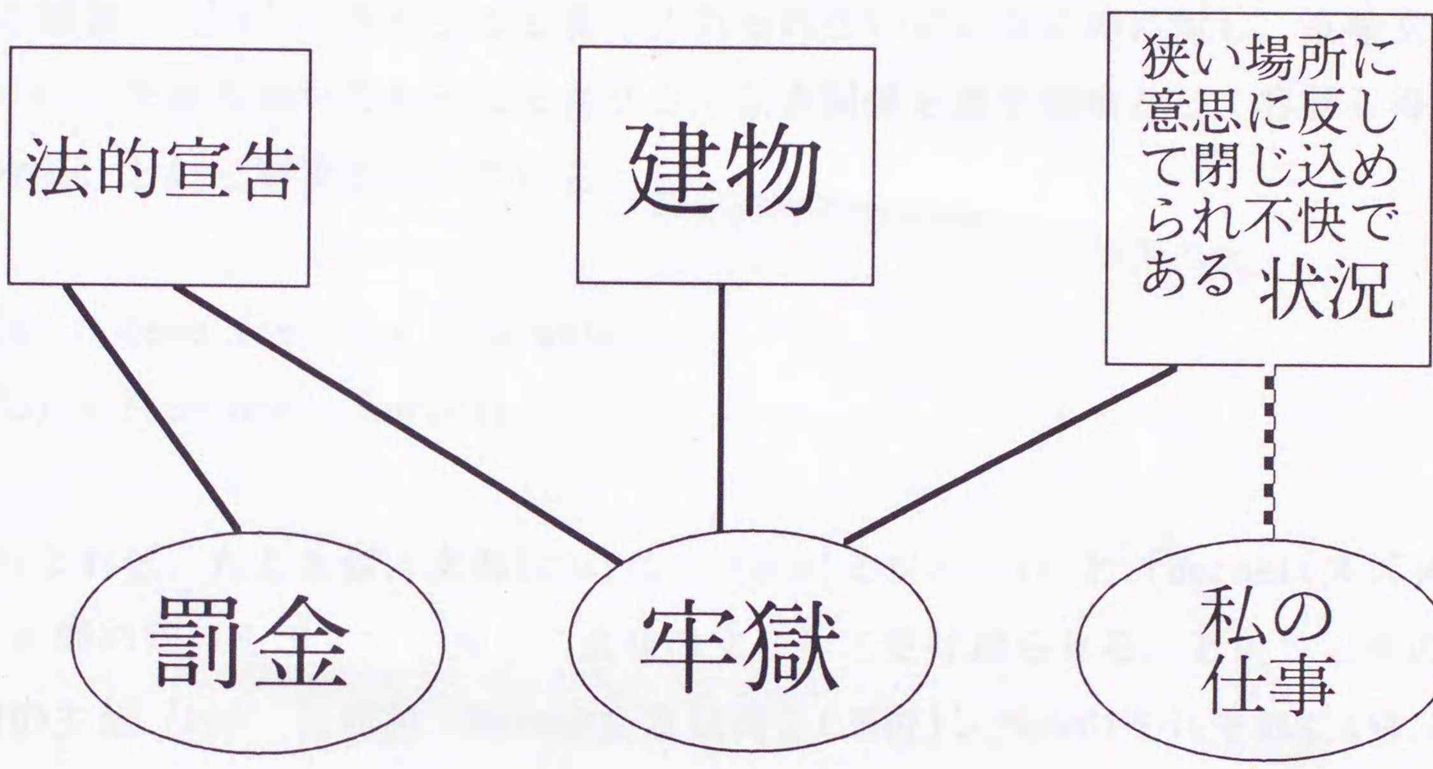


Figure 8.1 隠喩文“My job is (like) a jail”を理解するために使われる“jail”のまわりのカテゴリー概念構造

8.3.2 暗示的な比喩的クラス包含関係としての直喩

Ortony(1979)をはじめ，隠喩文理解に携わるそれまでの研究者たちは，類似性の標識の省略された直喩として隠喩を捉えていた．彼らの考えでは，隠喩は直喩の特別な場合になる．これとは逆に，Glucksberg and Keysarは，直喩が隠喩の特別な場合であると主張する．すなわち，彼らは直喩文をクラス包含関係の暗示された隠喩文とみなす．その理由として，彼らは文字通りの類似性を表す文から類似性の標識“like”を取り去ると受け入れられない文になるのに対し，直喩文から“like”を取り除いてもそのままクラス包含関係を表す隠喩として容認し得る文になる，という事実を挙げている．

(23a)　Bees are like　hornets.
(23b) * Bees are　hornets.

彼らによれば，たとえば，文例(23a)は，「bee(ミツバチ)」と「hornet(スズメバチ)」と間の類似を示す文字通りの意味の文として受け取られる，という．その際，(23a)の主語「bee」と述語「hornet」とは同じ(下位)レベルのそれぞれ互いに異なるカテゴリーを指示する．(23a)から類似性の標識“like”を取り去った文(23b)は，(23a)同様，主語，述語が同一レベルの異なるカテゴリーを指示するから，同一関係として受け取ることはできず，(23b)は受け入れられない文となる．

(24a)　Sermons are like sleeping pills.
(24b)　Sermons are sleeping pills.

一方，文例(24a)は直喩として理解される．既に述べた通り，彼らの考えでは，(24a)の述語「sleepng pill」は，主語「sermon」と同じレベルのカテゴリーを指示するだけでなく，その上位のカテゴリーをも同時に指示する．それゆえ，(24a)から類似性の標識を取り去った文(24b)は，一種のクラス包含関係を表す文とみなされ，隠喩として理解され得る．

8.3.3 比喩的クラス包含関係と文字通りのクラス包含関係の同一性

Glucksberg and Keysarは，隠喩文および直喩文が比喩的なクラス包含関係を表す文であり，比喩的なクラス包含関係は，通常の文字通りのクラス包含関係とまったく同じであると主張する．彼らは，その証拠として，文字通りのクラス包含関係を表す文と同様に，隠喩文も直喩文も，主語と述語を入れ替えると意味をなさなくなるという事実を挙げている．

(25a)　A tree is a plant

(25b) * A plant is a tree.

(26a)　Sermons are sleeping pills.

(26b) * Sleeping pills are sermons.

(27a)　My job is like a jail.

(27b) * A jail is like my job.

たとえば，文字通りのクラス包含関係を表す文(25a)の主語，述語を反転させた文(25b)が容認できないのと同様，隠喩文(26a)の主語，述語を入れ替えた文(26b)，直喩文(27a)の主語，述語を取り替えた文(27b)も，ともに受け入れられない．

ただし，Glucksberg and Keysarは，比喩的クラス包含関係を表す文として理解し得る文の中には，例外的にその文の主語と述語を入れ替えても意味をなす場合があると指摘する．すなわち，新たに作られた文の述語が，たまたま別の状況を表すアドホックカテゴリーを指示し得る場合があり，その場合には，新しい文も比喩的クラス包含関係を表すものとして理解できるようになるとしている．

(28a)　My surgeon was like a butcher.

(28b)　My butcher is like a surgeon.

先にも触れた通り，(28a)は，“butcher”が「無能で雑な仕事をする人」というアドホックカテゴリーを指示するため，一定の否定的な意味をもつものして受け

取られるという．これに対し，(28a)の主語と述語を入れ替えた文(28b)は，(28a)の主語“surgeon”が指示していたアドホックカテゴリーとはまったく別のアドホックカテゴリー「技術のある器用な人」を“surgeon”が容易に指示できるため特定の肯定的な意味をもつものとして受け取られるという．

8.3.4 比喩的クラス包含関係としての隠喩文と直喩文の特徴づけ

限定語句を文字通りのクラス包含関係として受け取られる文の述語や文全体に修飾させることにより，主語のカテゴリーが述語のカテゴリーに含まれる程度を変えることができる(Lakoff, 1973)．これと同様に，Glucksberg and Keysarは，限定語句を比喩的なクラス包含関係として受け取られる文の述語や文全体に修飾させることにより，その文の比喩性を連続的に変化させることができる，としている．その際，彼らは，類似性の指標も限定語句と同列に扱う．そして，当該文がクラス包含関係を暗示させる程度が大きくなるほど，比喩性は大きくなると主張する．

(29a) Cigarettes are literally time bombs.
(29b) Cigarettes are time bombs.
(29c) Cigarettes are virtual time bombs.
(29d) Cigarettes are like time bombs.
(29e) In certain respects,
cigarettes are like time bombs.
(29f) Cigarettes are deadly like time bombs.
(29g) Cigarettes are as deadly as time bombs.

たとえば，Glucksberg and Keysarによれば，比喩性の程度は，(29a)から(29g)へ行くに従って減っていくという(それぞれアンダーラインは著者による)．

しかしながら，すべての英語母語話者がこれらの比喩性の順序に同意するわけではないようである．身近にいる英文学を専門とする英語母語話者に(29a)から(29g)までの文を見せ，それらの文の比喩性に対し順位を付けてもらったところ，彼の指摘では，最も比喩的と感じるものから順に，b，a，c，d，g，f，eであった．

さらに，Glucksberg and Keysarは，述語Bが通常指示するカテゴリーの，述語Bが同時に指示するアドホックカテゴリーの成員としての典型性の程度差によって，隠喩文の適切さ(aptness)の違いを説明できるとする．

(30a)　Not even Einstein's ideas were all <u>gold</u>.
(30b)　Not even Einstein's ideas were all <u>platinum</u>.
(30c)　Not even Einstein's ideas were all <u>silver</u>.
(30d)　Not even Einstein's ideas were all <u>sapphires</u>.

彼らによれば，(30a)から(30d)までの文(それぞれアンダーラインは著者が付した)はいずれも「アインシュタインの考えですらすべてに価値があるというわけではなかった」という意味をもつものとして容易に解釈できるが，隠喩としての適切さはaからdへ行くに従い減少する，という．また，「金銭的価値のある稀少なもの」というアドホックカテゴリーの成員としての典型性の程度は，「gold」，「platinum」，「silver」，「sapphire」の順に減って行くが，その減り方はaからdへと適切さが減少する仕方と対応しているという．

(30)の四つの例の適切さの程度についても，(29)の七つの例の比喩性を指摘してもらった英語母語話者に，順位をつけるよう頼んだ．彼によれば，最も適切と感じるものから順に，(30a)，(30c)，(30d)，(30b)であるという．(30b)が他より適切でない理由を尋ねたところ，「platinum」は「gold」，「silver」，「sapphire」よりもずっと稀少な金属であり，その金銭的な価値よりもその極端な稀少さが目立って感じられるために，他より適切でない印象を受けると答えた．

8.4 属性のマッチングとカテゴリー化

Glucksberg and Keysar(1990)のアドホックカテゴリーへのカテゴリー化という考えは，顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングというOrtony(1979)の考えでは隠喩文の理解過程を十全に説明できないとして提出されたものであった．そこで，ここでは，Glucksberg and Keysarによって批判されたOrtonyの論点を考えてみることにしよう．

8.4.1 文字通りの意味の文の情報性

Glucksberg and Keysarは，Ortonyの顕著性の不均衡の仮説が，名詞述語文が文字通りの意味に解釈される場合を，述語側で顕著性の高い属性が主語側でも顕著性の高い状態すなわち“high b/ high a”の状態になっている場合とする点を批判する．彼らは，そうした説明では，文字通りの意味の文は聴者に何の情報も与えないことになると主張する．彼らによれば，文字通りの意味の文が実際に情報的になる次の場合を顕著性の不均衡の仮説では説明できない，という．すなわち，述語側で顕著な属性が主語側でも顕著であることを聴者に思い出させる場合である．

(31) A cup is like a mug.

Glucksberg and Keysarは，文例(31)を挙げ，カップがマグのように使えることを聴者に思い出させたいとき，話者は(31)を使うことができると指摘する．彼らは，この文を聴者が文字通りに理解するとすれば，“high b/ high a”対応となり情報的ではなくなるから解釈できないはずだとしている．

しかしながら，(31)は“high b/ low a”対応と受け取られると考える方が妥当かもしれない．聴者はカップがマグのような機能をもつことを忘れているのであるから，長期記憶に保持されているであろう「cup」の属性で，対応する属性が概念「mug」にあるものは，作業記憶へ直接的には引き出されていないはずである．したがって，その「cup」の属性は，(33)の文が処理される直前の聴者の作業記憶内には存在しないかあるいは存在したとしても顕著性は低いであろう．したがって，長期記憶から検索される「mug」の顕著性の高い属性およびそれに対応する「cup」の顕著性の低い属性との間で顕著性の不均衡が生じるはずである．

明らかに，この説明では，長期記憶に蓄えられた一種の宣言的な知識としての顕著性と，作業記憶上での情報の活性化のレベルすなわち情報の利用しやすさの程度を示す顕著性とが区別されている．Ortony(1979)は明示していないが，彼の論では，この二つの顕著性が暗黙に区別されている．たとえば，彼は“属性の不等”が顕著性の不均衡の状態を強めると主張している(8.3.2を参照してほしい)．

このことは，長期記憶内の属性に関する情報としての顕著性が作業記憶に引き出される際，その顕著性の情報が通常よりも大きな活性化のレベルをもつものとして評価されるということを示している．

(32a)　John's face was like a beet.

(32b)　John's face was red like a beet.

また，Ortonyは，(32b)((14c)と同じ)が(32a)((14a)と同じ)よりも比喩的でない理由を，「John's face」と「beet」の両方の側で，それらによって共有される属性の顕著性がともに高いため，としていた(8.3.5を参照のこと)．Glucksberg and Keysarは，この説明に対しても，(31)を理解する場合と同様に，(32b)が情報的でなく解釈できないことになると批判する．

前述の通り，(32b)では，「John's face」と「beet」によって共有される属性「red」が前景化されている．一般的に言って，前景化が生じれば，主語，述語間で共有される属性Cが特定されるから，それをそのまま使って「A is C」を隠喩文の解釈とすればよい．すなわち，前景化が生じている場合には，少なくとも当面は属性のマッチングを行う必要がなくなり，隠喩文の理解過程は文字通りの意味の文の理解過程と同じになる．それゆえ，たとえば(32b)のように，前景化されている隠喩文の比喩性が低くなるのは当然である．

8.4.2 属性の選択

Glucksberg and Keysarは，どのような二つの概念であっても，それらの間で共有される属性を(思いつきやすさに程度差はあるが)無数に考えることができるとし，名詞述語文の隠喩的な理解を説明するモデルには，主語，述語間で共有される属性のうちのどれが理解に使われるのかを事前に特定するメカニズムがなければならないと主張する．

カテゴリー化モデルでは，カテゴリー化を属性の選択に先立って行うことによって，主語，述語間で共有される属性の中から隠喩的な理解に使われるものをどのような場合であっても選択しておくことができる，とされる．一方，先に述べたように，顕著性の不均衡にもとづくマッチングのモデルでは，主語，述語間で

共有され述語側で顕著性が高く主語側で顕著性の低い属性で，同程度の顕著性の不均衡が生じているものが複数生じる場合，それらのうちいずれが理解に使うかを特定できない．それゆえ，理解に使われる属性を特定するメカニズムをもつという点で，カテゴリー化モデルの方が，顕著性の不均衡にもとづくマッチングのモデルよりも妥当であるように見える．

とはいえ，Glucksberg and Keysarの言う“状況を表すアドホックカテゴリー”は，文脈・状況上あるいは慣習的にしか決めることができないものであった．このことは，名詞述語文形式をもつ文の主語，述語によって共有される属性が，(慣習的に決まっているのでなければ)常にその文の置かれた文脈・状況によってしか決めることができない，ということを意味する．とすると，主語の単語，述語の単語のそれぞれの意味は熟知しているが，それらの組み合わせに出くわしたことがないという点で新奇な隠喩文を，何らかの解釈に導くような文脈・状況なしに与えられた場合には，慣習的に決まっているアドホックカテゴリーを指示できる場合を除けば，述語は何らかのアドホックカテゴリーを指示することはできず，また慣習的に存在するアドホックカテゴリーを指示できる場合であってもそのアドホックカテゴリーに主語の概念をカテゴリー化することはできず，いずれにせよその文は解釈できない，ということになる．しかし，これは事実ではないと思う．主語，述語それぞれの単語はよく知っているのであるから，それらの意味から何らかの解釈をこじつけることができるのではないかと思う．この新奇な隠喩文の理解の仕方は，8.1で述べたような，アナロジー推論に近いものであろう．とはいえ，新奇な隠喩文は，文脈・状況の情報の手がかりがなくても，主語・述語によって共有される属性で，述語側で顕著性が高く主語側で低いものを言語知識の範囲内で選択することができ，その文をある程度理解することができると考えられる．

主語，述語の新奇な組み合わせの隠喩文ではなく一度でも理解した経験のある隠喩文なら，新奇な取り合わせの隠喩文よりも効率的に理解し得るであろう．それゆえ，そうした隠喩文であれば，なおさら言語知識の範囲内だけである程度解釈することができるはずである．

カテゴリー化の考えも属性のマッチングの考えと対立するものではないであろう．ただ，カテゴリー化の考えは，「A is C_1，C_2，C_3…」を計算する際に必要な

知識の範囲を広くとりすぎている．その結果，隠喩文の理解が文脈・状況に依存して成立する程度を過大評価している．

Glucksberg and Keysarは，(33)のような文字通りの意味の文ですら，文脈・状況なしには解釈を決めることができないと主張する．

(33)　Dogs are animals.

彼らは，(33)が「犬が植物のカテゴリーではなく動物のカテゴリーに属している」ことを伝えるためにも，「犬は人間とは違うので，犬を人間のように扱うべきではない」ということを伝えるためにも，あるいはその他の意味にも使うことができるであろうが，それらの意味のうちのどれが実際の意味になるかを決めるためには文脈が必要になる，としている．

(33)が単に「犬が動物の一種である」ことを言うために発話されるケースは，犬のカテゴリーは動物のカテゴリーに含まれるという常識を聴者が忘れているというような，ごく稀な場合を除けばあり得ないであろう．一見当たり前のクラス包含関係を表す文をあえて話者が発話したとしたら，その場合には，Glucksberg and Keysarが指摘するように，クラス包含関係以上の意味を伝えていることを聴者は想定するであろう．その際，彼らが指摘したような意味をもつものとして聴者が(33)の文を受け取ることを十全に説明するには，顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングか，アドホックカテゴリーへのカテゴリー化による必要がある．つまり，この場合は，実際には，隠喩文と同じように理解される．隠喩文の理解と同じなのであるから，上で述べたのと同じ理由で，属性のマッチングの考えの方がカテゴリー化の考えよりも妥当な説明である．

しかしながら，前にも触れたように，顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングによって隠喩文の理解過程を説明しようとすると，名詞述語文が文脈・状況から単離されて与えられ，しかも，述語側で顕著性が高く主語側で顕著性の低い共有される属性で，同程度の顕著性の不均衡が生じているものが複数生じるような場合には，その複数の候補の中から一つを決める手だてがなかった．先に挙げた文例(20)に対して与えられた二通りの解釈を思い出してほしい．おそらくこれは真相なのであろう．つまり，この場合には，実際に解釈は多義的なままであり

一つには決まらないのではないか．この場合に限っては，文脈・状況の知識を利用する必要がある．

文法的な多義性のある文を解釈する際に，とり得る複数の統語構造のうちのどれか一つだけを選ぶ傾向を人はもっている(阿部・桃内・金子・李，1994)．つまり，その多義的な文が一定の解釈の導く文脈下に置かれていれば，その文脈に誘導された解釈が採られるのはもちろんであるが，特定の文脈下に置かれなくても，いずれか一方に偏って解釈される．これと同様に，上述のような複数の隠喩的意味をとり得，かつ文脈上どれか一つの解釈に導かれていない場合，どれか一つの意味を一貫して選択するということはあり得るであろう．先の(20)の例では，『ロミオとジュリエット』の劇中という特定の文脈下でなら「ジュリエットの一日はロミオとともに始まる」という解釈が選ばれるであろうが，そうでなければその解釈よりも「ジュリエットは，常に明るく輝き，希望を与え，あたりを輝かせてくれるような存在である」という解釈の方がずっと多く選択されるであろう．Searle(1979a)は，文脈・状況から単離されると，文字通りの意味(関係)や隠喩的意味(関係)などのような意味関係のみが決まり意味そのものは決まらない隠喩を無制限な隠喩(open-ended metaphor)と，また，単離されても一つの意味に解釈できる隠喩のことを単純な隠喩(simple metaphor)と呼び，それぞれを明確に区別している．

結局，Ortonyの顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングの説明でも，Glucksberg and Keysar(1990)のカテゴリー化の説明でも，属性を選択するメカニズムはさほど明確にされていない．双方とも，名詞述語文の理解に関する心理現象を同程度の説明力で説明する．ただ，Ortonyの考えの方が，理解時に参照する知識を当面言語知識に限定する分だけ優れた説明と言えるかもしれない．

8.4.3 隠喩としての理解とカテゴリー化

名詞述語文を，主語Aの指示する概念を述語Bの指示する概念へカテゴリー化するものとしてすなわちクラス包含関係として理解する場合と，隠喩として理解する場合との間には連続的な差しかない(Lakoff & Johnson, 1980)．クラス包含関係は文字通りの意味(関係)の一つである．

(34a)　An argument is a conversation.

(34b)　An argument is fight.

(34c)　An argument is war.

たとえば，Lakoff and Johnson(1980)によれば，「argument(議論)」は「会話(coversation)」の一種であるから，(34a)はクラス包含関係を意味する文であるという．また，(34c)は，「war(戦争)」のまわりの概念の一部と同じ構造が，「argument(議論)」のまわりの概念に与えられているから，隠喩になるという．これらに対し，(34b)は，「fight(格闘)」を単に肉体的な優劣や苦痛を伴うものと捉える人にとっては隠喩に近いが，「fight」を肉体的な優劣や苦痛に加え心理的な優劣や苦痛を伴うものと捉える人にとってはクラス包含関係を表す文に近くなるという．いずれにせよ，(34b)における主語と述語の意味関係は，クラス包含関係でも，隠喩的意味関係でもなく，両者の中間に位置する意味関係であるという．

Lakoff and Johnsonは，二つのカテゴリーBとAとがクラス包含関係にあるということは，類似性に関するいくつかの次元(dimension)に属する属性をBとAが共有していなければならないと主張する．それら次元の中には，知覚次元(perceptual dimension)，運動・活動次元(motion activity dimension)，機能次元(functional dimension)，目的次元(purposive dimension)，などがある．このうち，知覚次元とは，カテゴリーAがBと外見上どの程度似ているかに関わる属性の種類を指す．また，運動・活動次元とは，カテゴリーAがBとどの程度同じように操作できるかに関わる属性の種類である．機能次元は，カテゴリーAがBと同じ機能を果たすかどうかに関わる属性の種類のことを言う．そして，目的次元とは，カテゴリーAがBとみなし得る文脈・状況にもとづく属性の種類である．

Lakoff and Johnsonによれば，あるカテゴリーを指示する名詞に修飾語句をつけると，こうした次元の属性のうちの特定の次元の属性が否定されるという．たとえば，模造銃(fake gun)は，見かけ上本物の銃のように見えるから知覚次元の属性を本物の銃と共有し，また，構えたり狙いをつけたりして本物の銃のように扱うことができるから運動・活動次元に関する属性をも本物の銃と共有しているという．さらに，模造銃も本物の銃と同じ目的すなわち人を威嚇したり誇示したりすることを遂行することができるから，文脈・状況によっては目的次元に関す

る属性を本物の銃と共有することがあるという．しかし，彼らは，人を撃つという本物の銃が有している機能を，模造銃はもともと有していないから，機能次元に関する属性は，本物の銃にはあるが模造銃にはないとする．本物の銃と模造銃とは，明らかにクラス包含関係にない．このことは，これら次元の属性うちの一つの次元でも欠けると，クラス包含関係が成り立たなくなることを示す．

カテゴリーBとAとが隠喩的な意味関係をもつものとして理解されるということは，これら次元のうちのいくつかの次元の属性がBとAとの間で共有されていない場合と考えられるかもしれない．

(35)　This stump is a table.（Miller, 1977, より）

たとえば，ある切り株(stump)がテーブル代わりに使えるということを言うために文例(35)が発話されたとしよう．(35)は，野外という特別な文脈・状況下で発話されなければ隠喩として受け取ることはできないであろう．したがって，(35)の主語「stump」は述語「table」と，目的次元の属性を共有している必要がある．また，切り株に隙間なく無数の穴が開いていたとしたら，その切り株はテーブルとして使えないから，その切り株に対し(35)と言うことはできない．したがって，(35)と言えるためには，機能次元の属性を述語「table」と主語「stump」とは共有しあっていなければならない．しかし，問題の切り株が見かけ上テーブルと似ていてもいなくても(35)は隠喩として受け取られる．それゆえ(35)が隠喩として受け取られるために，知覚次元は充たされていてもいなくてもよい．また，通常のテーブルは持ち運びができたり立てかけたりすることができるが，そうしたテーブルの運動・活動次元の属性を，問題の切り株がテーブルと共有していなくても，(35)は隠喩として受け取ることができる．したがって，運動・活動次元も充たされていてもいなくてもよい．

一般に，名詞述語文の理解過程には，(通常の)カテゴリー化の過程，すなわち，主語によって指示されるカテゴリーを，述語によって指示されるカテゴリーの事例か否かを判断する過程が含まれる(阿部・佐山，1990；佐山・阿部，1990a，1990b，1990c)．そして，その判断の中には，知覚のテスト(perceptual test)すなわち述語のカテゴリーのもつテーブルの知覚的な属性を主語のカテゴリーが有し

ているかどうかに関するテスト，および，機能のテスト(functional test)すなわち述語のカテゴリーのもつ機能的な属性を主語のカテゴリーが有しているかどうかに関するテストの2種類のテストを行うという指摘がある(Miller, 1977)．両方のテストに合格すれば，述語のカテゴリーと主語のカテゴリーとはクラス包含関係にあると認定されることになる．また，一方のテストにのみ合格すれば，述語のカテゴリーと主語のカテゴリーとは隠喩的関係にあることになる．たとえば，Millerによれば，「picture of a table(テーブルの絵)」は，知覚のテストに合格するが機能のテストには合格しないという．それゆえ，「picture of a table」と「table」との間の関係は隠喩的であるという．また，彼は，「packing case (輸送用包装箱)」は，知覚のテストには合格しないが機能のテストに合格するとする．それゆえ，「packing case」と「table」との間の関係も隠喩的であるとする．

Millerは，知覚のテストが，述語のカテゴリーの知覚的属性にもとづく一種の真偽判断であると主張する．そして，真偽判断の結果である真偽値は文の意味の一部であるから，その知覚的属性は述語の語彙的知識に含まれると考えるのが自然であるとする．同様に，彼は，機能のテストが，述語のカテゴリーの機能的属性にもとづく一種の可能性(possibility)の判断である，とする．そして，そうした可能性の判断は，真偽判断と同じようになされると主張する．このことから，Millerは，機能的属性も知覚的属性と一緒に，述語の語彙的知識の中に含めて考えるべきであると結論する．

本節で述べたことは次のようにまとめられるであろう．名詞述語文の隠喩的理解の中には，主語Aを述語Bの事例とみなそうとする(通常の)カテゴリー化が含まれる．そうしたカテゴリー化は，述語Bのカテゴリーのもつある種の属性についての判断であり，その際，その属性は語彙的知識を参照し引き出される．

このことは，8.2で述べた結論，すなわち，名詞述語文の隠喩的な理解が，基本的には，顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングの過程であり，そのマッチングの際，言語知識の範囲内でマッチングに必要な属性の検索が行われるとする考えと一貫する．つまり，最初にカテゴリー化が行われ，述語Bと主語Aとがクラス包含関係にないと判定された場合に限り，顕著性の不均衡にもとづくマッチングの過程が起動される．長期記憶から検索された情報を，初めはそのまま入力さ

れた文の一部に直接適用し，うまく行かない場合に限り，検索された情報を加工・修正し再度その適用を試みる，というわけである．この考えは，第6章で説明した隠喩文理解過程の段階モデルにも矛盾しない．

さて，ここまでくれば，隠喩文理解の認知過程の全体像を述べることはたやすいであろう．しかしその前に，次節では，これまで述べてきた隠喩文理解の基本的なメカニズムを支えている知識について触れておくことにする．

8.5 隠喩文理解のメカニズムを支える知識

これまでに，最も単純化して考えた場合，“A is B”の名詞述語文形式をもつ隠喩文の理解とは，“B”が通常指示する概念とは異なる概念C_1，C_2，C_3…を指示していること，すなわち「A is C_1，C_2，C_3…」を計算することであり，その理解の基本的なメカニズムとして，長期記憶内の言語知識の範囲から，述語Bの顕著性の高い属性でその属性に対応するものが主語Aにもある(あるいは，その属性をAに適用可能である)ものを検索しそれをC_1，C_2，C_3…とする，という考えを述べた．こうした考えは，基本的にはOrtony(1979)の顕著性の不均衡にもとづく属性のマッチングの考えに沿ったものである．

8.3.2で触れたように，Ortonyの顕著性の不均衡の仮説では，属性のマッチングそのものが比喩的であった．マッチングが比喩的でかまわない理由は，“ある種”の隠喩文の理解においては，マッチングが慣習的比喩にもとづいているからである(Lakoff & Johnson, 1980)．“ある種”のと断ったのは，隠喩文によっては，その理解が，慣習的比喩にではなく，(慣習的な意味としての)“文字通りの意味”に依拠する場合もあるからである．本節では，これら，隠喩文の理解を成立させる基盤となる慣習的比喩と(慣習的な意味としての)文字通りの意味について考えてみたい．

8.5.1 慣習的比喩

マッチングが比喩的であるということ，すなわちOrtonyの言う属性の不等とはどのようなことであったかを，文例(36)((11)に同じ)を用いてもう一度考えてみよう．

(36)　Sally is a block of ice.　(Searle, 1979a, より)

(36)において，主語の概念「Sally」と述語の概念「a block of ice」とは「冷たい」という属性を共有する．しかし，「Sally」は心理的に冷たいのに対し，「a block of ice」は物理的に冷たいにすぎない．したがって，「Sally」の属性「冷たい」と「a block of ice」の属性「冷たい」とのマッチングは比喩的である．

こうした人の感情と温度との間の対応関係は，慣習的に決定されており，何らかの類似性にはもとづいていない(Searle, 1979a)．こうした対応関係はしばしば慣習的比喩と呼ばれる．一般に，慣習的比喩は，(慣習的な意味としての)文字通りの意味とともに，人の知識を構成する基本的な意味関係になっている(Lakoff, 1990; Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989; Martin, 1990, 1992; 山梨, 1983, 1988)．人の言語理解を支える知識を構成する基本的な意味関係として，慣習的比喩と文字通りの意味とは本質的に異なるところがない．それゆえ，異なる領域間のマッチングも同一領域内のマッチングも実質的な違いはない．

Jonhnson and Lakoff(1980)は，英語母語話者が様々な慣習的比喩の言語知識を有していることを豊富な例を用い考察してきている．彼らの挙げる慣習的比喩には，方向づけの比喩(orientational metaphor)，存在の比喩(ontological metaphor)，構造的比喩(structural metaphor)の3種類がある．これらの他，共感覚(synesthetic)にもとづく比喩も慣習的比喩の一種と考えられる(楠見, 1988; 山梨, 1988)．

Jonhnson and Lakoffによれば，彼らの挙げる慣習的比喩のうち，知識の最も基本的な単位とみなし得る慣習的比喩が，方向づけの比喩および存在の比喩であるという．このうち，方向づけの比喩とは，何らかの連続的な程度差をもつ概念と，空間的な上下関係や前後関係などとの対応を指す．彼らは，英語母語話者の言語知識の中で，量，価値，楽しさ，などといった概念が，空間的な上下関係に，経験的に対応づけられているとする．たとえば，量と上下関係の対応はFigure 8.2のように図示される．彼らは，この対応を反映した表現の例として，(37), (38)を挙げている．

(37)　My income rose last year.
（私の収入は去年上がった．）

(38)　He is under age.
（彼は規定年齢以下である．）

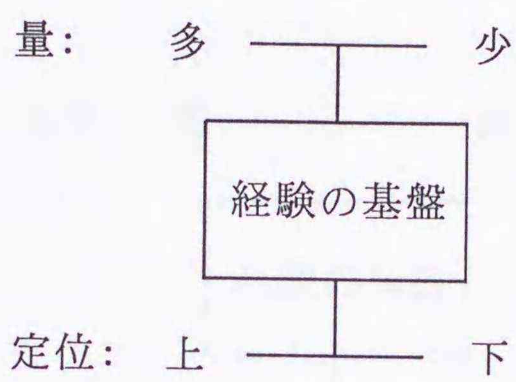


Figure 8.2　量の多寡と上下関係との対応

方向づけの比喩のもう一つの例が，時間的な前後関係と空間的な前後関係との対応である(Glucksberg & Keysar, 1990; Traugott, 1978)．英語では，過去は後方にあるものとして，また未来は前方にあるものとして捉えられる．このことは，日本語でも同様であり，たとえば，“将来”を“前途”と言うような表現の中に反映されている．

先ほど挙げた文例(36)における，感情的な冷たさと物理的な冷たさとの間の対応も，この方向づけの比喩の一種と考えることができるかもしれない．ただ，温度の高低は空間的な関係ではないから，その対応はFigure 8.2と同じような直接的な対応ではなく，Figure 8.3(a)とFigure 8.3(b)に図示されるような，二つの対応が組み合わされた対応であるのかもしれない．

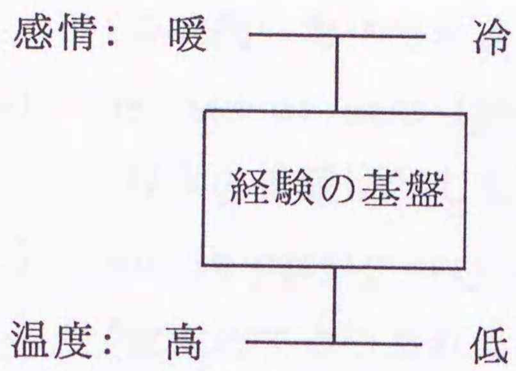


Figure 8.3(a) 感情的な冷たさと物理的な冷たさとの対応

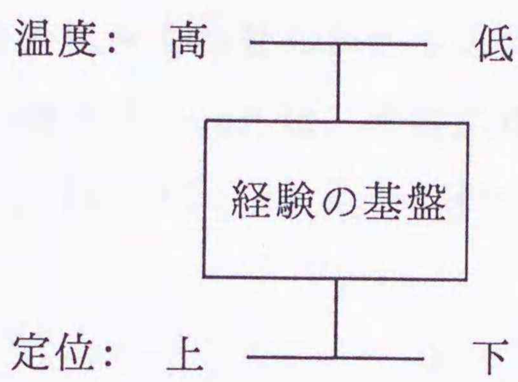


Figure 8.3(b) 物理的な冷たさと上下関係との対応

また，存在の比喩とは，心，感情，考え，などといった輪郭のない抽象的な概念と，人や食べ物，資源，などといった輪郭のある具体的な概念との対応を言う．Jonhnson and Lakoffによれば，英語母語話者は，(39a)，(40a)のような存在の比喩を知識として有しており，それぞれ，(39b)，(39c)，および，(40b)，(40c)のような表現に反映されているという．

(39a) The mind is a machine.
(心は機械である．)

(39b) My mind just isn't operating today.
(今日は，僕の頭はまったく作動していない．)

(39c) I'm a little rusty today.
(今日はちょっと頭が錆びついている．)

(40a) The mind is a brittle object.

(心は脆い物体である.)

(40b) Her ego is very fragile.

(彼女の自我はとても脆い.)

(40c) She is easily crushed.

(彼女はすぐつぶれる[くじける].)

一方，構造的比喩は，恋愛，議論などといった比較的複雑な抽象的概念と，比較的具体的な概念との部分的な対応を指す．構造的比喩は方向づけの比喩や存在の比喩の組み合わせられたものである．Jonhnson and Lakoffによれば，たとえば，英語の概念「love」は，存在の比喩(41a)によって核となる構造が与えられ，それに加え，(41)のb，c，d，e，fによってさらに部分的に構造が与えられているという．

(41a) Love is an emotion.

(恋愛は感情である.)

(41b) Love is a journey.

(恋愛は旅である.)

(41c) Love is a patient.

(恋愛は患者である.)

(41d) Love is a physical force.

(恋愛は物理的な力である.)

(41e) Love is a madness.

(恋愛は狂気である.)

(41f) Love is war.

(恋愛は戦争である.)

8.5.2 慣習的な意味としての“文字通りの意味”

隠喩文の中には，慣習的比喩にその理解の基盤をもたないものもある．その多くは，選択制限(selectional restriction)に違反しない隠喩文であると考えられる．

(42)　My surgeon was a butcher

たとえば，(42)(第6章の(18a)，および本章の(22b)と同じ)は，「私の外科医は仕事が雑で無能だった」というような意味に理解される(Glucksberg & Keysar, 1990)．その際，「butcher」の顕著性の高い属性，たとえば「無能な$_1$」と，「my surgeon」の顕著性の低い属性，たとえば「無能な$_2$」とがマッチングに使われると考えられる．その際，「無能な$_1$」と「無能な$_2$」とは同一の属性であり，それゆえそれらの対応は文字通りである．

8.6 隠喩文理解の認知過程の全体像

第6章，第8章では，主に名詞述語文形式をとる文の隠喩としての理解が，どのような認知過程を経て成り立つかという問題を考察してきた．ここでは，第6章，第8章での議論をもとに，隠喩文理解の認知過程の全体像をスケッチしてみたい．

隠喩文の理解過程は，全体的には，Searleのいう段階モデルによって妥当に捉えられるかもしれない．“A is B”の名詞述語文形式の隠喩文の理解過程では，まず，その文字通りの意味「A is B」が計算される．そして，その文字通りの意味が，会話の公準のようなコミュニケーション上の規則および文脈に照らして妥当でないと判断された場合に，隠喩的意味が計算し直される．

ただし，隠喩文の慣習性が高くなるにつれ，隠喩文は慣用句と同じように理解されるようになるであろう．慣習性の高い隠喩文は，単一の語彙項目として，長期記憶に登録されており，それを理解する際には，単語の語義を長期記憶から引き出すのと同じやり方で，長期記憶からその隠喩文に対する語彙項目を引き出す．

隠喩的意味の計算とは，概念A，概念Bそれぞれの属性をマッチングさせ，顕著性の不均衡を計算することによって行われる．属性のマッチングの結果，主語の指示するカテゴリーAは，述語の指示するカテゴリーBにカテゴリー化される．Glucksberg and Keysar(1990)のように，カテゴリー化だけで，隠喩的理解を説明しようとすると，文脈・状況に依存して決まるアドホックカテゴリーを構築するメカニズムを考える必要が生じる．そうしたアドホックカテゴリーは，言語知識

の範囲を超え，文脈・状況知識にまで検索の範囲を広げなければ構築され得ない．言語表現を理解するために，最初に言語知識や世界知識を参照し，その言語表現に対する何らかの表象を構築すると考えるのは自然であろう．初めから参照する知識の範囲を文脈・状況知識の範囲まで拡大するとすれば，入力された言語表現に対する表象と既存の先行文脈の表象との区別がつかなくなるであろう．そして，それまでにどのような言語表現がどのように発せられてきたかが分からなくなり，円滑なコミュニケーションは行われなくなるであろう．

隠喩文の理解を支える知識には，慣習的比喩の意味関係，および慣習的な意味関係としての文字通りの意味がある．慣習的比喩の意味関係を構成する二つの概念は類似性で結びついていない．多くの隠喩文は，この類似性にもとづかない慣習的比喩によって類似性を与えられており，それを用いて理解されている．隠喩文の理解を支える知識が，慣習的比喩であるか文字通りの意味であるかは，隠喩文の有する比喩性にはさほど関係がないように思われる．比喩性は，顕著性の不均衡の相対的な程度に加え，それら基盤をなす意味関係からどのくらい間接的であるか，すなわち基盤の関係との間に介在する対応の数によっても大きく左右される．

こうした隠喩文理解の認知過程の説明には，まだ解明されていない点も多く残されている．マッチングに用いられる属性は一種のスキーマ(Ortony, 1979)であり，その結果として生じるカテゴリーはいくつかの次元からなる一種のゲシュタルト(Lakoff & Johnson, 1980)である．スキーマとしての属性，あるいはゲシュタルトしてのカテゴリーの実体は明らかにされていないままである．

最後に，隠喩文理解の計算論的なアプローチに対する示唆を述べる．上述の結論は，意味ネットワークのような知識構造を仮定することによって，たやすく実装し得るであろう．文の隠喩的な理解における顕著性の計算は，長期記憶から検索された部分的な意味ネットワーク上で，述語“B”の指示対象を，それまでその述語の指示対象となっていた概念Bから，それに直結するまわりの概念C_1，C_2，C_3…に移すことである．この処理の手続きは，いわゆる換喩や提喩の処理や事例化(instansiation)の処理などと基本的に同じである．

第9章　隠喩文の理解しやすさと適切さについて（実験論文）

本章および第10章では，隠喩文の主語，述語の指示するカテゴリー概念のカテゴリー・レベルの違いによって，隠喩文の理解しやすさや適切さが変わるかどうかという特定のテーマに焦点を当て，それを実験的に考察する．本章では，隠喩文の理解しやすさや適切さに影響を与えると従来から指摘されてきている文脈および隠喩文の慣習性の要因を述語のカテゴリー・レベルと合わせて考慮する．

9.1 隠喩としての理解しやすさと適切さとの関係

隠喩的な言いまわしの中には，その意味は理解しやすいが隠喩としては適切とは思えない表現が存在する．また，逆に理解しやすいとは言えないが適切に使われていると感じられる隠喩もある．このことを我々は経験的によく知っている．では，なぜ我々は“理解しやすさ”と“適切さ”という二つの異なる言語直観をもっているのであろうか[1)]．

本研究では(1a)の名詞述語文形式をとる文の隠喩としての“理解しやすさ”と“適切さ”の関係を実験的に考察する．この形式をとる隠喩文には(1b)のような例がある．

(1a)　AはBである．(A，B: 名詞)

(1b)　男は狼である．

英語では，(2a)の形式の文が日本語の(1a)の形式の文に相当する．(2a)の形式の文には(2b)のような例がある．

---

1)　我々が隠喩的な言いまわしを読み(聞き)それに対して抱く言語直観には，“理解しやすさ”や“適切さ”の他にも，“面白さ”，“斬新さ”，等々，多種多様なものが考えられる(佐山，1991b，1992)．

(2a)　　A is B.　(A, B: 名詞)

(2b)　　Man is a wolf.　(Searle, 1979a, より)

例文(3a)と(3b)を解釈してみてほしい.

(3a)　　友情は酒である.

(3b)　　友情はウィスキーである.

(3a)と(3b)は互いに似た隠喩的意味をもつものとして理解され得るかもしれない.しかし,(3a)と(3b)とを比べると,(3a)の方が(3b)よりも理解しやすく,かつ適切であるように思われる.

(3a),(3b)の例から,以下の予測が成り立つかもしれない.同一の主語を有する二つの隠喩文が互いに上位・下位関係にある述語B,B'をもち,かつそれら隠喩文から受け取ることのできる意味内容が互いにほぼ同じである場合,上位レベルのカテゴリーを指示する述語Bを含む隠喩文の方が,下位レベルの述語B'を含む隠喩文よりも“理解しやすさ”および“適切さ”の程度が高い.

ただし,こうした予測は(3a),(3b)のような文例についてのみ個別的に成り立つものであり,一般的には,述語Bのカテゴリー・レベルの違いが“理解しやすさ”や“適切さ”に関与するということはないのかもしれない.

Ortony(1979)は,(2a)の形式の文が,隠喩として理解されるための要件として,「主語Aと述語Bとの間に“顕著性の不均衡”が生じていること」を挙げている(第8章を参照されたい).“顕著性の不均衡”の生じている状態とは,主語Aと述語Bとが共有する(と仮定される)属性群C_1,C_2,C_3…の顕著性が,述語B側で高く主語A側で低い状態を指す.具体的に言えば,(3a)(または(3b))では次のようになる.主語“友情”と述語“酒”(または“ウィスキー”)とは,“心地よい”,“快い”などといった属性群を共有する.そして,それら属性群の“顕著性”が述語側で高く主語側で低い状態,すなわち“顕著性の不均衡”の状態が生じている.こうしたOrtonyの考えに則れば,(3a)が(3b)より理解しやすい理由は,それら属性群が“友情”と“酒”との間で引き起こす顕著性の不均衡の程度の方が,“友情”

と“ウィスキー”との間に生じさせる顕著性の不均衡の程度より大きいため，ということになる．

ところで，文の隠喩としての“理解しやすさ”が，問題の隠喩文に先立つ“文脈”および問題の隠喩文それ自体の“慣習性”の程度によって変わることがこれまでに数多く指摘されてきている(文脈に関して，Gerrig & Healy, 1983; Janus & Bever, 1985; Ortony, Schallert, Reynolds, & Antos, 1978; 佐山・阿部, 1990a, などが，慣習性の程度に関して，Blasko & Connine, 1991, 1993; Long & Martin, 1991, などがある)．たとえば，第8章でも触れた通り，Ortony, Schallert, Reynolds, and Antos(1978)は，文の読解時間(reading time)が，先行する充分な文脈によって一定の隠喩的解釈に強く導かれる場合の方が，先行する文脈が少なくそれによって特定の隠喩的解釈にさほど誘導されない場合よりも短くなることを見いだしている．このことは，隠喩文の理解しやすさの程度が，文脈に応じて変わることを示している．

隠喩としての“理解しやすさ”に及ぼす文脈の影響と“適切さ”に与える文脈の影響の両方を同時に調べた研究もある．Gerrig and Healy(1983)は，文を一定の隠喩的解釈に導く文脈を文の前または後ろに付与することによって，“理解しやすさ(具体的には，読解時間)”と“適切さ(具体的には，適切さの評定値)”がそれぞれどのように変化するかを調べた．その結果，隠喩文の前に文脈を置いた場合の方が後ろに置いた場合よりも理解しやすさの程度は増すが，適切さの程度は双方の場合の間に差がないことを見いだしている．

以上のような議論を踏まえ，本研究では，(3a)，(3b)のように，互いに共通する隠喩的な解釈を隠喩文の述語が受けるように配慮しながら，一つの自然カテゴリー概念の系列の中で互いに上位・下位関係をなす述語B，B'のカテゴリー・レベルを変え，そのカテゴリー・レベルの違いによって，理解しやすさと適切さとが一定の変化を示すか否かを調べてみることにした．その際，一つのカテゴリー概念の系列中で上位・下位関係にある述語B，B'と，別のカテゴリー概念の系列中で上位・下位関係をなす述語B''，B'''において，上位レベルのBとB''，下位レベルのB'とB'''が，それぞれ同一のレベルにあるとみなし得るようにするため，以下の基準を設けた．すなわち，Rosch, Mervis, Gray, Johnson, and Boyes-Braem(1976)の言う“基本レベル”のカテゴリーを基準とし，それを上位レベルに設定し，

また，基本レベルの直下にあるレベルを下位レベルに設定する．“基本レベル”のカテゴリーとは，使用場面・状況の如何を問わず日常的に最も頻繁に使われるカテゴリーのことを指す．こうした基本カテゴリーの特徴を基準として採用した．以下，“上位レベル”のカテゴリーと言った場合には基本レベルのカテゴリーを指し，“下位レベル”のカテゴリーと言った場合には基本レベルの直下のレベルのカテゴリーを指すものとする．

本研究の目的は，述語Bのカテゴリー・レベルの要因に，文脈に対する隠喩文の述語Bの関連性の程度の要因，および隠喩文の慣習性の程度の要因を加え，これら三つの要因の変動によって，隠喩文の“理解しやすさ”と“適切さ”が何らかの影響を受けるかどうかを実験的に調べることである．

9.2 カテゴリー・レベル，文脈，慣習性の効果の測定：実験

方法

被験者　被験者は大学生108名であった．

材料　“AはBである”の形式の隠喩文を次のようにして作成した．“上位レベル”(基本レベル)のカテゴリーを指示すると考えられる隠喩文の述語B_1(たとえば“宝石”)およびB_1の“下位レベル”のカテゴリーを表すと思われる隠喩文の述語B_2とB_3(たとえば“ダイヤモンド”と“水晶”)を適宜選択した．それからさらに，それら三つの述語を隠喩として解釈し得るような主語(たとえば“瞳”)を選び，(4)から(6)までのような3種の隠喩文を合計30文作った．これら隠喩文に加え，(7)のような，隠喩文と同じ主語をもち，文字通りの意味に受け取ることのできるフィラー文1種を計10文作った．結局隠喩文3種とフィラー文1種からなる文の“グループ”を10グループ(1グループにつき4文，合わせて40文)用意したことになる．以下，これら“グループ”の各文をターゲット文と呼ぶことにする．

(4)　瞳は<u>宝石</u>である．
(5)　瞳は<u>ダイヤモンド</u>である．
(6)　瞳は<u>水晶</u>である．
(7)　瞳は<u>光るもの</u>である．

ターゲット文の前に置く“文脈”も，上述のターゲット文の“グループ”ごとに3種用意した．結局，全部で120の“文脈＋ターゲット文”の組み合わせが作成されたことになる．いずれの文脈も二つの文からなっていた．たとえば(8)から(10)がその例である．

(8)　目は口ほどにものを言うことがある．
　目を見れば心が<u>輝く</u>のが分かる．
(9)　目は口ほどにものを言うことがある．
　目を見れば心が<u>明るい</u>のが分かる．
(10)　目は口ほどにものを言うことがある．
　目を見れば心が<u>動く</u>のが分かる．

各文脈は2番目の文に含まれる1単語(形容詞，形容動詞，または動詞．以下，文脈語と呼ぶ)においてのみ異なっていた．たとえば文脈(8)，(9)，(10)は，順に“輝く”，“明るい”，“動く”を含むこと以外は同一であった．これら単語のうち一つはターゲット文の述語と意味上関連性が高いと思われるもの(たとえば述語“宝石”，“ダイヤモンド”，“水晶”に対して“輝く”)，もう一つは意味上中程度の関連性をもつと思われるもの(たとえば“明るい”)，残りの一つはほとんど関連がないと思われるもの(たとえば“動く”)にされた．ただし，これら単語に対する各述語の関連性の程度は実験の中で評定される．文脈語は文脈中では話題を表すターゲット文の主語の属性として言及され，ターゲット文の述語の属性としては直接言及されない．

文脈とターゲット文の間の意味的なつながり具合が悪い場合，それが原因となりターゲット文の隠喩としての理解しやすさや適切さが過大または過小に評定される可能性が生じる．そこで，文脈とターゲット文との意味的なつながりが自然かどうかを，本実験とは異なる3名の被験者に尋ねた．そして，彼らによって文脈とターゲット文とのつながりが悪いと指摘された場合には，文脈とターゲット文との間に接続詞が補われた．なお，巻末の付録に実験で用いられたすべての文脈とターゲット文(隠喩文)が示されている．

手続き　被験者を4群に分け集団で実施した．それぞれ，文脈語に対する隠喩文の述語の“関連性”を評定する群，隠喩文の“慣習性”を評定する群，隠喩文の“理解しやすさ”を評定する群，および隠喩文の“適切さ”を評定する群であった．

このうち，“関連性”を評定する被験者は12名であった．反応用紙には七つまたは八つの名詞(たとえば“旅”，“ダイヤ”など)と，一つの名詞につき三つの文脈語(たとえば“長い”，“明るい”など)が記されている．これら名詞は，いずれも隠喩文の述語であり，一つのターゲット文の“グループ”(材料の項を参照されたい)から一つずつ選ばれるよう配慮されている．被験者は，まず名詞一つを提示され，それから文脈語を提示される．そして各文脈語が直前に提示された名詞からどのくらい思いつきやすいかを7段階尺度上で評定するように求められる．尺度の目盛りの内容は，左から順に，とても思いつきやすい，かなり思いつきやすい，やや思いつきやすい，どちらでもない，やや思いつきにくい，かなり思いつきにくい，とても思いつきにくい，である．制限時間はとくに設けられていない．しかし，上から順に第一印象で迅速かつ正確に答えるように教示される．なお，提示される名詞の種類は被験者ごとに変えられ，また，それら名詞の提示順序も被験者ごとにランダムにされた．

“慣習性”を評定する被験者は36名であり，うち12名は関連性を評定した被験者と同じであった．反応用紙には，隠喩文七つまたは八つが，“～はそよ風である”のように主語を付けない形で書かれている．反応用紙内の隠喩文は異なるターゲット文の“グループ”から選択される．被験者は，各文が隠喩としてどのように使われるかを説明される．たとえば“～はそよ風である”は，ふだん気づかないが快適にしてくれるものごとをたとえるときに使う言い方であると説明される．被験者は，この言い方がどの程度よく使われる言い方かを7段階尺度上で評定するよう求められる．尺度の目盛りの内容は，左から順に，非常によく使われる，かなりよく使われる．やや使われる，どちらでもない，やや使われない，あまり使われない，ほとんど使われない，である．制限時間はとくに設定されていない．しかし，上から順に第一印象で迅速かつ正確に答えるよう指示される．なお，提示される文の種類は被験者ごとに異なり，また，それら文の提示順序も被験者ごとにランダムにされた．

“理解しやすさ”を評定する被験者は36名であり，いずれの被験者も関連性および慣習性の評定実験には参加していなかった．各反応用紙には，文脈とターゲット文からなる文章10種が記されている．ターゲット文は異なる“グループ”から選ばれている．被験者は各文章を読んで全体をよく理解し，そのあとで最後のターゲット文がどの程度分かりやすいかを7段階尺度上で評定するよう要求される．尺度の目盛りの内容は，左から順に，とても分かりやすい，かなり分かりやすい，やや分かりやすい，どちらでもない，やや分かりにくい，かなり分かりにくい，とても分かりにくい，である．制限時間はとくに設けられていない．しかし，上から順に第一印象で迅速かつ正確に答えるよう求められる．なお，提示される文章の種類は被験者ごとに変えられ，また，それら文章の提示順序も被験者ごとにランダムにされた．

“適切さ”を評定する被験者は36名であり，いずれの被験者も上記三つの評定実験には参加していなかった．手続きは，尺度の目盛りの内容が，左から順に，とても適切である，かなり適切である，やや適切である，どちらでもない，やや適切でない，あまり適切でない，まったく適切でない，であることを除けば，理解しやすさの評定の手続きとまったく同じである．

結果と考察

異なる“文脈＋隠喩文”ごとに，理解しやすさの平均評定値および適切さの平均評定値を算出し，それらの間の相関を求めたところ，それらの間には相関が認められなかった($r = .11$, $p > .29$)．そこで以下では，隠喩としての理解しやすさと適切さとを別々に分析し，その後で両者の性質とそれらの間の関係を考えることにした．

理解しやすさの評定値　理解しやすさを基準変数，カテゴリー・レベル，関連性，慣習性の三つを説明変数とする3要因の分散分析を行った[2)]ところ，モデル全体に対するF値は有意($F(84, 185) = 1.44$, $p < .02$)[3)]であったが，カテゴリー・レベルの要因は，主効果およびそれを含む交互作用のいずれにおいても有意ではなかった．それゆえ，カテゴリー・レベルの要因は隠喩文の理解しやすさとは無関係であったと考えられる．そこで，カテゴリー・レベルを説明変数から除き改めて2要因分散分析を行なった[4)]．その結果，関連性，慣習性の主効果はいずれも

認められなかった(順に$F(6, 221) = 1.63$, $p > .14$; $F(6, 221) = .92$, $p > .48$). しかし，関連性×慣習性の交互作用には有意差が見られた($F(36, 221) = 1.72$, $p < .01$).

慣習性の水準ごとに関連性の単純主効果を調べてみた．Figure 9.1に，慣習性の水準別に見た関連性の水準ごとの理解しやすさ評定値を示す．慣習性の水準は，Figure 9.1の中では，“ほとんど使われない”が慣習性0，“あまり使われない”が慣習性1，“やや使われない”が慣習性2，“どちらでもない”が慣習性3，“やや使われる”が慣習性4，“かなりよく使われる”が慣習性5，そして，“非常によく使われる”が慣習性6と記されている．また，関連性の水準は，(文脈語を)“とても思いつきにくい”が関連性0，“かなり思いつきにくい”が関連性1，“やや思いつきにくい”が関連性2，“どちらでもない”が関連性3，“やや思いつきやすい”が関連性4，“かなり思いつきやすい”が関連性5，“とても思いつきやすい”が関連性6と表記されている．さらに，Figure 9.1中の理解しやすさの評定値については，“とても分かりにくい”の値が0，“かなり分かりにくい”の値が1，“ややわかりにくい”の値が2，“どちらでもない”の値が3，“やや分かりやすい”の値が4，“かなり分かりやすい”の値が5，“とても分かりやすい”の値が6とされている．Figure 9.1において，有意差の見られたのは，慣習性1の“あまり使われない”隠喩文の場合($F(6, 221) = 2.82$, $p < .01$)，2の“やや使われない”隠喩文の場合($F(6, 221) = 2.76$, $p < .01$)，および，4の“やや使われる”隠喩文の場合($F(6, 221) = 2.50$, $p < .02$)であった．

Figure 9.1から以下の三つの点を指摘できる．第一に，慣習性0の“ほとんど使われない”隠喩文の場合，関連性の程度に関わらず理解しやすさの程度は一定で

---

2) 分析には統計プログラムパッケージSASのGLMプロシジャーを用いた．また，条件間のデータ数が不揃いであることを考慮しタイプIIの平方和をとっている(高橋・大橋・芳賀，1989).

3) 一般線型モデルにおいて，定数項を除くすべてのパラメータがゼロとなる帰無仮説の検定を行なっている．

4) モデル全体のF値は有意であった($F(48, 221) = 1.60$, $p < .01$).

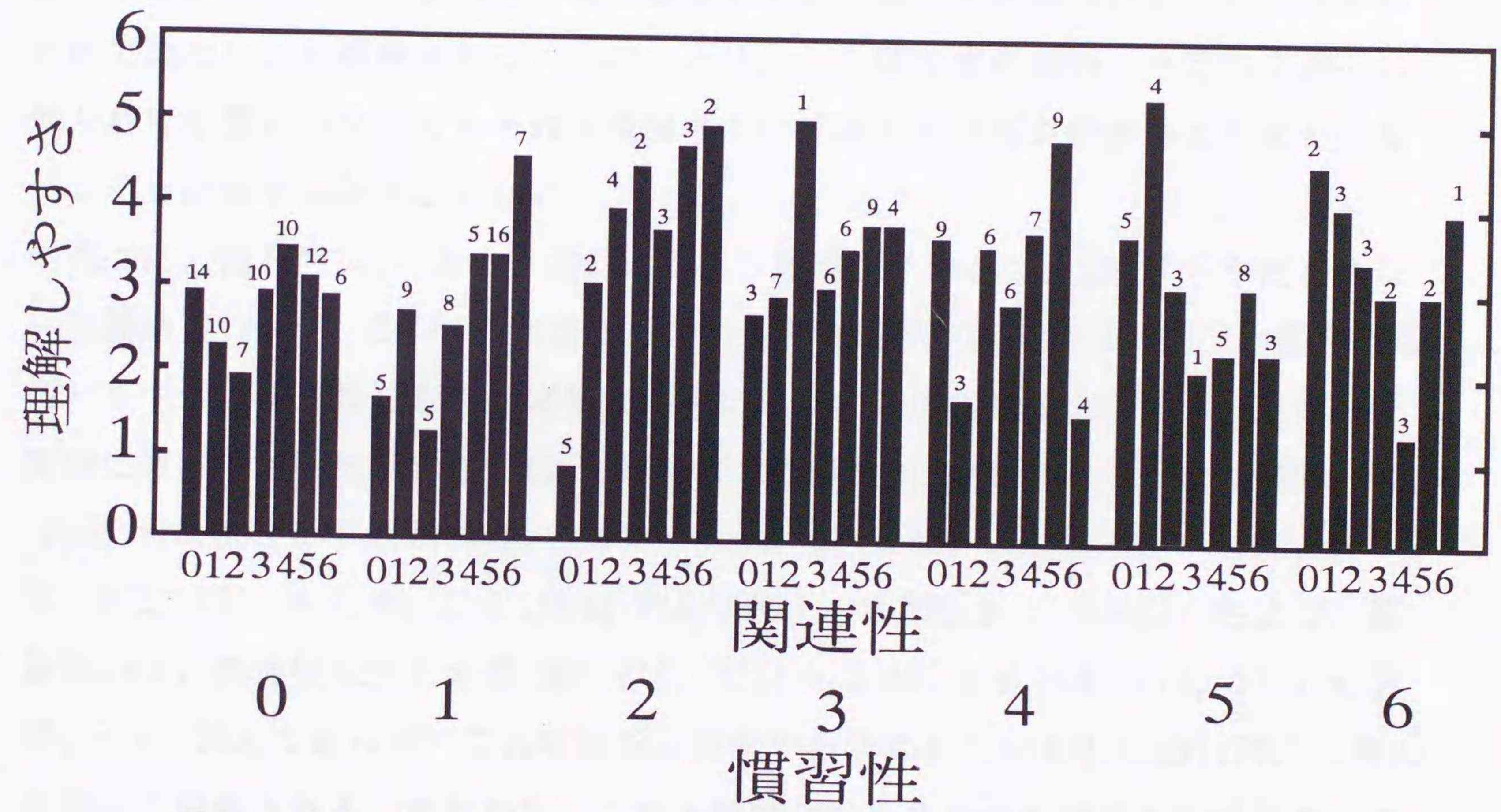


Figure 9.1 慣習性の水準ごとに見た，理解しやすさに及ぼす関連性の効果．グラフ上の数値は慣習性×関連性の水準ごとの，理解しやすさ評定値のデータの頻度を示す． 関連性，慣習性の各数字は，それぞれの評定尺度上の目盛りと対応している．関連性の各数字は，0=“とても思いつきにくい”から，6=“とても思いつきやすい”までのカテゴリーを表す．慣習性の各数字は，0=“ほとんど使われない”から“6：非常によく使われる”までのカテゴリーを表す．また，理解しやすさは，0=“とても分かりにくい”から6=“とても分かりやすい”までの値をとる．

ある．すなわち“ほとんど使われない”隠喩文はその述語に関連するどのような文脈語が提示されていたとしても理解しやすさは変わらない．実際，“ほとんど使われない”隠喩文の場合，関連性の二つの水準の組合せのうち，それらの間の差が10%以下の有意水準で有意であるものは，関連性2と4との間($F(1, 221) = 3.83$, $p < .05$)以外には見られなかった．この結果から，“ほとんど使われない”隠喩文の理解のされ方は，他の隠喩文の理解のされ方とは異なることが示唆される．実際，“ほとんど使われない”隠喩文(たとえば“～はビードロ細工である”［慣習性評定値平均 .33］)の理解しやすさ評定値は他の隠喩文のそれより低い傾向があった($F(1, 221) = 3.27$, $p < .07$)．人は新奇な“ほとんど使われない”隠喩文を理解するとき，どのような文脈語も述語の属性と関連づけようとしなかったのではないかと推察される．このことは，この隠喩文の場合，一定の文脈下に置かれても置かれなくてもそれを理解するのに要する処理負担があまり変わらないことを示唆するかもしれない．

第二に，慣習性1の“あまり使われない”隠喩文，および，2の“やや使われない”隠喩文(たとえば“～は会話である”［慣習性評定値平均 1.67］)の場合，理解しやすさは関連性の程度の増加とともに単調に増加する傾向がある．ただし，実際に有意差が認められたのは，関連性0と関連性2以上の各水準との間(順に$F(2, 221) = 3.99$, $p < .02$; $F(2, 221) = 3.80$, $p < .02$; $F(2, 221) = 4.05$, $p < .02$; $F(2, 221) = 6.90$, $p < .001$; $F(2, 221) = 8.78$, $p < .0002$)，および，関連性1と6，関連性2と6との間(順に$F(2, 221) = 3.15$, $p < .04$; $F(2, 221) = 5.95$, $p < .003$)であった．この結果は，従来から言われているOrtony(1979)の考えに則って説明される．すなわち，これら隠喩文は，まったく新奇な文ではないため，文脈語の関連性の程度が増すほどそれを手がかりに述語の顕著な属性を主語に適用できるようになったのではないかと推察される．

第三に，慣習性5の“かなりよく使われる”，および，6の“非常によく使われる”隠喩文の場合，理解しやすさは関連性の強さに応じＵ字型に変化する傾向がある．これら隠喩文の場合，その述語と関連性の高い(5,6)文脈語か，逆に関連性の低い(0,1,2)文脈語が提示されているときの方が，関連性が中程度(3,4)の文脈語が提示されているときより，理解しやすい傾向が見られた($F(2, 221) = 2.28$, $p < .10$)．この結果も，Ortony(1979)の考えに従い，隠喩文が慣習的であるほど，

理解時に引き出す顕著な属性の種類が一定するとすれば説明される．慣習性の高い隠喩文の述語の，顕著な属性と類似しているであろう，関連性の高い文脈語が与えられている場合，それを手がかりにできる上に，その慣習性の高い隠喩文の述語からもともと特定の顕著な属性を引き出しやすいのであるから，その隠喩文を理解しやすいのは当然であろう．また，たとえ関連性の低い文脈語が提示された場合であっても，慣習性の高い隠喩文は顕著な属性を特定しやすい隠喩文であるので，文脈語をその隠喩文の述語の属性と関係づけることなくたやすく理解し得ると説明される．一方，中程度に関連のある文脈語が提示されていると，人はその文脈語が慣習性の高い隠喩文の述語の顕著な属性と関係があると思うのであるが，その述語の顕著な属性とは少し異なるので，それらの間に微妙なミスマッチを生じさせてしまいかえって理解しにくくなると考えられる．たとえば“～は航海である”の“航海”からは“長い”，“波乱万丈”といった属性が引き出され解釈に利用されると思われるが，その際文脈中に“苦しい”のような文脈語が提示されていると，それが逆に理解の妨げになる，と説明される．

適切さの評定値　理解しやすさの評定値の場合と同様にして，適切さを基準変数，カテゴリー・レベル，関連性，慣習性の三つを説明変数とする3要因の分散分析を行った．しかし，5%以下の有意水準に達する主効果，交互作用が見られたにもかかわらずモデル全体のF値は5%以下にならなかった($F(84, 185) = 1.27$, $p < .09$)．この理由は実際には適切さに影響を与えない要因をモデルに含めたためと判断される．そこで，この分析で考慮したあらゆる主効果と交互作用を一つずつ取り出し検定を行なったところ，慣習性の要因は，主効果およびそれを含む交互作用のいずれも有意ではないことが分かった．そこで慣習性を説明変数から省き改めて2要因分散分析を行なったところ，モデル全体のF値は有意となった($F(13, 256) = 2.43$, $p < .004$)．個々の効果について調べた結果，カテゴリー・レベルの主効果は見られなかった($F(1, 256) = .36$, $p > .55$)が，関連性の主効果，カテゴリー・レベル×関連性の交互作用が認められた(順に$F(6, 256) = 2.27$, $p < .04$; $F(6, 256) = 2.86$, $p < .01$)．

関連性の水準ごとにカテゴリー・レベルの単純主効果を調べてみた．Figure 9.2に，関連性の水準別に見たカテゴリー・レベルごとの適切さの評定値を示す．Figure 9.2において，適切さの数値0は“まったく適切でない”を，1は“あまり

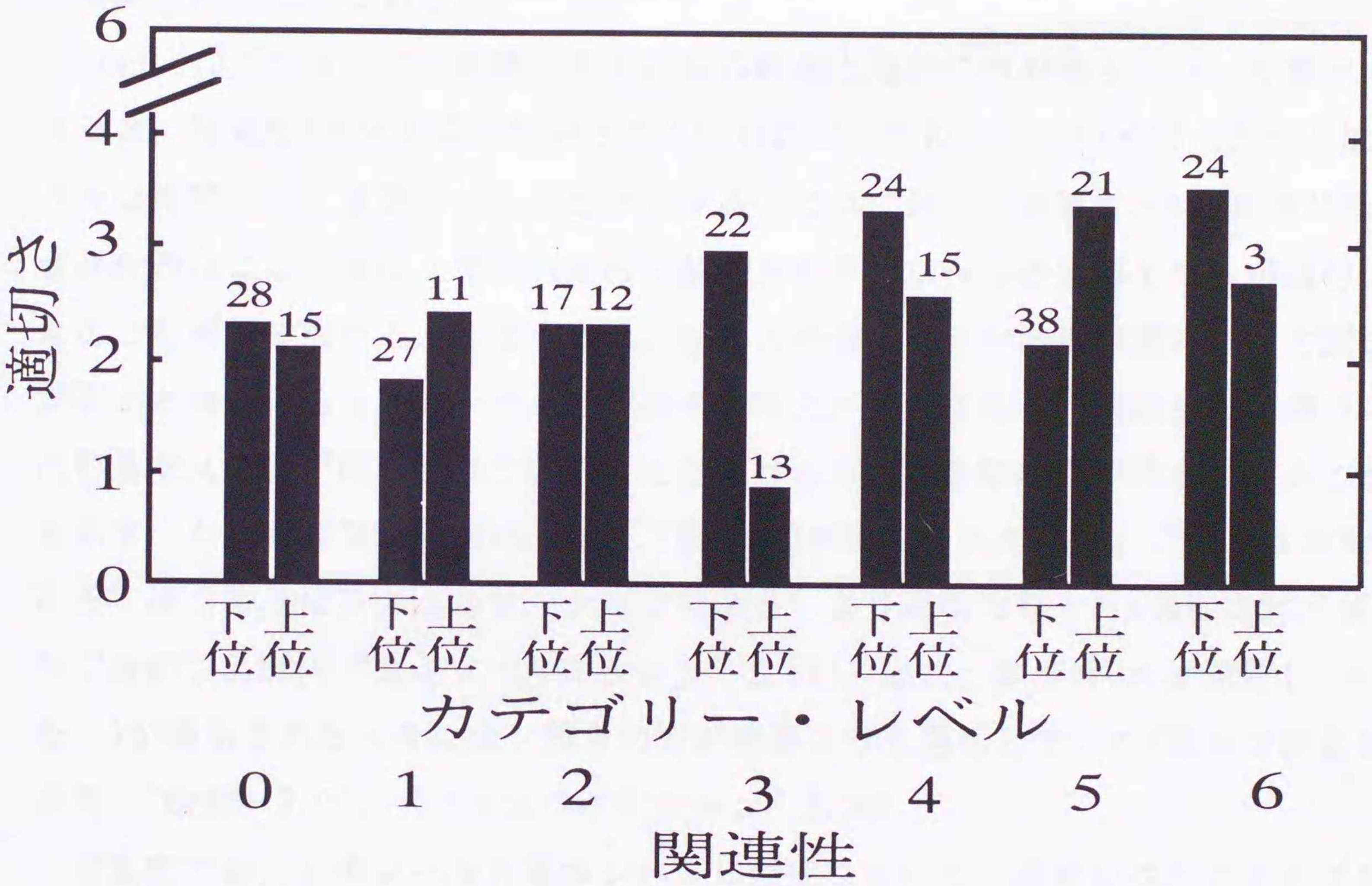


Figure 9.2　関連性の水準ごとに見た，適切さに及ぼすカテゴリー・レベルの効果．グラフ上の数値は関連性×カテゴリー・レベルの水準ごとの，適切さ評定値のデータの頻度を示す．関連性の各数字は，評定尺度上の目盛りと対応している．関連性の各数字は，0=“とても思いつきにくい”から，6=“とても思いつきやすい”までのカテゴリーを表す．また，適切さは0=“まったく適切でない”から6=“とても適切である”までの値をとる．

適切でない”を，2は“やや適切でない”を，3は“どちらでもない”を，4は“やや適切である”を，5は“かなり適切である”を，6は“とても適切である”をそれぞれ示す．また，関連性の七つの数字は，それぞれ，Figure 9.1の中の関連性の対応する数字と同じ意味を表す．Figure 9.2の中で，有意差が見られたのは，関連性3の“どちらでもない”文脈語が提示された場合($F(1, 256) = 9.80$, $p < .002$)，関連性5の“かなり思いつきやすい”文脈語が提示された場合($F(1, 256) = 4.86$, $p < .03$)であった．

Figure 9.2において，単純主効果の見られた上述の二つの場合について調べてみると，関連性3の文脈語が提示された場合には，下位レベルの述語の方が上位レベルの述語よりも適切であることが分かる．これに対し，関連性5の文脈語が提示された場合には，逆に上位レベルの述語の方が下位レベルの述語よりもが適切になることが見て取れる．このことは，述語との関連づけがある程度可能な文脈語が提示されていると下位レベルの述語の隠喩文が適切になり，述語との関連づけの容易な文脈語が提示されていると上位レベルの述語の隠喩文が適切になることを示す．たとえば関連性3の文脈語(“驚く”)が提示されたとき，“香りは会話である”は“香りはコミュニケーションである”より適切となった(適切さ評定値平均“会話”5.00，“コミュニケーション”2.67)．逆に，関連性5の文脈語(“楽しむ”)が提示されたときには，後者の方が前者よりも適切となった(適切さ評定値平均 “会話”3.00，“コミュニケーション”4.00)．

本実験では，上位レベルを基本レベルに設定していた．基本レベルのカテゴリーは，その成員の多くが共有し合う属性群を，他のレベルのカテゴリーよりも多く含む(Rosch, et al., 1976)．関連性の高い文脈語の手がかりがある場合の方が，そのような属性群の中から，理解に使われる属性群を特定しやすかったのではないかと推察される．そのために，関連性の高い文脈語を含む文脈下で，上位レベルのカテゴリーを指示する述語を含む隠喩文が，より適切となったのかもしれない．また，下位レベルのカテゴリーは上位レベルのカテゴリーにはない比較的顕著な示差的な属性群を含む．たとえば，“ウィスキー”は“酒”にはない“高価な”のような属性を含む．関連性の中程度の文脈語がある場合には，こうした示差的な属性が理解に使われることが多かったのではないかと推測される．そのために，下位レベルのカテゴリーを指示する述語をもつ隠喩文の方が適切になった

のかもしれない．

9.3 理解しやすい隠喩文と適切な隠喩文

本研究では，隠喩として受けとられる文の隠喩としての“理解しやすさ”と“適切さ”が，隠喩文の述語の“カテゴリー・レベル”の違い，文脈の種類すなわち隠喩文の述語と関連する文脈中の“文脈語”に対する述語の“関連性”の違い，および，隠喩文の“慣習性”の相違，に従って変わるか否かを調べた．その結果，“理解しやすさ”には，文脈語に対する関連性と隠喩文の慣習性との交互作用のみが関わることが見いだされた．さらに詳しく分析を行ったところ，(1)隠喩文の慣習性がきわめて低い場合，関連性の程度によらず理解しやすさは一定であること，(2) ある程度慣習性が低い場合には，関連性の程度の増加とともに，理解しやすさは単調に増加する傾向があること，(3) 慣習性の高い場合には，関連性が高いか逆に低い場合の方が，中程度の場合より理解しやすさの程度が高くなる傾向があることが見いだされた．これらのうち(2)，(3)の結果は，Ortony(1979)の考えを敷衍することにより説明される．一方，“適切さ”には，文脈語に対する関連性の主効果および隠喩文の述語のカテゴリー・レベルと関連性との交互作用が関与していることが見いだされた．詳細な分析の結果，関連性が中程度である場合には，下位レベルのカテゴリーを表す述語の隠喩文の方が適切となり，関連性が高い場合には，逆に，上位レベルの述語の隠喩文の方が適切になることが分かった．この結果は，上位レベルに設定していた基本レベルのカテゴリーの性質に基づいて説明される．

こうした本研究の結果から直接，隠喩としての“理解しやすさ”と“適切さ”との関係について何らかの結論を導くのは難しいかもしれない．しかし，本研究で得られた個々の隠喩文に対する，理解しやすさの平均評定値および適切さの平均評定値から，次のようなことが示唆される．理解しやすいが適切ではない隠喩文とは，Ortony(1979)の言う“顕著性の不均衡”を生じさせる主語・述語間の共有属性の数が多く，文脈・状況によっては隠喩的な意味をもつと受けとれなかったり，話者の意図とは異なる隠喩的意味に受けとられたりするものであると言えるかもしれない．たとえば“瞳はダイヤモンドである”（理解しやすさ評定値平均

4.11, 適切さ評定値平均 .67)がその例である. また, 逆に適切ではあるが理解しにくい隠喩文とは, 顕著性の不均衡のきわだって大きい共有属性はないが共有属性の数が少なくどの共有属性が不均衡を生じさせているか特定できるものなのではないかと推察される. たとえば“心はガラス細工である”(理解しやすさ評定値平均 2.89, 適切さ評定値平均 5.00)のようなものがそれにあたるであろう.

最後に, 本研究は, 隠喩としての適切さに, カテゴリー・レベルの違いが影響することを示したが, 文脈(関連性)および慣習性の要因を厳密に統制していなかった. 今後はこれらの要因を統制した上で, カテゴリー・レベルの違いあるいはその他自然カテゴリーの性質のもたらす影響をより厳密に調べていくことが必要になるであろう.

第10章　日本語の基本カテゴリーと隠喩文の理解しやすさ（実験論文）

10.1 主語，述語のカテゴリー・レベルと理解しやすさ

前章では，名詞述語文形式の文の隠喩としての適切さが，その述語のカテゴリー・レベルの違いに影響されるが，隠喩としての理解しやすさは，カテゴリー・レベルの違いにはよらないことが示唆された．しかし，前章の研究では，カテゴリー・レベルに加え，関連性(文脈)，慣習性の要因も同時に考慮されていたため，カテゴリー・レベルが，理解しやすさおよび適切さに与える効果を，厳密に調べられなかった可能性もある．そこで，本章では，カテゴリー・レベルをより厳密に統制し，隠喩としての理解しやすさにカテゴリー・レベルの違いが影響するかどうか，するとすればどのように影響するかについて，より精密な実験的考察を行うことにした．前の研究では，基本レベルとその下位のレベルの二つのカテゴリー・レベルを設けていたが，本研究では，基本レベルを中心に，その上位レベル，下位レベルの三つのレベルを実験的に設定する(実験Ⅰ(a)，(b))．また，先の研究では，述語Bのカテゴリー・レベルのみを考察の対象としていたが，本研究では，述語Bに加え，主語Aのカテゴリー・レベルも考慮する．すなわち，隠喩文の主語A，述語Bのカテゴリーのレベルを，上位レベル，基本レベル，下位レベルのいずれかに変えることにより，(1)の名詞述語文形式をとる文の隠喩としての理解しやすさが影響を受けるかどうかを調べる(実験Ⅱ)．

(1)　AはBである．(A，B: 名詞)

主語Aと述語Bのカテゴリー・レベルを同時に変化させることによって，それらのカテゴリー・レベルと，文の隠喩としての理解されやすさあるいは適切さとの関係を実験的に調べた研究はまだ行われてきていない．ただ，Ortony(Ortony, 1979; Ortony, Vondruska, Foss, & Jones, 1985)は，主語Aと述語Bとの比喩的な類似性，すなわち“A is (like) B”の形式の文(隠喩として理解される)の中に置かれたAとBとが似ていると判断される程度が，主語Aの属性の顕著性の測度ではな

く，主に述語Bの属性の顕著性の測度によって決まると指摘してきている．AとBとの比喩的類似性が大きいほど隠喩として理解されやすい(Tversky, 1977)．それゆえ，Ortonyの指摘は，間接的ながら，隠喩としての理解されやすさが，主語Aのカテゴリー・レベルの違いによる属性の顕著性の変動よりも，むしろ述語Bのカテゴリー・レベルの違いによる属性の顕著性の変動によって変わることを予測する．

そこで，本研究では，以下のような実験を行うことにした．まず実験Ⅰ(a)，Ⅰ(b)の二つに実験において，互いにクラス包含関係にあるような，“上位レベル－基本レベル－下位レベル”の三つのレベルからなる日本語の名詞のカテゴリー概念の系列には，具体的にどのようなものがあるのかを調べてみる．続いて，実験Ⅱにおいて，それら系列の中の名詞を用い，“AはBである”の形式をもつ文を作り，それらを隠喩として受け取らせるような文脈下で，それらの文の隠喩としての理解しやすさが，主語，述語のカテゴリー・レベルの違いによって変わるかどうか，変わるとすればどのように変わるかを考察する．

10.2 カテゴリー系列の同定：実験Ⅰ(a)

実験Ⅰ(a)の目的は，日本語の名詞のカテゴリー概念の体系の中に，どのようなカテゴリーの系列が存在するのかを調べることである．

方法

被験者　大学生60名であった．

材料　新聞の語彙調査(Ⅳ)(国立国語研究所編，1973)にリストされている単語(総数19万語)の中から，総頻度が30以上ある名詞50語を刺激語としてランダムに選んだ．このようにして選んだ理由は，被験者にとって馴染みのない単語を刺激語として選択することを避けるためであった．これら50の名詞をもとに小冊子を作った．

小冊子の1ページ目には教示が印刷されている．2ページ目以降には，各行の左端に刺激語(名詞)，その右側に回答記入欄が設けられ，行ごとにアンダーラインが付されている．刺激語の提示順序は小冊子ごとにランダムにされている．

手続き　実験は集団で実施された．被験者は50の刺激語のリストを提示され，

それぞれの刺激語について以下の二つの課題を行うよう求められた．第一の課題は，刺激語から，それを含む名詞の系列を作ることであった．刺激語は，系列の中のどこに置いてもよいが，系列中の隣あう名詞どうしは，互いに上位・下位関係になるように，すなわち，左側の名詞が右側の名詞を含むようになっていなければならない，とされた．たとえば，被験者は，“野菜”に対し，“植物－野菜－トマト－ミニトマト”というような回答を書き込んだ．その際，系列中の名詞の中に，提示された名詞を必ず含めること，一つの系列の名詞の数をできる限り三つ以上にすること，および，系列中の名詞は単一の名詞とし，奇妙な名詞を造語したり修飾語句のついた名詞句を作ったりしないようにすること，が被験者に要求された．

第二の課題は，第一の課題で考えた系列の中の名詞に順位をつけることであった．被験者は，普段の生活の中で最もよく使っているように思えるものを1番とし，その次に使っているものを2番というように順位付けするように教示された．たとえば，被験者は，先ほどの“野菜”に対する第一の課題の反応に対し，

③	①	②	④
植物	野菜	トマト	ミニトマト

というように順位をつけた．

第一，第二の課題のいずれに対しても，被験者は制限時間を課されなかった．

結果と考察

合計3000のデータを得，それらを以下のように集計した．まず，日常生活の中で最も“よく使う”と判定された名詞をリストし，その中から反応頻度が10以上あるものを選択した．次に，選択した名詞のそれぞれに対し，“上位レベル”にあるとされた名詞，“下位レベル”にあるとされた名詞をリストし，その中から反応頻度が5以上のものを選んだ．

その結果，50の刺激語のうち23について，“上位レベル”の名詞－“よく使う”名詞－“下位レベル”の名詞の系列が同定された．Table 10.1に，これら23の系列が“よく使う”名詞の産出頻度の高いものから順に示されている．この中には，

Table 10.1
“上位レベル”とされる名詞－“よく使う”とされる名詞－下位レベルとされる名詞

刺激語	“上位レベル”の名詞(反応頻度)[a]	“よく使う”名詞(反応頻度)[b]	“下位レベル”の名詞(反応頻度)[c]
映画	娯楽(7)	映画(41)	洋画(8)
自動車	乗り物(11)，機械(8)	自動車(41)	エンジン(5)，トヨタ(5)
新聞	紙(5)，マスコミ(5)	新聞(40)	記事(7)，スポーツ新聞(5)
地震	天災(20)，災害(9)	地震(40)	北海道南西沖地震(6)，関東大震災(6)，津波(6)
太陽	恒星(11)，太陽系(11)，宇宙(5)	太陽(39)	黒点(6)
人間	哺乳類(13)，生物(8)，動物(5)	人間(39)	男(7)
砂糖	調味料(22)	砂糖(38)	グラニュー糖(11)，黒砂糖(7)
電話	通信(11)，通信機器(7)	電話(38)	コードレスホン(8)
パチンコ	ギャンブル(12)，娯楽(7)	パチンコ(38)	フィーバー台(6)
花	植物(24)	花(38)	薔薇(11)，ひまわり(6)，チューリップ(6)
肉	食物(18)，牛(5)	肉(34)	牛肉(17)
祭	行事(9)	祭(30)	ねぶた祭(7)，みこし(6)
野菜	食物(20)，植物(6)	野菜(30)	キャベツ(6)
スポーツ	運動(5)	スポーツ(29)	サッカー(6)，競技(6)
三越	建物(7)	デパート(29)	三越(28)
火事	災害(10)	火事(28)	山火事(6)，消防車(5)
歌	音楽(8)	歌(26)	演歌(6)
ガス	気体(8)	ガス(24)	プロパンガス(6)
ピストル	武器(8)	ピストル(24)	ワルサーＰ３８(5)
レストラン	飲食店(5)	レストラン(24)	ファミリーレストラン(7)
ピアノ	楽器(10)	ピアノ(19)	グランドピアノ(7)
ビタミン	栄養(8)	ビタミン(14)	ビタミンＣ(8)
シャンソン	音楽(5)	歌(10)	シャンソン(9)

[a] 反応頻度5以上の反応をリストした．
[b] 反応頻度10以上の反応をリストした．
[c] 反応頻度5以上の反応をリストした．

刺激語“映画”に対する“娯楽[7]－映画[41]－洋画[8]”(以下[]内の数字は反応頻度を表す)，“花”に対する“植物[24]－花[38]－薔薇[11]，ひまわり[6]，チューリップ[6]”，“シャンソン”に対する“音楽[5]－歌[10]－シャンソン[9]”などがあった．ただし，系列の中には，“上位レベル”または“下位レベル”の名詞と“よく使う”名詞との間に，実際には上位・下位関係(クラス包含関係)とは異なる関係をもつものも含まれている．たとえば，“自動車－エンジン”，“太陽－黒点”などのような全体・部分関係，あるいは，“地震－津波”，“祭－みこし”などのような随伴関係をもつものがそれである．

Table 10.1にリストされていない27の刺激語のうち，“料理”，“ソニー”など，12は“上位レベル”の名詞，“下位レベル”の名詞のいずれも見いだされなかった．また，“小説”，“学校”など，15はいずれか一方のみが見いだされた．これら27の刺激語において，“上位レベル”または“下位レベル”の名詞が同定されなかった理由は，“学校”や“ソニー”などの場合のように，刺激語自体が上位(または下位)レベルのカテゴリーを指示していたためそれより上位(または下位)レベルの名詞を反応しにくかったか，あるいは，“料理”や“小説”などの場合のように多くの下位レベルのカテゴリーがあり得，反応が分散したためと考えられる．

Table 10.1を見ると，23の系列のほとんどで，刺激語自体が“よく使う”名詞としてリストされているのが分かる．それゆえ，系列中の“よく使う”名詞が基本カテゴリーであると断定することはできない．そこで，実験Ⅰ(b)では，実験Ⅰ(a)の被験者とは別の被験者に，Table 10.1の23の系列のうち上位・下位関係のみで構成されている18の系列を提示し，系列ごとによく使う順に番号をつけさせ，“よく使う”名詞が実際に基本カテゴリーになっているか否かを確認する．

10.3 基本カテゴリーの確認：実験Ⅰ(b)

実験Ⅰ(b)の目的は，実験Ⅰ(a)において同定された日本語の名詞のカテゴリー概念の系列の中央にある“よく使う”名詞が基本カテゴリーか否かを調べることである．

方法

被験者　大学生30名であった．いずれも実験Ｉ(a)の被験者とは異なる．

材料　以下のような小冊子を作った．1ページ目には教示が印刷されている．2ページ目の各行には，実験Ｉ(a)において同定された，上位レベルの名詞－“よく使う”名詞－下位レベルの名詞の系列23のうち18がアンダーライン付きで印刷されている．残り五つの系列は上位・下位関係とは異なる関係を含んでいたか，あるいは，同一の単語を含む系列が他にあったために除かれた．系列の提示順序および系列の方向(上位レベルの名詞が左に来るかまたはその逆)は小冊子ごとにランダムにされている．

手続き　実験は個別に行われた．被験者は3つの名詞からなる18の系列を提示された．被験者は，系列ごとに，日常生活の中で最もよく使っているように思えるものを①，その次によく使っているように思うものを②，その次を③，というように順番をつけるよう求められた．同程度によく使うように思うものに対しては同じ順位をつけることが認められた．その際，①，①，③あるいは①，②，②というように，順位をつけるよう教示された．制限時間はとくに設けられなかった．

結果と考察

Table 10.2に，基本カテゴリーを中心とした日本語の語彙のカテゴリー系列が示されている．上位レベルのカテゴリーを指示する名詞および下位レベルのカテゴリーを指示する名詞のいずれよりも有意に低い平均順位をもつ“よく使う”名詞が，基本カテゴリーを指示する名詞であり，その名詞を含む系列が基本カテゴリーを中心とした日本語の語彙のカテゴリー系列になっていると考えられる．提示された18の系列のうち，実際にその条件にあてはまる系列は，“娯楽－映画－洋画”や“乗り物－自動車－トヨタ”など，12であった．残り六つの系列のうち，“ギャンブル－パチンコ－フィーバー台”は，有意でない関係を含むが上に述べた条件に該当する系列であった．しかし，“音楽－歌－演歌”や“武器－ピストル－ワルサーP38”など，四つの系列では，上位レベルの名詞の方が“よく使う”名詞よりも平均順位が有意に低かった．また，“哺乳類－人間－男”では，“よく使う”名詞“人間”より“下位レベル”の名詞“男”の方が平均順位が有意に低かった．

Table 10.2
基本カテゴリーを中心とした日本語の語彙のカテゴリー系列

上位レベルの名詞(平均順位)		“よく使う”名詞[a](平均順位)		下位レベルの名詞(平均順位)
娯楽(2.63)****		映画(1.17)		洋画(2.17)****
乗り物(2.10)****		自動車(1.46)		トヨタ(2.47)****
マスコミ(1.93)****		新聞(1.23)		スポーツ新聞(2.77)****
天災(2.17)****		地震(1.07)		関東大震災(2.63)****
哺乳類(2.77)****		人間(1.57)	>[c]	男(1.53)
調味料(1.80)***		砂糖(1.33)		グラニュー糖(2.83)****
通信機器(2.73)****		電話(1.10)		コードレスホン(2.03)****
ギャンブル(1.67)*		パチンコ(1.37)		フィーバー台(2.97)****
植物(2.00)****		花(1.33)		薔薇(2.43)****
行事(1.60)		祭(1.40)		ねぶた祭(2.87)****
食物(2.23)****		野菜(1.43)		キャベツ(2.23)****
運動(2.17)***		スポーツ(1.60)		サッカー(2.00)*
災害(2.00)****		火事(1.13)		山火事(2.77)****
音楽(1.33)***	<[b]	歌(1.70)		演歌(2.97)****
武器(1.47)	<	ピストル(1.53)		ワルサーＰ３８(2.80)****
飲食店(2.43)****		レストラン(1.30)		ファミリーレストラン(2.17)****
楽器(1.40)	<	ピアノ(1.57)		グランドピアノ(3.00)****
栄養(1.60)*	<	ビタミン(2.07)		ビタミンＣ(2.17)

****$p < .0001$, ***$p < .001$, **$p < .01$, *$p < .05$

[a] 上位レベルのカテゴリーを指示する名詞および下位レベルのカテゴリーを指示する名詞のいずれよりも有意に低い平均順位をもつ“よく使う”名詞が基本カテゴリーを指示する名詞になる.

[b] 上位レベルのカテゴリーを指示する名詞の方が平均順位が低いことを示す.

[c] 下位レベルのカテゴリーを指示する名詞の方が平均順位が低いことを示す.

Rosch, Mervis, Gray, Johnson, and Boyes-Braem(1976)は，いくつかの英語の語彙のカテゴリー系列を見いだしている．彼女らの見つけた英語の語彙のカテゴリー系列がTable 10.3に示されている．Table 10.2とTable 10.3とを比較すると，一見して英語の方が二つの単語からなる下位レベルのカテゴリーが多いのが分かる．しかし，これは，単に日本語では，“洋画”や“コードレスホン”などように，一種の省略表記によって短い合成語を容易に作り出せるためと考えられる．

彼女らの挙げた六つの上位レベルのカテゴリーのうち“clothing(衣類)”，“furniture”に相当する日本語の刺激語として，実験Ⅰ(a)では“衣服”，“家具”が使われたが，“衣服”には上位レベルの単語も下位レベルの単語も同定されず，“家具”には下位レベルの単語“タンス”が見いだされただけであった．この理由は，“衣服”と“clothing”，“家具”と“furniture”との間に微妙な語感の違いがあったためかもしれない．“衣服”よりも“洋服”の方が“clothing”に意味的により近いと考えられる．“洋服”であれば“clothing”と似た系列が同定されていたかもしれない．また，“furniture”は椅子やテーブルのような動かせる家の備品のことを言うことが多い(リーダーズ英和辞典，1984)．実際，Table 10.3中の，“furniture”の基本レベルの事例“Table”，“Lamp”，“Chair”はすべてその説明にあてはまる．一方，日本語の“家具”は逆にどっしりとした動かせない家の備品のことを言うことが多いように思われる．その好例が，実験Ⅰ(a)で実際に見いだされた“タンス”であろう．日本語，英語を問わず，意味上似てはいるがニュアンスの異なる多くの単語がある．上の比較は，そうした単語のうちのどれを選ぶかによって，同定されるカテゴリーの系列が大きく変わるということを示唆するかもしれない．

Table 10.2中の“植物－花－バラ”や“食物－野菜－キャベツ”などから判断すれば，日本語のカテゴリー“果物”は基本レベルにあるものと推察される．しかし，Table 10.3中では，“Fruit”は上位レベルとされており，日本語の“果物”を含むカテゴリーの系列と英語の“Fruit”を含む系列とはレベルが一つずれるように思われる．Rosch et al.は，Table 10.3中のカテゴリー系列から推測すれば上位レベルのカテゴリーであるように思える“Tree”，“Fish”，“Bird”などといった生物学的カテゴリーが，実際には基本カテゴリーであることを見いだした．そして，それらの下位レベルに，ぞれぞれたとえば“Maple”や“Oak”，

Table 10.3
基本カテゴリーを中心とした英語の語彙のカテゴリー系列(Rosch, et al., 1976, より)

上位レベルのカテゴリー	基本レベルのカテゴリー	下位レベルのカテゴリー	
Musical instrument	Guitar	Folk guitar	Classical guitar
	Piano	Grand piano	Upright piano
	Drum	Kettle drum	Base drum
Fruit	Apple	Delicious apple	Mackintosh apple
	Peach	Freestone peach	Cling peach
	Grapes	Concord grapes	Green seedless grapes
Tool	Hammer	Ball-peen hammer	Claw hammer
	Saw	Hack hand saw	Cross-cutting hand saw
	Screwdriver	Phillips screwdriver	Regular screwdriver
Clothing	Pants	Levis	Double knit pants
	Socks	Knee socks	Ankle socks
	Shirt	Dress shirt	Knit shirt
Furniture	Table	Kitchen table	Dining room table
	Lamp	Floor lamp	Desk lamp
	Chair	Kitchen chair	Living room chair
Vehicle	Car	Sports car	Four door sedan car
	Bus	City bus	Cross country bus
	Truck	Pick up truck	Tractor-trailer truck

“Trout”や“Salmon”，“Eagle”や“Sparrow”，といったカテゴリーがあることを見つけた．日本語のカテゴリー体系では，“果物”は，より生物学的カテゴリーに近いために，基本レベルになるのかもしれない．

とはいえ，全体的に見れば，Table 10.2の日本語の語彙のカテゴリー系列とTable 10.3の英語の語彙のカテゴリー系列との間には極端に大きな違いはないように見受けられる．第8章でも触れたように，隠喩文の理解は，Table 10.2やTable 10.3に例示されるようなカテゴリーの体系によって支えられている(Glucksberg & Keysar, 1990; Lakoff & Johnson, 1980)．日本語の語彙のカテゴリーの体系と英語のそれとの間にさほど大きな違いがないということは，それらがそれぞれ支えている隠喩文の理解のあり方に多くの言語普遍性(language-universal)が存在することを示唆するかもしれない．

10.4 カテゴリー・レベルの効果の測定：実験II

実験IIの目的は，“AはBである”の形式をとる文が，隠喩として受け取られる場合，それらの文の隠喩としての理解しやすさが，主語A，述語Bのカテゴリー・レベルの違いによってどのように変化するかをを調べることである．

方法

被験者　大学生109名であった．

材料　実験I(a)および(b)において同定された，上位レベル，基本レベル，下位レベルの名詞からなる12の系列から10を選び二つずつ組み合わせ，一方を主語の系列，他方を述語の系列とし，5つのグループを作った．そして，グループごとに“AはBである”の形式のターゲット文を九つ作った．結局，ターゲット文は合わせて45文作られたことになる．どのターゲット文も文脈から単離されて与えられた場合には文字通りにも隠喩的にもたやすく受け取られることのないようにした．たとえば，(2)a, b, c, d, e, f, g, h, iがその例である．

(2)　a.　飲食店は植物である．
　　 b.　飲食店は花である．

c.　飲食店は薔薇である.

d.　レストランは植物である.

e.　レストランは花である.

f.　レストランは薔薇である.

g.　ファミリーレストランは植物である.

h.　ファミリーレストランは花である.

i.　ファミリーレストランは薔薇である.

さらに，三つの主語のいずれにもあてはまる話題からなり，しかもその話題を三つの述語で共通にたとえることのできるような文脈を作った．文脈は，述語およびその属性に直接言及する表現を含まないようにした．たとえば，(2)d，e，fに対しては次のような文脈を考えた.

(3)　飽食の時代と言われる中，レストランはますます繁栄しつつある．サラリーマンは一時の休息を求めてレストランを訪れる．レストランは恋人たちの格好のデートスポットでもある．今やレストランは都会人のオアシスになりつつある．レストランは人々にやすらぎとすがすがしさを与える.

(3)の文脈の後には(2)d，e，fのいずれかが続く．また，主語の異なる他のターゲット文の文脈については，文脈中に現れる元のターゲット文の主語をそれら他のターゲット文の主語と同じものに取り替えて作った．たとえば，(3)の文脈中の「レストラン」を「飲食店」，「ファミリーレストラン」に代えて作った.

このようにして作られた5グループ(1グループにつき三つの文脈，九つのターゲット文)すべてについて，認知心理学を専攻する大学院生5名に，それぞれ2回ずつ，ターゲット文を隠喩として確実に受け取り得るように文脈をチェックしてもらった．そして，彼らのアドバイスをもとに文脈を最小限修正した．なお，巻末の付録に実験Ⅱで用いられたすべての文脈とターゲット文(隠喩文)が示されている.

一つのグループから文脈とターゲット文を一つずつ，合計5組を選び，組ごとに小冊子を作成した．小冊子の1ページ目には教示が印刷されている．2ページ目に

は，練習試行用の文脈とターゲット文が印刷されている．3ページ目以降には，本試行用の文脈とターゲット文が，1ページにつき一組印刷されている．練習試行，本試行ともページの体裁は同じであり，各ページには三つの問が設けられている．問1には，当該文脈下におけるターゲット文の隠喩としての理解しやすさに対する評定尺度が印刷されている．また，問2には，ターゲット文の“言いかえ文”を記入する欄が設けられている．問2は文脈およびターゲット文を被験者が隠喩的に理解していることを確認するために与えられている．さらに，問3には，ターゲット文と同じ主語で，かつターゲット文と似た意味を表す別の隠喩文を記入する欄が印刷されている．問3の回答欄にはターゲット文の主語と助詞“は”があらかじめ印刷されており，被験者はその後に隠喩文の述語を続けて記入するようになっている．なお，文脈とターゲット文の提示順序は小冊子ごとにランダムにされている．

実験条件　主語のカテゴリー・レベル(上位，基本，下位)×述語のカテゴリー・レベル(上位，基本，下位)の2条件をともに被験者間要因とし各被験者にランダムに割り当てた．

手続き　実験は集団で行われた．被験者は，まず，六つの文(5文の文脈＋ターゲット文)からなるショートストーリーをじっくり読むように教示された．その際，ショートストーリーの最後の文がすべて隠喩であることをあらかじめ伝えられた．そして，まず，問1において，一番最後の文が隠喩としてどの程度理解しやすいかを7段階尺度上で評定するよう求められた．尺度の目盛りの内容は，左から順に，とても分かりやすい，かなり分かりやすい，やや分かりやすい，どちらでもない，やや分かりにくい，かなり分かりにくい，とても分かりにくい，であった．次に，問2において，一番最後の文をより直接的な別の言葉で説明するように求められた．さらに，問3において，一番最後の文と同じ主語をもちその意味にできるだけ近い意味になるような別の“AはBである”形式の隠喩文を書くように求められた．その際，“B”に修飾語句を付けてもよいが，必ず“AはBである”形式の隠喩文を記入するよう教示された．練習試行，本試行を通じ被験者はどの問に対しても制限時間を課されなかった．

結果と考察

理解しやすさ評定値　問2の言いかえ文または問3の隠喩文のまったく書かれていない3人のデータが，文脈とターゲット文の理解内容を確認できないとの理由で除外された．“とても分かりやすい”から“とても分かりにくい”まで順に0から6までの数値を割り当て，合計530の評定値データを得た．ターゲット文の主語のカテゴリー・レベル(上位，基本，下位)×述語のカテゴリー・レベル(上位，基本，下位)について2要因分散分析を行った．その結果，述語のカテゴリー・レベルの主効果のみが有意であった($F(2, 516) = 20.0$, $p < .0001$).

多重比較(Tukey法)の結果，述語のカテゴリー・レベルが基本レベルにある場合(平均評定値 = 2.79，SD = 1.66)の方が，下位レベルにある場合(平均評定値 = 3.78，SD = 1.71)よりも有意に低く評定された($p < .05$)．また，述語のカテゴリー・レベルが基本レベルにある場合の評定値は，上位レベルにある場合の評定値(平均評定値 = 2.83，SD = 1.57)よりも低かったが，それらの間に有意差は認められなかった．

下位レベルの述語の隠喩文は，下位レベルの述語にしかない示差的(distinctive)な属性があるために，その分他のレベルよりも理解しにくいと判断されたのかもしれない．たとえば，“飲食店(レストラン，ファミリーレストラン)は薔薇である”は，“薔薇”が，“トゲがある”のような，“植物”，“花”にはない“薔薇”に示差的な属性を含んでいたため，他のレベルの述語を含む隠喩文よりも理解しにくくなったと推測される．

さらなる分析を行った．主語のカテゴリー・レベルが述語のレベルと同じかまたは述語のレベルより低い場合(平均評定値 = 2.93，SD = 1.67)の方が，それ以外の場合(平均評定値 = 3.52，SD = 1.71)よりも有意に低かった($F(1, 516) = 14.8$, $p < .0001$)．加えて，主語のカテゴリー・レベルが述語のレベルより低いとき(平均評定値 = 2.78，SD = 1.60)の方が，主語のレベルが述語のレベルと同じとき(平均評定値 = 3.09，SD = 1.74)よりも有意に低い傾向が見られた($F(1, 516) = 2.86$, $p < .09$).

文字通りに“AはBである”の形式の文を理解する場合には，“$A \subseteq B$”，すなわち主語のカテゴリーAと述語のカテゴリーBとが同一であるかまたはBがAを含んでいなければならないという一種の“制約”を適用する(佐山・阿部，1990)．その際，Aのカテゴリー・レベルはBのレベルと同じか，それより低くなっている．上

の結果は，“AはBである”の形式の文を隠喩として理解する場合においても，文字通りに理解する場合と同様の“制約”を適用している可能性を示唆する．

産出された隠喩文　Table 10.4に，実験で提示された元の隠喩文すなわちターゲット文の意味と似た意味を表す隠喩文の述語として被験者によって挙げられた名詞の頻度が，元の隠喩文の述語ごとに合計されている．全体的に見て，複数の被験者によって同一の述語が産出される頻度はさほど多くなく，一つのターゲット文から様々に異なる述語が産出されていることが分かる．最も多い述語は，“(娯楽，映画，洋画)は新聞である”に対して産出された“ニュース”(9回)であった．また，2番目に多い述語は，“(飲食店，レストラン，ファミリーレストラン)は花である”に対して産出された“オアシス”(5回)であった．他はすべて4回以下であった．

Table 10.4から，提示された元の隠喩文の述語と同じカテゴリーの系列に属すると判断される述語(以下，系列語と呼ぶことにする)がどの程度産出されたかについて，次の2点を指摘できる．第一に，提示された元の隠喩文のグループによって，系列語が出現する頻度に大きなバラツキが見られた．たとえば，“レストランは花である”グループでは，“(飲食店，レストラン，ファミリーレストラン)は薔薇である”に対する“花”(2回)以外には系列語は産出されなかった．これに対し，“映画は新聞である”グループでは，“(娯楽，映画，洋画)はマスコミである”に対する“新聞”(4回)，“(娯楽，映画，洋画)は新聞である”に対する“ニュース”(9回)，“テレビ”(4回)など，多くが系列語であった．“レストランは花である”グループのターゲット文はそれの置かれた文脈下であまり適切と判断されていなかったために，系列語でない他の述語に取り替えられることが多かったのかもしれない．逆に，“映画は新聞である”グループのターゲット文は当該文脈下で比較的適切と判断されていたために，別の隠喩文に置きかえる際にも，元の隠喩文の述語と多くの属性を共有する系列語に取りかえられたのであろう．一般に，適切なターゲット文ほど，その述語を系列語に代えられることが多いと言えるのかもしれない．

第二に，産出された系列語の多くは基本レベルの名詞であった．この傾向は元の隠喩文の述語のカテゴリー・レベルの違いにはよらなかった．たとえば，“スポーツは火事である”グループでは，“火事”の上位レベルの述語“災害”の事

Table 10.4
提示された隠喩文と似た意味をもつ文として
産出された隠喩文の述語の頻度[a)]

提示された隠喩文(ターゲット文)のグループ 主語	述語	産出された隠喩文の述語(総頻度[b)])
“レストランは花である” グループ		
飲食店，レストラン，ファミリーレストラン	植物(33)	海(2)，砂漠の湖(2)
飲食店，レストラン，ファミリーレストラン	花(37)	オアシス*[c)](5)，公園(2)，草原(2)，天国(2)
飲食店，レストラン，ファミリーレストラン	薔薇(36)	公園(4)，オアシス*(2)，花(2)
“地震は野菜である” グループ		
天災，地震，関東大震災	食物(36)	栄養(2)，エネルギー(2)
天災，地震，関東大震災	野菜(36)	栄養剤(2)，薬(2)，食事(2)，ユンケル(2)
天災，地震，関東大震災	キャベツ(37)	肉(2)
“電話は砂糖である” グループ		
通信機器，電話，コードレスホン	調味料(34)	隠し味(2)，酒(2)
通信機器，電話，コードレスホン	砂糖(36)	塩(3)
通信機器，電話，コードレスホン	グラニュー糖(36)	調味料(4)，米(2)，砂糖(2)，友達(2)
“スポーツは火事である” グループ		
運動，スポーツ，サッカー	災害(31)	車の運転(4)，人生(3)，戦争(2)，将棋(2)
運動，スポーツ，サッカー	火事(39)	交通事故(2)，戦場(2)，戦争(2)，綱渡り(2)
運動，スポーツ，サッカー	山火事(36)	交通事故(2)，戦争(2)，綱渡り(2)
“映画は新聞である” グループ		
娯楽，映画，洋画	マスコミ(33)	新聞(4)，情報(2)，ワイドショー(2)
娯楽，映画，洋画	新聞(39)	ニュース(9)，テレビ(4)，ワイドショー(2)，雑誌(2)
娯楽，映画，洋画	スポーツ新聞(34)	ニュース(4)，テレビ(4)，鏡(2)

a) 頻度1の述語は省略した．
b) 述語ごとの，三つの主語を合わせた頻度である．
c) *印は実験で用いられた文脈中に同一の語があったことを示す．

例で，かつ基本カテゴリーを指示すると考えられる“戦争”，“交通事故”といった名詞が多く産出された．同様に，“映画は新聞である”グループでは，上位カテゴリー“マスコミ”の事例で，かつ基本カテゴリーと判断される“ニュース”，“テレビ”などが多く産出された．この結果は，一般に，上位レベルまたは下位レベルよりも，基本レベルのカテゴリーを指示する述語の方が隠喩文の述語として産出されやすい可能性を示唆する．

10.5 基本カテゴリーと隠喩文の理解しやすさとの関係

本研究は，隠喩文の主語，述語のカテゴリー・レベルを変えることにより，“AはBである”の形式をとる文の隠喩としての理解しやすさが影響を受けるかどうかを調べた．実験Ⅰ(a)，Ⅰ(b)では，日本語の語彙体系の中にも，英語のそれと似た，基本カテゴリーを基準としたカテゴリーの体系が存在することが確認された．実験Ⅱでは，隠喩文の述語Bが基本レベルにある場合の方が，下位レベルにある場合よりも理解しやすいことが示された．また，述語Bが基本レベルにある場合の方が，上位レベルにある場合よりも理解しやすい可能性があることも分かった．加えて，実験Ⅱでは，Bのカテゴリー・レベルがAのカテゴリー・レベルよりも高いか，またはBとAのカテゴリー・レベルが等しいときの方が，そうでない場合よりも理解しやすいことが示された．さらに，Bのカテゴリー・レベルがAのカテゴリー・レベルよりも高いときの方が，それらレベルが等しいときよりも理解しやすい傾向のあることが分かった．

上位レベル－基本レベル－下位レベルという三つのレベルからなるカテゴリーの系列は，人の長期記憶の基本的な構造の一つであると言える．実験Ⅱの結果を見る限りは，隠喩文の述語Bが基本カテゴリーである方が，その上位カテゴリーや下位カテゴリーであるよりも理解しやすい場合が多い．この理由は何であろうか?前章でも触れたように，基本カテゴリーは，その事例の多くが共有し合う属性群を，他のレベルのカテゴリーよりも多く含む(Rosch, et al., 1976)．“AはBである”形式の隠喩文によって伝えられる意味はこうした属性群にもとづいていると考えられる．上位カテゴリーはこのような属性群の一部を有するにすぎないから，上位レベルの述語の隠喩文を理解する場合，たとえ基本レベルの述語の隠喩文を

理解する場合と同じような解釈結果に到達したとしても，基本レベルの述語の隠喩文の理解の場合より多くの推論を行う必要が生じ，その分上位レベルの述語の隠喩文は理解しにくくなると推測される．また，下位カテゴリーは，基本カテゴリーの属性の多くを基本カテゴリーと共有する一方で，下位カテゴリーに特有な，上位カテゴリー，基本カテゴリーにはない示差的な属性をも有している．実験Ⅱで使われた文脈は，上位カテゴリー，基本カテゴリー，下位カテゴリーをそれぞれ指示する述語によって共通にたとえることのできる話題を記述していた．それゆえ，下位カテゴリーの述語の隠喩文を当該文脈下で理解する場合でも，その示差的な属性が使われ理解されることはなかったはずである．むしろ，多くの事例によって共有される属性群が理解に使われることが，それら示差的な属性によって妨害されたため，下位レベルの述語の隠喩文は，他のレベルの述語の隠喩文よりも理解されにくくなったと説明される．

第8章で詳しく述べてきた通り，“A is B”の形式の文の隠喩的な理解の基本的なメカニズムとして二つの考えが提案されてきている．すなわち，顕著性の不均衡にもとづいた属性のマッチングの過程と見るとみる考え(Ortony, 1979)とアドホックなカテゴリーへのカテゴリー化とみなす考え(Gluckberg & Keysar, 1990)である．本研究の実験結果は，間接的ながら，属性のマッチングの過程と見る前者の考えを支持するかもしれない．基本レベルの述語の隠喩文が他より理解しやすい理由は，理解に使うためのその述語の属性が，他のレベルよりも選択されやすいからであると考えられる．それら属性を多く有する事例の数が最も多いというのが基本カテゴリーの特徴である．隠喩文の理解が，文脈・状況に応じたアドホックなカテゴリーへのカテゴリー化の過程であるとすれば，カテゴリー化はカテゴリーの属性を使わずに行われるから，そうした属性に関する基本カテゴリーの特徴は，隠喩としての理解しやすさにさほど影響しなくなる．したがって，基本レベルの述語の隠喩文とそれ以外のレベルの述語の隠喩文との間に理解しやすさの差は生じなくなるはずである．このことは，隠喩文の理解の基本的なメカニズムが，カテゴリー化を行うことではなく，属性のマッチングを行うことであることを示唆している．

第Ⅳ部

名詞述語文理解の認知過程

これまでに，第Ⅱ部では，“AはAである”または“A is A”の名詞述語文形式の同語反復文がどのように解釈されるかを考察してきた．また，第Ⅲ部では，“AはBである”あるいは“A is B”の名詞述語文形式の隠喩文がどのように理解されるかを考察した．第Ⅳ部では，第Ⅱ部，第Ⅲ部での名詞述語文の理解過程に関する議論の結論として，任意の名詞述語文形式の文を受けとり，そこから何らかの意味解釈を計算する一般的な過程をモデル化することを試みる．

第11章　日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化（考察論文）

“AはBである”，“A is B”などの形式をとる名詞述語文は，どの言語にも存在する基本的な文形式の一つと考えられる．しかし，これまでの考察からも明らかなように，その“意味”，すなわち“A”と“B”との間の意味関係の解釈は一通りではない．とくに日本語の場合，数量記述の曖昧さや省略表現の豊富さのため，より多くの種類の意味のとり方がある．

本章では，こうした名詞述語文の意味解釈の手続きと手続きの参照する知識を具体的に表現し，その意味解釈過程をモデル化することを試みる．ここでは，その考察対象を“A”，“B”とも単一，既知の名詞である場合に限り，またその否定形“AはBでない”については触れないことにする．

11.1 日本語名詞述語文の様々な意味解釈

まず名詞述語文にどのくらい意味のとり方があるかを整理してみることにしよう．名詞述語文の解釈のされ方は，表層表現上の違いにより，大きく二つの場合に区別される．すなわち，表層表現“A”と“B”とが同じ場合と異なる場合に分かれる．

11.1.1 同語反復文としての解釈

表層表現“A”と“B”とが同じ場合には，第II部で詳述してきたような同語反復文の場合がある．むろん解釈できない場合もある．

同語反復文には，(1)，(2)，(3)，(4)，などの例がある((1)は4.3の(23)と，(2)は3.2の(5a)，5.1の(2)と，(3)は4.3の(19)，(21a)，5.1の(14)と，(4)は4.3の(15)とそれぞれ同じ)．

(1)　　不安は不安だ．

(2)　　しょせん，ゴミはゴミだ．

(3)　　ペンギンだって，鳥は鳥である．

(4)　　アメリカはアメリカ，日本は日本だ.

同語反復文は，いくつかの解釈の“パターン”のうちのいずれかを適用することによって解釈される(阿部・佐山，1993; 佐山・阿部，1993，1994; Wierzbicka, 1987，1988). どの“パターン”が選択されるかは，同語反復文の中で繰り返される名詞(以下，反復語)の意味的・統語的性質や文形式上の特徴によって決まる(第3章，第4章を参照されたい). たとえば，(1)は，“不安”が話者の感情・情動的な状態を指示し，かつ，形容動詞の語幹とみなし得る名詞であると判断され，その結果，不安な感情・情動状態にいることを話者自身が確認している意味に解釈される. また，(2)は，“ゴミ”が否定的価値評価を伴う概念を指示していると判定され，その結果，概念「ゴミ」の否定的な価値評価が恒常的で不変であることを強調・再認識する意味に受け取られる. (3)は，“aだって，AはAである”の文形式をとり，かつ，“ペンギン”が“鳥”の典型的でない下位事例を指示していると認識され，その結果，「ペンギンが実際には鳥の下位事例である」ことを強調・再認識する意味に解釈される. さらに，(4)の中の同語反復文“日本は日本だ”は，(4)が“BはB，AはAだ”という対比的な文形式をとっていると分かり，その結果，概念「日本」の独自性を強調・再認識する意味に受け取られる.

11.1.2 “文字通り”の解釈

表層表現“A”と“B”とが異なる場合には，“文字通り”の意味に解釈される場合，隠喩文として解釈される場合，“うなぎ文”として解釈される場合，など，がある. もちろんどのようにも解釈できない場合もある.

文字通りに解釈される場合には，(5)，(6)，(7)，(8)，のような例がある.

(5)　　狼は動物である.

(6)　　金星は宵の明星である.

(7)　　魚はえら呼吸である.

(8)　　太郎は病気である.

名詞述語文の文字通りの解釈には，上位・下位関係(クラス包含関係)としての解

釈，同一/同意関係としての解釈，属性/状態関係としての解釈などがある(荒木・佐々木・桃内，1991; 草薙・南・中野・吉田，1985)．たとえば，文例(5)はA⊊Bすなわち上位・下位関係として解釈される．(6)はA＝Bすなわち同一/同意関係として解釈される．また，(7)は全称的に(すなわちすべての「魚」について)あるいは常時成り立つ属性/状態関係として解釈される．さらに，(8)は特称的に(すなわち，ある「太郎」について)あるいは随時成り立つ属性/状態関係として解釈される．

11.1.3 隠喩としての解釈

名詞述語文が隠喩として解釈される場合には，(9)，(10)，(11)，のような場合がある((9)は1.1(1)，9.1(1b)と同じ)．

(9)　男は狼である．　[解釈の一例: 男は獰猛である．]

(10)　太郎は哲学者である．　[解釈の一例: 太郎には思索的なところがある．]

(11)　政治家は病気である．　[解釈の一例: 政治家はどこかオカシイ．]

名詞述語文が隠喩として解釈される場合には，いわゆる選択制限に違反する場合と違反しない場合とがある(Chomsky, 1965; 山梨，1982, 1988)．文例(9)は選択制限に違反する場合にあたり，たとえば「男は獰猛である」のように解釈される．また，文例(10)は違反しない場合に相当し，たとえば「太郎には思索的なところがある」といった解釈が与えられる．選択制限に違反する場合も違反しない場合も，隠喩文の述語が対象概念を指示する場合であった．述語が属性概念を指示し隠喩的に解釈される場合もある．たとえば，文例(11)がそれであり，「政治家はどこかオカシイ」というような意味に受け取られる．

11.1.4 “うなぎ文”としての解釈

名詞述語文が“うなぎ文”として解釈される場合には，(12)，(13)，(14)のような例がある．

(12)　僕はラーメン．　(料理店でラーメンを注文している状況で)

(13)　　兄は女である．　(生まれた子供のことを話している状況で)

(14)　　犬はコリーだ．　(賢い犬のことを話している状況で)

“うなぎ文”としての解釈は，英語の名詞述語文には見られない，日本語名詞述語文に独特な解釈である．前章までは，主に英語の名詞述語文の意味解釈について考察してきたため，“うなぎ文”としての解釈については触れてこなかった．ここで“うなぎ”文の意味解釈について簡単に説明しておくことにしよう．

名詞述語文の“うなぎ”文としての解釈に関する理論的考察

多くの国語学者たちによって，“うなぎ”文は，何らかの省略を含み，それゆえ特定の文脈・状況下でのみ意味をなす文と考えられてきている(たとえば，堀川，1983；奥津，1978；尾上，1982；薬，1988，など)．このうち，薬(1988)は，“うなぎ”文が，主題の省略された文であるとする．そして，“うなぎ”文が話者によって適切に発話され聴者によって妥当に理解されるためには，その“うなぎ”文をとりまく文脈の中で，その文の主題およびその“うなぎ”文と対比をなす別の“うなぎ”文が，陰にあるいは陽に提示されていることが必要であると主張する．このことを，薬(1988)は，(15a)，(15b)，および(16a)，(16b)のような連文を挙げ説明している．

(15a)　　昨日，僕は一人で夕飯を食べた．

(15b) ？僕はうなぎだった．

(16a)　　昨日，僕は彼と二人で夕飯を食べた．

(16b)　　僕はうなぎで，彼はラーメンだった．

(16b')　彼はラーメンで，僕はうなぎだった．

彼によれば，(15a)の文脈に導かれた文(15b)は容認されにくいのに対し，(16a)の文脈に導かれた文(16b)の一部“僕はうなぎで”はたやすく容認される，という．こうした彼の説明そのものには問題はないと考えられるが，彼の挙げた文例(16b)では，その文脈(16a)で設定される焦点“僕”が明確に維持されないので，適切で

はないかもしれない．より適切な(16a)に続く文は，(16b)よりもむしろ(16b')の方であると考えられる．

11.2 手続きの参照する知識とその性質：語彙ネットワーク

言語理解過程をモデル化する際に必要な知識源(阿部，1988)の中で，名詞述語文の意味解釈に関わるのは，単語と概念に関する知識(以下，これらをまとめて語彙知識と呼ぶ)，文脈に関する知識，発話状況に関する知識，話者に関する信念(belief)，等々であると考えられる[1)]．ここでは，その心内の語彙知識の表現として，ネットワーク的表現を仮定し，それを語彙ネットワークと呼ぶことにする．

11.2.1 語彙ネットワークの“文法”

以下，語彙ネットワークの記述に必要な概念を定義する．

- 語彙ネットワークは，ノードとアークからなる．

- ノードは，概念またはラベルを表わす．

- ラベルは，単語の表層的形式の対応物を表わす．

- アークは，二つの概念の間またはラベルと概念との間の関係を表わす．

- (単語の)意味は，その単語のラベルからアークによってたどることのできるすべての概念からなる．

次に，名詞述語文の意味解釈に必要とされる語彙ネットワークの性質を述べる．

---

1) 前章までの言い方で言えば，単語に関する知識は言語知識に含まれる．また，概念に関する知識は世界知識に相当する．

まず，概念の性質は，すべて他の概念との関係，すなわち，その概念に連結するアークの種類と向きによって決まると仮定する．さらに，アークの種類に関して，以下のような仮定を設ける．

・ アークには“is a”アーク，“is”アーク，“can be a”アーク，および“can be”アークの4種がある．

・ 個々のアークはそれぞれ異なる連結強度をもつ．

・ **“is a”**アーク，**“can be a”**アークは上位・下位関係(クラス包含関係)を表わす．このうち前者は全称関係または常時成立する関係を，後者は特称関係または随時成立する関係を示す．

たとえば，概念「ペンギン」と「鳥」との間には，「ペンギン」から「鳥」へ向かう“is a”アークが存在し，その“is a”アークは「ペンギンは鳥である」という関係の成立を示す．同時に，「鳥」から「ペンギン」へ向かう“can be a”アークも存在し，その“can be a”アークは「鳥はペンギンでありうる」という関係の成立を示す．結局，「ペンギン」と「鳥」の間には“is a”アークと“can be a”アークが存在することになる．この様子は，Figure 11.1(a)のように図示される．

また，「宵の明星」と「金星」の間には双方向の“is a”アークが存在する．さらに，「男」と「哲学者」の間には双方向の“can be a”アークが存在する．これら概念間の関係は，Figure 11.1の(b)，(c)のように表される．一般に，二つの概念間に“a”つきアーク，すなわち“is a”アークまたは“can be a”アークが存在すれば，必ずそれとは逆向きの“a”つきアークがそれらの概念間に存在する．“is a”アーク，“can be a”アークによって区別される任意の概念A，B間の関係は，Figure 11.2の(a)，(b)，(c)の3種類になる．これらのうち，(a)はA＝Bを，(b)は$A \subsetneq B$を，(c)は$A \cap B = \phi$ ($A \subseteq B$の場合を除く)を表す．

・ **“is ”**アーク，**“can be”**アークは，属性/状態関係を表わし，このうち

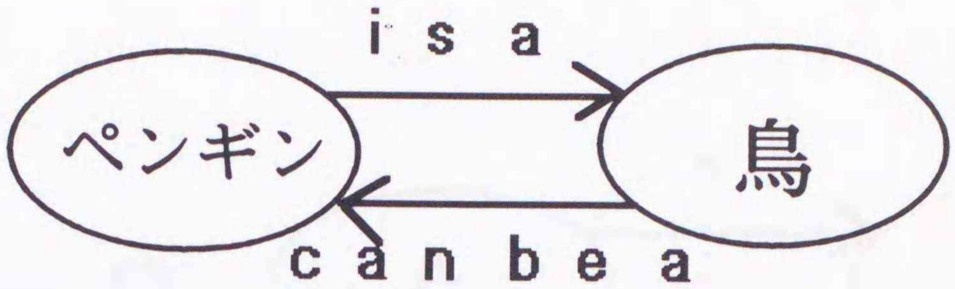


Figure. 11.1(a) 「ペンギン」と「鳥」との間の意味関係

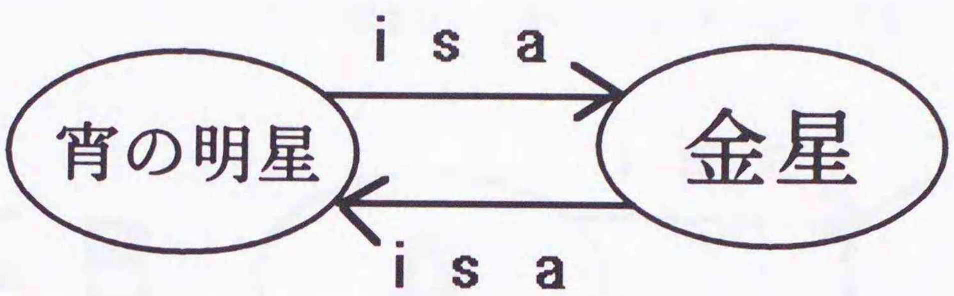


Figure. 11.1(b) 「宵の明星」と「金星」との間の意味関係

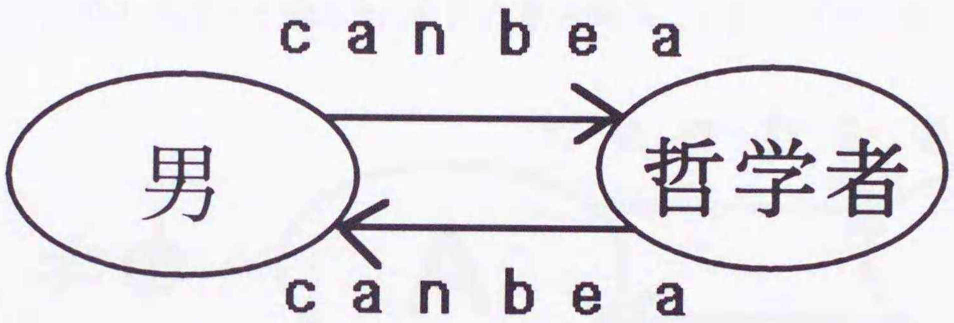


Figure. 11.1(c) 「男」と「哲学者」との間の意味関係

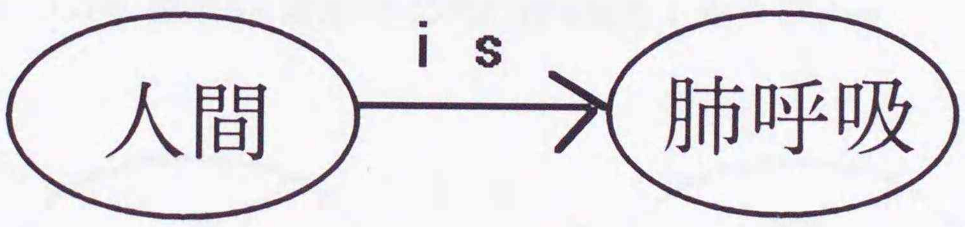


Figure. 11.1(d) 「人間」と「肺呼吸」との間の意味関係

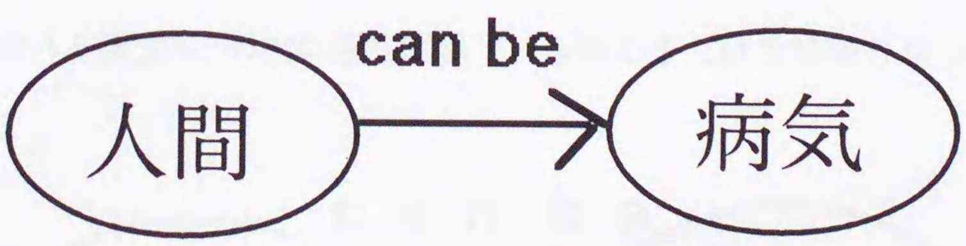


Figure. 11.1(e) 「人間」と「病気」との間の意味関係

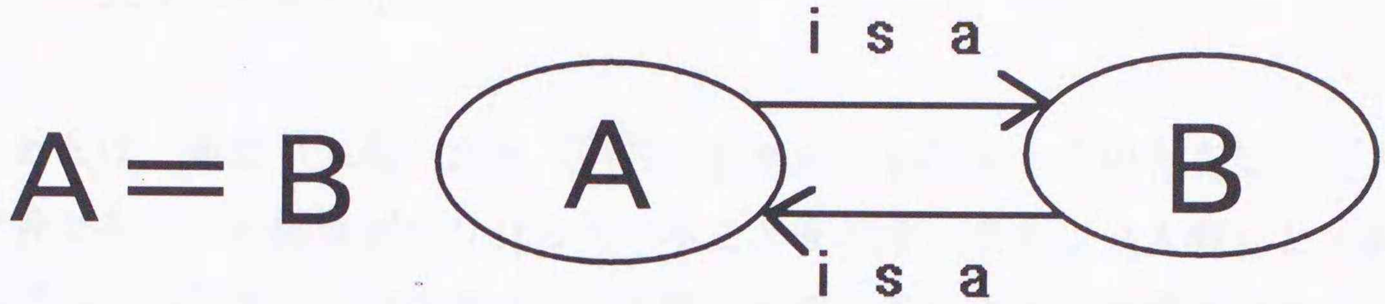


Figure 11.2(a) 概念Aと概念Bとの間の意味関係：同一/同意関係

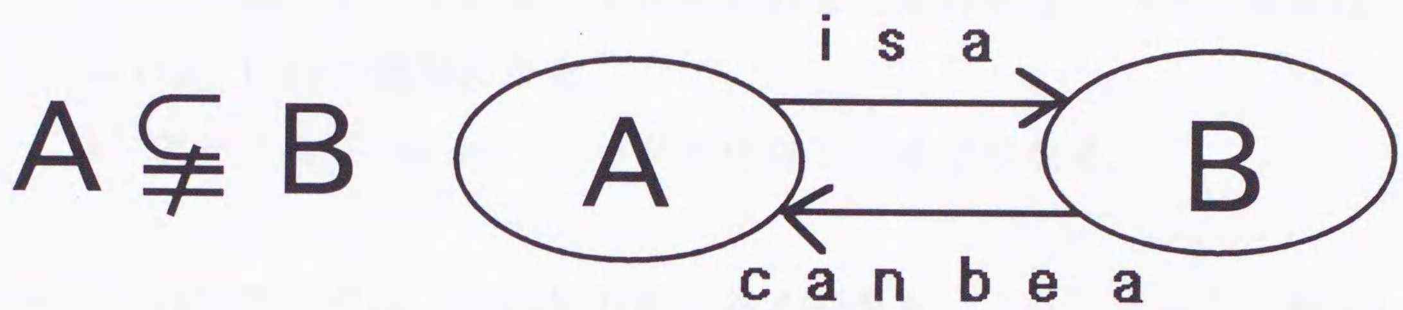


Figure 11.2(b) 概念Aと概念Bとの間の意味関係：上位・下位関係（クラス包含関係）

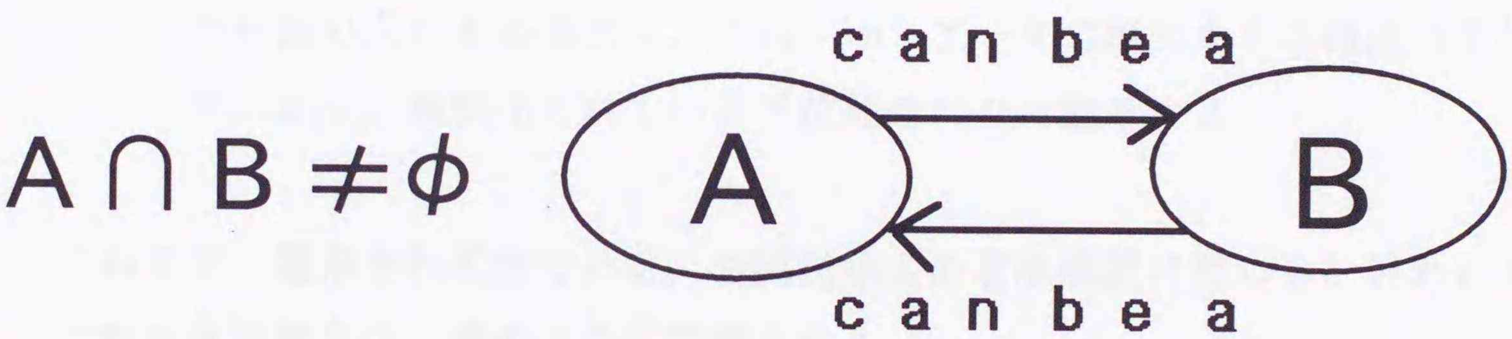


Figure 11.2(c) 概念Aと概念Bとの間の意味関係： $A \cap B \neq \phi$

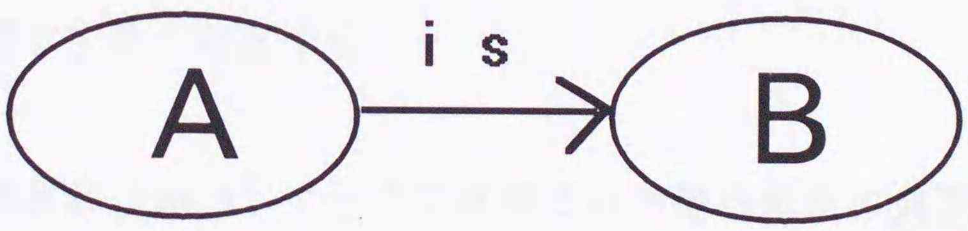


Figure 11.2(d) 概念Aと概念Bとの間の意味関係：（全称のまたは常時成り立つ）属性/状態関係

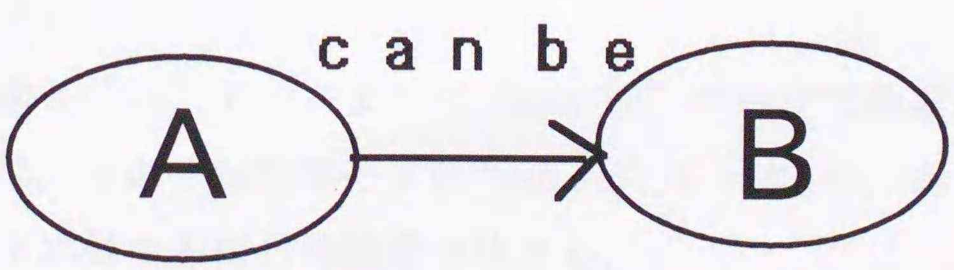


Figure 11.2(e) 概念Aと概念Bとの間の意味関係：(特称のまたは随時成り立つ）属性/状態関係

前者は全称関係または常時成立する関係を，後者は特称関係または随時成立する関係を示す．

たとえば，概念「人間」から「肺呼吸」への“is”アークの存在は，「人間は肺呼吸である」の関係が成り立っていることを示す．また，「人間」と「病気」への“can be”アークの存在は，「人間は病気になりうる」の関係があることを示す．これら概念間の関係は，Figure 11.1の(d)，(e)のように示される．“is”アーク，“can be”アークによって区別される任意の概念A，B間の関係は，Figure 11.2の(d)，(e)の2種類になる．

“is”アークと“can be”アークとは以下の点で異なる．

- “is”アークは，その矢の先にある概念を，“is”アークの根元にある概念のすべての下位概念に継承(inherit)するのに対し，“can be”アークは，その矢の先にある概念を，“can be”アークの根元にある概念の下位概念で，かつ，事例化されている下位概念にのみ継承する．

これまでに提案されてきている，名詞述語文の意味解釈に関わると思われるいくつかの説明概念は，次のように定義される．

- **事例化**とは，ある上位概念のラベルによって，文脈内のその特定の下位概念を指示することとする．

- ある概念と“is a”アークで連結された他の概念の**典型性**(typicaility, prototyicality)は，その“is a”アークの，ある概念から出る他のアークに対する相対的強度で決まる．

- ある概念と“is”アークまたは“can be”アークで連結された他の概念の**顕著性**は，その“is”アーク(“can be”アーク)の，ある概念から出る他のアークに対する相対的強度で決まる．

11.2.2 慣習的な比喩の意味関係

第8章の後半で触れたように，名詞述語文形式の隠喩文の中には，慣習性がきわめて高く，その文の主語の指示する概念Aと述語の指示する概念Bとの意味関係それ自体が，知識を構成する単位となっているものがある(Lakoff, 1990; Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989; Martin, 1990, 1992; 山梨, 1983, 1988)．たとえば，英語の概念「love」は，(17)のaからfまでの隠喩文(それぞれ8.6の(43)のaからfまでと同じ)の述語の概念によってそれぞれ部分的に構造を与えられている．

(17a)　Love is an emotion.
　　　(恋愛は感情である．)

(17b)　Love is a journey.
　　　(恋愛は旅である．)

(17c)　Love is a patient.
　　　(恋愛は患者である．)

(17d)　Love is a physical force.
　　　(恋愛は物理的な力である．)

(17e)　Love is a madness.
　　　(恋愛は狂気である．)

(17f)　Love is war.
　　　(恋愛は戦争である．)

(17)の各文例において例示されるように，主語の概念Aと述語の概念Bとは，何らかの類似性によって結びついておらず慣習的に結びついているに過ぎない．こうした慣習的比喩における概念Aと概念Bとの間の意味関係は，語彙ネットワークにおいても，これまでに述べたきた“is a”アークや“can be a”アークの一つ一つと同等に扱われる必要があると考えられる．しかし，日本語母語話者が実際に有する慣習的比喩の意味関係に具体的にどのようなものがあるかに関する実証的・実験的研究はほとんど行われてきていない．こうした現状を踏まえ，現段階では，語彙ネットワーク中に慣習的比喩の意味関係は導入されていない．

11.3 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル

11.3.1 日本語名詞述語文の意味解釈の手続き

名詞述語文の意味解釈の中心は，主語の指示する概念Aと述語の指示する概念Bとの間の意味関係の計算であり，その過程は，数個のモジュール的な手続きからなると考えられる．Table 11.1の最上欄には，それら手続きが挙げられている．手続きの後の英字は，便宜上手続きを区別するものである．各手続きの下のかぎ括弧内には，参照される知識源が示されている．Table 11.1には，入力の後，名詞述語文が処理されていく様子が分岐図の形で表わされている．また，Table 11.1の最右欄には，最終的な各分岐に当てはまる名詞述語文の例とその解釈例が示されている．

一般に，文理解過程は，文の形式に関する知識や発話規範からの“逸脱”の有無を認定(あるいは検出)する手続きと，認定された“逸脱”を修正する手続きとからなると考えることもできる．その際，名詞述語文の意味解釈は，どの手続きで“逸脱”が認定されたかと，その“逸脱”がどの手続きで修正されたかの組合せによって分類される．Table 11.1の手続きのうち，[手続きC]，[手続きE]が“逸脱”認定手続きに相当し，[手続きD]，[手続きF]，[手続きG]が修正手続きにあたると考えられる．以下，各手続きの判定内容と各手続きの過程全体の中での位置づけなどを説明する．なお，各手続きの下には，参照すべき知識源が示されている．

[手続きA]　ラベル“A”と“B”(以下，二重引用符はラベルを示す)の異同を判定する．

知識源：表層表現

[手続きB]　“A”，“B”の既知，未知を判定する．(ここでは“A”，“B”ともに既知の場合のみ扱う．)

知識源：語彙知識

Table 11.1
日本語名詞述語文“AはBである”の意味解釈手続き[a]

[手続きA] “A”と“B”との異同判定 [表層表現に照らして]	[手続きB] ラベル“A”“B”の既知未知の判定 [語彙知識に照らして]	[手続きC] 名詞述語文の意味的制約から逸脱の有無の判定 クラス包含関係の場合／属性/状態関係の場合 [語彙知識に照らして]	[手続きD] Aの事例化の有(○)無(×)の判定 [先行文脈に照らして]	[手続きE] 発話規範からの逸脱の有無の判定 [発話状況に照らして]	[手続きF] 主題等の省略の有(○)無(×)の判定 [先行文脈に照らして]	[手続きG] AとB(またはAのみ)にそれぞれ連結する概念群の顕著性に関する検索とそれらに対する意味判定. 顕著性の不均衡が正の場合(○) それ以外の場合(×) [語彙知識および先行文脈に照らして]	該当する名詞述語文の例 [その意味解釈の例] (理解のされ方)
◆“A”≠“B”の場合	◆“A”，“B”ともに既知の場合	◆A=B またはA≒Bの場合	◆○	◆			→例:金星は宵の明星だ. (“文字通り”)
				[話し手が聞き手(A，Bを既に知っている)にAの意味を伝えようとしている，と聞き手が判断した場合]			
				◆逸脱		◆○	→例:金星は宵の明星だ.[金星は一番星だ.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明[c]
			◆×	◆			→例:[一般に]ボブはロバートだ. (“文字通り”)
本研究では，以下の場合の意味解釈のプロセスについては触れない. ◆“A”既知，“B”未知の場合 ◆“A”未知，“B”既知の場合 ◆“A”，“B”とも未知の場合				[話し手が聞き手(A，Bを既に知っている)にAの意味を伝えようとしている，と聞き手が判断した場合]			
				◆逸脱		◆○	→例:ハイツはアパートだ[一般にハイツはアパートに過ぎない] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆A⊊Bの場合	◆○	◆			→例:[その]人間は動物である. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:人間は動物である.[その人間はやはり動物的な生き物である.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
			◆×	◆			→例:[一般に]人間は動物である. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:人間は動物である.[一般に人間はやはり動物的な生き物である.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆A⊋Bの場合: 逸脱	◆○	◆			→例:[その]男は侍だ. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:[その]男は侍だ.[その男は潔い人物だ]
						◆×	→発話意図不明 (隠喩的)
			◆×	◆			→解釈不能[d]
				◆逸脱	◆○		→例:男は侍だ.[男は何といっても侍のようでなければ.] (“うなぎ”文的)
					◆×	◆○	→例:[一般に]男は侍だ.[一般に男は潔いところがある.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆上記以外のA∩B≠φの場合: 逸脱	◆○	◆			→例:[その]男は哲学者だ. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:[その]男は哲学者だ.[その男は思索的な人物だ.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
			◆×	◆			→解釈不能
				◆逸脱	◆○		→例:男は哲学者だ.[一番魅力的な職業といえば，男の場合，哲学者だ.] (“うなぎ”文的)
					◆×	◆○	→例:[一般に]男は哲学者だ.[一般に男は思索的なところがある.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆ Bが，AまたはAの“is a”アークの先の概念から出る“is”の先である場合	◆○	◆			→例:[その]ステゴザウルスは草食である. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:ステゴザウルスは草食である.[そのステゴザウルスはおとなしい.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
			◆×	◆			→例:[一般に]ステゴザウルスは草食である. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:ステゴザウルスは草食である.[一般にステゴザウルスはおとなしい.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆ Bが，AまたはAの“is a”アークの先の概念から出る“can be”の先である場合: 逸脱	◆○	◆			→例:[その]男は病気である. (“文字通り”)
				◆逸脱		◆○	→例:[その]男は病気である.[その男はどこかオカシイ.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
			◆×	◆			→解釈不能
				◆逸脱	◆○		→例:男は病気だ.[男の大敵は何といっても病気だ.] (“うなぎ”文的)
					◆×	◆○	→例:男は病気だ.[男は女に比べ一般にどこかクルッテいる.] (隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
		◆それ以外の場合: 逸脱	◆△[b]	◆			→解釈不能
				◆逸脱		◆○	→例:男は狼だ.[その男は獰猛な人物だ.](隠喩的)
						◆×	→発話意図不明
			◆×	◆			→解釈不能
				◆逸脱	◆○		→例:男は狼だ.[好む動物といえば，男の場合，狼だ.] (“うなぎ”文的)
					◆×	◆○	→例:男は狼だ[一般に男は獰猛なところがある.]
						◆×	→発話意図不明 (隠喩的)
◆“A”=“B”の場合	◆“A”，“B”ともに既知の場合	? ◆ (Aが“is”の先のみの場合)					→解釈不能
		? ◆ (Aが“can be”の先のみの場合)					→例:不安は不安だ. (同語反復文的)
		? ◆それ以外の場合	◆○				→例:ペンギンだって,鳥は鳥である(同語反復文的)
			◆×				→例:アメリカはアメリカ，日本は日本だ. (同語反復文的)
						◆Aに連結する顕著性の高い概念に価値評価が関わっている場合	→例:しょせん，ゴミはゴミだ. (同語反復文的)
						◆それ以外の場合	→発話意図不明

a) 逸脱認定手続き[手続きC]，[手続きE]において，入力された名詞述語文に逸脱が生じた場合，その逸脱が修復されない限り(○印が付かない限り)，名詞述語文は受け入れられなくなる.
b) 事例化が確認されるが，[手続きC]における名詞述語文の意味的制約からの逸脱は修復されない.
c) 発話規範からの逸脱の修正に失敗した場合，名詞述語文の意味的制約からの逸脱の修正に成功している場合と失敗している場合の両方を含む.
d) 名詞述語文の意味的制約からの逸脱のみに失敗した場合.

[手続きC]　概念AとBの，語彙ネットワークにおける位置関係を判定する.
知識源: 語彙知識

[手続きC]では，AとBとの間に存在するアークの種類が同定される．ノード間に“a”つきアーク，すなわち“is a”アークまたは“can be a”アークが存在する場合，必ず一組存在するので，“a”つきアークによって結ばれる関係は，次の4通りのうちのいずれかになる.

[1]　A＝B，すなわち，AとBとの間に双方向の“is a”アークが存在する.

[2]　A⊋B，すなわち，AからBへの“can be a”アーク，BからAへの“is a”アークが存在する.

[3]　A⊊B，すなわち，AからBへの“is a”アーク，BからAへの“can be a”アークが存在する.

[4]　A∩B＝φ，すなわち，AとBとの間に双方向の“can be a”アークが存在する.

AとBとの間に“a”つきアークで結ばれる関係が存在しない場合，AとB(またはAと何らかの概念)との間の“a”なしアーク，すなわち“is”アークまたは“can be”アークによって結ばれる関係を同定しようとする．“a”なしアークによって結ばれる関係は，次の3通りになる.

[5]　AからBへの“is”アークが存在している.

[6]　AからBへの“can be”アークが存在している.

[7]　AとBとの間に“a”なしアークは存在しない.

このうち，[7]のみ，AとBの語彙ネットワーク内での位置関係が確定しない.

[手続きC]で判定された概念AとBとの位置関係のうちのいくつかは，名詞述語文によって容認される位置関係から外れている．すなわち，名詞述語文には，以下のようなAとBと間の意味的制約があると考えられる．今後，これを，名詞述語文の

意味的制約と呼ぶ.

名詞述語文の意味的制約:

・ $A=B$または$A\subsetneq B$である.
・ BがAの全称的なまたは常時成り立つ属性/状態になっている.

[手続きC]は，この意味的制約からの“逸脱”認定手続きと見ることができる.[手続きC]を適用した結果，名詞述語文の意味的制約を充たすことになるのは，[1]，[2]および[5]であり，それを充たさず“逸脱”が認定されるのは，[3]，[4]，[6]であるということになる．また，AとBとの位置関係の決定されない[7]も，この意味的制約を充たさないものと考え，“逸脱”があると認定される場合に含める.

[手続きD] Aが事例化されているかどうかを判定する.
知識源: 先行文脈

[手続きD]では，Aの指示対象が，先行文脈中にあるかどうかが検索される．事例化によって，ラベル“A”はAの下位概念を直接指示できることになる．したがって，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”があると認定された場合であっても，事例化が確認されれば，その時点で，“逸脱”は修復されることになる．換言すれば，[手続きD]は[手続きC]の“逸脱”の修復手続きになっている．また，もちろん修復できない場合もあり，そのような場合には，“逸脱”はそのまま残される．また，[手続きC]で“逸脱”の認定されない場合([1]，[2]，[5])，[手続きD]の適用結果は，その後の分岐の仕方にほとんど影響を与えない．実際，[1]，[2]，[5]の場合，[手続きD]で事例化の確認される場合とそうでない場合とで，その後の分岐の仕方はほぼ同じである(Table 11.1を見てほしい).

[手続きE] 発話規範から発話が“逸脱”しているかどうかを判定する.
知識源: 発話状況

[手続きE]は，発話状況に関する知識である発話規範に照らし“逸脱”があるか否かを判定する手続きである．ここでいう発話規範とは，たとえば，Grice(1975)の会話の公準のようなものを指す．

[手続きF]　主題などの省略がないかどうかを判定する．
知識源：先行文脈

次節で説明するように，[手続きF]は，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”と発話規範からの“逸脱”とがともに存在する場合に対して適用される．つまり，[手続きF]は，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”と，質に関する発話規範からの“逸脱”との両方を同時に修復する手続きになっているわけである．省略が補われると，名詞述語文は“うなぎ”文として解釈されることになる．

[手続きG]　AとB(またはAのみ)にそれぞれ連結する概念群の顕著性に関する検索とそれらに対する意味判定を行なう．
知識源：語彙知識および先行文脈

[手続きG]では，再び語彙知識が参照される．[手続きC]では，単に，概念AとBとの間の位置関係が決定されただけであった．これに対し，[手続きG]では，Aに連結する概念とBに連結する概念が検索され，Bから検索された概念の顕著性の，Aから検索された概念の顕著性との差，すなわち顕著性の不均衡が計算される．そして，顕著性の不均衡が正の場合にのみ隠喩的な解釈が成り立つことになる．また，“A”＝“B”の同語反復文の場合には，概念Aに連結する顕著性または典型性の高い概念が検索され，検索された概念が価値評価を含むかどうかなどといった判定が行われる．

11.3.2 各手続きにおける分岐の説明と適用例

ここでは，いくつかの名詞述語文が解釈に至るまでに，各手続きがどのように適用されるかを説明する．例として，Table 11.2の各名詞述語文が入力された場合を説明する．それら名詞述語文は，Table 11.1の中のいずれかの分岐をたどる．

Table 11.2

入力される名詞述語文の例とそのとり得る意味解釈結果

文番号	文例	[とり得る意味解釈結果]	**(理解のされ方)**
(1-1)	「男は哲学者である」…	[その男は哲学者である]	(**“文字通り”**の理解)
(1-2)	「男は哲学者である」…	[その男は思索的な人物だ]	(**隠喩**的理解)
(1-3)	「男は哲学者である」…	発話意図不明	(発話規範の“逸脱”の修正に失敗)
(1-4)	「男は哲学者である」…	解釈不能	(意味的制約の“逸脱”の修正に失敗)
(1-5)	「男は哲学者である」…	[魅力的な職業といえば男の場合哲学者である.]	(**“うなぎ”**文的理解)
(1-6)	「男は哲学者である」…	[一般に男は思索的なところがある]	(**隠喩**的理解)
(1-7)	「男は哲学者である」…	発話意図不明	(発話規範の“逸脱”の修正に失敗)
(2-1)	「男は狼だ」…	解釈不能	(意味的制約の“逸脱”の修正に失敗)
(2-2)	「男は狼だ」…	[その男は獰猛な人物だ]	(**隠喩**的理解)
(2-3)	「男は狼だ」…	発話意図不明	(発話規範の“逸脱”の修正に失敗)
(2-4)	「男は狼だ」…	解釈不能	(意味的制約の“逸脱”の修正に失敗)
(2-5)	「男は狼だ」…	[好む動物といえば，男の場合，狼だ]	(**“うなぎ”**文的理解)
(2-6)	「男は狼だ」…	[一般に男は獰猛なところがある]	(**隠喩**的理解)
(2-7)	「男は狼だ」…	発話意図不明	(発話規範の“逸脱”の修正に失敗)

[手続きA]の適用

(1-1)から(2-7)までのすべての文例が，“A”≠“B”の場合に相当する．

[手続きB]の適用

いずれの例とも“A”，“B”既知の場合にあたる．

[手続きC]の適用

(1-1)から(1-7)までの文例は，A∩B≠φの場合に，(2-1)から(2-7)までの文例は，“それ以外”の場合にあてはまる．すべての文例，すなわち(1-1)から(1-7)までと(2-1)から(2-7)までの文例が，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”ありと判断される．

[手続きD]の適用

(1-1)から(1-3)までおよび(2-1)から(2-3)までの文例が，事例化がある(○)場合に，(1-4)から(1-7)までおよび(2-4)から(2-7)までが，事例化のない(×)場合になる．(1-1)から(1-3)までの文例は，この時点で，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”が修正される．(2-1)から(2-3)までの文例は，事例化があるにもかかわらず，例外的に“逸脱”は修正されない．(1-4)から(1-7)までと(2-1)から(2-3)までの文例の“逸脱”は，修正されないままである．

[手続きE]の適用

(1-1)，(1-4)，(2-1)，(2-4)は，発話規範からの“逸脱”がないと認定される．これら文例のうち，(1-1)は，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”もないので，[その男は哲学者である]というように，“文字通り”に解釈される．また，(1-4)，(2-1)，(2-4)は，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”が修正されないまま残されるため，解釈不能となる．(1-2)，(1-3)，(1-5)，(1-6)，(1-7)，(2-2)，(2-3)，(2-5)，(2-6)，(2-7)は，発話規範からの“逸脱”があると認定され，その“逸脱”を修正するために，さらなる手続きの適用が必要になる．

[手続きF]の適用

［手続きF］は，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”と発話規範からの“逸脱”の二つの“逸脱”のある文例(1-5)，(1-6)，(1-7)，(2-5)，(2-6)，(2-7)に適用される．このうち，**(1-5)**，**(2-5)**では，省略が確認される(○)ことにより，二つの“逸脱”が同時に修正され“うなぎ”文的に解釈される．(1-5)は，たとえば，［一番魅力的な職業と言えば，男の場合，哲学者だ］のように，また，(2-5)は，たとえば，［好む動物といえば，男の場合，狼だ］のように解釈される．一方，(1-6)，(1-7)，(2-6)，(2-7)は，省略なし(×)と認定され，二つの“逸脱”が残されたままなので，さらなる手続きの適用を受ける必要がある．ここまでで，まだ解釈されていない文例は，(1-2)，(1-3)，(1-6)，(1-7)，(2-2)，(2-3)，(2-6)，(2-7)になる．

［手続きG］の適用

残る(1-2)，(1-3)，(1-6)，(1-7)，(2-2)，(2-3)，(2-6)，(2-7)のうち，**(1-2)**，**(1-6)**，**(2-2)**，**(2-6)**は，顕著性の差が正(○)と判定され，名詞述語文の意味的制約からの“逸脱”と発話規範からの“逸脱”の両方が同時に修正される．その結果，いずれも，隠喩的に解釈される．(1-2)は，たとえば，［その男は思索的な人物である］のように，(1-6)は，たとえば，［一般に男は思索的なところがある］のように，(2-2)は，たとえば，［その男は獰猛な人物だ］のように，(2-6)は，たとえば，［一般に男は獰猛なところがある］のようになる．**(1-3)**，**(1-7)**，**(2-3)**，**(2-7)**は，顕著性の差が正でないと判定され，発話規範からの“逸脱”が残されるので，いずれも発話意図不明になる．

11.4 手続きの適用順序

本モデルは一種の段階モデルとみなせる．本モデルは，名詞述語文形式の隠喩文の理解過程の段階モデルを一般化したものであり，その段階モデルの三つの段階に対応する三つの段階をもつ．

本モデルの第一段階は，［手続きA］，［手続きB］，［手続きC］を適用する段階である．“AはBである”の名詞述語文を聴者が受け取ったとしよう．作業記憶中には，ラベル“A”，“B”，“は”，“である”の表象が構築され，高い活性化レベル

に維持されるであろう．したがって，ラベル“A”，“B”に対して，[手続きA]，[手続きB]がこの順序で適用され，それらラベルの異同や既知・未知が判定されることになるであろう．

ラベルの表象が作られた後，それらに対する語彙知識が，長期記憶から検索され，語彙知識の間の関係づけが行われることになるから，[手続きA]，[手続きB]の適用の次には，[手続きC]が適用され，概念Aと概念Bとの間の関係が計算されることになるであろう．[手続きA]，[手続きB]，[手続きC]の適用によって，文字通りの意味の表象「AはBである」が構築される．

[手続きD]の適用，すなわち事例化の有無の確認は，第一段階の手続きよりも後に適用されるが，その順序を特定できないかもしれない．事例化の有無は，“その後”の[手続きE]，[手続きF]，[手続きG]の適用の仕方にほとんど影響しない(11.4.1の[手続きD]の説明を参照してほしい)からである．事例化の確認が，オンライン的には，すなわち，当該文を読んだ(聞いた)時点では，実行されないことを示唆するいくつかの実験結果(たとえば，Rayner & Pollatsek, 1989)から考えて，あるいは[手続きD]以外のすべての手続きが適用された後に，[手続きD]は適用されるのかもしれない．

第二段階は，[手続きE]を名詞述語文の文字通りの意味の表象に適用し，発話規範からの逸脱の有無の判定をする段階である．

第三段階は，[手続きF]の適用，すなわち主題等の省略の有無の判定，または[手続きG]の適用すなわち顕著性に関する検索と判定，である．

結局，本モデルでは，第一段階で，[手続きA]，[手続きB]，[手続きC]がこの順序で適用され，第二段階で，[手続きE]が適用される．そして，第三段階で，[手続きF]，[手続きG]のいずれか一方が適用される，ということになる．[手続きD]は，第二段階以降に適用されるが，順序を特定することができない．

11.5 日本語名詞述語文のネットワーク的意味表現

語彙ネットワークを参照した結果作られる名詞述語文のネットワーク的表現は，名詞述語文の意味解釈に関わる様々な心理現象を反映する．ここでは，まず，ある種の同語反復文の受け入れやすさが典型性と顕著性の違いとして，また，名詞

述語文形式の隠喩文の受け入れやすさが顕著性の違いとして説明できることを示す．さらに，それら違いを語彙ネットワーク上の違いにもとづいて表現できることを述べる．

11.5.1 同語反復文としての解釈

次の同語反復文の例を見てほしい．

(18a)　ペンギンだって，鳥は鳥である．

(18b)　すずめだって，鳥は鳥である．

日本語の名詞述語文として，(18a)は容認できるが，(18b)はその意味するところが分かりにくい．この違いは，ペンギンとすずめの鳥としての典型性の違いに起因すると考えられる．すなわち，一般に，“aだって，AはAである”の形式をとる同語反復文が受け入れやすいことと，概念Aにおける事例aの典型性が低いこととが対応する．概念「ペンギン」，「すずめ」，「鳥」の間の語彙ネットワークにおける表現はFigure 11.3のようになる．「すずめ」の方が「ペンギン」よりも「鳥」としての典型性が高い．それゆえ，Figure 11.3において，「すずめ」から「鳥」へ向かう“is a”アークの強度は，「ペンギン」から「鳥」へ向かう“is a”アークの強度よりも大きくなっている．(18a)と(18b)との間の受け入れやすさの違いは，それぞれの同語反復文を解釈する際に，(18b)の方が(18a)よりも，強度の小さい“is a”アークを参照するためと説明することができる．

反復語を，「鳥」からその上位概念である「動物」に代え，それぞれ(19a)，(19b)のようにするとどうなるであろうか．

(19a)　ペンギンだって，動物は動物である．

(19b)　すずめだって，動物は動物である．

(18a)，(18b)の場合とは異なり，(19a)，(19b)の受け入れやすさ(あるいは受け入れにくさ)は，同程度になるように思われる．この理由は，「ペンギン」の「動物」としての典型性と「すずめ」の「動物」としての典型性との間に程度差がないか

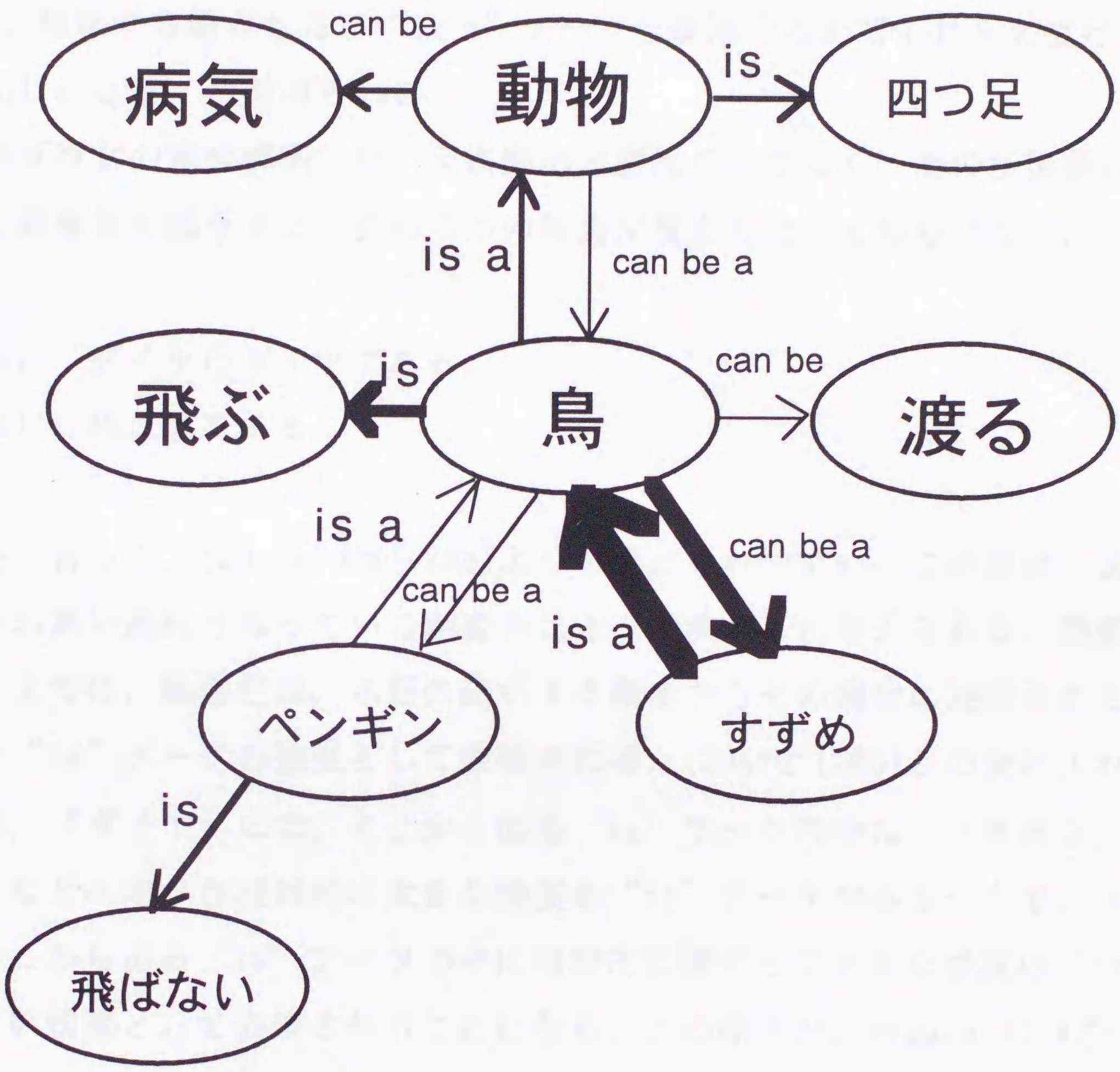


Figure 11.3 概念「鳥」，「すずめ」，「ペンギン」の語彙ネットワーク

らである，と説明される．Figure 11.3の語彙ネットワーク上で，「ペンギン」，「すずめ」の「動物」としての典型性の情報は，ともに「鳥」から「動物」への同一の“is a”アークの強度として表現されている．それゆえ，それら二つの典型性は当然ともに等しくなる．語彙ネットワーク上では，(19a)を解釈する場合も(19b)を解釈する場合も同じ“is a”アークを参照するのでそれらの受け入れやすさも同じになる，と説明される．

同語反復文の意味解釈には，反復語の典型性だけでなく，その反復語の有する属性の顕著性も関与する．次の二つの同語反復文を比べてもらいたい．

(20a)　ダイヤはダイヤである．
(20b)　机は机である．

直観的に言って，(20a)の方が(20b)よりも受け入れやすい．この差は，反復語が顕著性の高い属性をもっているか否かによって決まると考えられる．語彙ネットワーク上では，顕著性は，単語の指示する概念からその概念に連結された概念へ向かう“is”アークの強度として表現される．(20a)と(20b)との受け入れやすさの差は，「ダイヤ」には，そこから出る“is”アークの中に，「高価な」や「貴重な」などへ向かう相対的に大きな強度の“is”アークがある一方で，「机」には，そこから出る“is”アークの中に相対的に際だって大きな強度の“is”アークがない状態として表現されることになる．この様子が，Figure 11.4の(a)と(b)に示されている．

日本語の同語反復文は，それを一定の解釈に導く文脈情報のない場合，その反復語が本来もつ顕著性の高い属性によってその同語反復文の意味が推定されると考えられる．ただし，第5章でも触れた通り，厳密に言えば，その属性は顕著である他に否定的あるいは肯定的な“価値評価”を伴う必要がある．上述の(20a)と(20b)との受け入れやすさの差は，そうした価値評価に関わる属性の有無によると考えることもできる．

語彙ネットワークを用いて，一定の解釈に導く文脈下に置かれた同語反復文に対するネットワーク表現を考えることもできる．その際，文脈上の指定により，本来相対的に大きな強度をもっていた“is”アークとは別の“is”アークが参照

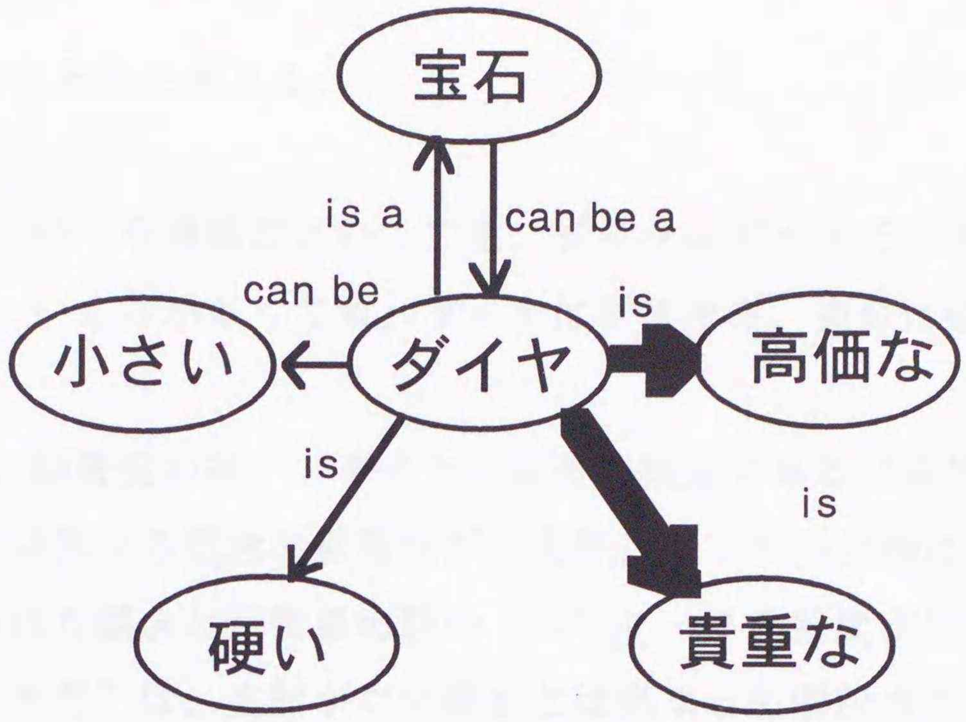


Figure 11.4(a) 概念「ダイヤ」の語彙ネットワーク

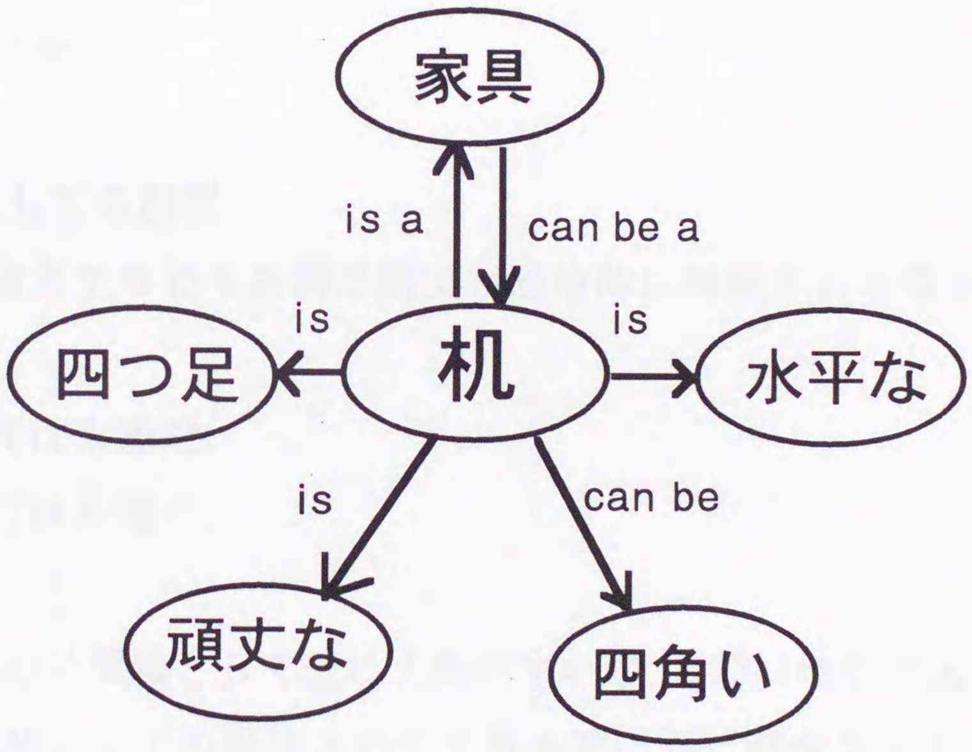


Figure 11.4(b) 概念「机」の語彙ネットワーク

されることもあると考える．

(21a)　いくら高価だといっても，ダイヤはダイヤだ．命にはかえられない．
(21b)　いくら小さくても，ダイヤはダイヤだ．充分に価値がある．

(21a)では，顕著性の高い「ダイヤ」固有の概念である「高価な」，「貴重な」などの概念とは異なる概念の顕著性が，文脈によって相対的に高められ，その顕著性の高められた概念と反復語の間の“is”アークの強度が参照されるため，“ダイヤはダイヤだ”は，文脈がない場合とは異なって解釈される．ところが，(21b)では，もともと顕著性の高い「高価な」や「貴重な」へ向かう“is”アークの強度が，文脈によって増幅されるだけなので，文脈がない場合と同じ「高価な」や「貴重な」へ向かう“is”アークが参照され，文脈がない場合と同じように解釈されることになる．

11.5.2 隠喩としての解釈

今度は，隠喩文すなわち名詞述語文が隠喩的に解釈される場合を考えてみよう．

(22a)　女性は太陽だ．
(22b)　電灯は太陽だ．

直観的に，(22a)は隠喩として受け入れやすいが，(22b)は受け入れにくい．(22a)，(22b)の間の隠喩としての受け入れやすさの違いも，語彙ネットワークにもとづいて説明できる．Figure 11.5(a)には概念「女性」と「太陽」の語彙ネットワークが示されている．また，Figure 11.5(b)には「電灯」と「太陽」の語彙ネットワークが示されている．「太陽」から出る“is”アークの中で，「明るい」や「輝かしい」などへ向かうものは相対的に顕著性が高いと考えられる．(22a)では，「女性」と「明るい」，「輝かしい」などとの間の“is”アークの顕著性が相対的に低く，「太陽」と「女性」との間に顕著性の不均衡が生じるため，受け入れやすい．これに対し，(22b)では，「電灯」と「明るい」，「輝かしい」などとの間の“is”アークの相対的な顕著性も，「女性」と「明るい」，「輝かしい」な

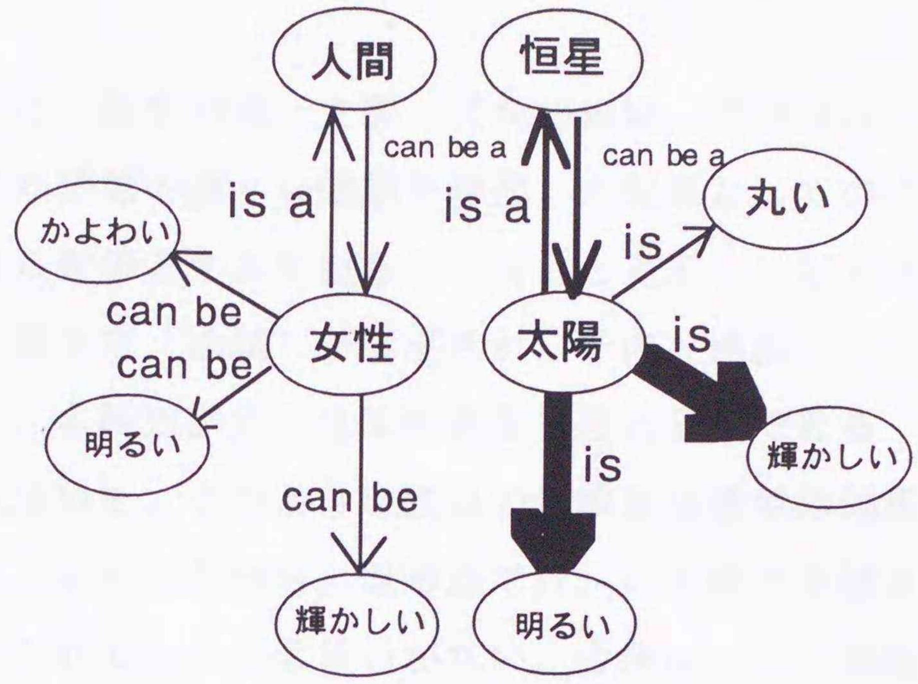


Figure 11.5(a) 概念「女性」と概念「太陽」の語彙ネットワーク

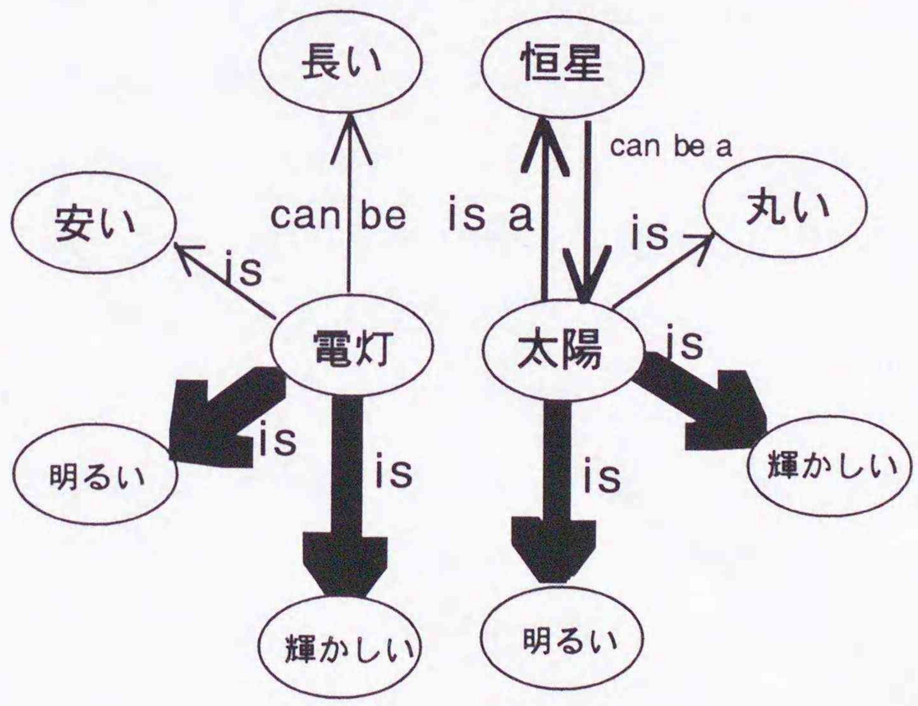


Figure 11.5(b) 概念「電灯」と概念「太陽」の語彙ネットワーク

どとの間の“is”アークと同程度に高くなるため，顕著性の不均衡は生じず，容認しにくくなる．

11.6 今後の課題

文理解過程は，語彙知識，文脈・状況の知識，発話状況に関する知識，等々，心内の多くの知識源の様々な知識を参照した結果としての“逸脱”の有無の判定手続きとそれらを修正する手続きからなると見ることもできる(阿部，1989b)．そして，どの手続きで“逸脱”が認定され，その“逸脱”がどの手続きで修正されたかによって，名詞述語文の意味解釈を妥当に分類できる．本章では，名詞述語文の意味解釈過程を，そのような数個の手続きの適用の過程として説明するモデルを提案した．しかしながら，現時点では，いずれの手続きにせよ，明確なメカニズムが与えられているとは言いがたい．今後は，より明確なメカニズムを考察していく必要がある．また，本提案の語彙ネットワークには，まだ慣習的な比喩的意味関係が導入されていない．どのような慣習的比喩的意味関係をどのように語彙ネットワークに組み込むかも，今後解決して行かなければならない問題の一つである．

第12章　名詞述語文意味解釈過程の全体像

“AはBである”（または“A is B”）の名詞述語文がどのように理解されるかをまとめてみることにしよう．長期記憶内で，表層表現“A”や“B”に直接対応するラベルと最も強く結びついている概念は，慣習性すなわち個人的な使用頻度の最も高い概念であると考えられる．したがって，“AはBである”が入力された直後に，ラベル“A”からそうした要件にあてはまる概念A_1とそのまわりの部分的な語彙ネットワーク(語彙知識)，およびラベル“B”とその条件を充たす概念B_1のまわりの部分的な語彙ネットワーク(語彙知識)が検索されるであろう．そして，概念A_1と概念B_1とが対応させせられ，A_1とB_1の意味関係が推論されることになる．A_1，B_1とも既知であったとしても，A_1とB_1の意味関係そのものが，長期記憶に保持されている関係あるいはそこからきわめて直接的に導き出される関係であることは稀である．このことは，“人間は動物である”のような名詞述語文を総称的に述べたてることがほとんどないことからも分かる．多くの場合，それまでラベル“A”，“B”がそれぞれ指示していたA_1，B_1から他の概念へ指示対象を変更するような推論が行われる．

表層表現“AはBである”の中の“A”は旧情報を担うことが多い．それゆえ，A_1は先行文脈の表象(知識)と結びつけられることが多いかもしれない．とくに“A”に指示形容詞が付いていたり，あるいは“A”自体が指示代名詞であったりすれば，先行文脈の表象(知識)の中に指示対象を同定する処理が行われるであろう．また，“A”が換喩的あるいは提喩的に使われていれば，A_1の部分的な語彙ネットワーク(語彙知識)内で，A_1からA_1に隣接する概念A_2，とりわけA_1と上位・下位関係あるいは全体部分関係をなす概念A_2に，“A”の指示対象は移されることになるであろう．たとえば，“モーツアルト”は作曲家を表す概念「モーツアルト」から「モーツアルトの楽曲」に指示対象が移されることになる．また，“ごはん”は概念「ごはん」からその上位概念「食べ物」へ移され，“赤シャツ”は「赤シャツ」から「(ある特定の)赤シャツを着た人」に移されることになる．

一方，“B”は新情報を担うことが多い．B_1そのものが新情報であれば，先行文脈の表象(知識)の中の主題情報が，省略された意味関係に関する情報として補われることによって，B_1はA_1またはA_2と結びつけられ，“うなぎ”文として理解さ

れることになる．B_1が妥当な新情報になり得なければ，B_1からB_1のまわりの概念B_2へ“B”の指示対象を変更させられることになるであろう．その際用いられる手続きの一つが，“顕著性の不均衡”の計算手続きであると考えられる．“顕著性の不均衡”の計算とは，概念B_1の顕著な属性で，それに対応する属性が概念A_1にも存在する概念B_2へ指示対象を移す作業のことであった．B_2は先行文脈の表象(知識)の中から選択されることもある．“A”の指示対象，“B”の指示対象が決められると同時にそれら指示対象間の意味関係も決まる．

指示対象の同定の手続きや事例化の手続き，換喩的/提喩的推論の手続き，さらには，主題の省略を補う処理の手続き，顕著性の不均衡の計算の手続きなど，名詞述語文の理解において適用される手続きは，互いに類似した操作であるかもしれない．それらは，いずれも，表層表現“X”が，通常指示する概念Xではなく，Xのまわりにある何らかの概念に指示対象を移動させる操作であると考えられる．異なるのは，手続きが主語の指示する概念Aに対して適用されるか述語の指示する概念Bに対して適用されるかの違い，および，その手続きが実行される際にどの種類の知識源が参照されるかの違いである．指示対象の同定や主題の省略を補う処理の手続きでは，先行文脈の表象(知識)が参照されるのに対し，顕著性の不均衡の計算や換喩的/提喩的推論では，主に語彙ネットワーク(語彙知識)が参照される．いずれにせよ，それら手続きは，ネットワーク的な知識表現を仮定することによって妥当に表現される．

“AはAである”(または，“A is A”)の同語反復文の理解のされ方は，主語，述語の異なる通常の名詞述語文の理解のされ方とはかなり異なるであろう．通常の名詞述語文の意味解釈では，主語Aと述語Bとの間の意味関係を決めることが基本的な作業であった．同語反復文の意味解釈において，そうした意味関係が決定されないことは明らかである．同語反復文が入力されると，長期記憶から概念A_1とそのまわりの部分的な語彙ネットワーク(語彙知識)の情報が検索されるであろう．それから，ラベル“A”の指示対象が概念A_1に保持される場合とA_1のまわりの概念に移される場合とがある．A_1に保持される場合には，概念A_1固有の情報というよりは，“AはAである”という文形式のもつ二つの一般的な意味のいずれかが引き出される．その一般的な意味とは，“同一性”(すべてのA_1は他のA_1と違わない)の意味，“独自性”(A_1は他とは違う)の意味である．一方，A_1のまわりの概念

に移される場合には，概念A_1のもつ顕著性の最も高い属性A_2へ移され，A_2の“不変性”の意味が引き出される．同語反復文の意味解釈においても，通常の名詞述語文の意味解釈と同様に，カテゴリーに関する情報が参照される．ただし，同語反復文の意味解釈の場合には，自然カテゴリーが特徴的に有する“族類似”構造が利用される．

第Ⅱ部以降，本論文でこれまでに考察してきた名詞述語文の意味解釈過程のモデルから，より一般的な文理解過程のモデルへと考察を進めていくことはさほど難しいことではないかもしれない．むろん，より複雑な形式の文には，名詞述語文の理解にはみられない処理手続きもあり得るであろう．しかし，これまで述べてきた名詞述語文の理解において想定された処理手続きは，どのような形式の文にも存在する基本的な手続きとなっているはずである．第Ⅰ部第1章で示したように，どのような修辞的表現であれ，基本的には，会話の公準の下位原則のいずれかの項目の下に分類され得ると考えられる．このことは，たとえ複雑な形式の文に特有の手続きがあったとしても，それは，より単純な形式の表現の理解の手続きと共通する要素を含んでいる可能性が高いことを示唆している．そうした要素は名詞述語文の意味解釈の手続きとも深い関わりをもっているであろう．

第Ⅴ部

まとめ

第13章　要旨

本論文では，修辞的表現がどのように理解されるかが，理論的および実験的に考察された．その際，理解過程を解明するという観点から，とくに，そこで参照される知識(源)の種類を明らかにするという観点から考察された．

第Ⅰ部では，修辞的表現に共通する理解の特徴があり得るか否かが考察された．

第1章では，文字通りの意味で見た場合に会話の公準(Grice, 1975,1978)のどの下位原則からの“逸脱”があると判断されるかという観点から，約2600例の修辞的表現が分類された．その結果，修辞的表現を読んで(聞いて)感知される逸脱の種類は，会話の公準のすべての下位原則の各項目に多岐にわたって分類され得ることが確認できた．修辞的表現の中には，二つあるいはそれ以上の下位原則に違反する事例，および，逸脱のあることは分かるがどの下位原則からの逸脱であるか特定できない事例も数多く認められた．このことから，会話の公準の各下位原則は，修辞的表現の理解過程内の質的に異なる様々な処理と関わるものである可能性が示唆された．そして，第1章の分類が，修辞的表現に共通する理解のメカニズムを探る出発点となり得るものであることが示唆された．

第2章では，修辞的表現を読んだ(聞いた)結果として生じる言葉の“あや”の心理印象が2通りの条件の下でクラスター分析された．22人の被験者が“あや”のあると思われる言語表現を読み，50の形容語尺度上でそれらの修辞性を評定した．次に，被験者は，同じ言語表現を表層の文字の並びや言葉の使い方などに注目して読み，初めと同じようにしてそれらの修辞性を評定した．2つの結果は互いに類似していた．それらは，50の形容語尺度が，ともに数個のクラスターに分類されることを示した．さらに，結果は“あや”の印象が知的・理性的側面と情動的側面とからなり，各側面は三ないし四つのグループからなっている可能性を示唆した．

第Ⅱ部では，“AはAである”または“A is A”という特別な場合の名詞述語文である同語反復文の意味解釈が理論的におよび実験的に考察された．

第3章では，“(ART) A be (ART) A. (A: 名詞，ART: 定冠詞，不定冠詞，無冠詞)”の名詞述語文形式をとる英語同語反復文がいかに解釈されるかを説明した従来の研究が概観された．それら研究は，同語反復文の意味解釈がどの程度文脈独

立的に成立すると考えるかという点において異なる．“radical pragmatists”(たとえば，Levinson, 1983)は最も文脈依存的な見解をとる．これに対し，“radical semanticist”であるWierzbicka(1987)は最も文脈独立的な見解をとる．これら二つの見解の中間に位置する立場をとる研究もある(Fraser, 1988; Gibbs & McCarrell, 1990; Glucksberg & Keysar, 1990)．言語理解過程において参照される知識源の観点から，概観した研究の中でどれが妥当であるかが論じられた．同語反復文も，言語理解過程において一般的に参照される知識源が参照され解釈されている可能性が示唆された．また，反復語の単数・複数の違い，冠詞の種類や有無といった，同語反復文そのものの表現形式上の違いによって意味解釈の仕方が異なるとする言語特異的な見解(Wierzbicka, 1987; Gibbs and McCarrell, 1991)が他の言語にどの程度あてはまるかが議論された．

第4章では，「AはAである(だ)．A：名詞」という名詞述語文形式をもつ日本語同語反復文がいかに解釈されるかを説明した従来の研究が概観された．佐山・阿部(1988a, 1988b, 1991a, 1991b, 1994)は，彼らが“制約”と呼ぶパターン的な言語知識が適用されることによって日本語同語反復文が解釈されると主張する．それら制約の中には，言語普遍的な制約と言語特異的な制約とがある．前者には，たとえば，反復語の“価値”が不変であることを聴者に強調・再認識させる制約があり，「ダイヤはダイヤである」のような同語反復文に適用される．一般に，日本語同語反復文は英語同語反復文ほどには文脈独立的に解釈されない．

日本語同語反復文を英語同語反復文と比較した結果，同語反復文には，(1)「すべてのAは他のAと違わない」という，カテゴリーAの成員の同一性，(2)「Aは他(B)とは違う」という，他のカテゴリーからの独自性，および，(3)カテゴリーAの顕著な属性の不変性，の3種の言語普遍的な意味があると結論された．これら意味は自然カテゴリーの“族類似”構造と関わることが指摘された．

第5章では，名詞述語文形式の日本語同語反復文の“容認性”と“修辞性”が，反復語および文脈の違いによってどう変わるかが実験的に考察された．100人の被験者が，5文または6文の同語反復文を読み，その同語反復文を容認可能にする場面を文章化するように求められた．さらに，被験者は，もとの同語反復文を，直接的な表現に言いかえるように要求された．同語反復文と言いかえ文双方に対する，自ら文章化した場面での“修辞性”を自己評定するように求められた．その

実験の結果から，具体的で一定の価値評価を伴う反復語の同語反復文(例：宝石は宝石である)ほど容認されやすく，抽象的で価値評価を伴わない反復語の同語反復文(例：原因は原因である)ほど容認されにくい傾向が示された．また，同語反復文をとりまく文脈中には，反復語と対極的意味関係にある単語が多く含まれており，そのような文脈下で，同語反復文は，意味のある発話として容認されやすくなることが見いだされた．さらに，同語反復文は，一般的に，反復語の否定的価値評価を強く導く文脈下での方が，肯定的・中立的価値評価を強く導く文脈下でより，解釈されやすい可能性が示唆された．

第Ⅲ部では，“AはBである”または“A is B”の名詞述語文形式の隠喩文を中心に，隠喩文一般の理解過程が考察された．

第6章では，隠喩文理解の全体的な過程を捉える仮説的枠組みとして提案された“段階モデル”が紹介され，段階モデルの妥当性を検討した実験的研究が概観された．文字通りに理解する仕方と隠喩的に理解する仕方とは同じであることを示す実験結果がある．また，隠喩的意味を計算する段階がオプションの過程である可能性に対して肯定的な結果と否定的な結果の両方がある．名詞述語文形式の隠喩文の理解過程では，“顕著性の不均衡”を計算する必要があるので，段階モデルは妥当であろうと結論された．各段階での処理は，比較的素早く行われるために，従来の実験的研究のいくつかが，段階モデルの妥当性を検証できなかったのであろうと考えられた．また，隠喩文の慣習性が高くなるにつれ，慣用的表現の理解と同じように理解されるようになることも合わせて結論された．

第7章では，間接的発話行為として機能する文の理解過程の段階モデルが考察された．間接的発話行為として機能する文の理解過程では，間接的な発話の力だけが直接的に計算されるとする見解と，文字通りの意味と間接的な発話の力の両方を同時に計算するとする見解とが実験的に支持されていることが紹介された．しかし，そうした実験結果からだけでは，段階モデルが妥当かどうかを判断することはできないことが示された．

第8章では，隠喩文理解の基本的なメカニズムとして提案されてきている二つの理論が概観された．Ortony(1979)は，“A is B”の名詞述語文の隠喩的理解を，述語“B”の指示する概念Bの属性を主語“A”の指示する概念Aの属性とマッチングさせる過程と考える．マッチングの際，Bの顕著性の高い属性とそれに対応する

Aの顕著性の低い属性との間に“顕著性の不均衡”が生じている必要があるとされた．Ortonyが直接述べていることではないが，この“顕著性の不均衡”を計算することとは，述語Bの顕著な属性で，それに対応するものが主語Aにもあるものへ“B”の指示対象を移すことであると考えられた．Ortonyが“顕著性の不均衡”を用いて説明できるとする隠喩的理解に伴う様々な心理現象が紹介された．また，Ortony自身による“顕著性の不均衡”の仮説を確認した実験的研究が紹介された．

一方，Glucksberg & Keysar(1990)は，述語“B”が，通常指示するカテゴリーBの他に文脈・状況上あるいは慣習的に決まるアドホックカテゴリーをも同時に指示できると仮定し，名詞述語文の隠喩的理解を，主語Aによって指示されるカテゴリーAをそのアドホックカテゴリーにカテゴリー化することであると考える．ここで，述語が本来指示するカテゴリーBはアドホックカテゴリーの典型事例であるとみなされる．彼らによって，アドホックカテゴリーへのカテゴリー化という考えによって説明できるとされた隠喩的理解に伴う様々な心理現象が紹介された．

Ortony(1979)の考えとGlucksberg & Keysar(1990)の考えとが比較され，その結果，それら二つの考えは互いに対立し合うものではないと結論された．そして，言語知識の範囲内で隠喩的理解の基本的な部分を説明できるという点で，Ortonyの考えの方が妥当であるとされた．この後，隠喩文の理解のメカニズムを支えている知識として慣習的比喩と文字通りの意味の2種類があることも言及された．

第9章，第10章では，主語，述語の指示するカテゴリー概念のカテゴリー・レベルの違いによって，隠喩文の理解しやすさや適切さが変わるかどうかに焦点を当て，それを実験的に考察した．第9章では，名詞述語文形式の隠喩文の隠喩としての“理解しやすさ”と“適切さ”が，文脈の種類すなわち隠喩文の述語と関連する文脈中の属性語に対する述語の“関連性”の違い，隠喩文の“慣習性”の相違，隠喩文の述語の“カテゴリー・レベル”の違いによって影響を受けるかどうかが調べられた．36人の被験者が一定の文脈下に置かれた隠喩文を読み，その理解しやすさを評定した．同様にして，別の36人の被験者が文脈中の隠喩文の適切さを評定した．さらに，別の36人は，属性語に対する述語の関連性，隠喩文の慣習性のうちの一つまたは二つの評定実験に参加した．分散分析の結果，隠喩文の理解しやすさには，属性語に対する関連性と隠喩文の慣習性との交互作用のみが関わることが見いだされた．さらなる分析の結果以下のことが示された．隠喩文の慣

習性がきわめて低い場合，関連性の程度によらず理解しやすさは一定である．比較的慣習性が低い場合には，関連性の程度の増加とともに，理解しやすさは単調に増加する．さらに，慣習性の高い場合には，関連性が高いか逆に低い場合の方が，中程度の場合より理解しやすさの程度は高い．一方，適切さには，属性語に対する関連性の主効果および関連性と隠喩文の述語の集合階層レベルとの交互作用が関与していることが認められた．詳細な分析の結果，関連性が中程度である場合には，下位レベルのカテゴリーを表す述語の隠喩文の方が適切となるのに対し，関連性が高い場合には，上位レベルの述語の隠喩文の方が適切になることが示された．

第10章では，隠喩文の述語のカテゴリー・レベルを厳密に統制することによって，名詞述語文形式の隠喩文の隠喩としての“理解しやすさ”に及ぼすカテゴリー・レベルの効果が詳しく調べられた．実験Ⅰ(a)では，60人の被験者が50の既知の名詞を提示され，それぞれについて，それを含み互いに上位・下位関係にあるカテゴリーの系列を作るように求められた．さらに，自ら作ったカテゴリーの系列の中でも最もよく使うと思うカテゴリーから順に番号をつけるように要求された．その結果，23の名詞について，“上位レベルの名詞－よく使う名詞－下位レベルの名詞”の系列が同定された．実験Ⅰ(b)では，(a)で同定された23の名詞の系列の中で上位・下位関係のみからなり，それとは異なる関係(たとえば，全体部分関係，随伴関係など)を含まないもの18系列を30人の被験者に提示し，“よく使う”とされた名詞が基本カテゴリーであるかどうかを確認した．その結果，12の系列について，系列の中央にある“よく使う”名詞が基本カテゴリーであることが確認された．さらに，実験Ⅱでは，実験Ⅰの(a)と(b)で同定された12の“上位レベルの名詞－基本レベルの名詞－下位レベルの名詞”の系列のうちの10が二つずつ組み合わせられ合計45の名詞述語文が作られ，さらに，隠喩として理解され得るような文脈が各名詞述語文ごとに作られた．そして，109名の被験者が当該文脈下での名詞述語文形式の隠喩文の理解しやすさを評定した．その結果，隠喩文の述語Bが基本レベルにある場合の方が，下位レベルにある場合よりも理解しやすいことが示された．また，述語Bが基本レベルにある場合の方が，上位レベルにある場合よりも理解しやすい可能性があることも見いだされた．加えて，BのカテゴリーＩ・レベルがAのカテゴリー・レベルよりも高いか，またはBとAのカテゴリー・

レベルが等しいときの方が，そうでない場合よりも理解しやすいことが示された．さらに，Bのカテゴリー・レベルがAのカテゴリー・レベルよりも高いときの方が，それらレベルが等しいときよりも理解しやすい傾向のあることが見いだされた．

第Ⅳ部では，第Ⅰ部から第Ⅲ部までの総括として，名詞述語文の一般的な意味解釈過程に関する包括的な考察が行われ，その過程のモデルが提案された．名詞述語文を理解する際には，モジュール的ではあるが，適用順序に段階性のある数個の手続きが適用されることが提案された．また，各手続きごとに，適用時に参照するいくつかの知識源も想定された．このうち，語彙知識には，ネットワーク的表現が採用された．このような手続きによって，既知の名詞から作られる名詞述語文の意味解釈のあらゆる分岐が妥当に説明された．とくに，“文字通り”の解釈や隠喩的解釈，“うなぎ”文的解釈などの違いが明確に区別された．これらの手続きの具体的な中身や適用方法は，文脈の存在を考慮し，一般化された．

謝辞

この論文は，著者が北海道大学文学部に研究生として在籍していたときの研究成果，および同大学大学院行動科学専攻課程に在学していたときの成果をまとめたものです．それら研究を実行しまとめるにあたっては，北海道大学文学部 阿部純一教授にひとかたならぬ御指導と御配慮を賜りました．実験の計画を立案する際には，きめ細かな助言をしていただきました．また，実験結果や過去の他の研究者の関連研究をとりまとめ論文を作成する際には，自分のつたない草稿に注意深く目を通していただき，ご助言，御批判を授かりました．ここに記して心より感謝いたします．

著者が大学院生であった頃，当時同じ研究室におられた釧路公立大学経済学部 金子康朗講師には，いつも研究上の相談にのっていただき励ましていただきました．また，やはり同じ研究室におられた韓国嶺南大学校文科大学 李光五助教授には，実験データを分析する統計的な方法を教えていただきました．両先生に心よりお礼申し上げます．

実験遂行にあたっては，北海道大学文学部行動科学科の学部生の方々，および，北海道大学文学部行動科学科基礎行動学研究室の大学院生諸氏に被験者として参加してもらいました．また，同院生諸氏からは絶えざる刺激と励ましを受けることができました．心より感謝します．

1994年 初冬

著者

引用文献

Abe, J. (1982). Schema representation of the "speaker-world" in natural language processing. In R. Trappl (Ed.), Cybernetics and systems research(pp. 885-890). Amsterdam: North-Holland.

阿部純一 (1987). 談話理解における“話者世界”の想定化について. 心理学評論, 30, 263-275.

阿部純一 (1988). 文章理解における“文脈処理”. 日本心理学会第52回大会発表論文集, S70.

阿部純一 (1989a). “心理学は科学だ”, “心理学はうなぎだ”, “心理学は心理学だ”: 修辞理解過程についての認知心理学的考察. 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, L23.

阿部純一 (1989b). 修辞を理解する過程. ディスコースプロセス研究, 1, 85-92.

阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五 (1994). 人間の言語情報処理: 言語理解の認知科学. サイエンス社.

阿部純一・佐山公一 (1990). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅰ): 問題と知識表現. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 683.

阿部純一・佐山公一 (1993). 同語反復文の意味はどのように解釈されるか(Ⅱ): 日本語の場合を中心にした考察. Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No.65.

Anderberg, M. (1973). Cluster analysis for applications. New York:

Academic Press. (Anderberg, M. (1988). 佐藤嗣司・江藤香 他(訳) 西田英郎（監訳）クラスター分析とその応用. 内田老鶴圃.)

荒木健治・佐々木淳一・桃内佳雄 (1991). 自然言語インターフェースのための未知概念の学習手法. ヒューマンインターフェース, 35(14), 99-106.

Barsalou, L. (1983). Ad hoc categories. Memory & Cognition, 11, 211-227.

Blasko, D., & Connine, C. (1991). The time course of metaphor processing: Effects of subjective familiarity and aptness. Proceedings of the Thirteenth Annual Conference of the Cognitive Science Society(pp. 658-662). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Blasko, D., & Connine, C. (1993). Effects of familiarity and aptness on metaphor processing. Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition, 19, 295-308.

Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), Questions and politeness: Strategies in social interaction(pp. 56-310). Cambridge: Cambridge University Press.

Chomsky, N. (1965). Aspects of the theory of syntax. Cambridge, MA: The M.I.T. Press.

Clark, H. H. (1979). Responding to indirect speech acts. Cognitive Psychology, 11, 430-477.

Clark, H., & Clark, E. (1977). Psychology and language: An introduction to psycholinguistics. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. (クラーク H.・クラーク E. (1986). 藤永保・小菅京子・酒井たか子・秦野悦子(訳). 心理言語学. 上下巻. 新曜社.)

Clark, H. H., & Gerrig, R. J. (1984). On the pretense theory of Irony. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 121-126.

Clark, H. H., & Lucy, P. (1975). Understanding what is meant from what is said: A study in conversationally conveyed requests. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 14, 56-72.

Clark, H. H., & Schunk, D. H. (1980). Polite responses to polite requests. Cognition, 8, 111-143.

Dascal, M. (1987). Defending literal Meaning. Cognitive Science ,11, 259-281.

Dascal, M. (1989). On the roles of context and literal meaning in understanding. Cognitive Science ,13, 253-257.

Fauconnier, G. (1985). Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language. Cambridge, MA: MIT Press. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博(訳). (1987). メンタル・スペース: 自然言語理解の認知インターフェイス. 白水社.)

Fraser, B. (1988). Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies. Journal of Pragmatics, 12, 215-220.

Gentner, D. (1983). Structure-mapping: A theoretical frame work for analogy. Cognitive Science, 7, 155-170.

Gerrig, R. J., & Healy A. F. (1983). Dual process in metaphor understanding: Comprehension and Appreciation. Journal of Experimental Psychology, 9, 667-675.

Gibbs, R. W. (1979). Contextual effects in understanding indirect requests. Discourse Processes, 2, 1-10.

Gibbs, R. W. (1981). Your wish is my command: Convention and context in interpreting indirect requests. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 20, 431-444.

Gibbs, R. W. (1982). A critical examination of the contribution of literal meaning to understanding nonliteral discourse. Text, 2, 9-27.

Gibbs, R. W. (1983). Do people always process the literal meanings of indirect requests? Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 9, 524-533.

Gibbs, R. W. (1984). Literal meaning and psychological theory. Cognitive Science, 8, 275-304.

Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? Journal of Memory and Language, 25, 181-196.

Gibbs, R. W. (1992). Categorization and metaphor understanding. Psychological Review, 99, 572-577.

Gibbs, R. W., & MacCarrell, N. S. (1990). Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding colloquial tautologies. Journal of Psycholinguistic Research, 19, 125-145.

Gibbs, R. W., & Mueller (1988). Conversational Sequences and preference for indirect speech acts. Discourse Processes, 11, 101-116.

Gildea, P., & Glucksberg, S. (1983). On understanding metaphor: The role of context. Journal of verbal learning and verbal behavior, 22, 577-590.

Glucksberg, S., Gildea, P., & Bookin, H. (1982). On understanding non-literal speech: Can people ignore metaphors? Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 21, 85-98.

Glucksberg, S., & Keysar, B. (1990). Understanding metaphorical comparison: Beyond similarity. Psychological Review, 97, 3-18.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan(Eds.), Syntax and semantics, Vol.3, Speech acts, (pp. 41-58). New York: Academic Press.

Grice, H. P. (1978). Some further notes on logic and conversation. In P. Cole ,& J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol.9, Pragmatics (pp. 113-128). New York: Academic Press.

芳賀純・子安増生（編）(1990). メタファーの心理学. 誠信書房.

Harman, H. (1976). Modern factor analysis. 3rd ed. Chicago: University of Chicago Press.

Hilgard, E. (1980). The trilogy of mind: Cognition, affection, and conation. Journal of the History of the Behavioral Sciences, 16, 107-117.

Hobbs, J. (1979). Coherence and coreference. Cognitive Science, 3, 67-90.

Hobbs, J. (1982). Towards an understanding of coherence in discourse. In W. G. Lehnert & M. H. Ringle (Eds.), Strategies for natural language processing(pp. 223-243). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

堀川昇 (1983). 「僕はうなぎだ」型の文について: 言葉の省略. 実践国文学, 24, 57-71.

Indurkhya, B. (1987). Approximate semantic transference: A computational theory of metaphor. Cognitive Science, 11, 445-480.

Inhoff, A. W., Lima, S. D., & Carroll, P. J. (1984). Contextual effects on metaphor comprehension in reading. Memory & Cognition, 12, 558-567.

Janus, R., & Bever, G. (1985). Processing of metaphoric language: An investigation of the three-stage model of metaphor comprehension. Journal of Psychological Research, 14, 473-487.

Johnson-Laird, P. N. (1983). Mental models. Cambridge, MA: Harvard University Press. (海保博之(監修). ＡＩＵＥＯ(訳). (1988). メンタル・モデル: 言語・推論・意識の認知科学. 産業図書.)

Jorgensen, J., Miller, G. A., & Sperber, D. (1984). Test of the mention theory of Irony. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 112-120.

金子康朗・佐山公一・阿部純一 (1986). 修辞表現理解過程における“逸脱”の検出. Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No. 45.

Kintsch, W. (1988). The role of knowledge in discourse comprehension: A construction-integration model. Psychological Review, 95, 163-182.

小泉賢吉郎 (1989). 英語の中の複数と冠詞: 日本人は本当に英語を理解しているか. ジャパンタイムズ社.

小泉保 (1990). 言外の言語学: 日本語語用論. 三省堂.

国立国語研究所 (1973). 電子計算機による新聞の語彙調査(IV). 国立国語研究所報告 48. 秀英出版.

Kreuz, R. J., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. Journal of Experimental Psychology: general, 118, 374-386.

国広哲弥 (1985). 慣用句論. 日本語学, 4, 4-14.

草薙裕・南不二男・中野洋・吉田夏彦 (1985). 文法と意味II(朝倉日本語講座 4). 朝倉書店.

楠見孝 (1985). 隠喩文における語句間の類似性: 意味特徴の顕著性が隠喩理解に及ぼす効果. 心理学研究, 56, 269-276.

楠見孝 (1988). 共感覚に基づく形容表現の理解過程について: 感覚形容語の通様相的修飾. 心理学研究, 58, 373-380.

Lakoff, G. (1973). Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. Journal of Philosophical Logic, 2, 458-508.

Lakoff, G. (1987). Women, fire, and dangerous things: What categorization reveals about the mind. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1990). The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? Cognitive Linguistics, 1, 39-74.

レイコフ G. ジョンソン M. 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) (1986). レトリックと人生. 大修館書店. (Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). Metaphors we live by. Chicago: University of Chicago Press.)

Lakoff, G., & Turner, M. (1989). More than cool reason: A field guide to poetic metaphor. Chicago: University of Chicago Press.

Levinson, S. (1983). Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press. (レヴィンソン S. C. 安井稔・奥田夏子 (訳) (1990). 英語語用論: Pragmatics. 研究社出版.)

Long, Z. & Martin, J. (1991). The role of conventionality in the real-time processing of metaphor. Proceedings of the Thirteenth Annual Conference of the Cognitive Science Society(pp. 801-805). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Lyons, J. (1977). Semantics (Vol.2). Cambridge: Cambridge University Press.

Malgady, R. G., & Johnson, M. G. (1980). Measurement of figurative language: Semantic feature models of comprehension and appreciation. In R. P. Honeck & R. R. Hoffman (Eds.), Cognition and figurative language(pp. 239-258). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Martin, J. H. (1990). A computational model of metaphor interpretation. San Diego, CA: Academic Press.

Martin, J. H. (1992). Computer understanding of conventional metaphoric language. Cognitive Science, 16, 233-270.

Miller, G. A. (1977). Practical and lexical knowledge In P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (Eds.), Thinking: Readings in cognitive science(pp. 400-410). Cambridge University Press.

Miller, G. A. (1979). Images and models, similes and metaphors. In A. Ortony(Ed.), Metaphor and thought(pp. 202-250). Cambridge: Cambridge University Press.

桃内佳雄 (1988). 文章の理解と生成について. 北海道大学大型計算機センターニュース, 20, 70-78.

Morgan, J. L. (1978). Two types of convention in indirect speech acts. Syntax and semantics, Vol.9, Pragmatics(pp. 261-280). New York: Academic Press.

毛利可信 (1980). 英語の語用論. 大修館書店.

大野晋(1978). 日本語の文法を考える. (岩波新書53). 岩波書店.

奥津敬一郎 (1978). 「ぼくハうなぎダ」の文法: ダとノ. くろしお出版.

尾上圭介 (1982). 「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか. 國文学: 解釈と教材の研究, 27(16), 108-113.

Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. Psychological Review, 86, 161-180.

Ortony, A., Vondruska, R. J., & Foss, M. A. (1985). Salience, similes, and the asymmetry of similarity. Journal of Memory and Language, 24, 569-594.

Ortony A., Clore, G. L., & Foss, M. A. (1987). The referential structure of the affective lexicon. Cognitive Science, 11, 341-364.

Ortony, A., Schallert, D. L., Reynolds, R. E., & Antos, S. J. (1978). Interpreting metaphors and idioms: some effects of context on comprehension. Journal of Verbal Behavior, 17, 465-477.

Rayner, K., & Pollatsek, A. (1989). Psychology of Reading. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

リーダーズ英和辞典. (1984). 研究社.

Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Study of Categories. Cognitive Psychology, 7, 573-605.

Rosch, E., Mervis, C., Gray, W., Johnson, D., & Boyes-Braem, P. (1976). Basic objects in natural categories. Cognitive Psychology, 8, 382-439.

佐藤信夫 (1978). レトリック感覚. 講談社.

佐藤信夫 (1981). レトリック認識. 講談社.

Sarle, W. S. (1985). VARCLUS Procedure. In S. Joyner (Ed.), SAS Institute Inc. SAS user's guide: statistics. 5th ed.(pp.801-823). Cary, NC: SAS Institute Inc..

佐山公一 (1991a). 「Ad hocカテゴリー」へのカテゴリー化 vs.「顕著性の不均衡」の計算: 比喩文意味解釈過程の二つの見解の比較検討. 北海道心理学会第38回大会(北海道心理学会・東北心理学会第7回合同大会)発表抄録集, 39-40.

佐山公一 (1991b). 言葉の“あや”の印象: “あや”に関わる形容語尺度の分類. Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No.55.

佐山公一 (1992). 言葉の“あや”の印象の分類: 言語表現の心理的効果測定のための形容語尺度の選定. 教育心理学研究, 40, 204-212.

佐山公一 (1993). 隠喩文の理解しやすさと適切さ: カテゴリー・レベル, 文脈, 慣習性の効果に関する実験. 北海道心理学研究, 16, 52-62.

佐山公一 (1994). 隠喩文の理解しやすさに及ぼすカテゴリーのレベルの効果. 日本心理学会第58回大会発表論文集, 889.

佐山公一・阿部純一 (1988a). 修辞理解の認知過程: 同語反復文の場合(隠喩文との比較). 日本認知科学会第5回大会発表論文集, 72-73.

佐山公一・阿部純一 (1988b). 同語反復文の理解過程. 日本心理学会第52回大会発表論文集, 783.

佐山公一・阿部純一　(1990a).　日本語名詞述語文の意味解釈手続きについて.　情報処理学会自然言語研究会報告(自然言語処理), 78-9, 65-72.

佐山公一・阿部純一　(1990b).　日本語名詞述語文の意味算定手続き：“文字通り”の理解から修辞的な理解まで.　日本認知科学会第7回大会発表論文集, 124-125.

佐山公一・阿部純一　(1990c).　日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅱ)：その処理手続き.　日本心理学会第54回大会発表論文集, 684.

佐山公一・阿部純一　(1991a).　同語反復文と隠喩文の意味解釈過程を支える概念知識構造の提案：典型性と顕著性の概念ネットワーク上での表現.　日本認知科学会第8回大会発表論文集, 72-73.

佐山公一・阿部純一　(1991b).　日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅲ)：“典型性”の概念ネットワーク上での表現.　日本心理学会第55回大会発表論文集, 380.

佐山公一・阿部純一　(1993).　同語反復文の意味はどのように解釈されるか(Ⅰ)：英語の場合を中心にした考察.　Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No.64.

佐山公一・阿部純一　(1994).　日本語同語反復文の意味解釈：反復語および文脈の関わり.　心理学研究, 65, 25-33.

Searle, J. P.　(1975).　Indirect speech acts.　Syntax and semantics, Vol. 3, Speechacts,(pp. 59-82).　New York: Academic Press.

Searle, J. P.　(1979a).　Metaphor.　In A. Ortony(Ed.), Metaphor and thought(pp. 92-123). Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. P. (1979b). Expression and meaning. Cambridge: Cambridge University Press.

Shinjo, M., & Myers, J. L. (1987). The role of context in metaphor comprehension. Journal of Memory and Language, 26, 226-241.

Smith, E. E., Shoben, E. J., & Rips, L. J. (1974). Structure and process in semantic memory: A featural model for semantic decisions. Psychological Review, 81, 214-241.

Sperber, D. (1984). Verbal irony: Pretense or echoic mention? Journal of Experimental Psychology: General, 113, 130-136.

Sperber, D., & Wilson, D. (1981a). Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.), Radical pragmatics(pp. 295-318). New York: Academic Press.

Sperber, D., & Wilson, D. (1981b). Pragmatics. Cognition, 10, 281-286.

Sperber, D., & Wilson, D. (1986). Relevance: Communication and cognition. Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Swinney, D. A. (1979). Lexical access during sentence comprehension: (Re)consideration of context effects. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 18, 645-659.

高橋行雄・大橋靖雄・芳賀敏郎 (1989). SASによる実験データの解析(SASで学ぶ統計データ解析5). 竹内啓(監修). 東京大学出版会.

戸田正直・阿部純一・桃内佳雄・徃住彰文 (1987). 認知科学入門. サイエンス社.

Traugott, E. C. (1978). On the expression of spatio temporal relations in language. In J. H. Greenberg, C. A. Ferguson, & E. A. Moravscik (Eds.), Universals of human language III(pp. 369-400).

Tversky, A. (1977). Features of similarity. Psychological Review, 85, 327-352.

梅本尭夫 (1969). 連想基準表: 大学生1000人の自由連想による. 東京大学出版会.

Wierzbicka, A. (1987). Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics'. Language, 63, 95-114.

Wierzbicka, A. (1988). Boys will be boys: A rejoinder to Bruce Fraser. Journal of Pragmatics, 12, 221-224.

Wilensky, R. (1989). Primal content and actual content: An antidote to literal meaning. Journal of Pragmatics, 13, 163-186.

Williams, J. P. (1984). Does mention (or pretense) exhaust the concept of irony?. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 127-129.

Wilson, D., & Sperber, D. (1981). On Grice's theory of conversation. In P. Werth (Ed.), Conversation and discourse(pp. 155-178). London: Croom Helm.

Winograd, T. (1977). A framework for understanding discourse. In M. A. Just & P. A. Carpenter (Eds.), Cognitive processes in comprehension (pp. 63-88). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

粟進 (1988). 「僕はうなぎだ」型の文を考える：主題の隠形化. 日本語学, 7(6), 44-51.

安井稔 (1978). 言外の意味. 研究社出版.

山梨正明 (1982). 比喩の理解. 佐伯胖(編). 推論と理解(認知心理学講座3, pp. 199-213). 東京大学出版会.

山梨正明 (1986). 発話行為(新英文法選書12). 大修館書店.

山梨正明 (1988). 隠喩と理解. 東京大学出版会.

付録:
実験(第2章，第9章，第10章[実験Ⅱ])で使われた言語材料

第2章

丸括弧内は，実験で被験者に与えられた修辞的表現例に対する説明を示す．表現例は著者別にまとめて示し，また，それらの原典は，各末尾の鍵括弧内に付されている．間接引用の原典は表現例ごとに二重鍵括弧内に示してある．

/キナリ　好きなり　春となり(キナリ：布地の名)/めだつ　プリント　ぷりん，ぷりんと(水着の広告コピー文)/酢豚つくりモリモリ食ったブス．/軽い機敏な仔猫何匹いるか．/渇きに．(清涼飲料水の広告コピー文)/なにか，こう，ワイオミングの一夜って感じになってきたなあ．(キャンプ用品の広告コピー文)/ふるえていては，愛は語れない．(コートの広告コピー文)/太るのもいいかなあ，夏は．
[以上，土屋耕一　(1984)．　土屋耕一全仕事．　マドラ出版より．]

/「近頃は，また短髪が流行りなんだってね．」「………」「若い人がジーパン離れしてきてるって話だねえ．」--「オジサン，何が言いたいの?」/逢わぬ人とは，別離もない．/微笑の法則/「あのォ，これ，作ってみたんですけど．」(ジャムの広告コピー文)
[以上，糸井重里　(1984)．　糸井重里全仕事．　マドラ出版より．]

/生きること…….結局それはできるだけ満足していられるように工夫することだ．『F．サガン，ある微笑』/人は旅をする．人は旅をして，ついにはわが家へもどる．人は生きる．人は生きて，ついには大地にもどる．/虎は死して皮をのこし，人は死して名をのこす．/墓場はいちばん安上がりの宿屋である．/元始，女性は実に太陽であった．/人間は一本の葦にすぎない．『パスカル，パンセ』/友情は人生の酒である．/負けの味というのは一生忘れない．/結婚生活一このはげしい海原を乗り越えていく羅針盤はまだ発見されていない．/「人生には予定表にない出来事がおこるんだなって…．」/理屈が判っても，気持ちがおさまらんのだ，年

寄りは.

[以上，現代言語セミナー(編)　(1985).　スルドイ言葉の辞典.　冬樹社より.]

/「なにいってやんでえ，いつおめえと酒を飲んだい?」「飲みましたよ.」「だからどこで?」/「勘定かい，さあよろしい，心得たよ.」「ああさようですか.」「心得ているよ.」「へえではひとつおはらいねがいたいもんで…….」「だから心得ているといってるんだよ.」/「あのねえさんには，こないだ観音さまで逢ったとき，たまにはお茶でも飲みにいらっしゃいなんていってたっけ…まんざら脈がなくもなかろう.」/(うそつき弥次郎は仕事で冬の北海道へいってきた．宿であったことを話している.)「さむいから，お茶でも飲んであったまろうとおもって，お茶をたのむと，女中がお茶をおかじりなさいというんで….」/「せっかくまあ，縁あって親分子分の杯をいただいたんですから，あたしもこれからは，心をいれかえて，いっしょうけんめい悪事にはげみますから，どうかいままで通り置いて下さい.」「いや，おまえが，真人間に立ちかえって，あっぱれ泥棒稼業にはげむなら(以下省略)」/「そのあとがまたいけないね．こんどは，みそこしへいくらかお銭を入れて，ガラガラふって，おとうふのおみおつけをこしらえたいんだけど，だれかおとうふを買ってきてくれないかしらとこういうんだ.(途中省略)だれかったってうちには猫とあたしだけしかいないんだよ.」/(相手にとりいろうとしている)「へい，こんちわ，どうもごきげんよろしゅう，その節はとんだ失礼をいたしました.」「どうもその節は，またばかにめいていいいたしました.」「なにいってやんでえ，いつおめえと酒を飲んだい?」/「おれは四つ足ならなんでも食うぜといったら，おどろいたね，こたつやぐらを持ってきやがった．さあ，四つ足だから食えというから，おれも負けずにいってやった．おなじ四つ足でも，こういうあたるものは食わねえ.」/「年がら年中その着物をきてる着たきりすずめじゃねえか.」/「なんだ，そこにいるのならさっさと返事をしろ．まあ，こっちへはいれ.」「手がふさがってるだ.」「なにをしているんだ.」「ふところ手をしてるだ.」/(熊公と彼のかみさんとの会話)「おまえさんが笑いながらあたしに教えたんだよ.」「しかとさようか.」「なにいってんだよ．そうだよ.」「それに相違ないか.」「ああ，相違ないねえ.」「おかしいと申して笑う貴様がおかしいぞ.」

[以上，興津要(編)　(1972).　古典落語.　講談社より.]

/羅生門が，朱雀大路にある以上は，この男の他にも，雨やみをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである．『芥川龍之介，羅生門』/「おっと今はねた鯉だが，やつは百五十万円の錦鯉だよ．(途中省略)ほかにも農林大臣賞や水産長官賞がぞろぞろ泳いでいるのだよ」『井上ひさし，ドン松五郎の生活』/堅田の浮御堂に辿り着いたときは夕方で，その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが，そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた．『井上靖，比良のシャクナゲ』/巡査がおまえはなんだと云うと，(酔っぱらいは)呂律の回らない舌で，お，おれは人間だと威張ってゐる．『夏目漱石，永日小品　人間』/法王ボニファキオ八世は，狐のようにその地位につき，獅子のようにその職務をおこない，犬のように死んだという．『モンテーニュ，エッセー』/「笑いごとじゃないぞ」とウィングが言った．「笑う気はないさ」，シェーンはライターの火をつけた．「もっとも，だからと言って泣きたいとも思わんがね．」『ブレッド・ハリディ，大いそぎの殺人』/太郎の目の色がかすかにうごいて，笑のさざなみをふくんだやうであった．/支配人は総金歯をにゅっとむいて笑ったので，あたりが黄金色に目映く輝いた．『井上ひさし，モッキンポット師の後始末』
[以上，佐藤信夫　(1978).　レトリック感覚.　講談社より.]

/今夜，死ぬのだ．それまでの数時間を，私は幸福に使ひたかった．ごっとん，ごっとん，のろすぎる電車にゆられながら，暗欝でもない，荒涼でもない，孤独の極でもない，ちえの果てでもない，狂乱でもない，阿呆感でもない，号泣でもない，悶々でもない，厳粛でもない，恐怖でもない，刑罰でもない，憤怒でもない，諦観でもない，秋涼でもない，平和でもない，後悔でもない，沈思でもない，打算でもない，愛でもない，救いでもない，言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は，ひとつも持ち合せてゐなかった．『太宰治，狂言の神』/波子の身の上相談も，愛の訴えに聞こえた．それだけの年月が，二人のあいだに流れていた．この年月は，二人のつながりでもあり，へだてでもあった．『川端康成，舞姫』/「顔に泥ぬられたやて，えらいすまなんだな，立派な顔に泥塗って．洗うたるわな．」コンクリートの道に，顔そむける間もなく額をゴシゴシとすりつけ

られ，マンガはもう生きた心地なく，（以下省略）『野坂昭如，殺さないで』
[以上，佐藤信夫 (1981). レトリック認識. 講談社より.]

/泣いてまでも頼んだ母の意見を振りきっていく娘に，かよは怒りと驚きを感じていた．かよはぎんが自分の娘であって娘でなくなっているのを知った．[渡辺淳一 (1975). 花埋み. 新潮文庫より.]/娘はこれだけは聞いておかなければならないというシンケンな顔付で尋ねた．[室生犀星 (1962). 杏っ子. 新潮文庫より.]

/オリンピックに出場することを「ソウルを目指す」と言う場合．/どの職場にもたいてい一人や二人与太郎はいるものだ．/「決して満点のとれないような問題ではない．現にこのクラスの何人かは満点だ．」/「…所詮，女は女なのさ」と言う場合．/今の日本の人口は一億二千八十六万四千五百十九人だから，一人が一つの夢をもっているとすると，全部で一億二千八十六万四千五百十九個の夢があるなんて考えるとなんだか楽しくなってくる．/実際には袖など濡れていないのに袖を濡らすと言う場合．/タイガースにとってバースはまさに救世主であった．/彼の言い方は断定的ではあるが，決して断定してはいなかった．/ピリッときいた新鮮なわさびはお涙ちょうだいの食べ物だ．
[以上，自作.]

第9章

グループごとに最初に隠喩文3種をまとめて記す．“●”の後，下位レベルのカテゴリーを表す述語の隠喩文1，下位レベルのカテゴリーを表す述語の隠喩文2，上位(基本)レベルのカテゴリーを表す述語の隠喩文の順に“/”で区切って並べてある．次に“■”の後に文脈3種を示す．互いに共通する最初の1文を記し，“//”の後に関連性の高い属性語を含む第2文，中程度の関連性の属性語を含む第2文，関連性の低い属性語を含む第2文の順に“/”で区切って並べてある．

●人生は航海である．/人生はヒッチハイクである．/人生は旅である．■失敗で

くじけるようではダメである．//一生は長いものである．/一生は苦しいものである．しかし，/一生は貴重なものである．

●男は狼である．/男は野ぎつねである．/男は動物である．■太郎と二人で旅行にいくのは止めた方がいい．//太郎は悪賢い奴だ．/太郎はおとなしい奴だ．しかし，/太郎は忙しい奴だ．それに，

●瞳はダイヤモンドである．/瞳は水晶である．/瞳は宝石である．■目は口ほどにものを言うことがある．//目を見れば心が輝くのが分かる．/目を見れば心が明るいのが分かる．/目を見れば心が動くのが分かる．

●思い出はシャボン玉である．/思い出はあぶくである．/思い出は泡である．■高校生活も今日で終わりである．//たくさんの出来事が心から消える．/たくさんの出来事が心からわいてくる．しかし，/たくさんの出来事を心から友と語ろう．

●香りは会話である．/香りはテレパシーである．/香りはコミュニケーションである．■彼女はその日の気分で香水の種類をかえた．//周囲の人たちはそれを楽しんだ．/周囲の人たちはそれを不快がった．/周囲の人たちはそれを驚いた．

●心はガラス細工である．/心はビードロ細工である．/心はコワレモノである．■青春期の子供は何にでも敏感になる．//彼の心はどんな言葉にも傷つきやすい．/彼の心はどんな言葉も美しいと思う．/彼の心はどんな言葉にも誠実である．

●音楽はそよ風である．/音楽は微風である．/音楽は風である．■環境音楽は現代社会にマッチした音楽だ．//自分の居場所をさわやかにしてくれる．/自分の居場所を静かにしてくれる．/自分の居場所をなごやかにしてくれる．

●友情はウィスキーである．/友情は焼酎である．/友情は酒である．■一日中営業に回って疲れている．//友達の何気ない心配りが，俺を酔わせる．/友達の何気ない心遣いが，俺には，しみてくる．/友達の何気ない心遣いが，俺にはありがた

い.

●他人はあわせ鏡である./他人は三面鏡である./他人は鏡である.■自分で自分を理解するのは難しい.//会話の中に自分の姿を写すしかない./会話の中に自分の姿をのぞくしかない./会話の中に自分の姿を知るしかない.

●顔はぬり壁である./顔は土壁である./顔は壁である.■相手はさらに態度を硬化させた.//好意は悪意で隔てられている./好意は悪意でくずれかけている./好意は悪意に変わった.

第10章(実験II)

初めに文脈を示し,その後に当該文脈に続いて提示された三つのターゲット文(隠喩文)を"/"で区切って示す.

/現代は情報化社会であると言われる.娯楽ですら情報の発信源になっている.ありとあらゆる娯楽情報がリアルタイムで流れ込んでくる.どこでどういう娯楽があるかに関する情報が氾濫している.娯楽を知ることによって今の世の中を知ることができる./娯楽はマスコミである./娯楽は新聞である./娯楽はスポーツ新聞である./

/現代は情報化社会であると言われる.映画ですら情報の発信源になっている.ありとあらゆる映画情報がリアルタイムで流れ込んでくる.どこでどういう映画があるかに関する情報が氾濫している.映画を知ることによって今の世の中を知ることができる./映画はマスコミである./映画は新聞である./映画はスポーツ新聞である./

/現代は情報化社会であると言われる.洋画ですら情報の発信源になっている.ありとあらゆる洋画情報がリアルタイムで流れ込んでくる.どこでどういう洋画が

あるかに関する情報が氾濫している．洋画を知ることによって今の世の中を知ることができる．/洋画はマスコミである．/洋画は新聞である．/洋画はスポーツ新聞である．/

/通信機器がなくなったら人間の生活は味気なくなるだろう．恋人どうしの甘い語らいにだって通信機器は欠かせない．今の世の中，遠距離恋愛というのもけっこうある．離ればなれの恋人たちにとって，通信機器は必需品だ．通信機器は実は我々の生活に味わいと豊かさを与えてくれているのだ．/通信機器は調味料である．/通信機器は砂糖である．/通信機器はグラニュー糖である．/

/電話がなくなったら人間の生活は味気なくなるだろう．恋人どうしの甘い語らいにだって電話は欠かせない．今の世の中，遠距離恋愛というのもけっこうある．離ればなれの恋人たちにとって，電話は必需品だ．電話は実は我々の生活に味わいと豊かさを与えてくれているのだ．/電話は調味料である．/電話は砂糖である．/電話はグラニュー糖である．/

/コードレスホンがなくなったら人間の生活は味気なくなるだろう．恋人どうしの甘い語らいにだってコードレスホンは欠かせない．今の世の中，遠距離恋愛というのもけっこうある．長時間話すときには，電話線は邪魔になるものだ．コードレスホンは実は我々の生活に味わいと豊かさを与えてくれているのだ．/コードレスホンは調味料である．/コードレスホンは砂糖である．/コードレスホンはグラニュー糖である．/

/飽食の時代と言われる中，飲食店はますます繁栄しつつある．サラリーマンはひとときの休息を求めて飲食店を訪れる．飲食店は恋人たちの格好のデートスポットでもある．今や飲食店は都会人のオアシスになりつつある．飲食店は人々にやすらぎとすがすがしさを与える．/飲食店は植物である．/飲食店は花である．/飲食店は薔薇である．/

/飽食の時代と言われる中，レストランはますます繁栄しつつある．サラリーマン

はひとときの休息を求めてレストランを訪れる．レストランは恋人たちの格好のデートスポットでもある．今やレストランは都会人のオアシスになりつつある．レストランは人々にやすらぎとすがすがしさを与える．/レストランは植物である．/レストランは花である．/レストランは薔薇である．/

/飽食の時代と言われる中，ファミリーレストランはますます繁栄しつつある．サラリーマンはひとときの休息を求めてファミリーレストランを訪れる．ファミリーレストランは恋人たちの格好のデートスポットでもある．今やファミリーレストランは都会人のオアシスになりつつある．ファミリーレストランは人々にやすらぎとすがすがしさを与える．/ファミリーレストランは植物である．/ファミリーレストランは花である．/ファミリーレストランは薔薇である．/

/運動には自分との戦い，時間との戦いという面がある．目標にたどりつくためには，一瞬たりとも気を抜くことができない．少しでも油断すれば取り返しのつかない結果を招く．先手をうち，気のゆるみを事前に防がなければならない．それには，たえず的確で冷静な判断が求められる．/運動は災害である．/運動は火事である．/運動は山火事である．/

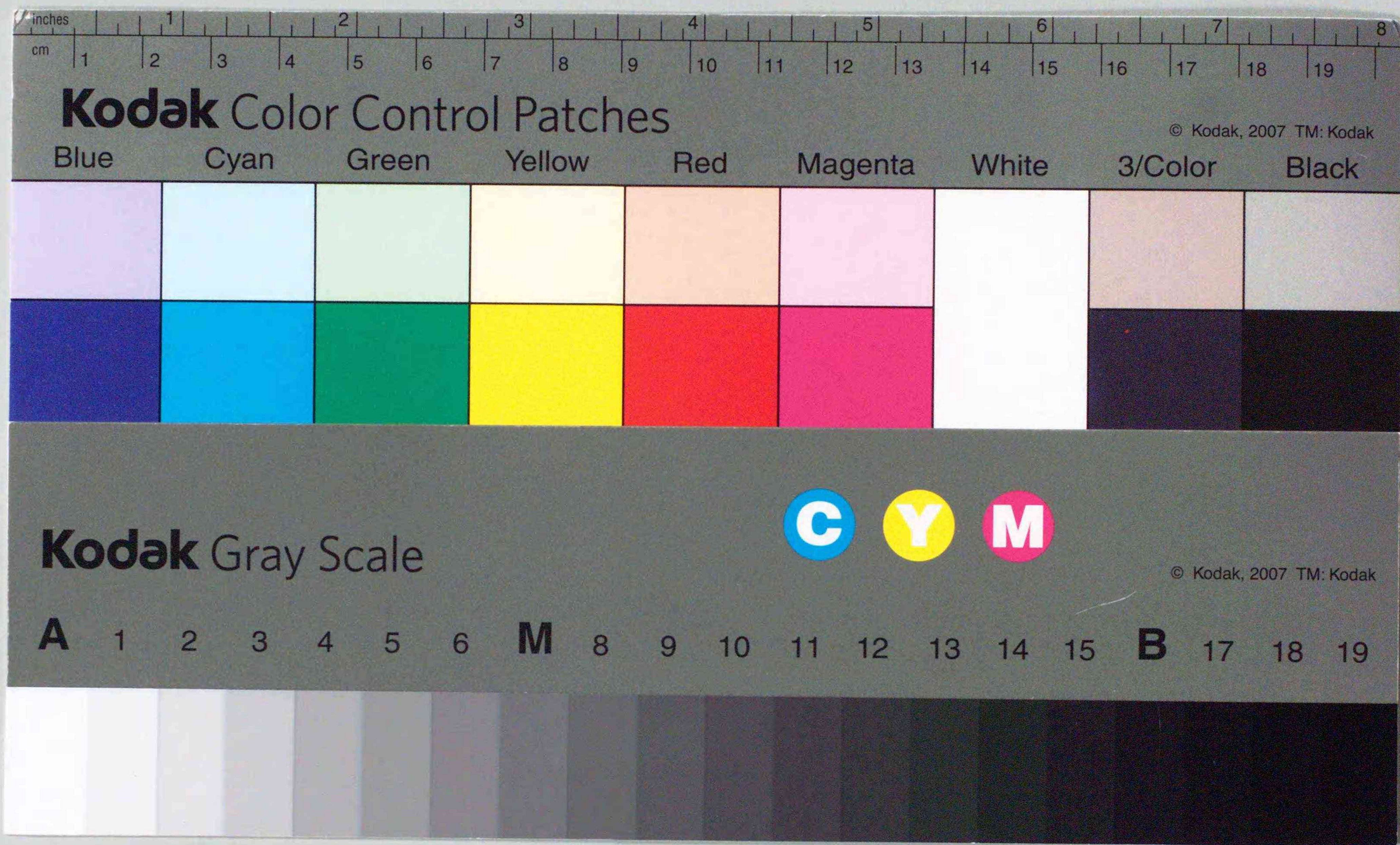
/スポーツには自分との戦い，時間との戦いという面がある．目標にたどりつくためには，一瞬たりとも気を抜くことができない．少しでも油断すれば取り返しのつかない結果を招く．先手をうち，気のゆるみを事前に防がなければならない．それには，たえず的確で冷静な判断が求められる．/スポーツは災害である．/スポーツは火事である．/スポーツは山火事である．/

/サッカーには自分との戦い，時間との戦いという面がある．目標にたどりつくためには，一瞬たりとも気を抜くことができない．少しでも油断すれば取り返しのつかない結果を招く．先手をうち，気のゆるみを事前に防がなければならない．それには，たえず的確で冷静な判断が求められる．/サッカーは災害である．/サッカーは火事である．/サッカーは山火事である．/

/日本人はこれまで幾多の天災を経験してきた．天災によって，日本人は何度も生まれ変わっているのだ．天災の後には，人々の生活の中に新しい活力がよみがえってくる．天災があるからこそ日本人は新鮮な気持ちを保ち続けることができる．日本人にとって天災は精気の源である．/天災は食物である．/天災は野菜である．/天災はキャベツである．/

/日本人はこれまで幾多の地震を経験してきた．地震によって，日本人は何度も生まれ変わっているのだ．地震の後には，人々の生活の中に新しい活力がよみがえってくる．地震があるからこそ日本人は新鮮な気持ちを保ち続けることができる．日本人にとって地震は精気の源である．/地震は食物である．/地震は野菜である．/地震はキャベツである．/

/関東大震災のような地震を日本人は何度も経験してきた．関東大震災によって，日本人は生まれ変わったのだ．関東大震災の後には，人々の生活の中に新しい活力がよみがえった．関東大震災があったからこそ日本人は新鮮な気持ちを保ち続けることができた．日本人にとって関東大震災は精気の源であった．/関東大震災は食物である．/関東大震災は野菜である．/関東大震災はキャベツである．/


inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
C Y M
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19